

平成23～25年度
生涯学習調査研究事業
無縁社会に立ち向かう ～新たな社会貢献の仕組みづくり～
調査研究報告書

「無縁社会」から「支縁社会」へ

～人と人がつながり、地域が元気になるコミュニティをめざして～

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、私たちにとって忘れられない日となりました。大きな余震が続き、恐怖と不安に押しつぶされそうになりました。しかし、私たちはそのような中から、人と人がつながることでの安堵感や人の温かさ、困難を共有し誰かのために行動する大切さを学びました。

あの震災から3年が過ぎました。課題は山積していますが、復旧・復興は少しずつではありますが着実に進んでおります。しかしながら、地域社会に目を移すと、「迷惑をかけながらも、それを許し合う社会」「他人にお節介をやく社会」などの私たちにとってなくてはならないコミュニティの文化が存在する一方、人々のセーフティーネットワーク（人と人とのつながりによって支え合う仕組み）が崩れ、希薄な人間関係による「無縁社会」が広がっていることも事実であり、コミュニティの再生が大きな課題となっております。この「無縁社会」は、「孤立無業」「生涯未婚」や「超高齢社会」「人口減少社会」などの課題とも複雑に絡み合っております。だからこそ、今この課題に取り組むことは社会教育に求められている大切な使命であると考えます。

このようなことを踏まえ、当センターでは、無縁社会に立ち向かう～新たな社会貢献の仕組みづくり～というテーマを設定し、「人と人がつながり、支え・支えられ、地域が元気になるコミュニティをめざして」3年間継続した調査研究に精力的に取り組んでまいりました。

最初に5つの県生涯学習センター担当者を対象としたプログラムとして「地域コミュニティ活動を担うための知識とスキルの獲得」を行い、次に各センターの所管区域内において「地域の特色を知るプログラム開発と実践」及び「地域の特色にあった課題解決プログラム開発と実践」を行うことを通して、それぞれの地域の抱える課題を地域住民自らが解決できるようにするため、人材の発掘及び育成を推進してきたところです。

また、「活動人口」という新しい指標を導入するとともに、それをを用いてこれまで実践してきた各プログラムに対する評価を試みました。これは、個人がその地域でどの程度の頻度で活動しているかを指標化しようとするもので、対象とした地域の人々の「人と人とのつながり力」が強い（弱）かを4つの縁（本文参照）の視点から把握することをねらいとしています。さらに、その地域の属性との相関関係を分析することにより、それぞれの地域にある課題やその対策の方向性を示唆してくれるものです。

本調査研究事業では「無縁社会」ということを地域社会の重要な課題と捉え、人と人との縁によってしっかりと結ばれた相互扶助の地域社会、すなわち「支縁社会」をめざして、その解決の担い手となる地域住民が力をつけるための様々な手立てを講じ、その対策の効果的な実施に向けて「活動人口」を導入してまいりました。しかしながら「活動人口」の手法はまだ完成したプログラムとは言えません。社会教育関係者の皆様に、更に検討を加えていただき、より良い手法として育てていただくことを願っております。

おわりに、本調査研究事業実施にあたりまして、ご指導、ご協力いただきました茨城大学長谷川幸介准教授をはじめ各調査研究委員、関係者の皆様、調査対象者といたしましてご回答いただいた数多くの皆様に心より感謝を申し上げます。

平成26年3月

茨城県水戸生涯学習センター 所長 高野 茂

目次

第1章 生涯学習調査研究の概要	
1 生涯学習調査研究のテーマ	1
2 生涯学習調査研究の目的	1
3 生涯学習調査研究のストーリー	2
4 生涯学習調査研究の対象	2
5 生涯学習調査研究の内容	3
（1）モデルプログラムの開発	3
（2）「活動人口」の調査	3
（3）水戸生涯学習センターモデルプログラムの実践	7
6 生涯学習調査研究の組織	22
第2章 社会貢献活動を担う人材の発掘・育成モデルプログラムの展開	
1 茨城県県北生涯学習センターの実践	23
2 茨城県鹿行生涯学習センターの実践	30
3 茨城県県南生涯学習センターの実践	36
4 茨城県県西生涯学習センターの実践	43
5 栃木県日光市社会福祉協議会の実践	52
第3章 「活動人口」調査結果と考察	
1 平成25年度生涯学習調査研究事業に係る「活動人口」調査の実施について	57
2 調査対象地域の調査結果	58
3 考察	62
第4章 生涯学習調査研究のまとめ	
1 新たな社会貢献の仕組みづくりにむけて	67
2 「活動人口」という指標を用いた 「地域のつながり度」を測定する手法確立にむけて	72
分析資料	
1 「活動人口」調査に係る属性の分析	75
（1）「プロフィール」分析について	75
（2）「調査項目」別の「縁」と「つながり力」の相関関係について	97
（3）「調査対象地域」別の「縁」と「つながり力」の相関関係について	140
（4）「縁」と「調査項目」の相関関係について	151
2 「活動人口」調査に係る属性と「つながり力」の分析	173
（1）「調査対象地域」別の「活動人口」と「つながり力」の相関関係について	173
（2）「縁」と「つながり力」の相関関係について	178
参考資料	
モデルプログラム（県域版）の展開を補う研修資料（OJTシート）	199
平成25年度モデルプログラム（コミュニティ版）の事業評価について	208
平成24年度生涯学習調査研究事業に係る「活動人口」調査票	212
平成25年度活動人口についての調査票	216

第1章 生涯学習調査研究の概要

1 生涯学習調査研究のテーマ

無縁社会に立ち向かう ～新たな社会貢献の仕組みづくり～

2 生涯学習調査研究の目的

無縁社会に立ち向かう ～新たな社会貢献の仕組みづくり～ という生涯学習調査研究事業の目的は次の通りである。そして、この目的は「3.11 東日本大震災」という大きな出来事に直面したことにより、より深く問われることとなった。

- (1) 「無縁社会」と言われる状況に社会教育はどう対応していくのか。
- (2) 茨城県内の5つの生涯学習センターの機能特性を効果的に発揮できるか。
- (3) 社会教育の成果指標を提示できるか。

第1の目的は、「社会教育の現代的課題」に応える総合的視座として検討されるべきものであった。多様な課題が山積している中で、共通する社会教育の視点を確立しようとする。都市化、少子高齢化、価値観の多様化など、各種の計画書や報告書の「現状分析」に描かれる状況に対して、社会教育力はどのような有効性を持つのかを再確認することである。

この課題に対する仮説は次のとおりである。「人は独りでは生きられない存在」だとすれば、社会教育は人を独りにさせない叡智の集結ではないのか。したがって、多様な生活課題に対応する社会教育力の視点は「人のつながり（＝縁）」に違いないという仮説である。

第2の目的は、茨城県内の5つの生涯学習センターの機能分担と地域特性の効果的発揮という目的である。立地特性や環境特性などそれぞれに異なった5つのセンターが固有な特性を発揮してこそ、茨城の社会教育力が生かされるという考え方であった。『統一的視座（テーマ）で5つの特徴的分析が実行され、統一的指標を提示する。』ことこそ、本事業の大きな目的である。

第3の目的は、社会教育の成果を量的数値（参加人数、事業回数など）に限定されず、質的な指標を分かりやすく提示するということである。「どうすれば、社会教育の実績や社会教育力を見せることが可能になるのだろうか。」全国の社会教育関係者が同様な悩みを抱えている。

このテーマについて、第1の目的と関連させて提示することにした。人間が幸せになる手段が「孤立しないこと」であるならば、社会教育の指標は「孤立していない度数＝つながり度」ではないかということである。一人の人間が活着しているということは、多様な人間同士の関わりを持っているに違いない。したがって、社会教育の成果は、事業の前後で「つながり度」がどのように増減したかという数値で表現されるはずだということである。その名称を「活動人口」とすることにした。それは、定住人口とも交流人口とも異なる新しい社会教育人口の提示という旅の始まりであった。

3 生涯学習調査研究のストーリー（モデルプログラム 作成フロー）

【平成23年度】

県全域に共通する総合課程として、地域の特性や課題の把握及び人と人とのネットワークの在り方などについて、無縁社会に立ち向かう～新たな社会貢献の仕組みづくり～をねらいに、モデルプログラム（県域版）を開発し、県内の5つの生涯学習センターにおいて、学識経験者と5つの生涯学習センター職員、各センターボランティアコーディネーターから成る生涯学習調査研究委員を構成員としてプログラムを実施する。

「新しい公共」の考えに基づく「中間支援組織」としての役割を学びながら、県北・鹿行・県南・県西の各生涯学習センター（以下各センター）区に対応する地域の実態に即した専門課程として、人と人との縁の復活やコミュニティ再生、地域の元気力アップなどに向けた、モデルプログラム（各センター版）の開発を行う。その過程において茨城県水戸生涯学習センター（以下水戸センター）は、社会教育の新たな成果指標として「活動人口」の提言を行うための調査研究資料を収集する。

【平成24年度】

各センターは、平成23年度に開発したモデルプログラム（県域版）を各センター区内の選定した地域で展開をする。このプログラムにより地域に無縁社会に立ち向かう新たな社会貢献の仕組みづくりを担う人材の発掘・育成を行う。

また、水戸センターは各センターと協働で中間支援組織の役割についての調査研究を行う。水戸センターは併せて各センターの実施するモデルプログラムから予想される活動人口の算出作業や受講生等からのヒアリングにより活動人口提言への調査研究を進める。

各センター区のモデルプログラム（各センター版）の検証を行い、他地域へのプログラムの移転を進める。平成25年度に実施する第3次団体の選定をする。

【平成25年度】

県全域の総合課程のプログラムから地域専門課程のプログラムを推進する一連の過程が終了となる。各地域でプログラムを実施する中で、各センターは継続的な「中間支援組織」としての役割を担い、スキルを学びストックしていく。

水戸センターは、県生涯学習課や高等教育機関等と連携し、新たな社会貢献の仕組みづくりを担う人材の発掘・育成プログラムを整理しストックする。併せて「活動人口」についての提言書をまとめ発信する。

4 生涯学習調査研究の対象

(1) プログラム開発及び実践対象（第3次団体）

ア 県北生涯学習センター管内・・・日立市城の丘団地住民

イ 鹿行生涯学習センター管内・・・行方市立麻生東小学校区住民

ウ 県南生涯学習センター管内・・・「プロジェクト土浦力」

※受講者の中の有志により構成された任意団体

エ 県西生涯学習センター管内・・・「ふる里まちづくり塾」

※受講者で構成された任意団体

(2) 「活動人口」調査のための調査票による調査対象

- ア 県北生涯学習センター管内・・・日立市城の丘団地住民
日立市田尻交流センター管内住民
- イ 鹿行生涯学習センター管内・・・行方市立麻生東小学校区住民
潮来市商工会講座受講者
- ウ 県南生涯学習センター管内・・・県南センター事業受講者
阿見町立本郷小学校区ふれあい地区センター管内住民等
- エ 県西生涯学習センター管内・・・筑西市大田地区住民
県西センター社会貢献活動推進事業受講生

※上段・・・調査研究対象地域

下段・・・コミュニティ再生事業対象地域

(県西C・・・社会貢献活動推進事業受講者)

- オ 水戸生涯学習センター管内・・・水戸市常磐，新荘自治会住民
(コミュニティ再生事業対象地域)
- カ 栃木県日光市社会福祉協議会管内・・・土呂部地区住民
※栃木県日光市社会福祉協議会が，高齢化が進んだ地域コミュニティを対象にした調査を実施しているため，水戸センターと連携協力して本事業を推進した。

5 生涯学習調査研究の内容

(1) モデルプログラムの開発

ア 県域版モデルプログラム作成

平成23年度は水戸生涯学習センターが主体となり，各生涯学習センター職員を対象に，地域におけるプログラム展開に必要な知識やスキルの習得を目的にワークショップを含む講座を実施した。

イ 各センター版モデルプログラム作成

平成24年度には各生涯学習センターが主体となり，地域の特色を踏まえたプログラムを開発し，地域コミュニティを対象に具体的な事業を展開した。水戸生涯学習センターはプログラムの円滑な推進のための支援を行った。

ウ コミュニティ版モデルプログラム作成

平成25年度は地域コミュニティを対象としたプログラムを展開した成果として発足した第3次団体が主体となり，自らが地域の課題解決の意識を持ち活動プログラムを開発し実践した。各生涯学習センターはプログラムの推進のための支援を行い，水戸生涯学習センターは各生涯学習センターの活動を支援するとともに「活動人口」の調査票の作成及び分析を実施した。

(2) 「活動人口」の調査

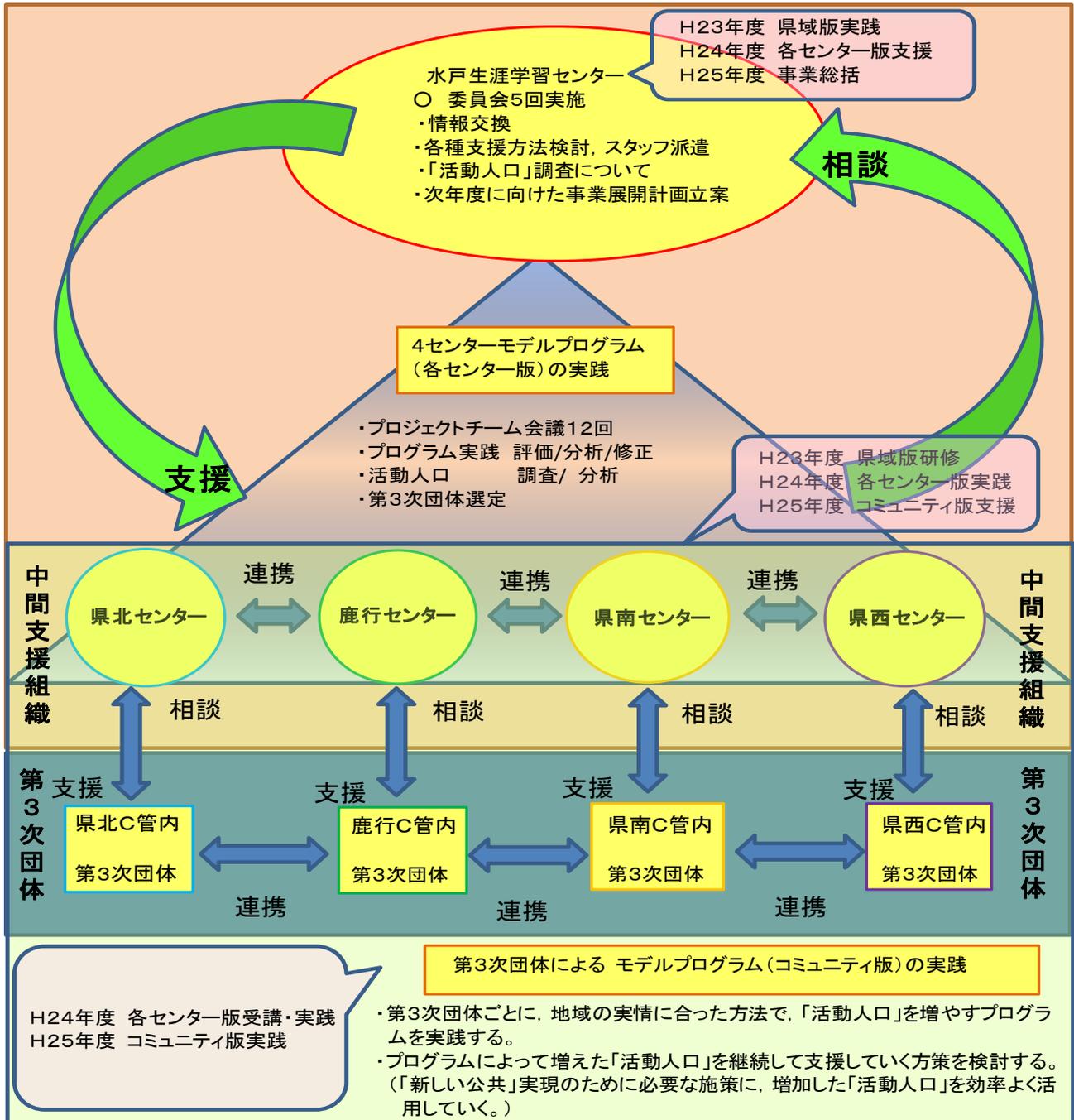
ア 「活動人口」調査の方法

(ア) 各生涯学習センターによる調査

各生涯学習センター区の第3次団体を対象に，「活動人口」の調査票を郵送又は直接配布し，郵送により回収し，集計及び分析を実施した。

- (イ) 水戸生涯学習センターによる調査
各生涯学習センター区の他事業（地域コミュニティ再生事業）受講者を対象に、郵送又は直接配布し、料金受取人払いによる郵送で回収し、集計及び分析を実施した。
- (ウ) 栃木県日光市社会福祉協議会による調査
土呂部地区全戸に訪問し、聞き取り調査を実施した。

モデルプログラム 作成フロー



イ 調査期間

(ア) モデルプログラム作成期間

平成23年6月9日から平成26年1月31日まで、3ヶ年とした。

(イ) 調査票による「活動人口」調査

- a 平成24年11月15日から平成24年11月30日まで留め置き調査とした。(資料7-1~4)

(a) 調査票による調査の回収状況

実施された調査のサンプル回収状況は、表(2)-1のとおりである。1,230の調査票配付数に対して520票が有効票として回収された。有効回収率は42.3%であった。

調査対象	合計		回答率 (%)
	配付数	回収数(n)	
県北C	630	123	19.5%
鹿行C	200	169	84.5%
県南C	200	165	82.5%
県西C	200	63	31.5%
計	1,230	520	42.3%

表(2)-1

(b) 調査の実施経過

本調査は、生涯学習調査研究委員会（以下委員会）が企画・実施したものである。調査実施にあたっては、平成24年7月の第2回委員会で調査票の原案を作成し、9月の第3回委員会で修正を加えて調査票を完成した。11月の第4回委員会で入力シートデータ提出までの流れを確認した。

(c) 数値について

- ① パーセントの表示値は、少数第2位を四捨五入し少数第1位で表した値である。
- ② 本文中の図にある「n」の値は、有効サンプル数を表す。

b 平成25年9月1日から平成25年10月31日まで留め置き調査とした。
 (資料8-1~11)

(a) 調査票による調査の回収状況

実施された調査の回収状況は表(2)-2のとおりである。2,614の調査票配布数に対して、1,202票が有効票として回収された。有効回収率46.0%であった。

	調査研究対象地域			コミュニティ再生事業対象地域		
	回収数 (n)	配布数 (部)	回収率 (%)	回収数 (n)	配布数 (部)	回収率 (%)
県北C	117	650	18.0	186	200	93.0
水戸C	-	-		253	520	48.7
鹿行C	166	202	82.2	24	200	12.0
県南C	203	400	50.8	76	150	50.7
県西C	64	162	39.5	74	91	81.3
日光市	-	-		39	39	100.0
小計	550	1,414	38.9	652	1,200	54.3

表(2)-2

(b) 調査実施経過

本調査は、委員会が企画・実施したものである。調査実施にあたっては、平成25年7月の第2回委員会で調査票の原案を作成し、7月中に修正を加えて調査票を完成させた。

(c) 数値について

- ① 調査に係る数値は小数第2位を四捨五入しているため、表記上では100%になっていない場合がある。
- ② 調査に係る数値のうち、「0.0%」は数値が0ではないが四捨五入の表記である。
- ③ 本文中の図にある「n」の値は、有効サンプル数を表す。

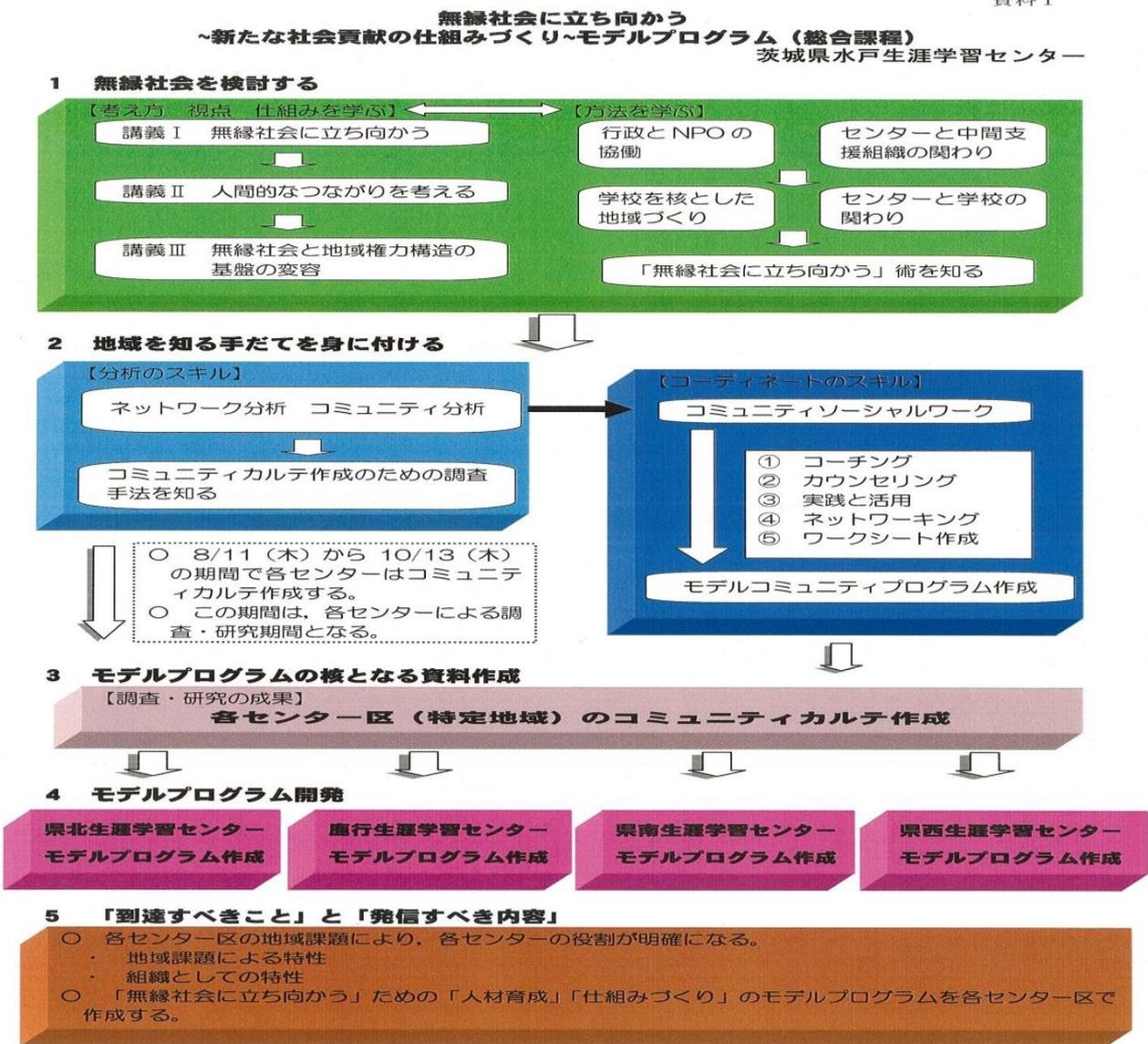
(3) 水戸生涯学習センターモデルプログラムの実践

ア 生涯学習調査研究モデルプログラム実施計画

年度	県教育庁生涯学習課	水戸生涯学習センター	各生涯学習センター
平成 23 年度	<ul style="list-style-type: none"> ○指導・助言 ○進捗状況把握 ○広報 ○渉外 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートの作成とまとめ ○モデルプログラム(総合課程)の提供(10回) ●「活動人口」についての調査研究 ○フォーラムの企画・運営 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートによる各センター内研修の実施 ○モデルプログラムの受講 ○各センター区のプログラムを作成 ○フォーラム運営と参加 ・パネラーとして各センターモデルを発表する。 ・運営への協力 ○報告書の作成 ・新たな社会貢献の仕組みづくりについての報告書を作成する。
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> ○指導・助言 ○進捗状況把握 ○広報 ○方向提示 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートの作成とまとめ ○各センターとの連絡調整 ・各センター毎に担当社会教育主事を置く。 ●「活動人口」の算出についての調査・研究 ●次期生涯学習調査研究事業のための調査 ○各センターモデルプログラムの検証とまとめ ○平成25年度各センター区モデルプログラム実施団体の選定 ○報告書の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートによる各センター内研修の実施 ○モデルプログラム(専門課程)の提供(10回) ●「活動人口」の算出についての調査・研究 ○各センターモデルプログラムの検証 ○平成25年度各センター区モデルプログラム実施団体の推薦 ○報告書の作成 ・各センター区モデルプログラムについての報告書を作成する。
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> ○指導・助言 ○進捗状況把握 ○広報 ○渉外 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートの作成とまとめ ○「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくりと人材育成の検証 ○モデルプログラム検証とまとめ ●「活動人口」についての提言をまとめる。 ○報告書の作成 ・様式の作成とまとめ ・学習の成果のまとめと発信 	<ul style="list-style-type: none"> ○OJTシートによる各センター内研修の実施 ○「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくりと人材育成の検証 ○モデルプログラム実施団体との連絡調整 ○モデルプログラムの検証 ●「活動人口」の算出データについて検証をまとめる。 ○「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくりと人材育成についての報告書をまとめる。

イ 平成23年度の取り組み
社会貢献活動を担う人材の発掘・育成モデルプログラム（県域版）の展開

モデルプログラム（県域版）の概要



(ア) 実施の目的

「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくりを担う、「支え合い」「助け合い」「つながり合い」のため、地域コミュニティの「補強」と「再生」を図る組織や人材の育成を行う。

(イ) 実施内容

a 無縁社会の検討

「無縁社会に立ち向かう」ためには、社会教育の力や社会構造を知ることと立ち向かう「無縁社会」をどう捉えるかを明確にする必要性があると考え第1ステップとした。第1ステップを教養部門と方法部門に分け展開した。

(a) 教養部門

① 「無縁社会に立ち向かう～今、社会教育に必要なもの～」

(2011/6/9 実施)

茨城大学生涯学習教育研究センター 長谷川幸介氏

「社会教育が立ち向かった4つの波」(民主化の波, 都市化の波, 少子高齢化の波, 無縁社会の波)から社会教育が果たしてきた役割や, 無縁社会の戦後の歴史的背景について学んだ。

また, 今後の社会教育で何ができるのか。人間とはこういうものだと再確認する目的をもって「無縁社会に立ち向かう」というテーゼをまとめたいという課題を提示された。

② 「コミュニティとアソシエーションそして家族

～戦後の人間的なつながりの形を考える～」(2011/6/23 実施)

茨城大学生涯学習教育研修センター 長谷川幸介氏

NGO茨城の会事務局長 小野瀬武康氏

県教育庁生涯学習課長 高橋 鉄夫氏

「人間的なつながりを考える」「人と人をつなげる役の必要性」について議論した。日本の中で息づいていた従来の社会で機能していたものがあまりにも膨大となり, 想定されていなかった部分が増えすぎた(弱者救済も増えすぎている)ため対応が困難な状況下にある。また交流を閉ざし家庭や地域とつながらない治外法権の居留地にいる人が増えている。

「縁」という網がボロボロになっている中で孤立している。自立と孤立を分けると無縁社会に立ち向かうことは自立させることである。「縁」の必要性や良さを体験している人が少ないのではないか。そのチャンスが提供されていない。東日本大震災の被災地では人と人が触れあって地域の良さを学ぶことができた。特に若い人たちは初めて人の役に立つ喜びを知ったのではないかと思う。

「人がつながらねば」という思いが今回の震災により揺さぶられたのではないかなどの本プロジェクトの背景と意義について学んだ。

③ 「無縁社会と地域権力構造の基盤の変容～日立市からの報告～」

(2011/7/14 実施)

茨城大学生涯学習教育研修センター 長谷川幸介氏

5つの文化の混在地〔北方系縄文人によるナラ林文化圏・大陸系縄文人による文化圏・黒潮海流に乗ってやってきた海民(隼人族)による文化圏・大陸から入ってきた弥生人による文化圏・高麗から入ってきた騎馬民族による文化圏〕である茨城と地域権力構造の基盤の変容を「日立のコミュニティ」から学ぶとともに茨城の地域特性について学んだ。

(b) 方法部門

① 「行政とNPO等が協働する戦略プランの意義」(2011/6/9 実施)

認定NPO法人茨城NPOセンター・コモンズ 横田能洋氏

NPO理解と中間支援組織について学ぶ。その後ワークショップによ

り中間支援組織としての各センターの役割について考えた。

⑥ 「茨城県における今後の人間的なつながりを考える

～学校を核とした取り組み～」（2011/6/23 実施）

NPO法人水戸こどもの劇場 副代表理事 横須賀聡子氏

学校を核としたコミュニティ活動から人間的なつながりを学ぶ。その後ワークショップにより学校を核とした人間的なつながりについて考えた。

b 地域理解についての研修

「無縁社会」に立ち向かうためには、コミュニティの活性化が必要であるという考えから、まずは地域を知ること・入り込むことをねらって各センターが作成するモデルプログラム作成のための「地域分析のスキル」と地域に入り込むための「コーディネートのスキル」を第2ステップとして展開した。

(a) 地域分析のスキル

① 「ネットワーク分析について」（2011/7/14 実施）

NGO茨城の会事務局長 小野瀬武康氏

茨城県内のネットワーク分析として以下を分析した。

- ・ 町内会のネットワーク分析
- ・ 農村地域のネットワーク分析
- ・ 都市地域のネットワーク分析
- ・ 近所のネットワーク分析
- ・ 「たまり場」のネットワーク分析
- ・ 交流型のネットワーク分析

新たな社会貢献の仕組みづくりを実現させるための手段としては、地域の特性を把握して特性をふまえた手段をとることである。キーパーソンの発見・発掘が必要であり、地域の問題意識を抱えている人の力を借りることや他所から来た人（脱サラ・脱都会）のエネルギーを地域に入れることも必要であるというコーディネート機能の重要性についても提示された。

その後、演習としてコミュニティ分析のスキルと活用について学んだ。

② 「コミュニティカルテの作成について」（2011/8/11 実施）

独自のコミュニティカルテ作成のために以下の内容で演習を実施した。

- ・ 取り組む問題とコミュニティの範囲
- ・ コミュニティカルテ作成手法
- ・ 調査の実施

(b) コーディネートのスキル

③ 「コミュニティソーシャルワーク①～③」（2011/8/25 実施）

- ・ 「コーチング」を株式会社燦 Coaching SAN 代表取締役の西村雅司氏による。
- ・ カウンセリングを臨床心理士・学校心理士の鈴木宏子氏による。
- ・ 実践と活用を牛久市社会福祉協議会の中村佳代氏による。

④ 「コミュニティソーシャルワーク④～⑥」（2011/9/8 実施）

- ・ ネットワーキングを守谷市ネットワーカー連絡協議会長の安藤聖志氏による。
- ・ コミュニティの核となる人物を探る①を茨城県水戸生涯学習セン

ター管理事務所の池田馨所長による。

- ・ コミュニティ調査について茨城県水戸生涯学習センター佐々木英治，篠崎昌子社会教育主事による。

③ 「コミュニティソーシャルワーク⑦」(2011/10/13 実施)

- ・ コミュニティの核となる人物を探る②を塙山学区住みよいまちをつくる会会長 西村ミチ江氏による。

c. モデルプログラム（各センター版）の開発

コミュニティエリアの地域性を考慮したプログラム開発を行った。

各センター区の特色と地域の実態に即したモデルプログラム（コミュニティ版）を開発するために，各センターに助言者を配置した。

(ウ) モデルプログラム（県域版）の展開を補う研修

この調査研究・プログラム開発事業を進めるにあたって，当初よりペーパーによる報告だけではない「成果の実のある還元」に視点を向けてもいる。そこで，生涯学習調査研究委員が事前・事後調査する内容についてメールによるOJTを活用して各センターにおいて共有化を図りつつプログラムが展開されるよう試みた。集まったモデルプログラムの展開は県内について一般的な内容となりつつあるので，各センター区の特色や地域性についての学びはOJTを特に活用するようにした。

a 地域課題と役割についての理解（資料 1-1, 2）

(a) 各センターにおける地域課題の明確化を図るための研修を実施する。

- ① 地域の人々の生活にとってのマイナス要因を探る。
- ② 地域の置かれている状況で，身近に感じている問題を探る。
- ③ 改善の余地があり，行政や団体に関わることで見直せる問題を探る。
- ④ 「支え合いと活気ある社会」の構築をすすめるために解決しなければならない問題を探る。
- ⑤ 地域課題を緊急性のあるものと今後計画的に進めるものに分けて課題解決を図る。

(b) 「新しい公共」の考え・視点から各センターの役割について考察する。

- ① 地域課題解決のために，自助・互助・公助の視点からどのように関わるか。
- ② 茨城教育プラン「第3章豊かさを広げる生涯学習の推進」の実現にどのように関わるか。

b 「無縁社会」「新しい公共」について考える・共有する機会としての研修（資料 2-1, 2）

(a) 各センターのテーマ設定について研修を実施する。

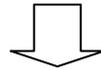
① 無縁社会の問題を項目別に分ける。

- ・ 家庭教育問題
- ・ 青少年教育問題
- ・ 高齢者問題
- ・ 地域社会問題

② 「新しい公共」の考え・視点による各センターの役割を組織の関係図に

まとめる。

- c 「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくりへの考察
(資料 3-1, 2)
 - (a) 人間的なつながりを深めるために必要なことについて
 - (b) 「学校を核とした人間的なつながりを深めるためには？」について
 - d 「コミュニティ分析」(資料 4-1, 2)
 - (a) 各センター区の地域課題について分析する。
 - (b) 各センター区の「無縁社会に立ち向かう問題点」について分析する。
 - (c) 各センターが取り上げようとする地域について分析する。
 - (d) 各センター抽出地域のコミュニティ分析の資料を準備する。
 - e 「コミュニティカルテ」作成計画立案(資料 5)
- (エ) 各センター区のモデルプログラム(各センター版)開発の基本方針
- a 【「無縁社会」の検討から】
 - (a) 「縁」を捉える
「縁」＝「私たち」のつながりであり、縁が切れたときは孤立する。
(自立したつながりが「私たち」)
「人は独りでは生きられない」ことから幸せになるためのネットワークづくりを「縁」と捉えることにした。「地縁」「血縁」「友縁」「職縁」の4つを社会化とする。
 - (b) 「無縁」を捉える
前記の4つの縁から孤立した人たちを「無縁」と考えたがモデルプログラムの学習が進むにつれ多くの検討がなされた。
「人は独りで生きられない。幸せになるためのネットワークづくりを縁と呼ぶ。」とは個人のことと捉えられる。孤立した人たちを「無縁」という表現はきつすぎる。孤立というと「弾き飛ばされた」感が強い。助け合って幸せに暮らせるようなネットワークづくりを「縁」と呼ぶ。この「縁」が薄い、または加われない人を「無縁」とする方が適切であるという考えになった。
 - b 【「無縁社会」に立ち向かうために】
 - (a) 人と人との絆が希薄になった「無縁社会※」に対応していくためには、戦後日本社会が構築したシステムからこぼれた高齢者、子育て世代、引きこもり、要介護者、無縁社会予備軍等の受け皿としてのコミュニティの「補強」と「再生」が必要とされている。
 - (b) 生涯学習に対する要請として、社会の現代的課題や地域課題に対して、問題解決型学習方法の採用や社会貢献への視点から、具体的な取り組みの必要性が言われている。
 - (c) 学習成果を社会的弱者支援、子育て支援をはじめ、災害ボランティアや復旧など広く地域社会活動を担う人材については、自治を楽しいと感じられるような、あるいは自ら行動したほうが住民にとって有益であると考えてもらえる仕掛けの中から人材の発掘・育成の学習機会の提供が求められている。



みんなで地域をつくる新しいシステムの構築が必要とされている

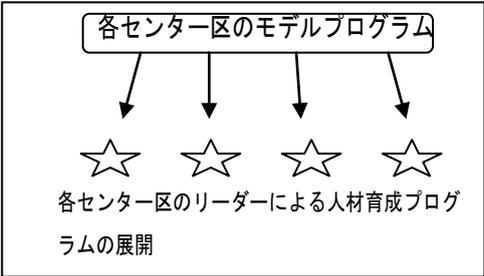
＜各センターのモデルプログラムのテーマ＞

「人と人の縁を紡いで、助け合っていく地域社会をつくろう！」

※ 無縁社会
人は独りでは生きられない。助け合い、幸せに暮らせるためのネットワークづくりを「縁」と呼ぶ。「地縁」「血縁」「友縁」「職縁」の4つを社会化という。これらの「縁」が薄い、または、加われない人々を「無縁」とし、社会的な環境の変化に伴い対応できない状態・社会現象を「無縁社会」と捉えた。

c 【各センターのモデルプログラムの基本的な考え】

(a) 各センター区のモデルプログラムの対象を検討した。当初は各センター区の各地域の代表者の育成を考え、プログラムで育成された各地域のリーダーが各地域の人材育成のプログラムを開発し展開することで考えた。

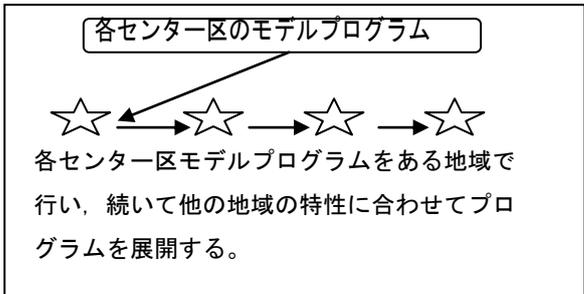


(右図)

(b) コミュニティの範囲について一義的・画一的に策定することはほぼ不可能ではあるが茨城県の地域特性を協議した結果から、継続的に活性化するには短学級の小学校区が以下により適正ではないかと判断した。(資料として昭和54年度「コミュニティに関する報告書」コミュニティ対策推進研究会)

- (a) 歴史的条件・現実条件（主体的条件及び意識・感情も含む）から「おらが学校」という言葉に代表される小学校区がよい。
(b) 子ども会、PTA 等他の機能別住民組織の(地区)委員の選出基盤がよい。
(c) 行政による物的施設が配置・整備されている。
(d) リーダーが地域の諸条件の変化（自ら活動が生み出したもの、他の住民が作り出したもの）に気が配れる範囲である。
(e) 地域の生活課題の共有化が図れる範囲である。
(f) ヒアリング調査や訪問等が可能な範囲である。

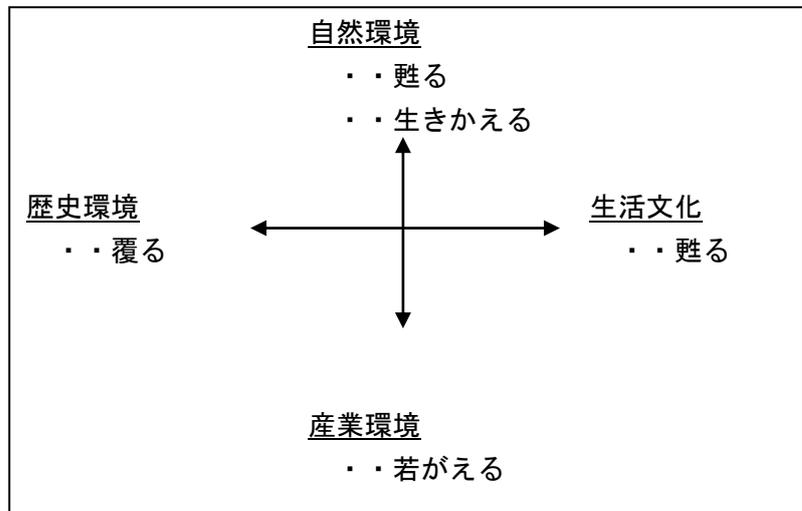
(c) (b) によりモデルプログラムの対象を短学級の小学校区と想定した。そのことにより(a)のようにプログラムを展開する方法と右図のようにプログラムを展開するやり方が馴染む地域やプログラムがあるのでないかと考えた。



d 【コミュニティカルテの作成と活用】

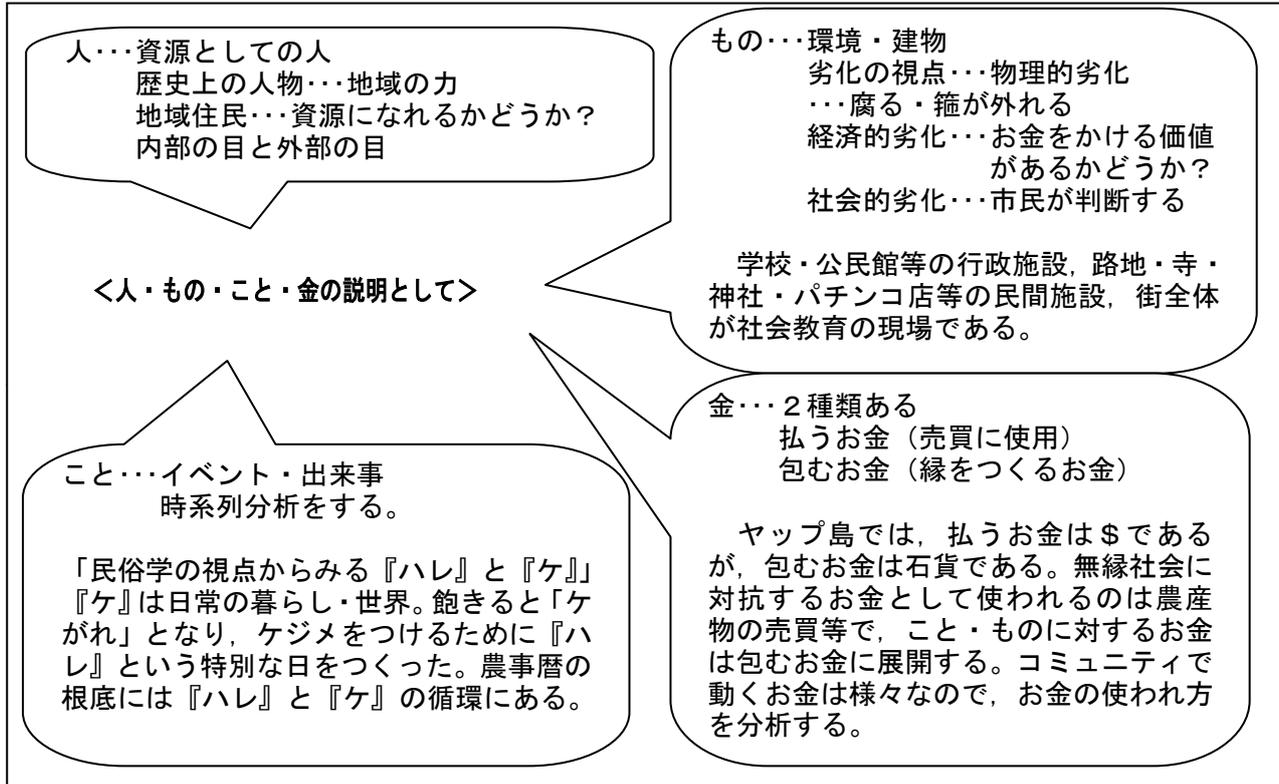
- (a) 地域のシーズ（種）をニーズに変えプログラムを展開するには、地域をよく知り伸長したい部分や課題となる部分を刺激することがプログラムを魅力的にする上で重要である。『コミュニティを分析するには、そのカルテ（処方箋）を作成することが必要である。』という考えのもとにコミュニティカルテの作成に取り組んだ。内容的には「絵に描いた餅」とならない活用性の高いもので刻々と変化する社会の実態に合わせて加除加筆が常にできるものを作成することになった。
- (b) ここではプログラム作成のためにコミュニティカルテをプログラム開発に活かしたかを述べる。
- ① 地域の特徴の分析 1
「4匹のかえる」

この座標を「い・く・わ・よ」かえると名づけて分析のときに活用する。

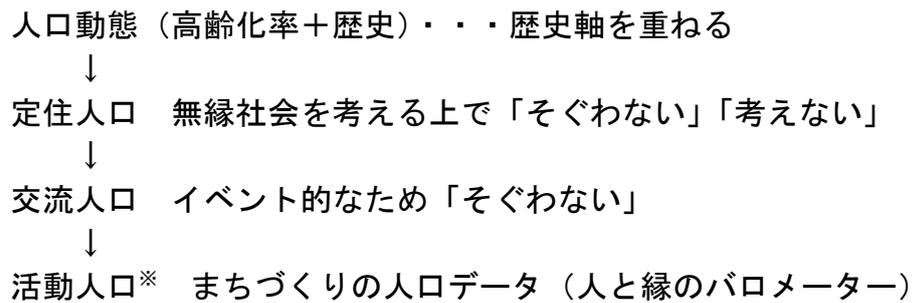


⑥ 対応策の特性

- 加減乗除・・・人・もの・こと・金を組み合わせる。
- 足し算できる要素・・・人・もの・こと・金
- 引き算できる要素・・・人・もの・こと・金
- 掛け算できる要素・・・人・もの・こと・金×外部からの力
- 割り算できる要素・・・計画（3年間で対応する場合は3で割る）



⑦ 地域の特性の分析 2



※ 活動人口
 「定住人口」や「交流人口」ではなく、そこで活動する人の数を示す。地域ネットワークの指標となるもの。人と人との関わりが縁であり、活動人口は「縁（えにし）」で数える。

水戸生涯学習センターと県教育庁生涯学習課により、平成25年度に「活動人口」の提言につなげる。

e 【各センター区のモデルプログラム（各センター版）のテーマ】

各センターが地域の特性を考慮して以下のようなテーマを設定しプログラムを開発している。

- (a) 県北生涯学習センターは、無縁化に立ち向かい、孤立化を防ぐ人材育成活動の中で人と人をつなぐコミュニティづくりを考え、日立市特有のコミュニティに対応した「城の丘のつながりを深めよう」をテーマとした。
- (b) 鹿行生涯学習センターは、女性プラザと併設する特性を活かして「男女共同参画に支えられた豊かな子育てコミュニティづくり」をテーマとした。
- (c) 県南生涯学習センターは、地域で生活する全ての人に居場所があり、人の役に立つ喜びが味わえる社会の構築を目指し、無縁社会に立ち向かう地域力を育成することを目的として「土浦力をダス！」をテーマとした。
- (d) 県西生涯学習センターは、地域のつながりとリーダー養成に主眼を置いて学校を核とした世代ごとの課題に対応した活動づくりを目的として「地域で子どもを育てよう」をテーマとした。



ウ 平成24年度の取り組み

(ア) 調査研究委員会及び合同協議会の開催

a 茨城県水戸生涯学習センターに於いて5回(6/1, 7/25, 9/21, 11/28, 3/6)実施した。

平成24年度調査研究事業実施計画 無縁社会に立ち向かう～新たな社会貢献の仕組みづくり～

茨城県水戸生涯学習センター

月日	持参物	10:00~	10:15~	11:00~	12:00~	13:00~	13:30~	15:00~	16:00~	成果
1 6/1 (金)			全体協議 県生涯学習課長挨拶 水戸生涯学習センター所長挨拶 参加者自己紹介 委員会組織	協議 「活動人口」について [講師] 茨城大学 准教授 長谷川幸介氏 [パネラー] 水戸生涯学習センター 企画課長 長平塚雅夫	尿食・休憩	事業の概要 説明 3年間を見 通した事業 説明	情報交換 ・モデルプログラム(各センター版)報告 ・モデルプログラム(各センター版)の概要 ・各センターのプロジェクトチーム組織 ・プログラムの進捗報告 ・質疑 ・助言	協議Ⅱ 評価表作成・活用について ワークショップ	協議Ⅲ 本日のふりかえりと今後の展開を 録る	・各センターの進捗状況 の把握。 ・H25~26年度に向けた、事業ビジョンの把握。

月日	持参物	10:00~	10:30~	12:00~	13:00~	14:00~	16:00~	成果
2 7/25 (水)	事業進捗状況 事業評価表 (OJTシート)		協議 「無縁」時代のメディアとコミュニティ ～ラジオ番組の現場で得た実践知～ [講師] フリーディレクター 山崎 一希 氏	尿食・休憩	協議 「活動人口」について 調査方法の実際	情報交換 モデルプログラム(各センター版)報告 ・モデルプログラム進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ※質疑を含めフリートーク形式であるが、各センター担当者をパネリスト、アドバイザーを助言者として設置する。	茶話会 本日のふりかえりと今後の展開を 録る	・各センターの進捗状況 の把握。 ・活動人口調査についての 把握。

月日	持参物	10:00~	10:30~	11:00~	12:00~	13:00~	15:00~	16:00~	成果
3 9/21 (金)	事業評価表 (OJTシート) 事業進捗状況		協議 ●H24年度の事業展開の概要説明と H25年度以降の事業展開の構想につ いて説明・協議 [講師] 茨城県生涯学習課長 長谷川 幸介 氏 水戸生涯学習センター 総務課長 菅野 正 氏	情報交換 ●モデルプログラム(各センター版) 報告 ・モデルプログラム進捗報告 ・事業評価表を使った報告	尿食・休憩	情報交換 ●モデルプログラム(各センター版)報告 ・モデルプログラム進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ※質疑を含めフリートーク形式であるが、各センター担当者をパネリストにし、パネリスト、アドバイザーを助言者として設置する。 ※各センターごとに、そのセンター職員と県教育生涯学習課及び水戸生涯学習センター担当社会教育課、センター管内団体で情報交換する。	協議 「活動人口」について 調査方法の実際	茶話会 本日のふりかえりと今後の展開を 録る	・事業概要についての理解 ・各センターの進捗状況の把握。 ・活動人口調査についての把握。 ・スタッフ間の役割分担等の確認

月日	持参物	13:15~	13:30~	16:00~	成果
4 11/28 (水)	事業評価表 (OJTシート) 事業進捗状況 モデルプログラム (コミュニティ 版)(案)	受付	情報交換 ●モデルプログラム(各センター版)報告 ・モデルプログラム進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ・活動人口調査実践報告	茶話会 ●モデルプログラム(コミュニティ 版)実施について① ・各CのH24年度提出報告書につ いて(フォーマットの提示) ・水戸Cネットワークフォーラムにつ いて(参加確認と参加方法) ・本日のふりかえりと今後の展開を 録る	・各センターの進捗状況 の把握。 ・活動人口調査についての 把握。 ・モデルプログラム(コミュニ ティ版)の作成

月日	持参物	13:30~	14:00~	16:00~	16:30~	成果
5 3/6 (水)	H25年度 モデルプログラム (コミュニティ 版)プレゼン	受付	閉会行事 協議 ・H25年度実施に向けて、モデルプロ グラム(コミュニティ版)プレゼン テーション ※各生涯学習センター及び市町村開 関係員、NPO等、H25年度実施団体 によるプレゼン ・助言指導	協議Ⅳ ・平成24年度生涯学習調査研究 事業報告書について ・平成25年度調査研究事業につ いて ・その他	閉会行事	・H25年度にむけた事業 展開計画の把握。

- b 各センターが実施しているモデルプログラムの他地域への拡大を図るため、市町村職員及びNPO等職員が参加する合同協議会を同時に開催した。様々な視点からの意見交換により、モデルプログラムの点検見直しの場となった。
- c 協議及び会議内容は、毎回モデルプログラム(各センター版)の進捗状況の報告と評価発表、次年度展開可能な第3次団体への趣旨説明を含めた広報及びスキル研修を実施した。さらに、「活動人口」調査のための研修を実施した。
- d 報告書及び実践事例集を作成し各関係機関に配布するとともに、今年度の取り組みを中心に事業を総括し、次年度への課題の整理を行った。

(イ) 活動人口調査の実施

a 各センターが実施した調査を集計及び分析を実施し、地域別の特徴の考察及び地域別活動人口を積算した。

(ウ) 各センター支援

第3次団体にモデルプログラム（各センター版）を提供している各センターに対し、担当社会教育主事を配置し県教育庁生涯学習課職員とともに各センター事業に参加し、様々な支援及び連絡調整を行った。

(エ) 事業評価

常時プログラムについての検証を実施するために、OJTを開催し、事業分析シート及び事業評価シートを用い評価を行った。（資料6-1, 2, 3, 4）

事業分析シート		作成者	〇〇〇〇
----------------	--	-----	------

1 事業概要

事業名	生涯学習調査研究事業		
事業目標	<p>急激な社会の変化に伴い、人と人とのつながりが希薄化し、互いに支え合うことができる社会が崩壊しつつあるという「無縁社会」が広がっているという現実がある。この課題に対応するためには、住民の社会貢献への意識を高めていくことが求められている。つまり、社会貢献の新しい仕組みづくりについて考えていかなければならなくなってきている。そこで、水戸生涯学習センターは県生涯学習課とともに、県内4生涯学習センターに理解・協力を求めながら、プログラム開発・実践・支援を展開する。また、「地域の人々が元気になるつながり力」を数値で表す「活動人口」調査を行う。さらに、開発したプログラムを小学校区程度の範囲で展開できるように広めていくことを目的とする。</p>		
事業の内容 具体的な手だて	<p>水戸生涯学習センター 平成23年度・モデルプログラム(県域版)開発実践 平成24年度・モデルプログラム(各センター域版)支援 調査研究委員会の実施・次年度実施団体選定 「活動人口」調査 平成25年度・モデルプログラム(コミュニティ域版)支援 「活動人口」調査</p>	<p>県内4センター生涯学習センター 平成23年度・モデルプログラム(県域版)実践 平成24年度・モデルプログラム(各センター域版)実践 調査研究委員会の実施・次年度実施団体選定 「活動人口」調査 平成25年度・モデルプログラム(コミュニティ域版)支援</p>	<p>第三次団体(自治体・NPO等) 平成24年度・モデルプログラム(各センター域版)実践 平成25年度以降・モデルプログラム(コミュニティ域版)実践</p>

2 予想される・期待される結果(アウトプット)

アウトプット	<p>3ヶ年の継続調査研究を、水戸生涯学習センターと県生涯学習課が先導的な役割を担い、県内4生涯学習センター及びセンター管内の各種社会教育関係団体等を対象に、地域の特性に合った人材育成プログラムを開発し実践すると、新たな社会貢献を担う人材が育成され、「人と人とのつながりの力を示す活動人口」が増加する。</p>
---------------	---



3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	<p>「無縁社会」を検討する</p> <p>「地域を知る」手立てを習得する</p> <p>「モデルプログラム(各センター版)」を開発する</p> <p>「活動人口」の調査を行う</p> <p>「モデルプログラム(コミュニティ版)」の実践団体を選定する</p> <p>「モデルプログラム(コミュニティ版)」を開発する</p> <p>「モデルプログラム(コミュニティ版)」を実践する</p>	<p>「無縁社会」にいたる社会的背景が理解できた人の数</p> <p>「無縁社会」に立ち向かうための協力(支援)組織の存在や手法が理解できた人の数</p> <p>地域との密接な関係づくりのため必要な「ネットワーク分析・コミュニティ分析・コミュニティカルテ作成スキル」が理解できた人の数</p> <p>地域との密接な関係づくりのため必要な「コーディネイトスキル」が理解できた人の数</p> <p>「モデルプログラム」が開発できたセンターの数</p> <p>「活動人口」の定義が理解できた人の数</p> <p>「活動人口」の調査方法が理解できた人の数</p> <p>「活動人口」の算出方法が理解できた人の数</p> <p>「モデルプログラム」を展開する各種社会教育関係団体等を選定できたセンターの数</p> <p>「モデルプログラム」が開発できた各種社会教育関係団体等の数</p> <p>「モデルプログラム」を実践する各種社会教育関係団体等の数や支援者の数</p>



	内容	指数
最終アウトカム	<p>新たな社会貢献を担う人材が育成され、人と人がつながりあう力が増大された。</p>	<p>「活動人口」の数</p>

事業評価シート	作成者	〇〇〇〇
----------------	-----	------

期日	講座名	講座内容
6月1日	生涯学習調査研究委員会	①全体協議・委員会についてのインフォメーション ②講話「活動人口」について シンポジウム 茨城大学 長谷川幸介准教授 水戸生涯学習センター平塚寿夫企画振興課長 ③事業概要説明 ④情報交換 ⑤事業評価についてインフォメーション ⑥本日の振り返り

結果(アウトプット)	評価 (Check)	改善 (Act)
参加者・・・24名 実施時間・・・7時間	センター管内自治体の参加率60% 自治体への事業説明が不足していた 情報交換で、各センターのプレゼンが時間オーバー	参加者を増やすため、センター管内で、興味を示している自治体部署の拡大とNPO団体等への呼びかけ実施。 委員会の進行について再考する

成果(アウトカム)	評価 (Check)	改善 (Act)
全体協議	水戸生涯学習センターとしての役割と県生涯学習課との連携が、受講者(各センター)が理解できた。	
活動人口	活動人口の定義や捉え方の再提案により、さらに具体的な数値化への基礎が築けた。	今回をベースに、さらに具体化できるように、「アンケート質問項目」の検討や積算方法の検討の時間を設ける。
事業説明	主に、市町村生涯学習課対象の事業概要説明であったが、市町村にしてみれば次年度以降の具体的な関わり方が明確でないため、積極的な参加とは言えなかった。	呼びかける対象を拡大する。
情報交換	各センターは、自分のプログラムと対比しながら、意欲的にプレゼンしていた。どのセンターにも共通して、受講生の年齢に偏りが感じられた。	継続実施 新規受講生獲得のため、講座の構成の新たな取り組みのため、講義的なプログラムを追加する。
事業評価	各センターとも、プログラム実施ごとに詳細な振り返りを実施していることから、新たな試みと言うよりも、今までのものをペーパーに落とす感覚で良いと伝えた。理解は得られた。	各センターには実施ごとに毎回提出をお願いした。

計画 Plan	25年度実施団体を見据えた、委員会参加者を構成する。プログラム参加者を増やすため若者層への働きかけができる、また、コミュニティーづくりのための若者層からの定言的な内容の講話を取り入れた、プログラムとする。
-------------------	--

(オ) 次年度に向けて、モデルプログラム（コミュニティ版）の広がりや定着のための研修会の実施
「無縁」時代のメディアとコミュニティ～ラジオ番組の現場で得た実践知～
フリーディレクター山崎一希氏

「無縁社会に立ち向かう」新しい社会貢献の仕組みづくりについての調査研究

「無縁」時代のメディアとコミュニティ～ラジオ番組の現場で得た実践知

フリーディレクター 山崎一希

2012年7月25日 水戸生涯学習センター

1. 自己紹介

1983 年茨城県常陸大宮市出身慶應義塾大学環境情報学部卒業

2006 年茨城放送入社

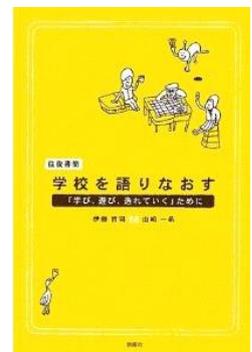
『阿部重典のアットマーク』『恭ノ介のココで語れば』などワイド番組のディレクター、プロデューサーのほか、ラジオドラマの脚本・演出やステージイベントのディレクションなど担当

2011 年茨城放送を退職フリーディレクターに

あわせて茨城大学大学院に入学し、社会心理学を専門に学ぶ

【その他の活動】

路上生活者・生活困窮者の自立支援活動、県立高校の適応支援教室ボランティアスタッフ、共著書『往復書簡・学校を語りなおす-「学び、遊び、逸れていく」ために』（新曜社）



2. 茨城放送『notes. (ノーツ)』という試み

- 現在担当している茨城放送の番組『notes. (ノーツ)』
毎週土曜日13:00～18:00 生放送

【パーソナリティ】山田タボシ (WEBディレクター)
/ ayako_HaLo (シンガー)

【アシスタント】木村さおり



- 「参加型」の追究
 - ・ フェイスブックなどのSNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の活用
 - ・ 参加型番組会議の開催、そこでの議論を軸を番組をつくっていく



エ 平成25年度の取り組み

(ア) 調査研究委員会の開催

a 茨城県水戸生涯学習センターに於いて5回(6/7, 7/19, 10/4, 11/8, 1/31)開催した。

平成25年度調査研究事業実施計画書 無縁社会に立ち向かう～新たな社会貢献の仕組みづくり～

期日	持参物	9:00	9:30	9:50	11:45	成果
1 6/7 (金)	・モデルプログラム(コミュニティ版)の概要	受付	全体会 水戸生涯学習センター所長挨拶 県生涯学習課長挨拶 参加者自己紹介 委員会組織	協議 調査研究事業の意義について 調査研究事業展望について 活動人口調査について	茶話会 情報交換 ・各センターのプログラム概要説明 ・本日の振り返りと今後の展望を練る	・他センターの進捗状況の把握 ・H25年度の事業ビジョン把握
2 7/19 (金)	・モデルプログラム(コミュニティ版)実践事例	受付	開会行事 協議 「活動人口」調査に係る実施主旨及び方法についての研修及び積算の方法について	情報交換 ・モデルプログラム(コミュニティ版)の進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ※質疑を含めフリートーク形式で実施し、他センター職員や委員より助言を受ける。	11:15 茶話会 ・本日の振り返りと今後の展望を練る	・各センターの進捗状況の把握 「活動人口」調査について及び実践方法の把握
3 10/4 (金)	・モデルプログラム(コミュニティ版)実践事例	受付	開会行事 協議Ⅰ 「活動人口」調査に係る進捗報告及び質疑 「活動人口」調査から分かること(考察発表) 協議Ⅱ 「報告書」作成に係る内容及び様式についての研修	10:30 情報交換 ・モデルプログラム(コミュニティ版)進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ※質疑を含めフリートーク形式で実施し、他センター職員や委員より助言を受ける。	11:30 茶話会 ・本日の振り返りと今後の展望を練る	・各センターの進捗状況の把握 「活動人口」調査の再確認 「報告書」作成について内容・書式の確認
4 11/8 (金) ※変更	・モデルプログラム(コミュニティ版)実践事例 「活動人口」調査結果 各センターの「報告書」 (事前にメールにて報告)	受付	開会行事 協議Ⅰ 各センターにおける「活動人口」調査に係る調査結果・考察の報告会(全体に対する確認) 協議Ⅱ 各センターの「展開報告書」について中間報告	10:30 情報交換 ・モデルプログラム(コミュニティ版)進捗報告 ・事業評価表を使った報告 ※質疑を含めフリートーク形式で実施し、他センター職員や委員より助言を受ける。	11:30 茶話会 ・本日の振り返りと今後の展望を練る	・各センターの進捗状況の把握 「活動人口」調査結果と他センターの活動報告の内容及び書式の把握
5 1/31 (金) 中講座室		受付	開会行事 協議Ⅰ (1)平成23年度～25年度生涯学習調査研究事業報告書について (2)その他 (3)質疑 協議Ⅱ (1)平成26年度調査研究事業について (2)その他 (3)質疑		11:00 全体会 水戸生涯学習センター所長挨拶 県生涯学習課長挨拶	・H26年度の事業展開計画の把握

b 協議内容は、モデルプログラム(コミュニティ版)の進捗状況の報告と確認「活動人口調査」に係る調査票及び調査地域の検討を実施した。また、「活動人口調査」から得たデータを分析することにより、各地域のもつ課題の整理について協議した。さらに、事業報告書の作成を担った。

c 報告書を作成し各関係機関に配布することで、新しい社会貢献の仕組みを示すとともに、配布先の課題に即した形にアレンジするための基礎となる考え方

として発表した。

(イ) 活動人口調査の実施

a 調査対象地域（地域コミュニティ再生事業対象地域）に調査票による調査を実施した。

b 回収した調査票の集計及び分析を実施し、各対象地域の活動人口を積算した。

(ウ) 各センター支援

第3次団体に対し支援している各センターごとに、担当社会教育主事を配置し、モデルプログラム（コミュニティ版）の進捗にあわせ、関係諸機関との連絡・調整をはじめとする支援を実施した。

(エ) 文部科学省主催「地域と協働する大学づくりシンポジウム ～地域と大学の更なる協働にむけて～」のポスターセッションに茨城大学とともに参加し、地域の特色にあった社会貢献の仕組みの構築に向けての取り組みを発表した。

文部科学省
地域と協働する大学づくりシンポジウム
～地域と大学の更なる協働に向けて～

○日時 平成 25 年 5 月 10 日 (金) 13:30～18:00
○場所 文部科学省旧庁舎 6 階講堂

プログラム

13:30～13:40 開会挨拶 文部科学省
13:40～13:50 行政説明 文部科学省
13:50～14:15 事例発表
※これまでの取組の成果や大学による地域貢献に関する取組を報告します。
松田 恵示 (東京学芸大学教授・学長補佐)
山川 尚美 (広島修道大学人文学部教授・学術交流センター長)

14:30～16:00 パネルディスカッション
※以下のパネリストにより地域と大学の協働の在り方を議論します。
○パネリスト
大宮 登 (高崎経済大学地域政策学部教授)
門川 大作 (京都市長)
中西 茂 (読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員)
藤江 昌嗣 (明治大学副学長・社会連携機構長)
藤田 公二子 (富山大学地域連携推進機構生涯学習部門教授)
○ファシリテーター
上月 正博 (独立行政法人国立高等専門学校機構理事、前文部科学省大臣官房審議官)

16:00～17:00 ポスターセッション
※18の参加大学がポスター等を用いて地域貢献に関する取組等を報告します。
和歌山大学、琉球大学、三亜大学、北海道教育大学、東京学芸大学、香川大学、山口大学
明治大学、青森中央学院大学、広島修道大学、兵庫大学、富山大学、熊本大学、神戸学院大学
宮城教育大学、福島大学、岩手大学、茨城大学

17:00～17:55 全体討議&ミニワークショップ
※パネルディスカッションでの議論を踏まえつつ、参加者全員でこれからの大学と地域の協働の在り方を議論します。
○ファシリテーター
佐々木 英和 (文部科学省生涯学習調査官、宇都宮大学地域連携教育研究センター准教授)

17:55～18:00 閉会挨拶 文部科学省
18:30～20:00 情報交換会 (文部科学省1階食堂)

参加申込は、こちらから
http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/daigaku/1316487.htm



(オ) 栃木県日光市社会福祉協議会が、高齢化が進んだ地域コミュニティを対象にした様々な活動を実施しているため、当事業との連携が相互に良い効果が期待できると考え連携協力して本事業を推進した。(長谷川委員長より助言)

6 生涯学習調査研究の組織

学識経験者、NPO等団体職員、県・市町村職員、各生涯学習センター（県北・水戸・鹿行・県南・県西）職員により構成する「生涯学習調査研究委員会」を設置し、調査研究を行った。

第2章 社会貢献活動を担う人材の発掘・育成モデルプログラムの展開

1 茨城県県北生涯学習センターの実践

県北生涯学習センターの取り組み

1 調査研究事業の取り組みの概要

- (1) 事業名 コミュニティを考える～城の丘のつながりを深めよう～
- (2) 事業の趣旨

近年、少子高齢化や情報の高度化が進み、それに伴い住民同士の関係の希薄化による地域活力の衰退など「無縁社会」と呼ばれる現象が起きている。このような時代にあって、住民の孤立化を防ぎ、住民の社会貢献活動への参加を促進することが求められている。

そこで、平成23年度生涯学習調査研究事業の中で城の丘団地を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、子育て世代が中心の団地であり活力はあるが、将来の高齢化を見据えた方策の立案が今から必要であること、また住民同士の交流と助け合いを求めていることが判明した。そのため、団地内に「新しい公共」の担い手となるキーマンを発掘・育成し、住民相互の助け合いや支援を醸成するために、地域住民の意識の向上を図るプログラムを展開する。

地域のつながりの大切さは2011年3月11日の東日本大震災以降、重要だと認識されている。しかし、2年という月日の経過が住民の意識の変化をもたらしている。大震災直後と現在ではだいぶ違ってきているのが感じられる。このような中で、今後の人と人とのつながり方について検討することを目的として、無縁社会に立ち向かい、一人ひとりが他者を支え行動する『支援』が息づくコミュニティの成立をめざして平成24年度から25年度と2年間にわたり活動を展開する。

- (3) 対象 城の丘団地住民

2 実践事例

- (1) 内容・方法

ア プログラム計画「企画員会議」

平成24年度は県北生涯学習センターが主体となってプログラムを検討するメンバーである企画員を城の丘団地内で募集し、プロジェクト会議及び企画員会議を8回行った。

※企画員募集チラシは城の丘団地630戸に配布し8名の企画員が集まった

企画員募集チラシ

城の丘絆づくりプロジェクト
企画員募集 女性の方大歓迎

城の丘団地の皆様へ・・・

今年度、城の丘団地自治会では、茨城県県北生涯学習センターと共に、城の丘絆づくりプロジェクトを立ち上げることになり、地域の皆さんから広く企画員を募集することになりました。役員、班長など関係ありません。誰でもOKです。楽しい企画を一緒に考えてみませんか？希望する方は電話かファックスにて支部長 又は県北生涯学習センターまでご連絡ください。第一次募集締切は6月10日ですが、その後も随時受け付けいたします。

支部長 山形 哲司

一緒に楽し
みましょう

お問い合わせ
・茨城県県北生涯学習センター
TEL 0294-39-0012
FAX 0294-39-0121
・支部長 山形 090-3901-6859

企画員申込書 FAX 39-0121

・県北生涯学習センター事業グループ 永井、佐藤 ・支部長 山形 行

住所 _____ () 番 _____

氏名 _____

電話 _____

(ア) 第1回企画員会議 (理念設定)

「何のためのまちづくりか」という最も根本的・究極的な目的となる「理念」を明確にし、ぶれることのない指針を確立する。

この「理念」が根幹であり判断基準となるので、これを参加者が「共有すること」が重要である。募集により集まった企画員が3班に分かれてワークショップを行い、



【顔が見える城の丘 風通しの良い城の丘を目指して】
というテーマが設定された。

(イ) 第2回企画員会議 (現状把握)

「つながりを深めるために何をやれば良いのか」という課題について、具体的な方策を考えることで企画員の意見がまとまってきた。

(ウ) 第3・4回企画員会議 (未来予測)

団地の実情をベースに城の丘の未来を予測する。明るい兆しを伸ばしていく可能的な将来と、気になる現状を放置した成り行きの将来を考えながら、まちづくりのコンセプトを導き出し、ランドデザインを描く⇒イベント企画

「第1回 城の丘絆フェスティバル」の開催イベントを通して“つながる”一歩を踏み出すことを確認し、まずは企画員自身がつながることを意識した。



(エ) 第5回企画員会議

今回は第1回絆フェスティバルの当日のボランティアスタッフも参加した会議となり、当日の作業分担の確認など、手際よく進んでいった。この背景には企画員会議の他、自主的に企画員が集まり、各々が担当するブースの進捗を確認するなど主体的に自分たちの課題と捉え、自発的な行動があった。このことは今回の中での一番の成果と言える。

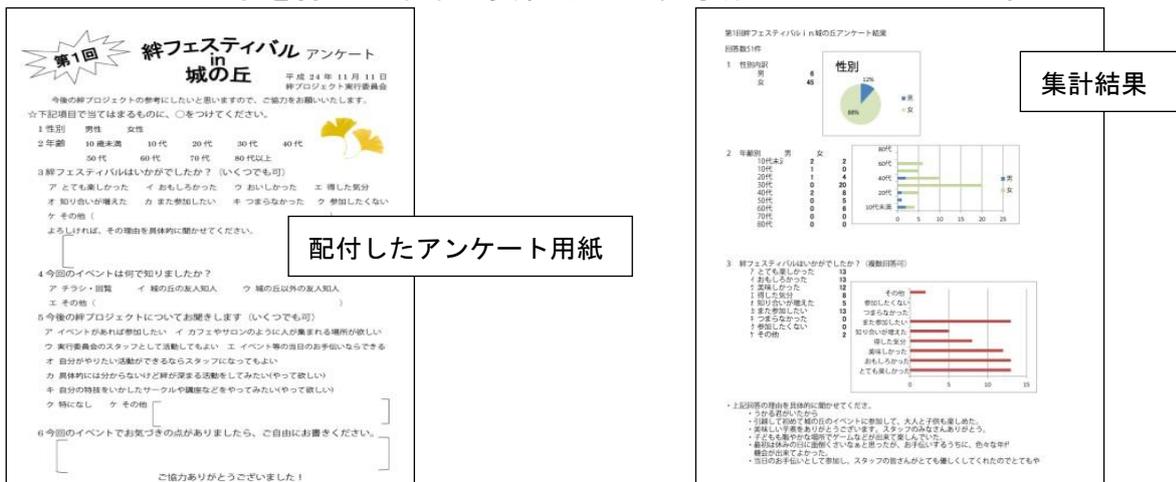
(オ) 第6回 「第1回城の丘絆フェスティバル」の開催（目的達成のための手段）
 団地内の人と人とのつながりの構築及び、構築を担う人材の育成のための手段として、「第1回城の丘絆フェスティバル」を開催した。



(カ) 第7回企画員会議（要所説明）
 絆フェスティバルの反省会の実施

フェスティバル終了後も活動を続けた。良かった点、反省点等の今後の課題について自主的に分析したことを持ち寄り、ワークショップを行った。

このワークショップで可能的な将来像と成り行き的な将来像の両方を描き出すと、その間にギャップを生み出している要素が見えてくる。そこで次回は、ここに手を打てば未来が変わるという局所になると整理した。



(キ) 第8回企画員会議（方法立案）
 「まちづくり研修会 ～1年を振り返って～」
 ・講師 宮崎道名氏 佐野智香氏

反省会の中で、まちづくりにおいて専門的な講師の指導を受けたいという声があり企画した。今後の活動の指針になることと思われる。

イ 実践内容（計画編成）

平成25年度は24年度の県北生涯学習センター主体の実践から企画員主体の実践に移行してきた。平成25年11月17日開催の「第2回城の丘絆フェスティバル」に向けて4月からワークショップを企画員の主体で15回行った。15回のワークショップは絆フェスティバルだけではなく、「絆ニュース」の発行や、団地内の一斉清掃への参加を促すためのミニイベントの企画・運営など、昨年度の実践を活かし幅を広げて活動した。

(2) 評価

ア 講座やプログラムの評価視点・方法

ワークショップを中心に企画員会議を開催し、終了後の事業評価シートを作成した。その日の事業展開が目標まで達成したかについて評価した。

イ 講座やプログラムの評価の実際

事業分析シート

作成者 県北生涯学習センター

1 事業概要

事業名	コミュニティを考える 城の丘のつながりを深めよう
事業目標	・無縁社会に立ち向かい、一人ひとりが他者を支え行動する『支援』が息づくコミュニティの成立を目指す。 ・より明るく住みやすい城の丘団地を作る。
事業の内容 具体的な手だて	モデルプログラムの実施 ・ワークショップ ・講座の実施 ・イベントの開催

2 結果(アウトプット)

アウトプット	ワークショップ: 7回 講座 : 1回 イベント : 1回
--------	-------------------------------------

3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	①現状把握	①城の丘団地全戸にアンケート調査をかける。 630通のアンケートに対し167通の回答
	②組織づくり	②企画員募集に際し8名の希望者 実際の受講生と捉え、活動を開始(途中2名欠)
	③未来予測	③企画員会議を重ね、まちの未来を明るく可能的な未来を予測し、ランドデザインを描く。 「絆フェスティバル」の企画
	④目的達成のための手段	④イベント開催「絆フェスティバル」の開催
	⑤要所説明	⑤イベント開催後のアンケート集計結果や反省点などの分析をする。
	⑥方法立案	⑥⑤の分析を踏まえ、今後の具体的な方向性を考える。
	⑦計画編成	⑦次年度の計画や組織編成などを考える。

	内容	指数
最終アウトカム	企画員から絆プロジェクト委員会の発足	・活動人数 6名 ・城の丘絆フェスティバルの開催 参加人数 約530名 ・絆Newsの発行 ・自主研修会、先進地視察の企画

事業評価シート

期日	講座名・イベント名・テーマ等	講座内容 実行
平成23年 12月～ 平成25年 11月	城の丘のつながりを 深めよう	城の丘団地内のつながりが無い、もっと交流を深めたい等の声が聞こえる中、どうしたら住みやすい地域になることができるか、何をしたら良いのかをワークショップをしていくなかで考えてみよう。その中で企画したことを実践してみる。

結果(アウトプット)	評価		改善		
参加回数・人数			年間事業計画の中で大枠を決めておく。 次回までに各自への連絡が早く伝わるようにする。		
第1回 12名	地域の実情に合わせて講座の日程をその都度連絡することにしたので計画的な日程の見通しが立てられなかった。				
第2回 10名					
第3回 15名					
第4回 8名					
第5回 19名					
第6回 530名					
第7回 8名				効率性	妥当性
第8回 10名				4・3②・1	④・3・2・1

成果(アウトカム)	評価		改善
住民自らが地域の課題に気づき、課題解決のための行動を起こした。	テーマを設定し、そのテーマに沿った活動を実施した。		企画員が無理なく活動を続けていくためには、個々のつながりの度合いを適宜に調整できる組織づくりを目指す。 活動の目的達成のための「理念」はぶれないように常に意識する。目的達成のためには手段(方法)は一つではないことを理解する。 ネットワークを広げていく手段(方法)の開発を考える。
企画員としての組織を作り、目標を持って活動した。	企画員が率先して動き、地域の繋がりをつくり絆フェスティバルを開催した。その結果、企画員同士のつながりは強化された。		
企画員として継続して活動を続けていく	絆プロジェクトという組織の活動を広げるために、不定期ではあるが、絆Newsの発行をする。地域への情報発信の一つである。		
	成果	満足度	
	④・3・2・1	4③・2・1	

総合評価	合計点数	評価	コメント
効率性・妥当性・成果・満足度の評価の数字を合計する		S (15点～16点)	コスト的な改善の余地より、労力の改善の余地を考える必要がある。すべて企画員が先頭で動く体制から、まとめ役としての体制へ移行していくことを次年度への課題と考える。 活動の成果としては『絆プロジェクト』の組織化を考える方向に向かい、活動の発信をする絆Newsの発行、勉強会、先進地視察研修などが見られ意図した以上の成果があったと思われる。また『絆フェスティバル』の参加者などからの満足度はかなり高いようであった。
		④ (11点～14点)	
		B (8点～10点)	
		C (4点～7点)	

次時計画	内容
	地域の拠点となる場所で、各企画員が新しいネットワークを作るための事業を展開する。また、その各々のネットワークをつなぎ合わせる事業展開も考える。

3 調査研究事業の取り組みの成果と活用

(1) プログラム実施の成果

今回の一連の企画員会議を通して企画員会議に参加した受講生は漠然としたまちづくりから課題を明確にして、理念や目標を持ったまちづくりへと変容してきた。今回のテーマ【顔が見える城の丘 風通しの良い城の丘を目指して】を理念と捉えて、住みよい城の丘団地を作っていくための組織を固めていくという目標ができた。また、その目標を達成するためには、企画員自身が実践を通して得た個々のスキルを確固たるものにするための勉強会をしたいという意識が芽生えた。具体的には、コーディネートの仕方、ファシリテーターとしての役割等、すべて実践を通して行ってきた事を確認できる講座を受講したいという意識になった。これはこの取り組みの大きな成果である。

(2) 企画員実践の成果

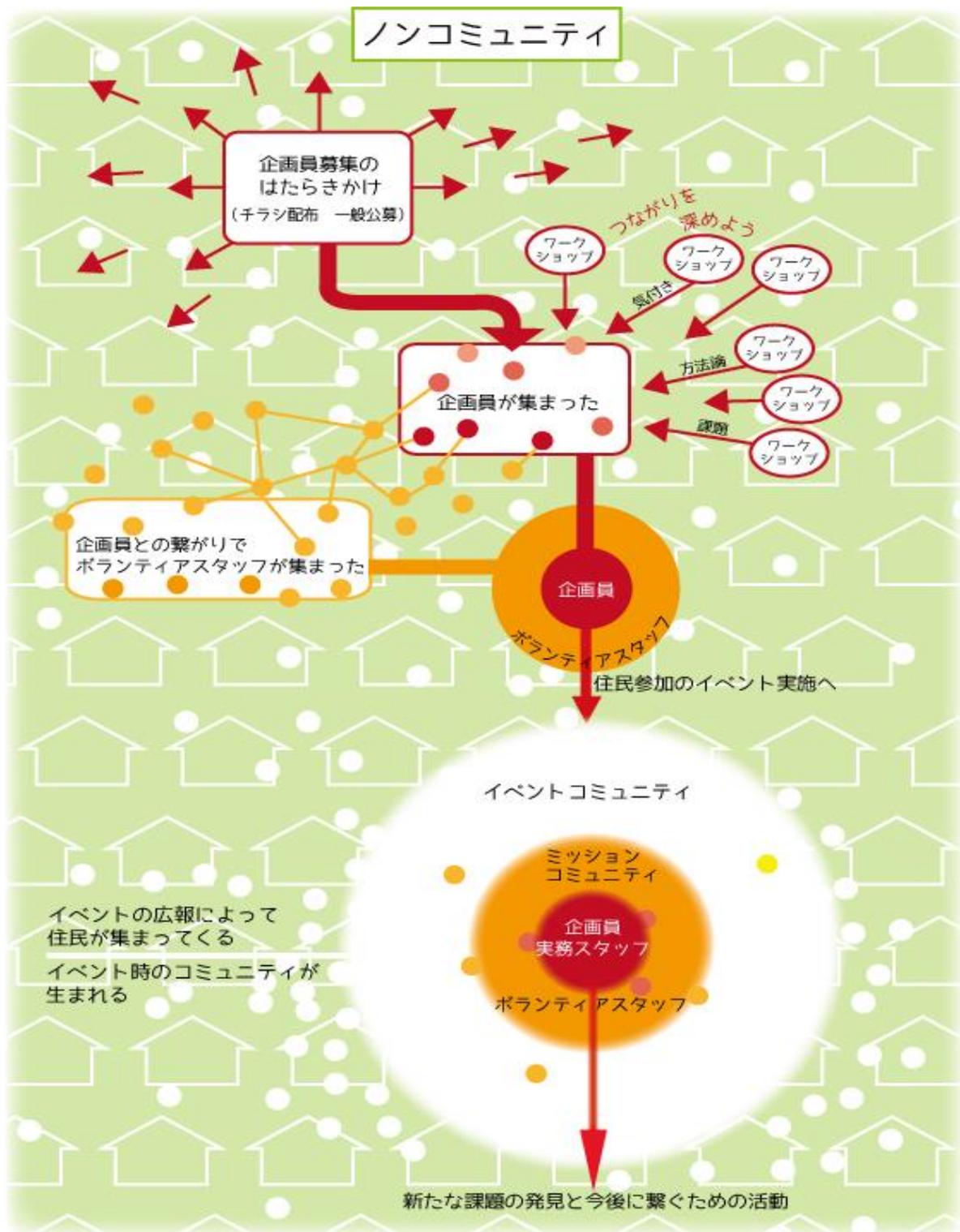
平成25年度は昨年の実践を踏まえ、企画員が主体となって、企画・運営を行った。その結果、企画員自身がまちづくりについて同じ考え方でないことに気づいた。これはつながりを広げて行く上では大切なことであり、また一歩前進したことになる。企画員が自己実現のための「種」を団地内に蒔き、新たなネットワークを広げる。この手法で企画員が各々新しいネットワークを広げていくことで、団地内のつながりが重層的に広がっていく。このことが、「無縁社会に立ち向かう」セーフティネットの広がりになっていくことになる。

(3) 今後の展開ビジョン

2年間にわたり、城の丘団地内で活動した企画員たちは、まちづくりに対する各々の目標を実現するために、企画員同士、離れた活動をしたり、一緒に活動したりという形になる。今までは、顔見知りをつくるという目的を「絆フェスティバルの開催」という手段を使って行ってきた。今後は企画員一人一人、新たなネットワークづくりを始めていく。そしてその個々のネットワークが「絆フェスティバル」で結びつき、より広いネットワークへとつながっていくことを目指していく。この繰り返しの過程で、ゆっくりと、しかし、確実に「無縁社会に立ち向かう」セーフティネットが広がっていく。このネットをつなぐキーマン（企画員）は必ずその中にいるはずである。人材発掘、人材育成はこのネットワークを広げていくワークショップの中で繰り返し行われていく。

県北生涯学習センターとしては、このセーフティネットの結びつきが平時の時は“ゆるゆる”と負担にならず、しかし、有事の際は“固くしっかり”と結ばれるものとなるよう、まちづくり研修会や先進地の事例紹介などを通して、無縁社会から支縁社会へとゆっくり焦らずに、しかし確実に向かう、下支えのサポートをしていきたい。

【つながりのイメージ図】



2 茨城県鹿行生涯学習センターの実践

鹿行生涯学習センターの取り組み

1 調査研究事業の取り組みの概要

- (1) 事業名 男女共同参画に支えられた豊かなコミュニティづくり
 (2) 事業のねらい

地域づくりの課題として、少子高齢化の進行、活動人口の減少、交通機関の衰退等があげられる。そうした中、学校統廃合の進行に伴い、地域の結びつきの希薄化が危惧されてきている。そこで、誰もが興味関心の高い「子育て」に焦点を当て、学校を核とした新たなコミュニティを形成すると同時に、地域の特色を生かしながら既存の地域コミュニティをより活性化するとともに、地域で活躍する人材を発掘・育成することを通して、「新しい公共」に向けた地域活性化を図る。

(3) 対象

地域づくり推進員（旧麻生第一中学校学区の幼稚園保護者・子ども会保護者）・地域の女性会・小中学校PTA・行方市社会福祉協議会・学校支援ボランティア・NPO代表等・一般等

2 実践事例

(1) 内容・方法

ア 地域の現状を把握するために、アンケート調査を実施した。アンケート調査の分析を踏まえて、モデルプログラムを計画した。

- ◇ 平成24年度モデルプログラム講座実践
- ◇ 平成25年度モデルプログラム講座計画

回数	期日	内容	対象者	会場	備考
1	5/ 9(火)	第1回モデルプログラム運営委員会及び地域づくり推進委員会	運営委員 地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
2	5/28(火)	第2回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
3	6/18(火)	第3回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
4	8/ 9(金)	第4回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
5	11/22(金)	第5回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
6	12/20(金)	第6回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	

7	1/17(金)	第7回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
8	2/12(金)	第8回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
9	2/22(土)	第9回地域づくり推進委員会 地域活性化イベント	地域づくり推進委員 協力団体	レイクエコー 講座室1他	
10	3/ 5(水)	第10回地域づくり推進委員会	地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	
11	3/ 7(金)	第2回モデルプログラム運営委 員会及び第11回地域づくり推進 委員会	運営委員 地域づくり推進委員	レイクエコー 講座室1	

イ 平成24年度：実践内容

[第1回講座：事業紹介・子育ての現状について]



- 講座初回のため、パワーポイントを活用して地域アンケートの結果や地域の実態や課題を説明した。さらに、事例紹介として「里山のたまり場」の小野瀬武康氏より活動報告をいただいた。さらに、事例を題材にし、「地域の子育ての課題」をワークショップ形式で協議をした。ワークショップでは、参加者からたくさんの子育てに係る悩み等が出されて、意見を共有することができ、今後の取組の参考とすることができた。

[第2回講座：ママ友から始まる子育て環境づくり]

- 「ママ友をつくる」という視点から講義を実施した。事例発表では、鹿嶋市で活躍しているNPO ニュライフがミの和田みゆき氏から子育てに係る講話をいただいた。また、講話をもとに、「子育てサロン」についてのワークショップを行い、子育て世代の母親等の悩みやその解消への対策について情報交換を行うことができた。



[第3回講座：男性の視点を生かした子育て]

- 実技演習として、子ども会の行事やイベント等で簡単にできる「風船アート」を行い、意外に簡単にできることに参加者は驚いていた。また、「笑っているパパが社会を変える」というテーマで、NPO ファザリングジャパンの長友英哲氏に講話をいただいた。現在の日本の子育て事情等の内容で大変好評であった。男性の子育て参画がこれからは今まで以上に重要になってくることの再認識ができた。



[第9回講座：高校生と子育て討論会]

- 「高校生と子育て討論会」というテーマのもと、地元の高校生に参加をしてもらい、高校生を交えたワークショップ「高校生と話し合おう」を行った。現役高校生の将来の夢や地域を活性化するための施策等についての意見交換を行った。大人が思っている以上に現役高校生は地域のあり方等について真剣に考えていることがわかった。



[第10回講座：さあ出番だ！地域で子育て]

- 「さあ出番だ！地域で子育て」というテーマのもと、小学校統合に係る利点及び課題について話し合いを行った。登校に関する課題や三世代交流事業の減少、さらには、親同士の交流の必要性等が課題としてあげられた。課題解決に向け、PTA活動の活性化や地域全体で子育てに関わっていける意識づけやイベント企画等も大切ではないかという意見が出された。



ウ 平成25年度：実践内容

[第1回委員会：事業実施検討]

- 昨年度の参加者から10名の推進委員の参加があった。本年度実施する事業の方向性について説明をした。各地域の現状や取組等について、それぞれの立場から意見交換をした。統合学校において、活動が軌道に乗るための大変さが共有できた。今後、どのようにイベント企画を進めていけばよいのかの検討を行った。



[第3回委員会：事業実施検討]

- 今回は、イベント実施に向けた具体的な内容が協議された。自分達が地域の中で関わってきている団体の提案やアンケート調査を実施して動向を探る等の意見が提案された。イベント企画に向けて意見が積極的に出されてきて、意識が高まってきている。次は、さらに具体的な内容の協議をしていこうという意見が出された。



(2) 評価

ア 評価観点・方法

(ア) 評価方法：講座終了時の「講座に係るアンケート」を実施し、「事業分析シート」及び「事業評価シート」を作成し、毎回の講座実施状況を評価する。

(イ) 評価観点：効率性・妥当性・成果・満足度

イ 評価の実際

(ア) 平成24年度は、各講座ともイベント等で活用できるよう「実技研修」を取り入れ、受講者の満足度は高かったが、実技研修の意味を十分に理解しながら取り組んでいた受講生は少なかった。

(イ) 講座内容が盛りだくさんになってしまい、1つ1つの内容が十分でなかった。特に、次年度につなげるための「ワークショップ」への時間が短かったので、コミュニティづくりへの深まりが不十分であった。

- (ウ) 参加者同士がお互いに協力し合いながら取り組んでいたりと、積極的にワークショップに参加したりしていることから、受講者間での仲間づくりの意識は高まってきた。
- (エ) 平成25年度推進委員は、地域活性化への意欲が高く、学校を取り巻く新しい絆づくりに積極的に関わっていかうとする意識で、イベントの自主企画に取り組んできている。
- (オ) 学校を取り巻く新たなコミュニティを形成するにあたり、学校と地域との協働の意識を十分に図り、共通認識で推進していくことが重要であることがわかった。

事業分析シート

作成者	鹿行生涯学習センター
-----	------------

1 事業概要

事業名	平成25年度調査研究事業 男女共同参画に支えられた豊かなコミュニティづくり
事業目標	少子高齢化や国際化、高度情報化の急速な進展に伴い、人と人とのつながりや地域と人とのつながりの希薄化が課題となっている。そこで、先導的な調査・研究に取り組むことにより、住民の社会貢献への意識を高めるなど、互いに支え合うことができる社会の実現を図るための人材育成に資する。
事業の内容 具体的な手だて	昨年度モデルプログラムに参加した推進委員を中心として、地域を結びつける活動に取り組むことを通して、統合した小学校を取り巻く地域住民や関係団体等が、自主的・主体的・相互的に活動できるつながりを構築し、社会貢献への高い意識をもった人材の発掘や育成に取り組んでいく。

2 結果(アウトプット)

アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティづくりについての協議会の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・運営委員会 2回 (約30名) ・推進委員会 8回 (約80名) ○地域活性化イベント1回 (約40名)
---------------	--

3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティづくりに対する意識の変容 ○推進委員による地域状況の把握 ○地域活性化イベントの計画・運営 ○地域活性化イベントの実施に向けた仲間づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校を取り巻く地域住民や保護者間をつなぐための取組について理解を示した人数。 ○地域活性化イベントの実施に向け、地域全体で取り組むための協力団体及び協力者の数。 ○自主的イベント実施に向けてのブース数。 ○イベント実施に向けての協力者及び関係協力団体の数。

	内容	指数
最終アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> ○統合地域全体(地域住民や団体等)で、統合した地域等への自主的・主体的な支援活動の展開 	<ul style="list-style-type: none"> ○統合した地域における支援活動に自主的・主体的に取り組んでいる人数。

3 成果と活用

- (1) 地域を元気にするために、「人と人」「人と地域」とが強く結びつくことの大切さや地域が一体となって子育てに取り組む大切さを参加者は学ぶことができた。
- (2) 講座に参加した受講生同士が「仲間づくり」への意識を図ることができた。お互いの地域の情報交換等を図り、他地域のよさを少しでも吸収し、自分達の地域に生かせるようにしようとする意識がみられた。
- (3) 2年目の講座は、アンケート結果からみると、内容が多かったが、実技研修もねらいに即した研修であり、ワークショップでの協議も活発に行われ、参加者にとっては有意義な講座内容であった。
- (4) 少人数であるが、学校やPTA活動に協力できる支援体制を作ることができた。今後は、支援に参加した方が活躍できる場所を提供できるようにするとともに、地域内での多くの係わりができるような支援をする必要がある。
- (5) 今後、社会の流れを考えると、統廃合する学校地域が増加してくる。統廃合した学校地域において、子育てを通じた「新たなコミュニティづくり」をするにあたっては、準備段階より学校（学校で求めていること）と地域（支援できること）との十分な連携を図り、主体的に「互助・共助」ができるよう、共通した認識で取り組むことが重要である。

4 資料

平成25年度生涯学習調査研究事業

レイクエコー ファミリーシアターと同日開催



あつ

みんな集まれ！ わくわく☆フェスタ

2月22日(土) 10:30～14:20 (予定)

場所：レイクエコー

ご家族・お友達とぜひ一緒に
ご参加ください。

スタンプラリー
で景品ゲット！

参加費無料



出店ブース・体験コーナー (予定)

スライムづくり

～すきな色で～

射的 (しゃてき)

～あたるかな？～

やきいも

～おいしさNo.1！
行方の特産物～

風船アート

～すきな形に～

型抜き (かたぬき)

～きみならできる？～

スーパーボール
すくい

～なんこすくえるかな？～

焼き杉板づくり

～すきな文字をプレートに～

キーホルダーづくり

～トースターで?! あらふしぎ～
関東電気保安協会

ニュースポーツ

～気軽に！ みんなで！
楽しもう！～

オリジナル芳香剤づくり

～すきな香りをつけてみよう～

(株)クラシ鹿島事業所

※数に限りがあります。

主催：茨城県教育委員会・(公財)茨城県教育財団・茨城県鹿行生涯学習センター・調査研究事業推進委員会

3 茨城県県南生涯学習センターの実践

県南生涯学習センターの取り組み

1 調査研究事業の取り組みの概要（平成24年度）

(1) 事業名

「土浦力をダス！～人がつながるまちづくり講座～」

(2) 事業の趣旨（ねらい）

受講生自らが「地域力」の大切さに気づき、学ぶことを通して「人」が育ち、その「人」によって、地域の人たちがつながる「ネットワークとたまり場」が作られている。それにより、「土浦力＝人と人とがつながる力」が生まれ、高まっている。

(3) 対象

一般市民 30名

2 実践事例

(1) 内容・方法

ア プログラムの計画

まず、講座の開催場所である土浦市の生涯学習課、土浦市中心市街地を拠点に活動をしているNPO法人「まちづくり活性化土浦」、土浦商工会議所の協力を得て、ファシリテーターの徳田太郎氏を中心に、組織委員会を結成した。

事前に委員会を開き、それぞれの役割の確認やモデルプログラム内容の検討、講師の選定等を行い、プログラムを計画した。

チラシを作成し、土浦市内公民館等施設に配架、また、各協力団体のホームページ等で広報を行なった。

表ー1 プロセスデザイン&プログラムデザイン計画

回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
実施日	6月19日(火)	7月10日(火)	8月7日(火)	8月21日(火)	9月11日(火)	9月25日(火)
テーマ	はきダス	おもいダス	うごきダス	つくりダス	つくりダス	あるきダス
アウトカム	みんなの“想い”を交換しよう 土浦をもっと知りたい、元気にしたいという気持ちになっている このメンバーと一緒に活動に取り組んでいこうという気持ちになっている	土浦の“過去”について知っていることが増えている 土浦の“過去”を“未来”に活かすためのヒントがつかめている	現在の土浦力を考えよう 土浦の“現在”について知っていることが増えている 土浦の“現在”を“未来”に活かすためのヒントがつかめている	みんなでできることを考えよう 土浦の“理想の未来”が見えている “理想の未来”に対応する、自分たちの“ありたい姿”が描けている	みんなでできることを考えよう “ありたい姿”を実現するために自分たちが“できること”が見えている “できること”を具体的な“活動”として表現できている	実際になにかやってみよう “活動”を実現するための“計画”ができている “計画”を発表するための準備ができている
10:00	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡
10:15	ワークショップ全体についてのインストラクション	チェックイン	チェックイン	チェックイン	チェックイン	チェックイン
10:30	インストラクション	インストラクション	インストラクション	インストラクション	インストラクション	インストラクション
10:45	チェックイン	話題提供	話題提供	ワールドカフェ：土浦の“理想の未来”は？	オープンスペース①：“ありたい姿”を実現するために、何ができるだろう？	ディスカッション①：“活動”を計画に落とし込もう！（上）
11:00	インストラクション					
11:15	インテグレーション①：土浦について知っていることは？	視点の整理	視点の整理			
11:30	は？					
11:45	は？					
12:00	昼食休憩	昼食休憩	昼食休憩	昼食休憩	昼食休憩	昼食休憩
12:15						
12:30						
12:45						
13:00	インテグレーション②：土浦について知りたいことは？	フィールドワーク	フィールドワーク	ハーベスト：土浦の“理想の未来”に対応する、私たちの“ありたい姿”は？（フリップスピーチ→未来新聞）	オープンスペース②：“できること”を具体的な“活動”にすると？	ディスカッション②：“活動”を計画に落とし込もう！（下）
13:15						
13:30						
13:45	インテグレーション③：土浦を元気にするためにできそうなことは？	ふりかえり&わかちあい	ふりかえり&わかちあい	ふりかえり&わかちあい	ふりかえり&わかちあい	ふりかえり&わかちあい
14:00						
14:15	ふりかえり&わかちあい					
14:30						
14:45	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト
15:00	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡	事務連絡

図-1 「土浦力をダス！」広報チラシ

イ 実践内容

計画に基づき、全6回の講座を実施した。土浦市および近隣市町村在住の方12名と、組織委員等関係者7名が参加した。

講座で初めて顔を合わせる参加者が、講座をとおしてお互いの想いを共有し合えるよう、毎回、講座の初めと終わりに“チェックイン・チェックアウト”という、自分の今の気持ちを話す場を設けた。講座の中でも、一方的な講義ではなく、参加者全員が発言をする機会、また、他の人の意見を聞く機会を多く取り、“想い”の共有を図った。



- (ア) 第1回 「はきダス みんなの『想い』を交換しよう」
 - a 土浦について知っていること
各自ポストイットに自分の知っていることを書いて模造紙に貼り付けていく。
 - b 土浦について知りたいこと
aと同様に行うが、その中で「知りたいこと」の半分以上が解決する。
 - c みんなに知っておいてほしいこと
お互いのことを知ってもらうことで、今後一緒に学んでいく仲間意識を高める。
- (イ) 第2回 「おもいダス 土浦のことを知ろう」
 - a 土浦の昔を知る（講師：土浦市博物館学芸員 木塚久仁子氏）
商業で栄え、まちの人が頑張り元気だったとされるころの土浦について学ぶ。
 - b 土浦まち探検
午前中の講義を踏まえて、実際に歩いてみたい場所を決め、3グループに分かれまち歩きを行なう。自らの目で実際にまちを見て、どう感じたかを発表する。
- (ウ) 第3回 「うごきダス 現在の土浦力を考えよう」
 - a 土浦の今を知る
 - (a) 土浦市を中心に活動を行なっている、3つの団体から話題提供をしてもらう。
 - (b) 土浦市立土浦第一中学校 生徒会…花火大会後のクリーン運動等の活動
 - (c) 土浦スポーツ健康倶楽部…スポーツで土浦を元気にする（歩数マイレージ等）活動
 - (d) 市民ネットワーク わくわくプロジェクト…主婦を中心とした、「エコキャンドル」づくり等の活動

- b 過去・現在の整理
前回学んだ「過去」と今回学んだ「現在」についての知識や思いを整理することで、「未来」に活かすための「ヒント」を考える。
- (エ) 第4回 「つくりダス みんなでできることを考えよう」
 - a 土浦の「理想の未来」
自分の考える理想の未来を話し合い、同じ思いの人たちでグループを作る。
 - b 私たちの「ありたい姿」
5年後の土浦が、具体的に「こうなっていれば良いな」という思いを「未来新聞」の形で表現し、発表する。
- (オ) 第5回 「つくりダス みんなでできることを考えよう」
 - a “こんなことができる”！
土浦の未来の姿を思い描きながら、何のために、誰のために、やりたいこと、できることを考える。
 - b 名前を考える
できることのひとつとして、コミュニティカフェを計画。その名前を考える。
- (カ) 第6回 「あるきダス 実際になにかやってみよう」
 - a 名前を決める
土浦力（人と人とのつながり）を高めてゆくため、その手段としてイベントやコミュニティカフェを展開する仲間を組織する。
 - (a) グループ名：「プロジェクト土浦力」
土浦について考える会、または茶話会やカフェの名前：「土浦ポン café」
…名産の蓮（レンコン）の花が開くときの音＝「ポン」からイメージ
 - b 今後の方向性
土浦市役所移転にむけて、市役所庁舎の中に情報発信基地となりうる（コンシェルジュサービスなどができる）コミュニティカフェを展開していけるように働きかけをしていく。
 - (a) 講座だけで終わらせない。
 - (b) 自分たちの体力を付けていく活動も行う。
 - (c) まずは、活動をいろんな人に知ってもらうことから、そして仲間集めから始める。

以上の3点を踏まえて企画を立てる。

(2) 評価

ア プログラムの評価視点・方法

毎回、講座時間終了後に組織委員会を開き、「事業評価シート」を元に、その回の結果（アウトプット）および成果（アウトカム）について話し合い評価を行なった。アウトプットは、主に参加者数や講座の展開方法がどうであったかについての評価であり、アウトカムは、その回の目標（事前に定めておいたアウトカム）が達成できているかについて評価した。

その評価を元に、プログラム内容の修正や方向性の確認を行なった。



イ プログラムの評価の実際

事業分析シート

作成者 県南生涯学習センター ○○

1 事業概要

事業名	土浦力をダス！～人がつながるまちづくり講座～
事業目標	地域で生活するすべての人に居場所があり、人の役に立つ喜びが味わえる社会の構築をめざし、無縁社会に立ち向かうための地域力を育成する。
事業の内容 具体的な手だて	モデルプログラムの実施

2 結果(アウトプット)

アウトプット	講座回数：全6回 参加者数：30名
--------	----------------------

3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	はきダス 土浦について、みんなの”想い”を交換する	・土浦をもっと知りたい、元気にしたいという気持ちになっている人が増えている。 ・みんなが、このメンバーと一緒に活動に取り組んでいこうという気持ちになっている。
	おもいダス 土浦のことを知る	・土浦の”過去”について知っていることが増えている。 ・土浦の”過去”を”未来”に活かすためのヒントがつかめている。
	うごきダス 現在の土浦力を考える	・土浦の”現在”について知っていることが増えている。 ・土浦の”現在”を”未来”に活かすためのヒントがつかめている。
	つくりダス みんなでできることを考える	・土浦の”理想の未来”が見えている。 ・”理想の未来”に対応する、自分たちの”ありたい姿”が描けている。
	つくりダス みんなでできることを考える 実際にやってみる	・”ありたい姿”を実現するために自分たちが”できること”が見えている。 ・”できること”を具体的な”活動”として表現できている。



	内容	指数
最終アウトカム	自ら気づき学ぶことを通じて「人」が育ち、その「人」によって、地域の人たちがつながる「ネットワーク」と「たまり場」がつくられている。「土浦力＝人と人がつながる力」が育まれ、高まっている。	・参加者の中から1つ以上のグループができ、「ネットワーク」と「たまり場」をつくっている。

事業評価シート

期日	講座名・イベント名・テーマ等	講座内容 実行
平成24年 6月19日～ 9月25日	土浦力をダス！	「土浦に住んでいるけれど、土浦のことをよく知らない。土浦を元気にしたいけれど、方法がわからない。仲間を作りたいけれど、きっかけがない。」という想いのある人を募り、①土浦に対する想いの共有 ②土浦の過去・現在・未来を知る学習 ③どんな土浦にしていきたいか ④何が自分たちにできるか ⑤何をやるかという手順で、一つ一つ次につなぐためのヒントをつかめるよう進行する。

結果(アウトプット)	評価	改善				
参加人数 第1回 17名 第2回 17名 第3回 24名 第4回 23名 第5回 21名 第6回 19名	土浦市の広報誌案内のを見て参加した人が多かった。回を追う毎に、新しい参加者が増えた。途中からの参加者も、馴染みやすい講座内容であった。 内容の時間配分や会場のセッティングが徐々に良くなっていった。	<ul style="list-style-type: none"> ・募集の方法 ・新しい参加者への事前説明不足 ・講座全体の時間配分 ・会場のセッティング(机の配置等) ・毎回最後にまとめの時間が必要 				
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">効率性</td> <td style="width: 50%;">妥当性</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">4・③・2・1</td> <td style="text-align: center;">4・③・2・1</td> </tr> </table>	効率性	妥当性	4・③・2・1	4・③・2・1	
効率性	妥当性					
4・③・2・1	4・③・2・1					

成果(アウトカム)	評価	改善				
受講生自らが「地域力」の大切さに気づいている 「人」が育ち、地域の人たちがつながる「ネットワークとたまり場」が作られている 「土浦力＝人と人がつながる力」が育まれ、高まっている	「地域力」の低下をどうにかしたいという動機で参加されている方が多かった。講座をとおしてさらにその想いが深まった。 実際の「たまり場」作りまではいかなかったが、地域を自分たちの手でどうにかしたいという受講生が多く、講座終了後に「プロジェクト土浦力」という形でグループが結成された。 講座をとおして、受講者や土浦にある既存の団体などのつながりを強化することができた。	更に強く・深いつながりをつくるためには、講座の時間や回数を増やした方が良い。 講座の出口をもっと明確に用意しておいた方が、受講生が活動に移りやすい。				
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">成果</td> <td style="width: 50%;">満足度</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">④・③・2・1</td> <td style="text-align: center;">④・③・2・1</td> </tr> </table>	成果	満足度	④・③・2・1	④・③・2・1	
成果	満足度					
④・③・2・1	④・③・2・1					

総合評価	合計点数	評価	コメント
効率性・妥当性・成果・満足度の評価の数字を合計する	合計 点数	S (15点～16点) ④ (11点～14点) B (8点～10点) C (4点～7点)	改善点、反省点は多かったが、参加者の満足度は高かった。グループも結成され、成果は大きかった。

次時計画	内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・申込み者に家族や知人を誘ってもらい、参加者を増やす。 ・途中からの参加者へ、事前説明を良く行なっておく。 ・時間配分や会場のセッティングは、毎回同じではなく、内容に合わせて変えていく。 ・講義を聴いた後や、講座時間の最後には必ずまとめと確認の時間を設け、参加者の理解を図る。

3 調査研究事業の取り組みの成果と活用

(1) プログラム実施の成果

受講生の多くが、講座だけで終わりたいわけではない、終了後も出会った仲間と一緒に土浦のために活動を続けていきたいという想いを強く持っていた。そのため、「プロジェクト土浦力」という団体を発足した。アドバイザーという形で講座にかかわっていた組織員も、このメンバーとなる。

(2) 講座終了後の展開「プロジェクト土浦力」の活動事例（平成24年度～25年度）

- ア 月1回の定例会の実施…イベントの企画会議やメンバーの情報交換の場
- イ 規約・趣意書の作成…規約の制定。プロジェクト土浦力発足までの経緯や土浦力の定義、会の目的、活動目標を盛り込んだ“趣意書”を作成
- ウ 学習成果の発表…生涯学習センターのイベント「まなびフェスタ」で、講座で学んだ成果の発表や「プロジェクト土浦力」のPRを兼ねた茶話会を行なった。
- エ メールリングリストの立ち上げ…メールアドレスを持っているメンバーが多いため、連絡をスムーズに行なうツールとしてメールリングリストを作成
- オ 年間計画・年間目標を決める…楽しみながら仲間を増やす、「土浦力」を浸透させる。
- カ 「クリスマスポンcafé」…まちなか交流ステーション「ほっとOne」を利用し、3日間、展示発表や交流会を実施。
- キ 『かしわインフォメーションセンター』視察…情報の発信の仕方やコンシェルジュサービスの事例を見学
- ク 「ひなまつりポンcafé」…土浦商工会議所のひなまつりイベントに参加。商店街の空き店舗を利用し、クラフト教室や茶話会を実施。
- ケ 助成金プログラム申込…今後の活動資金のため、「中央ろうきん助成プログラム」に申請、審査を通過
- コ はすの花ポンcafé『はすの花のひらく音を聴く会』…はす農家や市の農林水産課と協力し、はす畑という場所で土浦について考える機会を設けた。
- サ 船上ポンcafé『霞ヶ浦サンセットクルーズ～湖上から土浦を語ろう～』…船の上から夕日の土浦を眺め、土浦について語り合う機会を設けた。

団体成立後、まず始めに行なったことは、“趣意書”を作成することであった。これにより、活動の方向性を明確にすることができた。また、先進的な活動を視察することで、将来、自分たちがやりたいことを明確にするためのヒントを得た。

移動型コミュニティカフェの活動をとおしては、行政や他団体とのつながりを強化することができ、そのつながりは、今後の活動にも大きく影響することと思われる。また、「土浦力」「ポンcafé」という名前を広く多くの人に知ってもらう機会となり、カフェに参加した人の中から仲間になる人も出てきた。

イベント実施後には必ず振り返りを行い、個人の想いを共有し、全体の意見の集約を行い、次に活かすようにした。

その結果、回を重ねる毎に工夫がなされるようになり、広報や展示方法を変えることや、活動に興味を持った人への「スターターキット」を作成することなどに至った。

(3) 生涯学習センターとしてのかかわり

団体発足後は、行政や他団体の情報を提供し、つながりを強化できるように支援してきた。また、公民館等の公共機関へのチラシの配布、市の広報誌への広報、募集の際の事務局等、団体だけでは難しい部分を担った。

平成25年度は、それまでの支援を続けるとともに、メンバーが団体の運営方法や仲間集めの方法を学べるよう、『つくろう、育てよう、私のコミュニティ』と題した講座を開催している。メンバーだけでなく、一般参加者も募り、「プロジェクト土浦力」という活動の実践の場を紹介することで、新たなメンバーの獲得にも力を入れている。

(4) 今後の展開ビジョン

プログラムから団体の立ち上げまで、約1年半の活動をとおして見えてきたことは、地域とのかかわりの重要性とその難しさである。

ある地域で何かをやりようと思ったときに、まず何をどこに持ちかければスムーズに事が進むのかということは、簡単そうに見えて、実際はかなり時間がかかることであった。例えば、新しく団体を立ち上げて、イベントを開きたい・メンバー募集をしたと思ったときにはどこへ話しをすれば良いであろうか。市町村の生涯学習課や市民活動課、社会福祉協議会や生涯学習センター等、活動の内容にもよるであろうが、様々なところが考えられる。

今回のように、協力者が多くおり、そういったつながりを支援してくれる場合は良いが、そうでない場合、せつかく行動をおこそうとしている人たちの活動を妨げる要因になると考えられる。

そこで、今後は団体や個人、あるいは行政やNPO法人といったもの同士をつなぐような、いわゆるコンシェルジュサービス的な活動が「プロジェクト土浦力」を中心に展開されることを期待している。また、“コミュニティカフェ”の活動が更に活発になり、現在のような移動型だけでなく常設型のカフェが展開されていくことを望む。

そして、それらの活動により「人と人とがつながる」ことで、地域で生活する人、一人一人にとっての“居場所”ができるよう、支援をしていきたい。



4 茨城県県西生涯学習センターの実践

県西生涯学習センターの取り組み

1 調査研究事業の取り組みの概要

(1) 事業名

「ふる里まちづくり塾」

(2) 事業の主旨

様々な地域資源の活用を図り、新たな人と人とのつながりを構築するため、対象地区を茨城県県西生涯学習センターが位置する大田地区とし、地域の特性や課題の把握・分析を行いながら、住民が居住する地域の歴史、自然、風土を学び、地域に貢献した先人の足跡をたどることによって、自分の住むまち（郷土）に対する愛情と誇りを持つと同時に、事業を通じてコミュニティの「再生」「補強」を図る人材の発掘・育成並びに、課題解決へ向けた新たな仕組みづくりを目的とする。

(3) 対象

茨城県筑西市大田地区の住民、及び地域づくりに関係する団体や長など。

2 実践事例

(1) 平成24年度

ア 内容・方法

本事業の目的にあった事業を立ち上げるために、大田地区の住民、200戸を無作為に抽出し、アンケートを実施した。「ふる里まちづくり塾」の企画にあたり、地域や市民の為にに行われている事業や催しとの明確な棲み分けを行う為、アンケート結果と筑西市や大田地区で既に行われている事業内容等を調査し、テーマを「地域を知る」、「地域での人と人とのつながりを深める」に定め、三世代で一緒に活動が出来る事業を、参加者と共に作り上げることとした。

(ア) 講座計画やプログラム計画

- a 会場：茨城県県西生涯学習センター及び大田地区
- b 目的：子どもを核として地域の大人が一体となった地域コミュニティの再生を目的に活動し、三世代の絆を深める。
- c 実施期間：平成24年5月～12月（全11回）
- d 内容：
 - ・第1回及び2回（5月）
 - プロジェクトチームの1年間の見通しとモデルプログラム（地域版）実施準備確認
 - ・第3回～11回（6月～11月）
 - モデルプログラム（地域版）の実施及び、調査結果と併せての検証
- e 受講対象者：大田地区の住民、地域づくりに関係する団体や長など

(イ) 実践内容

a 結成式及び講演会（第1及び第2回）

講 話：「無縁社会に立ち向かう為には～これから地域が目指すもの～」

講 師：茨城大学 長谷川幸介 准教授

（講座のねらい）

今後、地域において新しい絆を作る為に必要な事項として、「人は独りでは生きられない」ことを認識し、地域が抱える課題について考え、誰もが誇れるふるさとを作る為に今何が必要か、参加者全員の理解を深め、考える機会を提供する。

b 第3回～第9回

講 話：「これからの地域が目指すもの」（第3回）

講 師：特定非営利活動法人 里山を守る会 代表 中川行夫 先生

（講座のねらい）

里山作りに着手した経緯、並びにその後の活動をについて、地域の子も達に今何が必要かを考え、地域が解決すべき課題を考える機会を提供する。

講 話：「地域の自然や環境を知る」（第4回）

講 師：特定非営利活動法人 未来につなごう鬼怒川・小貝川の会

代表 古澤諭 先生、郷土史家 桐原光明 先生

（講座のねらい）

大田地域の自然・歴史を中心とした、大田地区の成り立ち（旧大田村について）や自然環境の特徴について学ぶとともに、次世代を担う子ども達へ引き継いでいかななくてはならない、自然環境の尊さ、重要さについて考える機会を提供する。

講 話：「地域の歴史を知る、地域に貢献した先達者を調べる、先達者の足跡調査」

講 師：郷土史家 桐原光明 先生（第5回～11回）

（講座のねらい）

自分たちの住む大田地区の歴史について知識の習得を図り、歴史を生かしたまちづくりについて学ぶ機会を提供するとともに、コースの安全性、距離、内容など本番へ向けた事業の改良、改善点に務め、三世代の交流やふれあいを目的とした、歴史を生かしたまちづくりウォーキングについての企画運営能力の向上を図る。

c 第5回（実践活動）

テーマ：「地域の参加者によるウォーキング

（地域づくり三世代歴史ウォーキング）」

講 師：郷土史家 桐原光明 先生

（講座のねらい）

企画・運営等、受講生が主体となり、ふる里まちづくり塾で学んだ地域の歴史や知識を生かし、イベントを実施することで、参加者の自主性を引き出すとともに、今後の活動への意欲と自信を養う事を目的とする。



三世代歴史ウォーキングの様子

名所案内を行う参加者

手作り名所案内看板

テーマ：「一年の振り返りと、次年度の方向性について」

講師：郷土史家 桐原光明 先生

(講座のねらい)

参加者の自主的な団体の結成と、これまでの活動や経験を踏まえた、次年度以降の活動の継続と、方向性を明確にする事を目的とする。

【ワークショップでの意見 (※一部抜粋)】

- ・大田地区に関する理解が深まり、この地域に住み続けたいと思うようになった。
- ・今までしたことはなかったが、近所の荒れ果てた公園を初めて整備した。始めは呼びかけても誰も手伝ってくれなかったが、自分が整備している姿を見て、仲間が出来た。ふる里まちづくり塾がきっかけとなった。
- ・若い世代への参加を強く呼び掛ける必要があると思う。

【次年度にむけての意見 (※一部抜粋)】

- ・自分たちだからこそ出来るものを、子ども達に残せる活動をしていきたい。
- ・今年度は「三世代」というテーマのもと行ってきたので、来年度も同じく三世代で参加出来る行事を企画したい。
- ・今年は三世代の参加が思わしくなかったので、もう少し集客したい。
- ・高齢者が集まれるたまり場を作り、交流を深めたい。



今年度の反省を話し合う様子



来年度の活動について意見を述べる参加者

(2) 平成25年度

ア 内容・方法

平成24年度との大きな違いは、センターが主体ではなく、センターは支援・助言する立場へ完全移行し、平成24年度に立ち上げた「ふる里まちづくり塾」の参加者達による主体的地域貢献活動が目的である。

「ふる里まちづくり塾」メンバー各々が主役となり、地域の絆作り・地域が抱える課題等について考え、これまでの経験と学んだ知識を活用し、各自治会や地域を越えた課題解決へ向けた効果的な活動の展開の促進を図るため、参加者達によるワークショップや実践活動の継続のサポートを行う。

(ア) 講座計画やプログラム計画

- a 会 場：茨城県西生涯学習センター及び五所地区
- b 目 的： 子どもを核として地域の大人が一体となった地域コミュニティの再生を目的に活動し、三世代の絆を深める。
- c 実施期間：平成25年5月～平成26年2月（全8回）
- d 内 容： ・第1回～3回（5月～7月）
 - 「ふる里まちづくり塾」の方向性と活動計画について（ワークショップ）
 - ・第4回～6回（8月～10月）
 - 事業の実施及び、結果と併せての検証（実践活動及びワークショップ）
 - ・第7回～8回（11月～2月）
 - 今年度の反省と、次年度へ向けた事業計画の策定（実践活動及びワークショップ）

(イ) 実践内容

- a 第1回～3回 事業説明会及び今年度の活動内容及び計画について（ワークショップ）

助言者：茨城県西生涯学習センター職員

今後の取り組みや活動内容について、各自のまちづくりに対する考えや意見の発表の機会を設け、地域の絆作り、地域が抱える課題についての共通理解を図るとともに、誰もが誇れるふるさとを作る為に、また地域の絆をより深める為にどのような取り組みを行うべきか、全員が真剣に考える非常に有意義な機会となった。

【アンケート結果※一部抜粋】

問：ふる里まちづくり塾では、今後どのような活動を行いたいですか？

- ・歴史ウォーキング 55%
- ・昔遊び 22%
- ・里山づくり 23%

(自由記述)

- ・地域の行事を生かして、地域の交流をする。
- ・子ども会・学校の地区割り集落単位活動としては、それなりに子供遊び場で親と一緒に活動する機会がある。
- ・老人会の活性化 これから一番重要なのではと考えられる。
- ・現状実態把握（経過、及び人・物・金）が大事である。

- b 第4回～6回 地域貢献活動の準備及び実施（ワークショップ及び実践活動）
助言者：茨城県県西生涯学習センター職員

アンケート結果をもとに、「三世代歴史ウォーキング」を含めた3事業（子ども向けの昔遊び・里山づくり）を開催することに決定した。

「三世代歴史ウォーキング」では、昨年度の経験や知識を活用し、また地域を越えた「人と人とのつながり」を深める為、開催場所を近隣地域（五所地区）とし、今後の活動地域の拡大や新規参加者の獲得に努めた。



事業説明会の様子



五所地区での「三世代歴史ウォーキング」の様子

- c 第7回～8回 今年度の反省と次年度の事業計画の策定（※予定）

助言者：茨城県県西生涯学習センター職員

イ 評価

（ア） 講座やプログラムの評価視点・方法

事業分析シートを活用し、講座やプログラム実施後に生じる、参加者の意識およびその後の行動等の変容、さらには地域住民や地域社会への影響などのアウトカムを、必要性、効率性、有効性、公平性、優先性等の視点から評価を行う。

また、最終アウトカムが得られるまでの途中の段階で予想される変化や影響を中間アウトカムとして設定し、事業目標への手立てやプログラムの修正を図る。

（イ） 講座やプログラムの評価の実際

事業評価シートを活用し、評価指標は、参加者が本事業を通して「自主的な地域貢献活動への関心」「自主的な地域との関わり」に関してどのような成果が見られるか評価していくために以下のように設定した。

a 評価指標

- ・参加者の満足度 事業全体に対する満足度
- ・地域課題解決へ向けた自主性
- ・地域とのつながり、協力体制
- ・地域との関わりに対しての積極性

b 評価の方法

上記の点について、次の方法で参加者の変容をとらえ、事業評価をした。

（a）参加者へのアンケート調査

各種講座、ワークショップ、実践活動等でのアンケートを行い分析した。

（b）指導者による観察

参加者の活動の様子や、振り返りの記録内容から分析した。

c 評価資料から見る評価の実際

【参加者アンケート結果】

問：自分の住む町をどのようにしていきたいか

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| ◆子どもたちの声が聞こえるまち | ◆歴史のある美しいまち |
| ◆笑顔の絶えないまち | ◆お互いに声かけられるまち |
| ◆年代を越えて行事が出来るまち | ◆近所付き合いがあるまち |
| ◆樹木・草花の多いまち | ◆心の交流があるまち |
| ◆自然に恵まれたまち | ◆活力のあるまちづくりをする団体があるまち |
| ◆里山が沢山あるまち | ◆高齢者がのんびりいきいき暮らせるまち |
| ◆ごみの無いまち・綺麗なまち | ◆趣味の同好会が多く、外に出られるまち |

- | |
|--|
| ◆地域づくり三世代歴史ウォーキングでは、先導・案内・交通整理・看板作りなど、参加者が自主的に動いた。 |
| ◆学んだ歴史を、地域の人が地域の人に伝えることにより、事業を通し、自治区を越えた新しいつながりが出来た。 |
| ◆事業の前半は受動的活動が多かったが、後半は主体性の高まりが見られた。特に最後まで参加した人達は地域における活動に対して実践力がついたように感じる。 |
| ◆ふる里まちづくり塾がきっかけとなり、公園の整備や里山づくりに取り組み始めた参加者が生まれた。 |

事業分析シート

作成者 県西生涯学習セン

1 事業概要

事業名	生涯学習調査研究事業 ふる里まちづくり塾
事業目標	子どもを核として地域の大人が一体となった地域コミュニティの再生を
事業の内容 具体的な手が	「子ども達の笑顔」をキーワードに、地域の歴史や昔遊び、里山づくりを通じて三世代が参加できる事業を運営、実施することによって、地域に新

2 結果(アウトプット)

アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりに関する講座・会議を6回実施予定 ・大田地区自治会長，地域住民の参加（50～60名） ・平成25年度以降における，まちづくり活動団体の自主的活動
---------------	--

3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	<p>①地域づくりに対する参加者の意識の変容，自身の地域での役割を理解している。</p> <p>②地域課題や社会の要請について考え，自身や仲間との地域活動についての役割や活動を見いだす。</p> <p>③参加者自身が地域活動への学びや知識を深める。</p> <p>④参加者同士が一体となり，自主的に事業を企画し，団体としての機能の充実を図る。</p> <p>⑤参加者同士が一体となり，事業実施に向けた準備を行い，目標達成の為の課題や問題解決へ取り組む。</p> <p>⑥参加者同士が一体となり，自主的に事業を実施する。</p> <p>⑦三世代まちづくり活動団体の継続活動及び事業計画の策定を行う。</p>	<p>・ 少子高齢による社会構造の変化や，地域の取り，自身の役割，存在を地域に活かす為の考える。</p> <p>・ 地域活動として，3つの地域活動を提案する</p> <p>① ウォーキング活動 ② 子ども達への昔遊びの提供 ③ 子ども達の活動の場（里山）の提供</p> <p>・ 事業実施に対しての必要な知識（地域の地歴史的名所）について理解が深まっている。</p> <p>・ 参加者が主体となり，担当を決めたり，広報の準備をする等，主体的な運営が出来た。</p> <p>・ 主体的に，団体や自治会への交渉や打合せめ，事業実施への協力体制を構築した。</p> <p>・ 事業の実施により，協力団体や地域とのつ加者同士の交流を深め，今後の活動への意志を固める事ができた。</p> <p>事業実施の結果と反省を踏まえ，今後の継続活動への参加者同士の意思確認と具体的な活動内容を計画する事ができた。</p>

	内容	指数
最終アウトカム	団体としての機能の充実と	次年度以降も，グループを3つに分け，①ウォーキング活動の提供③子ども達の活動の場（里山）の提供を主体的な継続活動を行う。

事業評価シート

期日	講座名・イベント名・テーマ等	講座内容 実行
10月20日	三世代ふれあい歴史ウォーキング	五所地区での歴史ウォーキングイベント

結果(アウトプット)	評価	改善
第6回講座 参加者:37名 県西生涯学習センター職員2名 講師1名	<ul style="list-style-type: none"> ・雨天ではあったが、参加者の意志により決行することが出来た。 ・計画通り順調に終了することが出来た。 ・事故等無く、参加者全員無事に終了することが出来た。 	
	効率性	妥当性
	4・3・ 2 ・1	4・ 3 ・2・1
	<ul style="list-style-type: none"> ・雨天のため、歴史的説明が十分出来なかったため、次回は天候状況に配慮する必要がある。 ・子どもの参加が少なかったため、子どもへの広報方法を検討する必要がある。 	

成果(アウトカム)	評価	改善
・三世代ふれあい歴史ウォーキング	<ul style="list-style-type: none"> ・天候には恵まれなかったが、計画通り進め、また状況に応じてはコースを縮小するなど臨機応変に対応できた。 ・どのような状況にも、落ち着いて対応し、イベントの運営や企画に自信を持てた。 ・事業が成功したことで、参加者同士の交流が深まり、今後の継続活動について意欲が高まった。 ・郷土史会との新たなつながりを深め、今後の連携についても協力し合える体制を構築できた。 	
	成果	満足度
	4・ 3 ・2・1	4・ 3 ・2・1
	<ul style="list-style-type: none"> ・雨天での準備物や、必要備品を充実させる。 ・事務的役割の責任分担の明確化 	

総合評価 効率性・妥当性・成果・満足度の評価の数字を合計する	合計点数	S (15点～16点) A (11点～14点) B (8点～10点) C (4点～7点)	<ul style="list-style-type: none"> ・事業実施の達成感により参加者同士の団結力や、交流をさらに深められた。 ・企画からイベント実施への一連の流れや、進め方について、経験として、参加者の財産となった。 ・参加者からは、「最初は不安であったが、参加者の笑顔がみれて、自分のことのように嬉しかった」大変なことも多かったが、その分、達成感を味わうことが出来た」という意見が聞かれた。
-----------------------------------	------	--	---

次時計画	<ul style="list-style-type: none"> ・事業の反省会と今後の活動やその他の活動(里山、昔遊び)について
------	--

3 調査研究事業の取り組みの成果と活用

まず、はじめに、今回の事業を企画・運営するにあたり、多くの方々に協力をしていた事で、本事業の目的の一つでもある「地域の人と人とのつながりをより深めてもらう」ことは大きく達成されたと考える。

【協力及び関係機関】

大田地区の自治委員/大田小学校 PTA 会長/大田地区子ども会現・前会長等
大田地区をはじめとする地域住民の方々/大田公民館
筑西市教育委員会生涯学習課・市長公室広報広聴課・企画部企画課
坂東市企画部市民協働課/五所公民館/五所小学校/五所地区自治委員/郷土史会

「ふる里まちづくり塾」という新たな地域貢献活動団体が結成されるにあたり、上記に示すような、これまでつながりの無かった自治会や、地域住民が一つの課題に対し新たな協力体制を構築し、また自主的に解決へ向けた取り組み手法などを学ぶ事は、これからの地域コミュニティの再生にあたり、必要不可欠な要素である。

また、今回の事業手法として、自分たちの居住する地域の歴史、自然、風土を学び、地域に貢献した先人の足跡をたどることによって、地域（郷土）に対する愛情と誇りを持つ取り組みが、参加者の身近なテーマとして、事業参加へのハードルを下げたことで、共通の趣味や興味を持つ、新たな人と人とのつながりの実現をより可能にし、事業を通じて人的つながりを深め、自主的な地域貢献活動への意識の醸成を図れたと考える。

これからは（１）地域コミュニティの再生（２）人と人とのつながりの深化（３）学校・家族・地域の連携を目指し、無縁社会を解決する為に、地域で人が安心・安全に暮らし、共に支え合い、助け合う社会の創造を目標に、今回の事業を通じて新たに結成された団体の活動の支援を行う事が必要である。

また、地域の人が元気になり、住み続けて良かったと感じる為にはどのような活動が必要か。自分の地域を良くする為に住民一人一人が自らの力を発揮し、いきいきと元気になる社会づくりが出来るよう本事業で実践してきたプログラム（地域づくりについての学習・実践）を活用し、多くの地域で、地域社会に貢献する人・団体を発掘・育成し、次のまちづくりにつなげなくてはならない。そのためにも、当センターはコーディネーター機能を向上させることが重要であり、本事業を通して得た、地域のデータ（ヒト・モノ）を整理し、ストックを高めると共に、地域の人が主体となる、新しい社会づくりをどう進めたら良いかを継続して検討する必要がある。

5 栃木県日光市社会福祉協議会の実践

日光市社会福祉協議会の取り組み

1 栃木県日光市の概況

栃木県日光市は、平成18年3月20日に今市市、日光市、藤原町、足尾町及び栗山村の5市町村が合併し、新しい市として誕生した。市の総面積は、県土の約4分の1を占める広大な面積を誇り、全国でも3番目の広さである。地形的には、林野が約87%を占め、平地から山岳地帯に至る起伏に富んだ地形により、自然環境の豊かさ、変化のある気候などが形成されている。

人口：89,129人（平成25年4月1日現在）

世帯数：36,337世帯

総面積：1,449.87km²

自然資源：奥日光の湿原、鬼怒沼湿原、鬼怒川、渡良瀬川、里山の景観

文化・産業資源：日光の社寺、日光杉並木街道、足尾銅山施設

観光資源：鬼怒川温泉、湯西川温泉、川俣温泉、奥鬼怒温泉郷など



2 日光市における過疎・高齢化地域（集落）の現状

日光市の高齢化率は年々上昇し、平成25年4月1日現在では28.8%となっている。特に、中山間地域では更に高い数値を示しており、同時に過疎化の一途を辿っている。昨今、いわゆる「限界集落」の問題がクローズアップされているが、栃木県内ではその対象地域の大部分が日光市という現状にある。

日光市では、高齢化の進行、地理的条件、人口規模、一般的な生活基盤の脆弱さといった不利な条件を備え、複合的にさまざまな課題を有する地区を「高齢化集落」と定義し、各種施策に取り組んでいる。現在、16集落が対象地域となっている。

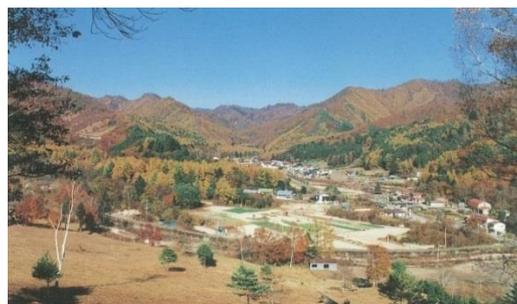
【日光市が定義する高齢化集落】

- ・主に山間に位置していること
- ・65歳以上の高齢者が総人口の45%以上を占めていること
- ・集落内人口が概ね100人未満であること
- ・地域の中心地（総合支所）からの距離が約2.5km以上あること

3 栗山地域・土呂部（どろぶ）地区の特性と課題

土呂部地区は、旧栗山村北西部に位置し、標高は900m、耕地及び住宅のある平坦地は四方をに囲まれている。年間平均気温は8.5℃（-16.3℃～32.3℃）、年間降雨量は1,718mm、冬は積雪が多い地域である。

主な産業としては、和牛繁殖経営、イチゴ苗の生産を行っている。また、地元有志による「どろぶ」を結成し、ワラビやトウモロコシ等の特産品開発に取り組む動きも出てきている。



また、地域のシンボルとして水芭蕉の自生地やキャンプ場「CAMP・IN・ドロブツクル」、文化行事として関白流獅子舞、アメダス観測所がある。

平成 25 年 4 月 1 日現在、人口 56 人、29 世帯、高齢化率 62.5%。日光市の高齢化集落の対象地域のひとつとして位置づけされている。

平成 19 年度に実施された「高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査報告書」では、「就労の場」、「交通」、「通信」、「野生鳥獣被害」、「移動」、「冬期時の生活（雪かき）」などの生活上の課題を抱えている。

4 課題解決のための活動実践

高齢化集落に対して、さまざまな行政施策が講じられる中、地域住民の生活ニーズ、とりわけこの土呂部地区においては、冬期時の「雪かきができなくなる」といった不安に対して、雪かきボランティア等の必要性が課題として挙げられた。

この課題に対し、中間支援組織である社会福祉協議会において支援のあり方について協議した結果、生活ニーズの一部となるテーマ（雪かき、移動など）だけを課題として抽出するのではなく、

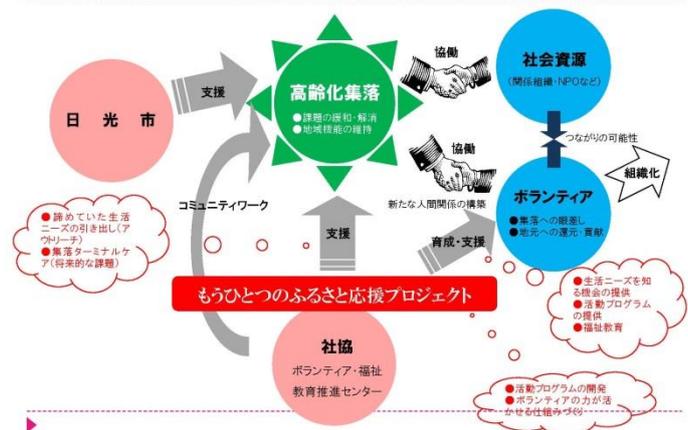
今後の地域のあり方そのものを地域住民と議論し、地域づくりを進めていかなければならないという結論に至った。

しかし、地域の主体（担い手）となる定住人口を増やしていくことは、これまでの取り組みからも現実的ではない状況であったため、地域以外の人力を活かす仕組みづくりを模索した。

そして、この「もうひとつのふるさと応援プロジェクト」を立ち上げ、地域住民との交流活動等を通して、外部の人たちが「第二のふるさと」と感じてもらえるように、土呂部地区への愛着心の醸成、継続的な関係性の構築が、課題解決に結びつくのではないかと仮説を立て、活動を展開する運びとなった。

また、この仕組みづくりを行うには、長期的な視点が不可欠であるため、活動の展開過程としては、①交流（イベント）型、②短期課題解決型、③生活支援型の段階を想定して取り組んでいる。

もうひとつのふるさと応援プロジェクト



(1) 雪かき体験塾の開催・・・①

地域住民とボランティアとの出会いの場、「雪かき」という課題解決のプログラムとして、平成23年から「雪かき体験塾」を開催している。

このプログラムでは、ボランティアが土呂部地区に関わる契機として、この地域への関心層を増やすという目的もあり、事前学習としての地域理解から関心を高め、継続した関わりや活動へと移行させるための事後学習を実施している。

これまでに、市内外から、参加者層も小学生から高齢の方まで幅広く、過去3回の実施で、延べ61人のボランティアが活動に参加した。

雪かき体験塾



The Snow Busters in DOROBU



期 日：平成 26 年 2 月 2 日(日)
※上記日程のほか、1月29日(水)の事前研修、2月7日(金)の事後研修に参加してください。
どろぶ
雪かき体験会場：日光市土呂部地区(栗山地域)
参加費：無料

■申込先・お問い合わせ先

社会福祉法人 日光市社会福祉協議会 ボランティア・福祉教育推進センター
 〒321-1261 栃木県日光市今市511-1 TEL.0288-30-4117

雪かき体験塾 2014

高齢化が進む中山間地域への広域的な支援を行うため、雪かきボランティアの育成とボランティアと地域との継続的な交流の場の提供を目的に、『雪かき体験塾2014』を開催します。

■スケジュール (①～③まで、全3回のプログラムとなります。)

区分	期日	時間	内容	備考
① 事前	1月29日(水)	18:30	受付	●全体研修(必須) ●会場：日光市社会福祉協議会
		19:00	オリエンテーション 学習(地域理解、雪かき活動ほか)	
		20:30	閉会	
② 実践	2月2日(日)	7:15	市役所集合・受付	●集合・解散場所は、日光市役所本庁の駐車場になります。 ●実施場所：土呂部地区(栗山地域) ●昼食は、地元の食材を使った特製カレーを予定。
		7:30	出発	
		8:45	土呂部到着・準備	
		9:00	雪かき活動(実践)	
		12:15	昼食(交流)	
		13:30	土呂部出発	
③ 事後	2月7日(金)	18:30	受付	●全体研修(必須) ●会場：日光市社会福祉協議会
		19:00	活動のふりかえり まとめ	
		20:30	閉会	

■参加対象

- 雪かきボランティア活動に興味のある方
- 中山間地域の支援に関心のある方
- 原則として、3回とも参加できる方

■定員

20名
※定員になり次第、締め切り。

■参加費

無料

■申込方法

電話または来所にて、**1月24日(金)**までにお申し込みください。



■申込先・お問い合わせ先

日光市社会福祉協議会
 ボランティア・福祉教育推進センター
 〒321-1261 日光市今市511-1
 [tel] 0288-30-4117
 [fax] 0288-30-4118

【主 催】 日 光 市 / 社会福祉法人日光市社会福祉協議会



※「雪かき体験塾 2013」の様子。活動終了後には、地元の食材を使った昼食などで交流をしている。

(2) 土呂部へ行こう！の開催・・・①②

(1)の「雪かき体験塾」での関心を継続させ、地域住民との関係性の構築を目的に、年2回(6月、9月)、土呂部地区の四季折々の魅力を感じてもらいながらボランティア活動を行う交流プログラム「土呂部へ行こう!!」を開催している。

このプログラムでは、(1)の参加者にリピーターとして参加してもらおうと同時に、②の要素も踏まえた、草刈り、河川清掃などの活動を展開している。これまで4回開催し、延べ68名のボランティアが参加している。

このプログラムは、高齢化が進む深山地域・土呂部(どろぶ)地区への交流、ボランティアと地域との継続的交流を目的に実施しています。趣旨をご理解の上、お申し込みください。みんなで「土呂部」の魅力を満喫しに行きましょう!

申込期限
平成25年6月24日(月)まで

土呂部
Let's Go To DOROBU!!

行こう!!

小雨決行!!
草刈りボランティア活動&"D"定食のついで

夏直前の「土呂部」でみんなと再会!

今年もこの時期がやってきました!
今回も雪かき体験塾に続き、土呂部の「夏」の準備に当たった土呂部地区のみなさんとのボランティア活動・交流事業を実施いたします。
主に「草刈り」の活動となります。また、シリーズとなりました今回のランチメニューは、その名も「D定食」!お楽しみに!!
午後は土呂部地区内での「ワラビ狩り」ツアーも企画しています。ふるってご参加ください!!

■開催日時/平成25年6月30日(日)
午前7時～午後4時

■会場/日光市土呂部

■日程/裏面をご覧ください。

■定員/20名(※先着順)

■参加費/無料

■申込・お問い合わせ先

社会福祉法人 日光市社会福祉協議会 ボランティア・福祉教育推進センター
〒321-1261 栃木県日光市今市511-1 TEL.0288-30-4117

土呂部へ行こう!!～草刈り活動&"D"定食のついで～日程表

時間	内容	詳細等	備考
7:00	受付(市役所)	●左時間は、バス利用者のスケジュール。	※バス利用者の集合場所は、市役所待合室(雨天・降雪)になります。
7:10	市役所出発	●現地に直接集合する場合は、8:25にドロブツクル集合。	
8:25	ドロブツクル到着		
8:30	顔合わせ	●組合代表挨拶 ●顔合わせ(組合員・ボランティア・職員) ●スケジュール説明、草刈りオリテ	
8:45	草刈りボランティア活動	[草刈り活動手帳等] ①草刈り(刈払機、鎌等) ②刈った草を標字等で集め、一輪車またはトラックに積み、指定場所に草を捨てる	※刈り済みの草(刈払機、手鎌)や草モ、ゴミ等はどの程度かは、各自で持ち帰ってください。※刈払機の燃料は持ち帰りません。
11:45	作業終了・片付け	●集合写真撮影 ●ドロブツクル事務所等に到着替え	
12:00	昼食	●バーベキュー棟にて配膳する。ドロブツクル敷地内で自由食を食べる。 [D定食メニュー(予定)] ①マスの塩焼き ②トウモロコシとワラビの炊き込みおこわ ③ウリッパと油揚げの味噌汁 ④山菜の煮物 ●片付け(案内・誘導) ●中締め、ワラビ狩りツアーオリテ	
13:30	ワラビ狩りツアー	●ワラビ狩り(無料エリア)又は土呂部散策 ※ワラビ狩りとは別に、「土呂部産ワラビ」を事前に注文することができます。(希望者のみ) 土呂部産ワラビ(600g)500円	※バス以外の参加者は、中締め後、自由参加となります。※雨天の場合は、中止にすることもございます。
14:30	出発	●左時間は、バス利用者のスケジュール。	
15:45	市役所到着		
16:00	解散		



※「土呂部へ行こう!!part.3, part.4」の草刈り活動の様子。地元の食材を使った昼食は定番となった。

(3) だろぶスノー・バスターズ(雪かき隊)の開催・・・②

これまで、(1)の「雪かき体験塾」や(2)の「土呂部へ行こう!!」の活動を展開しているが、当面の最終目標は③の生活支援型プログラムへの移行である。

活動開始から2年が経過し、リピーターのボランティアも増えてきたことから、平成25年より「雪かき」が必要な時に即応的に対応できる仕組みとして、「だろぶスノー・バスターズ」の活動を実施している。

平成 26 年も近隣地域のボランティアを含め、15 名が登録し、1 月 7 日から 3 月 18 日までの間で活動することになっている。

「雪かき体験塾生」から「スノー・バスターズ」へ!!

どろぶ スノー・バスターズ 2014



メンバー募集します。

地元の方の“声”に 応えて・・・。

平日の雪かきが必要時に開催!

2014年
とき/1月8日(水)~3月14日(金)
ところ/日光市栗山地域 土呂部(どろぶ)地区

主催

日光市 / 社会福祉法人 日光市社会福祉協議会

どろぶスノー・バスターズ 2014

期 日

2014年
1月8日(水)~3月14日(金)
※「平日の雪かきが必要な時」に開催します。

場 所

日光市栗山地域
土呂部地区
集合場所: 土呂部公民館 (日光市土呂部 93)

参加対象

○原則として、これまでに「雪かき体験塾」に参加したことのある方
○自家用車等で直接現場に来ることができる方

申込(登録)方法

○必ず、事前登録が必要になります。
○登録には、すぐに情報を受信できる携帯メールアドレスが必要ですが、(※)所定の登録用ハガキに必要な事項を記入の上、郵便ポストに投函してください。

【登録先】

日光市社会福祉協議会
ボランティア・福祉教育推進センター
(松本・福祉)
日光市今市 511-1
TEL0288-30-4117

【注意事項(※)】

※携帯メールの場合、パソコンからのメールが受信できるように設定してください。(詳しくは、各携帯電話会社等にご相談ください。)
※原則、メールでの配信となりますが、利用できない方につきましては、別途ご相談ください。

持物・服装

○長靴
○汗ふきタオル
○着替え
○昼食 (コンビニは近くにありません)
○スコップ、スノーダンプ (持参できる方)
※雪かきができる服装でお越しください。

全体の流れ

STEP① メンバーとして登録します。

○登録は、日光市社会福祉協議会まで。(左側)
○ボランティア活動保険に加入していない方は、登録時に申し出てください。

STEP② 雪かきが必要となった場合、登録者にメールが届きます。(実施前日)

○STEP②からの窓口が変わります。
【雪かき窓口】
日光市栗山総合支所・総務課
地域おこし協力隊 (青山・土屋)
日光市日滝 575
TEL0288-97-1112

STEP③ 参加できる場合は、前日 21 時までメールで返信します。(先着順)

○参加できる方は、前日 21 時 (午後 9 時) までにメールで返信 (予約) してください。
○参加できる人数は、先着 5 名までです。

STEP④ 参加(実施)することが決まったら、当日 10 時に集まり活動します。

○当日 10 時に土呂部公民館に集合します。
○現地スタッフ (地域おこし協力隊) の指示に従い、活動を始めます。
○活動時間は、次のとおりです。

10:00~15:00

【注意事項】

※雨雪状況などにより時間が変更になる場合があります。
※大雪などで中止の場合、当日 8 時までに参加予約者に電話連絡します。

STEP⑤ 終了後、「温泉施設無料入浴券」を差し上げます。

○活動していただいた方に、栗山地域内の共同浴場などで利用できる「温泉施設無料入浴券」を差し上げます。

【注意事項】

※1人1回の活動につき1枚です。
※指定の温泉施設のみ有効です。
※この期間中(平成26年1月8日~3月14日)であれば、活動日以外でも利用可。

(4) その他の活動

この土呂部地区での活動開始から4年目になるが、活動者数や関心層が増えたことにより、県内の大学生や参加者などが、この(1)~(3)の活動以外にも土呂部地区に関わり、支援活動を行う動きが見られるようになってきた。



※写真左から、「大学生ボランティアによる大滝の看板設置、遊歩道清掃活動」、「大学生農業サークルによる支援活動」「日光茅ポッチの会による希少植物や里山風景を守る活動」の様子。

第3章 「活動人口」調査結果と考察

1 平成25年度生涯学習調査研究事業に係る「活動人口」調査の実施について

(1) 調査の名称

「活動人口」調査

(2) 調査の目的

地域住民が、日々の生活の中で人との連携・協力によってどのような活動をどの程度行っているか、人々の活動状況を把握し、その拡大を図ることによって人と人、人と地域との絆を深めるとともに、地域活動の活性化や活発化を推進することを目的に「活動人口」調査を実施する。

(3) 調査の内容

ア 「活動人口」という指標を用いて、地域における人と人との「つながり力」の強さを測定する。

※「活動人口」とは、個人が地域においてどの程度活動しているかをもとに算出したもので、人と人との「つながり力」(＝「皆が元気で、他の人とどの程度つながっているか」)について、具体的に数値化したものである。

イ 本調査でいう「活動人口」は、個人がどの程度の「つながり力」度数をもって活動を行っているかを指標化したもので「度数」的な意味合いが強く、単純に定住人口との比較はできない。「活動人口」は暫定的に定めたものであり、より良い指標にしていくために今後とも検討を重ねていくこととする。

ウ 「活動人口」の算出の仕方

(ア) 各回答者の調査票から項目ごとの数値(「よく行った」2点、「行った」1点、「行わなかった」0点)を合計し一人当たりの「つながり力」度数を算出する。

(イ) (ア)をもとに、全回答者数の「つながり力」度数を算出する。

(ウ) (イ)の数値を全回答者数で除算して1人当たりの「つながり力」度数の平均値を算出する。

エ 地域間の比較を容易にするために、1人当たりの「つながり力」度数に1,000を乗算したものを、「人口1,000人当たりの活動人口」とする。

これを、「人口1,000人当たりの、『みんなが元気で、他の人とどの程度つながっているか』」を表す指標、すなわち「活動人口」とする。

$$\text{「活動人口」} = \frac{\text{「つながり力」度数の合計 (＝ウ (イ))}}{\text{全回答者数}} \times 1,000$$

(4) 調査票について

ア 属性について(プロフィール)

(ア) 性別 (イ) 年齢 (ウ) 家族構成・血縁・地縁

(エ) 職業について・職縁 (オ) 居住歴・地縁・友縁 (カ) 定住意向

イ 4つの縁について

「血縁」「地縁」「友縁」「職縁」の観点から活動の様子を分析する。

1度でも活動していれば「行った」、複数回または継続して活動していれば「よく行った」を選択できるようにする。

ウ その他として自由記述欄を4つの縁とアンケート全体を別に記述できるようにする。

2 調査対象地域の調査結果

(1) 活動人口について

ア 平成24年度調査対象地域別活動人口及び4つの縁別活動人口

※平成24年度の「活動人口」の積算においては、定住人口との比較をするために、1人当たりの活動頻度素数（H25年度は「つながり力」度数に名称変更）に定住人口を乗じて活動人口とする試みを行った。

$$\text{「活動人口」} = \frac{\text{全回答者の活動頻度素数の合計}}{\text{回答者数}} \times \text{定住人口}$$

※「定住人口」は、調査する地域の20歳以上の人口とする

(ア) 調査対象地域別活動人口

活動人口は、土浦駅北口中心市街地住民が2,022,300.8人で最も多く、以下、行方市立大和第一、第二、第三小学区住民で647,472.0人で続いている。最も少ない日立市城の丘団地住民は14,374.8人で、差が2,007,926.0人である。

(表(1)-1)

調査対象地域	全回答者の活動頻度素数の合計	回答者数	1人当たりの活動頻度素数	定住人口	活動人口
日立市城の丘団地住民	1,628	123	13.2	1,089	14,374.8
行方市立大和第一、第二、第三小学区住民	3,468	169	20.5	31,584	647,472.0
土浦駅北口中心市街地住民	2,879	165	17.4	116,896	2,022,300.8
筑西市立大田小学校区住民	1,186	63	18.8	13,156	247,332.8
※日光市土呂部地区住民	421	39	10.8		(10,794.9)
全体	9,161	520	17.6		【17,617.3】

※ 定住人口は、平成22年国勢調査に基づく。

表(1)-1

※ 土呂部地区については、参考データとするため、「全体」には合算しない。

※ 【 】内の数値は、平成25年度の「活動人口」と比較しやすくするために「1人当たりの活動頻度素数」に1,000を乗じ算出した数値。

(イ) 4つの縁別活動人口

全体での一人当たりの「縁別活動人口」は、家族や親戚に関わる活動人口が6.1人で最も多い、以下地域に関わる活動人口5.9人、友人に関わる活動人口3.2人、職場に関わる活動人口2.4人と続く。調査対象地域で見ると、行方市立大和第一、第二、第三小学区住民が縁別活動人口の多い地域であると言える。
(表(1)-2)

活動内容 調査対象地域	家族や親戚に関わること 【血縁】	地域に関わること 【地縁】	友人に関わること 【友縁】	職場に関わること 【職縁】	活動頻度素数計 全回答者 一人当たり
日立市城の丘団地住民 [123]	596 (4.8)	467 (3.8)	281 (2.3)	284 (2.3)	1,628 (13.2)
行方市立大和第一、第二、第三小学区住民 [169]	1,271 (7.5)	997 (5.9)	540 (3.2)	660 (3.9)	3,468 (20.5)
土浦駅北口中心市街地住民 [165]	916 (5.6)	1,122 (6.8)	591 (3.6)	250 (1.5)	2,879 (17.4)
筑西市立大田小学校区住民 [63]	371 (5.9)	489 (7.8)	253 (4.0)	73 (1.2)	1,186 (18.8)
※日光市土呂部地区住民 [39]	133 (3.4)	133 (3.4)	116 (3.0)	39 (1.0)	421 (10.8)
全体 [520]	3,154 (6.1)	3,075 (5.9)	1,665 (3.2)	1,267 (2.4)	9,161 (17.6)

表(1)-2

※ 調査対象地域における、[]内の数値は、調査対象地域ごとの回答者数

※ 4つの縁（血縁、地縁、友縁、職縁）に係る（ ）内の数値は、1人当たりの活動頻度素数

※（ ）の数値は、四捨五入しているため、合計と表記が一致しない場合がある。

※ 土呂部地区については、参考データとするため、「全体」には合算しない。

イ 平成25年度調査対象地域別活動人口及び4つの縁別活動人口

(ア) 調査対象地域別活動人口

活動人口は、日立市田尻交流センター管内住民が20,860.2人で最も多く、以下、潮来市商工会講座受講生20,791.7人、阿見町本郷小区ふれあい地区センター管内住民20,460.5で続いている。最も少ない日立市城の丘団地住民は11,572.6で、差が9,287.6人である。(表(1)-3)

調査対象地域	全回答者の「つながり力」度数の合計	全回答者数	一人当たりの「つながり力」度数	活動人口
日立市城の丘団地住民	1,354	117	11.6	11,572.6
日立市田尻交流センター管内住民	3,880	186	20.9	20,860.2
行方市麻生東小学校区住民	2,592	166	15.6	15,614.5
潮来市商工会講座受講者	499	24	20.8	20,791.7
県南センター事業受講者	2,545	203	12.5	12,536.9
阿見町立本郷小区ふれあい地区センター管内住民	1,555	76	20.5	20,460.5
筑西市大田地区住民	1,285	64	20.1	20,078.1
県西センター社会貢献活動推進事業受講生	1,154	74	15.6	15,594.6
水戸市新荘、常磐自治会住民	4,289	253	17.0	16,952.6
※日光市土呂部地区住民	436	39	11.2	11,179.5
全体	19,589	1,202	16.3	16,297.0

表(1)-3

※ 土呂部地区については、参考データとする。

(イ) 4つの縁別活動人口

全体での一人当たりの「縁別活動人口」は、家族や親戚に関わる活動人口が6.2人で最も多い、以下地域に関わる活動人口4.7人、友人に関わる活動人口3.6人、職場に関わる活動人口1.8人と続く。(表(1)-4)

活動内容 調査対象地域	家族や親戚に関わること 【血縁】	地域に関わること 【地縁】	友人に関わること 【友縁】	職場に関わること 【職縁】	「つながり力」度数計 全回答者一人当たり
日立市城の丘団地住民 [117]	557 (4.8)	358 (3.1)	280 (2.4)	159 (1.4)	1,354 (11.6)
日立市田尻交流センター管内住民 [186]	1,367 (7.3)	1,120 (6.0)	937 (5.0)	456 (2.5)	3,880 (20.9)
行方市麻生東小学校校区住民 [166]	1,051 (6.3)	708 (4.3)	550 (3.3)	283 (1.7)	2,592 (15.6)
潮来市商工会講座受講者 [24]	172 (7.2)	134 (5.6)	86 (3.6)	107 (4.5)	499 (20.8)
県南センター事業受講者 [203]	1,043 (5.1)	732 (3.6)	558 (2.7)	212 (1.0)	2,545 (12.5)
阿見町立本郷小区ふれあい地区センター管内住民 [76]	579 (7.6)	474 (6.2)	329 (4.3)	173 (2.3)	1,555 (20.5)
筑西市大田地区住民 [64]	499 (7.8)	418 (6.5)	313 (4.9)	55 (0.9)	1,285 (20.1)
県西センター社会貢献活動推進事業受講生 [74]	466 (6.3)	309 (4.2)	192 (2.6)	187 (2.5)	1,154 (15.6)
水戸市新荘、常磐自治会住民 [253]	1,579 (6.2)	1,284 (5.1)	991 (3.9)	435 (1.7)	4,289 (17.0)
※日光市土呂部地区住民 [39]	137 (3.5)	136 (3.5)	119 (3.1)	44 (1.1)	436 (11.2)
全体 [1,202]	7,450 (6.2)	5,673 (4.7)	4,355 (3.6)	2,111 (1.8)	19,589 (16.3)

表(1)-4

- ※ 調査対象地域における、[]内の数値は、調査対象地域ごとの回答者数
- ※ 活動内容における4つの縁の()内の数値は、一人当たりの「つながり力」度数()の数値は、四捨五入しているため、合計と表記が一致しない場合がある。
- ※ 土呂部地区については、参考データとする。

3 考察

(1) 「活動人口」調査分析結果及び特徴

調査の考察に当たり、平成24年度の調査で明らかになった「活動人口」（＝茨城県内4地域）と、平成25年度調査結果から積算した「活動人口」（＝茨城県内9地域と栃木県日光市を合わせた10地域）について比較を試みた。平成24年度は、調査対象地域の「1人当たりの活動頻度素数」に1,000を乗じた数値を「活動人口」として試算し活用した。

調査対象地域全体について分析すると、「活動人口」は平成24年度17,617.3人、平成25年度16,297.0人となり、平成24年度比1,320.3人の減少である。また、経年変化が比較可能な県内4地域のうち県北、鹿行、県南の3地域が減少している。しかしながら「縁」ごとのつながりの様子について分析を進めると、4つの縁のうち【血縁】「家族や親戚に関わること」、【友縁】「友人に関わること」で数値の上昇が認められる。これらの要因を以下のように考察した。

また、県内5つの生涯学習センターのモデルプログラムの進捗との関連から分析してみると、新しい絆を創出するために活動している第3次団体の取り組みが、【血縁】や【友縁】という身近な人間関係のつながり力から、【地縁】「地域に関わること」及び【職縁】「職業に関わること」といった物質的なつながりが中心の人間関係にまで広がったことが人々のつながり方の変容に大きく影響したと思われる。

人々のつながりの拠点となっている学校の統廃合の影響から分析してみると、小学校区ごとに人々には活動の機会や役割が担保されていたが、統廃合により地域行事の形態が変化し、それに伴い人々の生活スタイルが地域から距離を置くようになった。反動として地域に対し広くつながりを求めようとする表れが、【友縁】、【職縁】の数値上昇に関係していると思われる。（鹿行センターの例から）

「学習会への関わり」と「地域・まちづくり活動」について共に高い数値を示していることを分析してみると、生涯学習センターや公民館などでの「学び」の機会を通してつながった人々が実践へと移行する過程で、つながり力を強め地域の元気力向上に貢献していることが推察できる。（県北、県南センターの例から）

高齢化社会が進む現在、調査対象者も同様の現状にある。このことから加齢に伴う体力的な理由から地域とのつながりが希薄になり、その分「日常生活における助け合い」など【血縁】とともに活動する傾向が非常に強く見受けられる。つまり、地域社会や職場での役割の喪失などによる【地縁】や【職縁】でのつながり力の減少割合以上に【血縁】でのつながり力の上昇割合が向上し、結果として「活動人口」の増加につながっていることが分かる。（県西センターの例から）

限られた地域内ではあるが、女性において【友縁】【職縁】の広がりが強く見受けられることについては、外部団体が実施する各種事業への参加と地域内での就業状況の好転により、女性の社会進出に伴う地域の活性化が促進されたことにより、つながり力が向上し「活動人口」の増加に影響したと思われる。（日光市の例から）

以上のように2年間継続した調査結果を、「活動人口」の経年変化を指標として整理してみると、地域の特色に合わせたモデルプログラムを展開することは、地域が元気になり、つながり力を強めるために有効な手段であると考えられる。

(2) 県北生涯学習センターの考察

ア 「活動人口」調査結果の概要

平成24年度は13,235.8人、平成25年度の「活動人口」は11,572.6人であった。このモデルプログラムを推進することで「活動人口」が増えると仮定するならば、真とはならなかった。

平成25年度、平成24年度とほぼ同数のアンケート回収率であった。しかし、各世帯一人に回答を求めたため、回答者の属性に顕著な違いがあった。その結果、アンケート集計の結果を比較して効果を計ることは大変難しくなった。例えば、平成24年度は男性57.5%、女性42.3%に対し、平成25年度は男性32.5%、女性67.5%と回答者の逆転が見られた。また、「就業状況」においても平成24年度は男性が多く回答したにも関わらず、「仕事をしていない」61.0%、「仕事をしている」39.0%、平成25年度は「仕事をしていない」32.5%「仕事をしている」67.5%と女性の就業率が高くなっている。一般的に男性回答者が多ければ就業率も高くなると予想されるのが、女性回答者が多く、就業率も高いということは、その地域の経済環境なども鑑みる必要がある。

4つの縁、「家族や親戚に関わること」「地域に関わること」「友人に関わること」「職場に関わること」において、「地域・まちづくり活動」、「環境保全活動」の数値が増えている。それに対して、「非常時の協力・支援」に関して減少しているのは、「東日本大震災」の記憶が過去のものになりつつあるのではないと思われる。

イ 今後の検討課題

今後、「活動人口」の経年変容を見るにあたり、被験者の属性や回答方法について検討する必要がある。個人の活動の動きで追跡するのか、家族単位の動きを見るのか。また、調査方法を整理し、より精度の高い方法論を確立することが必要であると考えられる。

(3) 鹿行生涯学習センターの考察

ア 「活動人口」調査結果の概要

調査研究対象地域の回答者の数や対象はほぼ変わらないが、平成24年度の「活動人口」は、20,520.7人であるのに対し、平成25年度の「活動人口」は、15,614.5人と大きく減少している。その要因の一つには、調査研究対象地域にこれまでであった4つの小学校が、平成25年4月より統合されて1校となり、学区が大きく広がったことがあげられる。統合による学区の拡大で、小学校の行事やそれに関連した地域の行事・イベント等の企画・運営に一人一人が参加する機会が大きく減少してしまったことが影響していると思われる。

つまり、今までそれぞれの居住地域の小さな学区内で行われていたときには、人口比率からも必然的に各個人が参加活動する機会が多かったのに対し、小学校が統合されたことによる学区の拡大、学区内の人口増加に伴って、各個人が参加活動する機会が少なくなってしまうことが考えられる。

小学校中心に行われてきた行事やイベント等の内容数については、統合前も統合後もあまり変化はないと思われるが、人口との比率が変わったことにより、これまで活動に積極的に関わってきた方たちの出番が少なくなったことは、活動をともに行ってきた仲間同士のつながりの減少にも何らかの影響を及ぼしていると思われる。

イ 今後の検討課題

地域住民同士のつながりを生み出す要素の一つである「学校」の存在は大きく、学校を中心にコミュニティが作り出されていることも多い。特に、過疎化が進む地域においては、学校統合による「活動人口」の変動へのマイナス影響が懸念される。こうした従来の地域における活動を停滞させないように配慮しながらコミュニティ再生への新たな手立て等を考え取り組んでいく必要があると考える。

(4) 県南生涯学習センターの考察

ア 「活動人口」調査結果の概要

センター区全体の特徴は、まず、どの関わり合いにおいても、ほぼ全てで「日常生活における助け合い」が一番高い比率であることである。次いで、「環境保全活動」や「地域・まちづくり活動」が上位にみられる特徴もある。このように、生活に密着した事柄について関心の高い地域であると考えられる。

調査研究対象地域では、コミュニティ再生事業対象者に比べ、「芸術・文化・スポーツ活動」が全体的に高い位置にある。こうした要因は、調査研究対象者がセンター事業受講者であり、普段から積極的にこうした活動に参加していることに関係しているように思われる。

また、調査研究対象地域では、「学習会への関わり」と「地域・まちづくり活動」を行った人の比率が、ほぼ同率であった。このことから、生涯学習センターや公民館等で学習をした人が、地域・まちづくりに関心を持ち、実際の活動につながっていると推測することができる。今後は、こうした活動へつながるような講座を増やしていけば、さらに地域が活性化していくのではないだろうか。

平成24年度の調査と平成25年度の調査結果を比較すると、一番大きな変化は、ほぼ全ての項目において、地域との関わりが大きく減少しているところである。

また、「日常生活における助け合い」や「学習会への関わり」では、友人との関わりも減っている。反対に、「地域・まちづくり活動」では、家族や親戚との関わりが増加している。

これらのことを、プロフィールをもとにみってみる。平成24年度調査と、平成25年度調査のプロフィールで最も大きく違ったところは、男女の数である。平成24年度調査では、男性46.1%、女性53.9%であるのに対し、平成25年度調査では、男性51.7%、女性48.3%と男女の割合が逆転しているのがわかる。

このことから、女性は男性よりも地域への参加率が高く、それは、単に日常生活に関わるだけでなく、趣味や学習などの活動においても同じであるということが考えられる。

そして、男性は家族や親戚といった血縁関係においては、一緒に活動することが多いが、地域の人と活動することは少なく、友人と日常生活の助け合いをしたり学習会に参加したりする機会も少ないということもわかる。

このことは、この年代の男性が、仕事などのために地域や友人と関わる機会を十分に持てなかったことに起因しているのではないだろうか。

さらに比較から読み取れることは、「非常時の協力・支援」が全体的にかなり減っていることである。これは、東日本大震災から年月が経つにつれ、次第にその必要性の認識が薄れてきたことに関係していると思われる。

イ 今後の検討課題

調査結果を踏まえ、今後この地域では、男性の地域参加の機会や、居場所づくり、また、学習者同士の交流の場の提供をしていく必要があると考える。

(5) 県西生涯学習センターの考察

ア 「活動人口」調査結果の概要

調査研究対象地域の回答者の数や対象地域はほぼ変わらないが、回答者の男性の比率が平成24年度73%に対し、平成25年度81.2%、また年齢層では平成24年度「70代」46%、「50代～60代」50.8%に対し、平成25年度「70代」50.8%、「50代～60代」47.6%と平成24年度に比べ高齢化が進んでおり、高齢層の男性の変容が平成25年度の「活動人口」の変化に影響していると考えられる。全体的な「活動人口」では、平成24年度の「活動人口」は18,825.4人であるのに対し、平成25年度の「活動人口」は、20,078.1人となり、平成24年度比1,252.7人の増加となった。高齢層の男性の変容を受けて、「活動人口」の増加につながったと推測される。

各調査項目で見ると、「日常生活における助け合い」、「地域・まちづくり活動」、「学習機会の関わり」など「家族や親戚に関わること」が増加し、逆に「地域に関わること」が減少している。このことは、対象地域の男性の高齢化が進み、年齢による体力的な理由や、地域社会での活動の場を見いだすことが出来ずに、一番身近な「家庭・家族」での活動が主となっていることが伺える。また、それを証明するかのようにより地域的な活動が必要となる「非常時の協力・支縁」や「環境保全活動」においては「家族や親戚に関わること」、「地域に関わること」ともに減少する結果となった。

イ 今後の検討課題

調査結果より、全体的な「活動人口」の増加の要因としては、「地域に関わること」の減少を補う以上の「家族や親戚に関わること」の増加や、「行った」から「よく行った」への変容など、血縁関係における活動の活性化が読み取れる。つまりは、【血縁】から【地縁】・【友縁】へのシフト移動を円滑に行えるシステムの構築が、今回の対象地域のキーワードとなり、「活動人口」の増減及び地域コミュニティの活性化に大きく関わってくることが分かる。

これからも進んでいく地域社会の高齢化や無縁社会に立ち向かうため、「活動人口」の増加は必須であり、地域社会との関わりが男性よりも高い女性の社会参加・参画の力を活用し、個人単位ではなく、夫婦・家族単位での地域社会への関わりを増加させる取り組みや、交流の場、居場所づくりを促進していく必要があると考える。

(6) 日光市社会福祉協議会（土呂部地区）の考察

ア 「活動人口」調査結果の概要

平成24年度と比較し、増加した活動としては、「地域・まちづくり活動」、「環境保全活動」、「高齢者・障がい者支援」の3項目であり、その大半が「40～60代」の「女性」である。主な増加の理由は、地域内での就職（組合）によるもの、外部団体が行う活動への参加である。つまり、中山間地域特有の男性社会において、女性の社会参加（就労、まちづくり活動への参加など）は、「活動人口」を増加させる要因と

なることが推測できる。

また、人口減少に伴い、一人ひとりの地域社会における役割が増えていく中で、女性の社会参加や社会的役割の創出は、地域の資源を増やすと同時に、持続可能な地域社会づくりに不可欠な存在となるのではないかと考える。

一方、「非常災害時協力」、「環境保全活動」での活動が減少した。年代は「60～70代」で、主として「男性」である。主な減少の理由は、高齢化に伴い、身体的な理由から老人会を退会するもの、地域社会での役職等の退任によるものである。

つまり、地縁における役割の喪失が、地域内での活動を減少させる要因につながっている事が見えてきた。今後もこのような減少が予測されるが、役割の喪失で終わることなく、代わる新たな社会的役割を担っていけるかが重要なポイントではないかと考える。

イ 今後の検討課題

この調査において、「活動に参加したか（参加）」だけでなく、「企画や運営に携わる活動を行ったか（参画）」についての設問項目（2, 3, 4, 6, 9, 10）があり、高齢者の多い地域では、何らかの活動への参加はあっても、主体的な参画までには至らない場合が多い。その結果、「（参画は）行わなかった」と回答するケースも多く、この点が「活動人口」増加につながらなかったひとつの要因ではないかと推測する。

第4章 生涯学習調査研究のまとめ

我が国において拡大しつつある無縁社会にどう対処したらよいか。人と人とのつながりによって構築されていた地域社会のセイフティネットワークが崩壊することによって、人々の暮らしの安全・安心が失われていってしまう。安心して暮らせる社会づくりに向けて人と人とのつながりをどのようにして取り戻していったらよいのだろうか。「無縁社会に立ち向かう」といったテーマのもとに茨城県教育委員会の新たなチャレンジが始まった。

平成23年度は、4つの生涯学習センターにおいて、それぞれ所管する地域の現状や課題を把握し、課題解決に向けてどのような手法を用いて地域の人々のつながりを強めて行くか、具体的な対策を検討した。茨城県教育委員会の立場から地域の活性化に取り組むことは、これまでに経験したことがなく、情報のストックも少ないことから、担当者の情報収集や基礎的な学習からのスタートであった。地域の元気アップに取り組んでいる団体等から取り組み状況や課題など様々な話を聞き、地域ごとに多様な手法の検討を行った。ねらいは地域社会において人づくりや教育力の向上に努め社会教育の復活を図ることである。

平成24年度は、23年度に各生涯学習センターが中心となって検討したモデルプランをもとに、地域の人達と一緒に実施体制を整え、各種の事業を実施し、その結果について評価を行った。平成25年度には、地域の人々が主体となって推進組織を設置し、地域の元気アッププランを作った。それをもとに支縁社会づくりに向けた各種の取り組みが実施された。

それぞれの生涯学習センターを中心に実施された対策について、その効果をどう評価するかという観点から「活動人口」という手法を導入した。地域で積極的に活動する人が増加すれば人と人とのつながりが拡大しその地域は元気になる。これまでの定住人口や交流人口の拡大を図るといった視点ではなく「活動人口」の拡大という新しい手法を提起したのである。この「活動人口」という考え方を地域の元気アップ手法として確立できれば、これまでとは異なった地域社会の活性化対策が推進されると考えられる。ぜひ全国各地で実験的に取り組まれることを期待したい。

今回の調査では、対策を実施した地域と「活動人口」を測定する地域との整合性がうまくとれなかったことから、実施した施策の効果が的確に測定できなかった。今後、地域の元気アップ対策とその効果を測定する「活動人口」の整合性を図ることによって、「活動人口」の増加に向けた効果的な対策の整理ができるものと考えている。

1 新たな社会貢献の仕組みづくりにむけて

(1) 無縁社会の到来

今日の我が国の社会は、核家族化の進展やライフスタイルの個性化、通信手段の高度化などから、人と人との結びつきが希薄化し、「無縁社会」といわれるような状態になってきている。【血縁】(親戚相互のつながり)や【地縁】(地域の人とのつながり)、【友縁】(友達とのつながり)【職縁】(職場のつながり)といった人との縁が薄れてきているのである。

このような人と人とのつながりは、茨城大学の長谷川幸介准教授の言葉を借りれば「社会のセイフティネットワーク」として非常に重要なのである。何かあったときに助けてくれる、手を貸してくれる仕組みがあることは安心して暮らせる基本である。

これが壊れてしまうと人々の暮らしが不安定となり、犯罪や事件・事故の拡大などに影響を及ぼしてくると考えられる。人と人とのつながりによって形成されている「社会のセーフティネットワーク」の再構築は差し迫った課題である。

(2) これまでの社会貢献活動

「世のため人のため」という言葉に象徴されるように、我が国では古くから他人や社会のために奉仕することが美德とされてきた。社会を明るくする運動や地域の清掃活動、隣近所の助け合いなど多くの人々の協力や努力によって地域社会が運営されてきた。

近年は、急速な高齢化や少子化の進展などに伴って、老人の介護や子育てなど社会福祉の分野におけるボランティア活動が活発になり、社会貢献活動の大きな比重を占めるようになってきた。また、地域活性化に向けた各種の取り組みが活発に行われるようになり、多くの人々が地域おこし活動に積極的に関わるようになってきている。

一方、マンションや賃貸住宅の増加に伴って地域における共同作業の機会などが減少し、居住する人と地域社会との関わりが少なくなってきた。このため、災害復旧ボランティア活動のように地域を越えて、あるいは何らかの目的に向けて広域的な人々の参加によって行われる社会貢献活動が拡大してきている。国際協力の分野においても、アジアやアフリカの貧困地域における国際貢献活動の高まりが見られるなど、我が国における社会貢献活動が一段とグローバル化してきている。

(3) 地域社会への関心の高まり

人々の社会貢献活動が、自分の足下の活動から広く人と人とのネットワークにもとづく活動や地域を越えた目的行動へと移行する傾向が強まってきている中で、阪神淡路大地震が発生し、多くの人々が被災地に足を運び、がれきの中から人命救助をするとともに、がれきの整理や復興への取り組みに奔走した。その活動の経験は日本全国に広まり、災害等の発生した現場に多くの人々が参加するようになるとともに、ボランティア団体の活動も一層活発になった。

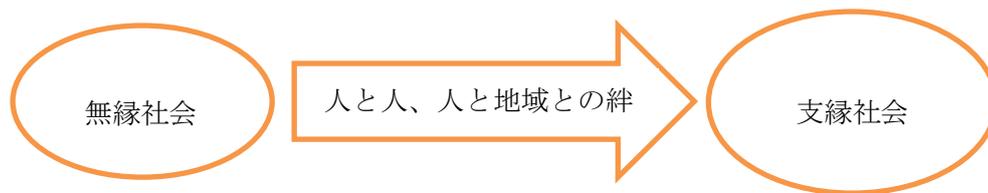
東日本大震災では、その経験が生かされ全国各地から被災地に多くの人々が駆けつけた。このような地域を越えた社会貢献活動は、困っている人達の助けになろうという止むにやまれない日本人としての心意気の現れであり、今後も拡大していくことが望まれる。一方、被災した人々の間には、人と人との絆の大切さが再認識され、復興やまちづくりに向けた協力も強まり、自分の住んでいる地域への関心が一段と高まってきている。

(4) 支縁社会づくりに向けた取り組み

東日本大震災後、多くの人々が人と人との絆を求めるようになってきたのである。

【血縁、地縁、職縁、友縁】といった人と人との絆がしっかりと築かれ、セーフティネットワークに支えられた社会、すなわち「支縁社会」(昭和女子大学長 坂東真理子氏提案)を作っていくことの重要性を多くの人々が認識するようになってきたのではないだろうか。

かつての日本社会は、互助や共助の精神に支えられた社会であった。農作業や地域の清掃作業といったことは共同で行い、子ども達が悪いことをすれば自分の子どもだけではなく他人の子どももしっかりと叱る。隣人愛に支えられた共同の社会であった。そのような共に助け合う、共に支え合う「支縁社会」の復活に向けて取り組んでいくことが我が国にとっては大変重要である。



(5) 茨城県立生涯学習センターの取り組み

人生80年時代といわれるように人々の長寿化が進んでいる中で、長い人生を生きいきと暮らせるように生涯学習ということが強く求められるようになり、従来の社会教育活動に代わって生涯学習活動が全国的に進められるようになってきた。教育行政においては、社会教育から生涯学習へと自ら学ぶことの大切さを重要視する時代になったのである。地方自治体や民間機関においてカルチャースクールが地方自治体や民間によって活発に行われるようになり、文化やスポーツ、料理といった多彩な講座が全国各地で開催されている。団塊の世代が定年退職を迎え、自由な時間が拡大したことによってその傾向は一団と強まってきているように思われる。

そのような中、茨城県教育委員会では、県内の生涯学習センターがカルチャースクール化の傾向にあり、地域社会における教育力が衰退してしまった現状を直視し、社会教育の復活に向けて果敢な取り組みを行った。

ア 住宅団地におけるイベントを通じた絆の形成（県北生涯学習センター）

(ア) 多様な生活スタイルや様々な年齢の人々が住む住宅団地において、いかにして住んでいる人が協力し合って暮らしやすい居住環境をつくって行くか検討を進めた。

(イ) そのための手段としてイベントの開催を計画し、事業の実施過程を通して人と人との融和が進み、新たな人材の発掘にもつながった。また、団地に居住する多くの人々に対して、人と人とが交流することの大切さや日常生活におけるコミュニケーションの重要性が認識された。

イ 子育てを中心に男女共同参画による地域社会づくりの推進

(鹿行生涯学習センター)

(ア) 管内にある茨城県女性プラザを踏まえ、男女共同参画による子育てを中心としてコミュニティの形成を図ることをねらいに学習会、交流イベントなど多彩な事業を実施した。

(イ) 2年目以降は学校支援ボランティアの必要性に着目して、学校と地域が力を合わせて学校教育のサポート及び地域の活性化方策などの検討を行い、事業の実施に取り組んだ。

ウ 商店街の活性化と地域の総合力の発揮（県南生涯学習センター）

(ア) 土浦地域においては、つくば市や牛久市といった近隣都市の発展の影響を受けて中心商店街の地盤沈下が著しいことから、商店街の活性化をねらいとした様々な方策を検討した。

(イ) さらに、地域の資源や潜在力に目を向け、それを活用することによって土浦地域の元気アップを図ることを目的に各種の取り組みを実施した。「はすの花のひらく音を聴く会」や船上から夕日につつまれる土浦市街を眺めながら土浦について語り合う機会など、この地域ならではのユニークな活動が行われた。

エ 地域資源の発掘と活用に向けた取り組み（県西生涯学習センター）

(ア) 県西地域は歴史的、文化的資源に恵まれていることを踏まえて、「ふる里まちづくり塾」を開設し地域の歴史や文化などを学習することから取り組みをスタートした。

(イ) 平成25年度は、地域コミュニティの再生を目的に三世代の絆を深めるため、三世代歴史ウォーキングのプログラム開発や里山づくりなどに取り組むことが方向付けされ、地域住民を中心に具体的な活動が始まった。

(6) 「支縁社会」づくりに向けた社会貢献活動

「無縁社会」といわれる我が国において、お互いに助け合い協力し合って、安全安心な暮らしが営めるような人と人との絆によってしっかりと支えられた「支縁社会」を築いていくためには、身近な地域において次のような社会貢献活動が活発に展開されるように努めて行くことが大切ではないだろうか。

ア 地域における相互扶助の環境づくりに向けた活動

・高齢者の介護 ・子育て支援 ・日常生活における様々な相互協力

イ 安全安心な地域環境づくりに向けた活動

・防災体制づくり ・防犯パトロール ・登下校の子どもの見守り

ウ 地域コミュニティの振興に向けた活動

・清掃作業 ・環境保全活動 ・自治会活動

エ 地域の教育力の復活に向けた活動

・青少年の健全育成 ・子ども達の体験活動

オ 人々の交流を促進するための活動

・三世代交流事業 ・地域の祭りやイベントの開催

カ 歴史的資源や伝統文化を守る活動

・伝統文化の継承 ・郷土の学習

キ 家族や親族間における親睦行事や相互協力の拡大

ク 友人との協力による社会貢献活動への参加

ケ 職場の人達と一緒にした社会貢献活動

(7) マッチングシステムの導入

ア 人材バンクの設置

地域に住んでいる人の中には多彩な能力を持った人がいるが、人と人とのつながりが薄れてしまった今日においては、そのような情報が地域で共有されていない。地域の元気アップを進める上で、そのような力を持った人の協力は重要であり、ぜひとも地域において人材バンクを設置し、それぞれが提供できるボランティア活動や社会貢献活動などを登録しておいて力を借りることが大切ではないだろうか。そのようなリストが整理できただけでも地域の活性化にとっては大きな前進である。

イ 地域のニーズ情報の発信

一方で、地域の高齢者や子育て世代の応援、環境保全活動、イベントの開催などを進めるにあたって、「このような人材を求めます」といった地域のニーズ情報を地域の人々の中に流すことが大切である。一人暮らしの高齢者が求めている庭木の手入れや片付け、子育て世代のお母さんの困り事、イベントの協力者を求めるといったことなど具体的な地域のニーズ情報を集め、地域の人達の協力で解決できる内容を整理し、地域の皆さんに情報として流すことである。

ウ マッチングシステムの構築

地域社会のニーズとボランティア活動に協力できる人の情報が収集できたところで、両者をマッチングさせる作業を行うことによって、身近なところで行える社会貢献活動が動き出せるものとする。このようなマッチングシステムをぜひ導入し、社会貢献活動をしたくてもチャンスがなくなかった人や時間にゆとりのある人などに活動の場を提供できるようにすることが大切である。

(8) コミュニティの再生に向けて

地域社会をそこに住んでいる人々の手によって住みやすくして行く、安全、安心な地域社会にして行こうとする動きが高まる中で、これまでのように地方自治体に対して陳情や要望を行いながら地域社会を運営して行く行政依存型の地域社会から脱皮し、そこに居住する人々の力を合わせて地域の自治を図って行くことが肝要である。

近年地方自治体の財政がますます厳しくなっている中で、住民の参加や協力によって地域社会を運営していくことが大切になってくると考えられる。このようなことから、小学校区や一団の住宅団地などを単位とした地域において、住民参加によって地域社会を運営して行く、コミュニティの再生を進めて行くことが大切ではないだろうか。すなわち、ボランティア的な社会貢献活動から地域社会の運営に参加していくというより積極的な社会貢献活動への取り組みである。

(9) 社会貢献活動を通じた人材の発掘、育成

以上のような社会貢献活動への取り組みを進めることによって、その過程において地域の人材発掘が進み、また新たな活動にチャレンジする人が現れるなど、地域社会において人的なネットワークが形成され始まるものと考えられる。

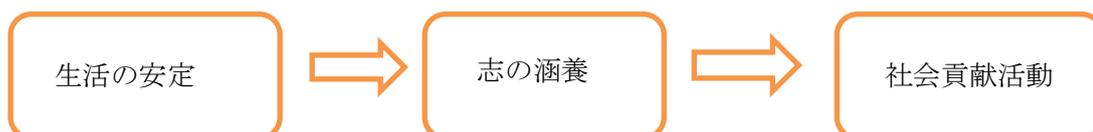
また、そういった活動を通して事業の後継者を生み、育て、人づくりが進んで行くものと考えられる。多くの人いろいろな社会貢献活動を行っているが、それぞれが個別に行うのではなく、元気な地域社会づくりを目指して力を合わせることによって、地域で人が育つシステムが構築されるのではないかと考えられる。身近な地域において社会貢献活動が活発になることによって、社会の教育力が醸成されて行くのではないだろうか。

(10) 志が社会貢献活動を拡大する

我が国は、派遣労働といった雇用の不安定化や若年世代における低所得者の拡大などから経済的・精神的にもゆとりの少ない、将来に夢や希望を見いだすににくい社会状況になっている。そのような中において、社会貢献活動に参加する人の拡大を図っていくためには、何としても生活の安定が必要である。自分の暮らしが安定し、心にゆとりが生じて初めて他の人のために役立つことをしてみようという気持ちが生じるのではないかと思う。

そのような状況になって、人は自分のことだけにのみ生きるものではないということを理解し、人のため、社会のため、国のためにどう貢献するか、そのためにどう生きるかということを考えることができるのではないだろうか。そのような目的意識が志ではないかと思う。その志というものがいつの間にか日本からなくなりつつある。

人や社会のために何か役立つことをやってみようという強い心がなければ、すなわち志がなければ社会貢献活動はできないと考えられる。そのように考えると、「無縁社会」から「支縁社会」に転換を図って行くためには、志を持った人々を育てて行くことが大変重要ではないかと考えられる。



2 「活動人口」という指標を用いた「地域のつながり度」を測定する手法確立にむけて今回の調査研究事業において長谷川准教授から「活動人口」という新たな概念が提案され、委員会において考え方の整理をするとともに試験運用するなど検討を進めてきた。「活動人口」について多くの皆さんにご検討いただき、地域活性化や地域再生の新たな指標として確立できることを願っている。

(1) 定住人口の減少と地域活力の低下

我が国の人口は、近年の急速な少子化や高齢化の進展により減少傾向に転じ、農山村地域などにおいては過疎化の進行が著しく、若年人口の不足で地域の存続が難しい限界集落といったような事態も生じてきている。また、若者の地方からの流出は地域の活力低下に大きな影響を与えており、若者が住みやすい地域づくりは、地域の活性化にとって重要な要素である。

このように活力が低下した地域が多く見られるようになったことから、少しでも元気にしたいと地域活性化に向けた多様な取り組みが全国各地で進められている。

(2) 交流人口の拡大による地域活性化

定住人口の減少に歯止めがかからない地域においては、人々の交流を活発にすることによって地域を元気にする、いわゆる交流人口の拡大を目標に様々な事業の展開に努めている。観光の振興、体験ツアーや里山ツアーの開催、特産品の販売、地域の特色を生かしたイベント、ゆるキャラによる地域のPRなど、一人でも多くの人に来てくれるよう地域の生き残りをかけたチャレンジが活発に行われている。

このような取り組みの結果、地域間交流が活発になり交流人口の拡大が図られたことにより、元気になった地域が各地に見られるようになっている。

(3) 東日本大震災と絆

先の東日本大震災では2万人を超える多くの人の命が失われ、未だ20万人を超える人々が避難生活を送っている。この震災を経て人々の意識に大きな変化が現れている。読売新聞社が震災後の平成23年11月に行った全国世論調査によれば、「震災後、とくに大切にしたいと思うようになったこと」を2つ選ぶ問いに対して、家族が69%、地域とのつながり37%という数値が出ている。

また、震災を契機に多くの人々が地域の良さを再認識するようになるとともに、寄付やチャリティ活動への参加、ボランティア活動への関心の高まりがみられるようになっている。

(4) 絆は活動によって深まる

人と人、人と地域の絆は、様々な活動を通して結ばれて行くのではないだろうか。地域の清掃活動に参加することによって人との結びつきや地域とのつながりが深まる。職場においては一緒にボランティア活動に参加し、あるいは地域のイベントに参加することによって、職場の人と人との結びつきが形成され、より密接になって行く。家族や友人の間においても同じようである。それぞれ活動を通して人と人との絆が形成され、また活動を通して絆が一層深まって行く。

このように考えると、「無縁社会」から「支縁社会」に転換して行くためには、人々

が様々な活動に参加して行くことが重要であり、多くの人々が活動に参加しやすい環境づくりを進めて行くことが重要ではないだろうか。

(5) 「活動人口」という新たな指標の検討

そこで、地域の人々がどのような活動をしているかを調査し、それをもとに更に活動を促進して行くための対策を検討することによって地域の元気アップを図って行くことが考えられる。すなわち、定住人口や交流人口の拡大でその地域の元気度を図るのではなく、地域に住んでいる人達の活動状況をもってその地域の元気度を図るという考え方である。

一人の人がいくつの活動を行っているか、一人当たりの活動度数を調べ、これを元に「活動人口」を算定するのである。たくさん活動をしている人が多く住んでいる地域の「活動人口」は大きな数値を示すこととなる。一方、あまり活動をしたがらない人が多く住んでいる地域は「活動人口」が少ないこととなる。新たな地域概念として「活動人口」を測定することによって、地域における人々の絆を深めるとともに、地域における人々の活動の活発化を図ることができるものであり、真の地域活性化が促進されるものと考えられる。



(6) 「活動人口」の活用

ア 「活動人口」の大小あるいは「活動人口」比率によって、対象地域の人々が他の地域と比較してどの程度活発に活動しているか、対象地域の元気度の比較が出来る。

イ 活動分野別の「活動人口」を他の地域と比較することによって、対象地域においてはどの分野の活動を活発にしたらよいか明らかになる。

地域における活動があまり活発でないと判断される場合、家族や親族間における活動が活発でない、あるいは友人との活動が活発でないなどが明らかになることから、それに対応した活動の促進を図るための対策を講じることが可能となる。

ウ 今回の調査では、「無縁社会」を改善しようということをねらいに「活動人口」の手法を用いたことから、活動分野を【血縁】【地縁】【友縁】【職縁】という4つの分野をベースに「活動人口」を算定した。ベースとなる活動分野を地域福祉活動や文化活動、スポーツ活動、ボランティア活動などに設定し、それぞれ活動項目を選定して「活動人口」を算定することも考えられる。このように「活動人口」は、対象地域において実施しようとする施策に応じて活用することが考えられる。「活動人口」の汎用性を広げて行くことは、今後の課題である。

(7) 「活動人口」指標は生きがいのある社会づくりにつながる

「活動人口」という概念を地域に取り入れることによって、その地域に住んでいる人々がどの程度活動しているかが測定される。「活動人口」の増加を図るためには、地域の人々が主体的に、積極的に活動に参加することが求められる。そのことによって地域の人々の活動が一層活発になり、生きがいを感じられるようになるのではないだろうか。「活動人口」という概念は、まさに生きがいのある社会づくりに寄与することとなると考えられる。

また、「活動人口」という考え方の元に、地域において人々の様々な活動が展開さ

れるようになると、活動に参加している人達は、より良い活動を求めて、あるいはより高いレベルの活動を行おうと努力するようになり、地域において人づくりの機能が高まってくるとはならないだろうか。活動を通して人が育つのである。このように考えると、「活動人口」という概念を地域社会に入れることは、地域の教育力の復活につながるのではないだろうか。正に「人は人によって育てられる」といったことの実践の場となるであろう。

(8) 「活動人口」の拡大と市民力の向上

今日の我が国の社会は、行政が中心となって様々なセイフティネットワークが築かれている。何か困ったことやトラブルがあれば、行政機関に届け出、あるいは訴えることによって解決してもらう。行政にすぐやる課というものが設置されるようになってきたこともその現れであろう。面倒なもめ事は裁判に訴えて解決してもらうといったことが多くなり、訴訟社会とも言われる。このようなことから、市民自らが問題やトラブルを解決しようとする力は発揮されないようになってしまっている。すなわち市民の力が大きく後退してしまっているのではないだろうか。

このような事態が拡大して行けば、行政の負担は増加する一方で財政負担は大変なものになるであろう。既に一部の地方自治体においては、住民が行政から資材を提供してもらい住民が協力して施設整備をするといったようなことがなされている。また、近年「新しい公共」という考え方が提唱され、市民や市民団体、NPO、企業などが協同して公共サービスの提供に参加することが求められるようになってきた。このように地域社会を維持するにあたって、市民の力が重要な役割を担うようになってきている。

従って、「活動人口」の拡大という手法を用いて、社会の新たな担い手として市民力の復活、向上を図ることは行政にとっても重要なことと考えられる。

(9) 「活動人口」概念の深化を図ろう

交流人口の拡大によってその地域に来てくれる人を増やし、地域産業や文化の発展を促すと同時に、その地域に住んでいる人々の活動が活発になることによって地域の市民力を高めることが、真に地域活性化につながるのではないだろうか。

「活動人口」の考え方を地域に導入し、その地域のどのような分野において「活動人口」の拡大を図ったら良いか検討した上で、人々の活動の活発化を促して行くことが大切である。その際大切なことは、活発にしようとする活動分野、具体的に活発化を図ろうとしている活動内容をよく検討して調査項目を設定することである。

従って、今後「活動人口」について次のような考察が必要であると考えられる。

- 地域の人々の力を引き出すことができるような調査項目や、コミュニティの再生につながるような調査項目の設定の仕方
- 活動状況を的確に表せるような活動度数の設定の仕方
- 地域間の比較検討を容易にするための「活動人口」の表示の仕方
- 調査対象者の選定の在り方

「活動人口」という考え方はまだスタートしたばかりであり、今後多くの皆さんからご意見をいただき、「活動人口」の概念をしっかりと構築し、地域の再生に有効な手法として確立していく必要があると考えている。

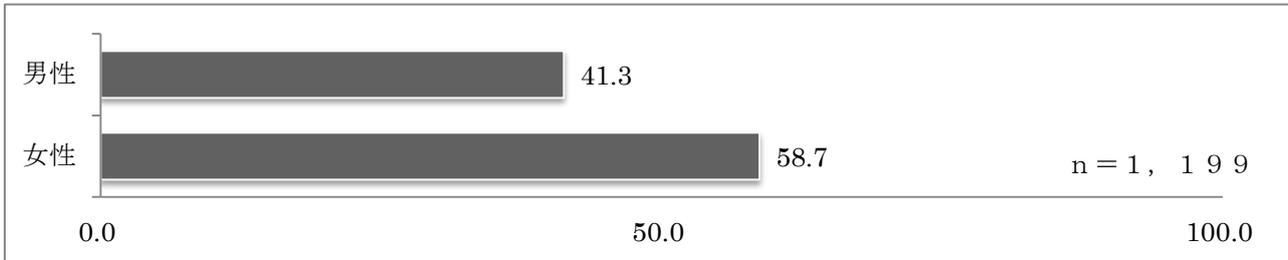
分析資料

1 「活動人口」調査に係る属性の分析

(1) 「プロフィール」分析について

ア 性別

(ア) 茨城県内9地域と栃木県日光市を合わせた10地域（以下、県全体）回答者全体の男女比は、「女性」58.7%、「男性」41.3%で女性の割合が高い。（図(1)-1）

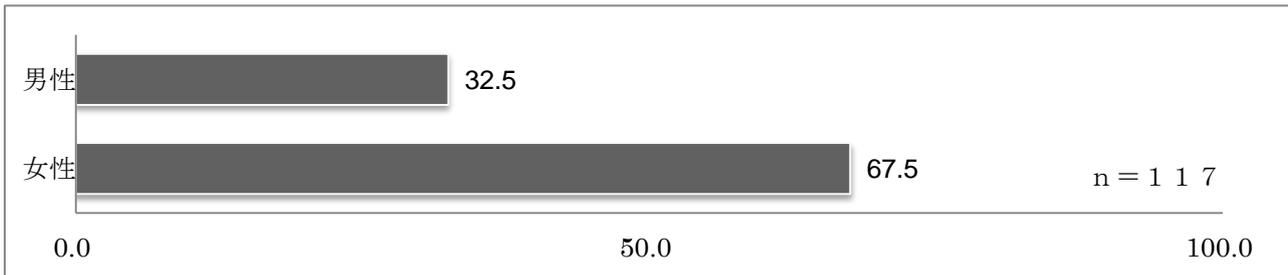


図(1)-1

(イ) 県北生涯学習センター調査研究対象地域・日立市城の丘団地住民（以下、北調査研究対象地域）

回答者全体の男女比は、「女性」67.5%、「男性」32.5%で女性の割合が高い。この割合は県全体と比較すると1割ほど「女性」の回答者が多くなっている。

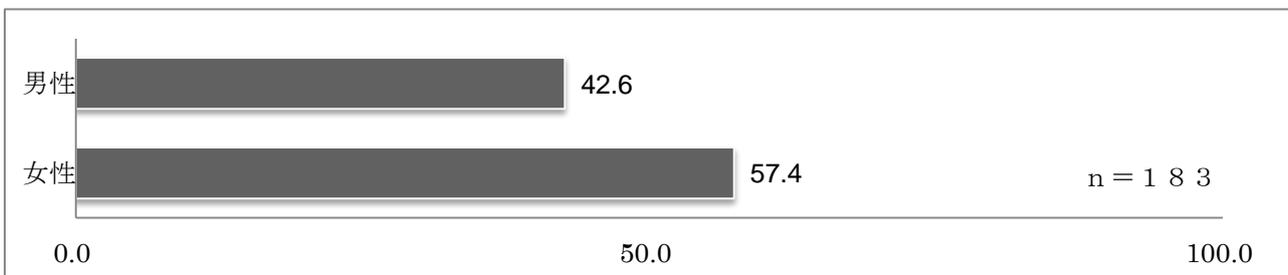
（図(1)-2）



図(1)-2

(ウ) 県北生涯学習センターコミュニティ再生事業対象地域・日立市田尻交流センター管内住民（以下、北コミュニティ再生事業対象地域）

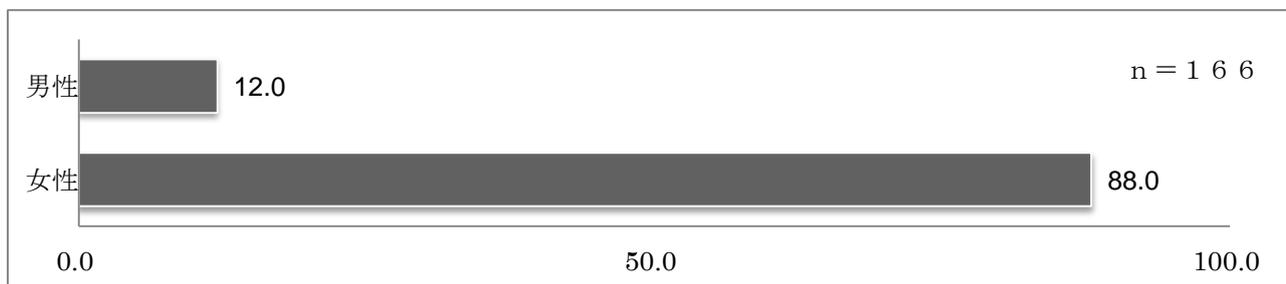
回答者全体の男女比は「女性」57.4%、「男性」42.6%で、女性の割合が高い。この割合は県全体とほぼ同じ傾向である。（図(1)-3）



図(1)-3

(エ) 鹿行生涯学習センター調査研究対象地域・行方市立麻生東小学校区住民（以下、鹿行調査研究対象地域）

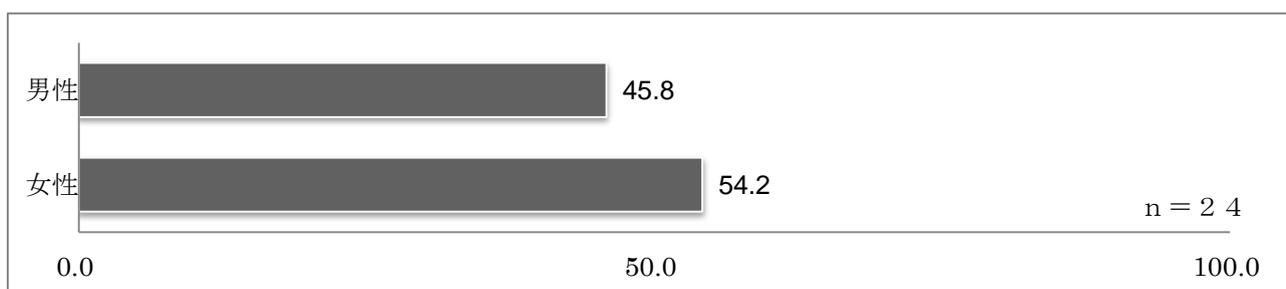
小学校の保護者が対象である。学校からの文書は、基本的に母親が多い傾向にあるため、回答者も女性の割合が高くなっている。（図(1)-4）



図(1)-4

(オ) 鹿行生涯学習センターコミュニティ再生事業対象地域・潮来市商工会議所講座受講者（以下、鹿行コミュニティ再生事業対象地域）

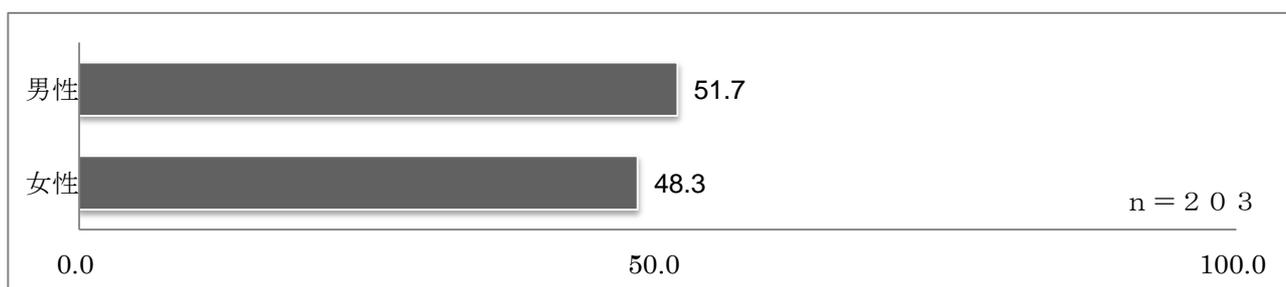
鹿行コミュニティ再生事業対象地域は商工会議所に所属している事業者のアンケート調査である。事業受講者の男性の割合が高くなっているため、回答者も小学校保護者と比較すると男性の割合が高くなっている。（図(1)-5）



図(1)-5

(カ) 県南生涯学習センター調査研究対象地域・県南センター事業受講者（以下、南調査研究対象地域）

男女比は、「女性」48.3%、「男性」51.7%で、「男性」の割合が若干高くなっている。（図(1)-6）



図(1)-6

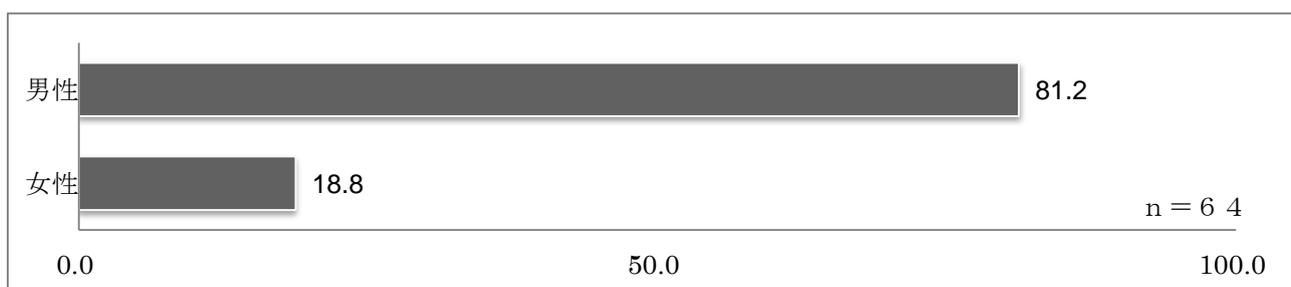
- (キ) 県南生涯学習センターコミュニティ再生事業対象地域・阿見町立本郷小学校区ふれあい地区センター管内住民（以下、南コミュニティ再生事業対象地域）
南コミュニティ再生事業対象地域に行なった調査では、「女性」57.9%、「男性」42.1%と、県全体と同じく「女性」の割合が高い結果である。（図(1)-7）



図(1)-7

- (ク) 県西生涯学習センター調査研究対象地域・筑西市大田地区住民（以下、西調査研究対象地域）

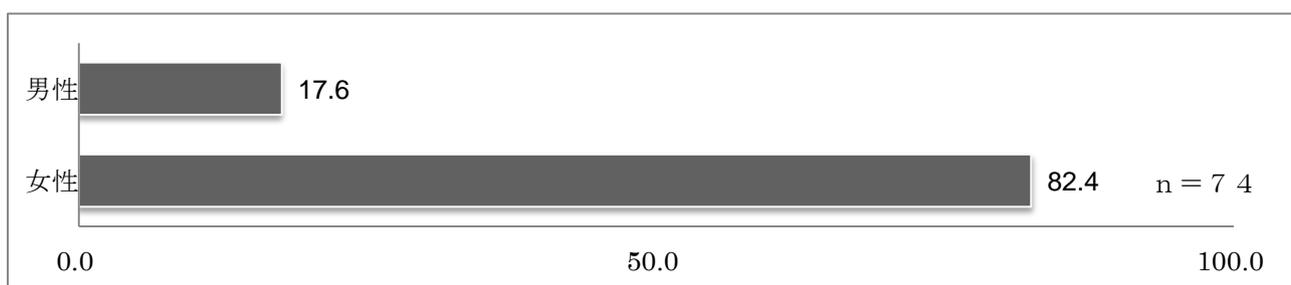
回答者全体の男女比は、「男性」81.2%、「女性」18.8%で、「男性」の割合が高い。この割合は、県全体と比較すると、「男性」の割合が約2倍という高い数値を示している。（図(1)-8）



図(1)-8

- (ケ) 県西生涯学習センター県西センター社会貢献活動推進事業受講者（以下、西社会貢献活動推進事業受講者）

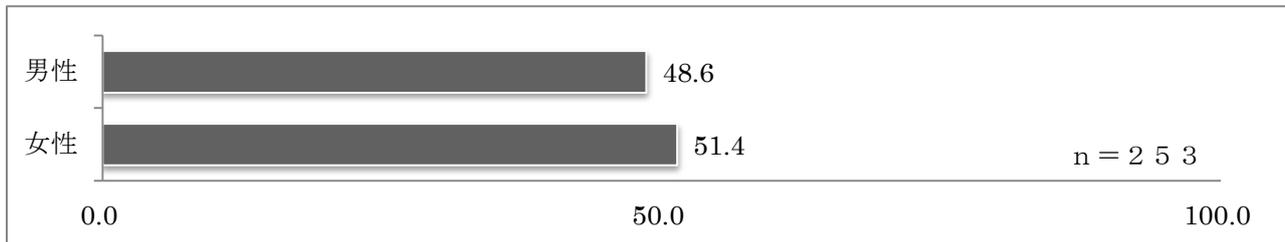
回答者全体の男女比は、「女性」82.4%、「男性」17.6%で、「女性」の割合が高い。この割合は、県全体と比較すると、「女性」の割合が2割ほど高くなっている。（図(1)-9）



図(1)-9

(コ) 水戸生涯学習センターコミュニティ再生事業対象地域・水戸市常磐，新荘自治会住民（以下，水戸コミュニティ再生事業対象地域）

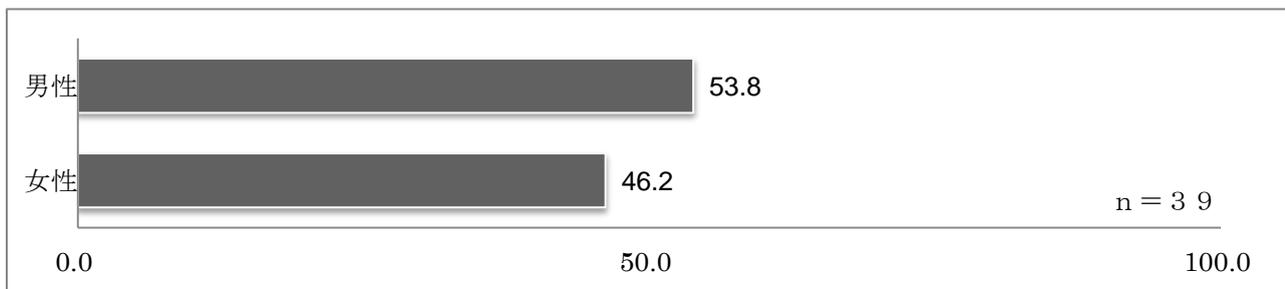
男女比は，「男性」48.6%，「女性」51.4%で，「女性」の割合が若干高くなっている。（図(1)-10）



図(1)-10

(サ) 栃木県日光市社会福祉協議会管内土呂部地区（以下，日光市土呂部地区）

全ての地域在住の方（長期入院等による不在を除く。）に対して調査を実施したが，男女比は，「男性」53.8%，「女性」46.2%で，「男性」がやや多い。県全体と比較しても，「男性」の回答がやや多くなっている。（図(1)-11）

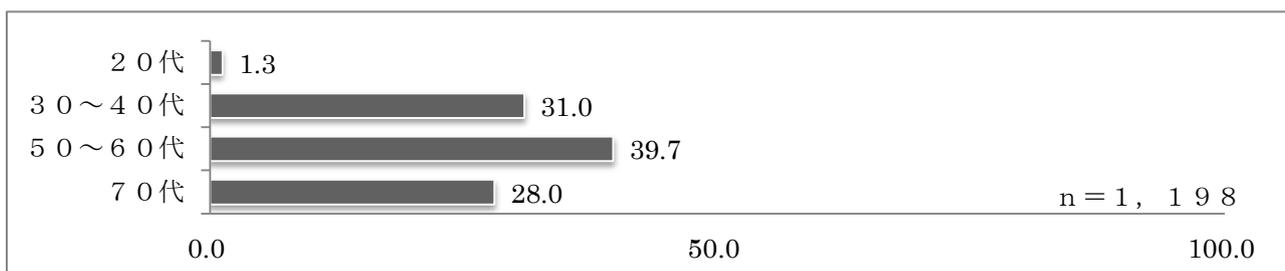


図(1)-11

イ 年代

(ア) 県全体

「20代」は極端に少ない。「30～40代」と「70代」は，ほぼ同じ割合であり，「50～60代」が約10%多くなっている。（図(1)-12）

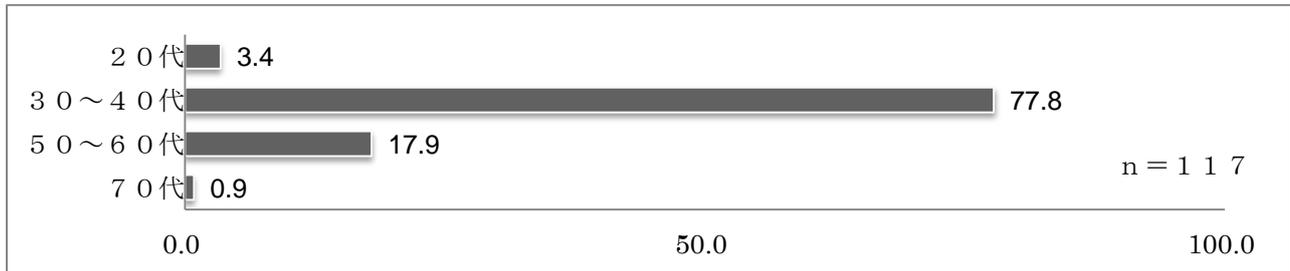


図(1)-12

(イ) 北調査研究対象地域

年代は「30～40代」が77.8%と多く、次に「50～60代」が17.9%、20代が3.4%となっている。これは県全体と比較すると若い世代が多いことがわかる。

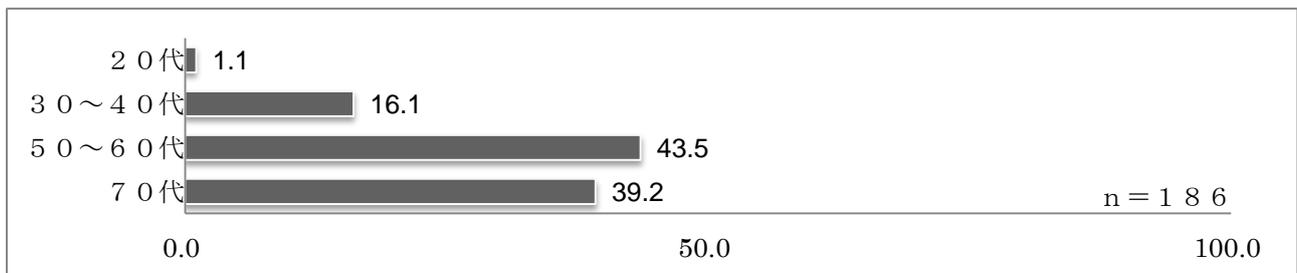
(図(1)-13)



図(1)-13

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

年代は「50～60代」が43.5%、「70代」が39.2%、と合わせると8割を超え、「30～40代」は16.1%、「20代」は1.1%とかなり低い数値となっている。これは県全体と比較しても高齢化が進んでいることが見てとれる。(図(1)-14)

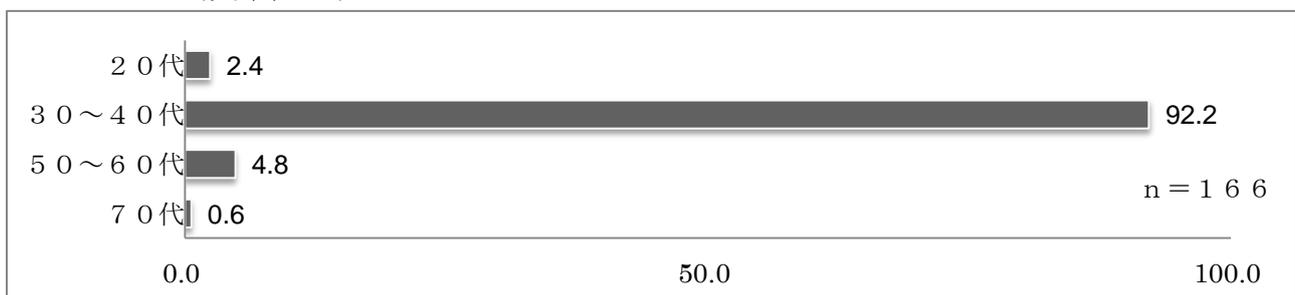


図(1)-14

(エ) 鹿行調査研究対象地域

小学校の保護者対象のアンケート調査である。小学校在学中の保護者の年齢層を考えると、「30～40代」の保護者の割合が圧倒的に高くなっている。「50～60代」の回答者の割合が高いことは、家族構成の状況によると思われる。

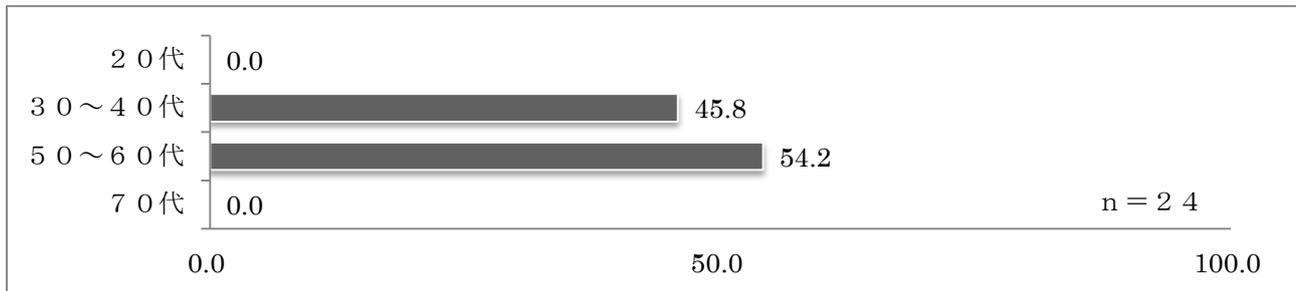
(図(1)-15)



図(1)-15

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

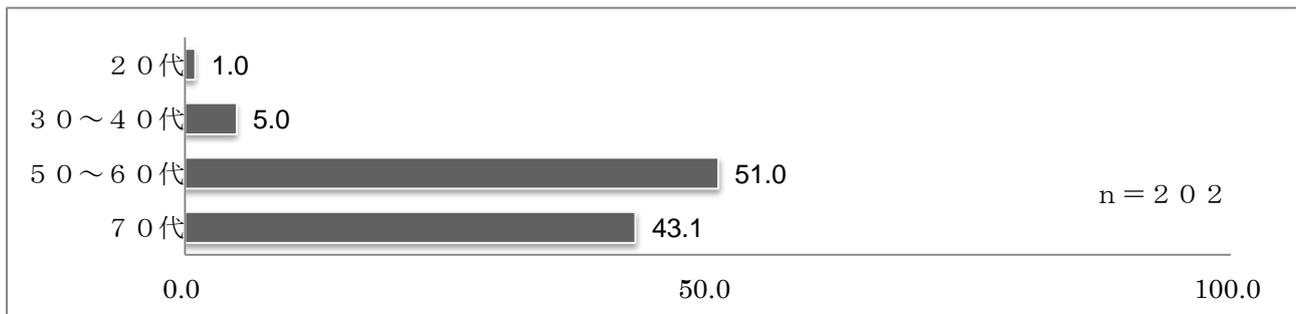
鹿行コミュニティ再生事業対象地域は商工会議所に所属している事業者対象のアンケート調査である。商工会所属の事業主の年齢層が30～60代の年齢層で構成されているため、回答者もその年齢層が中心となっている。(図(1)-16)



図(1)-16

(カ) 南調査研究対象地域

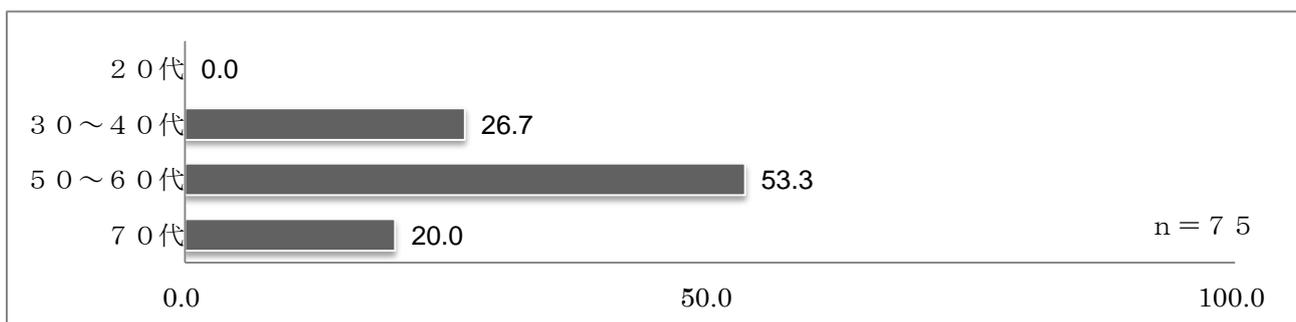
年代は、「50代～60代」51.0%、「70歳以上」43.1%を合わせると、全体の94.1%を占めている。(図(1)-17)



図(1)-17

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

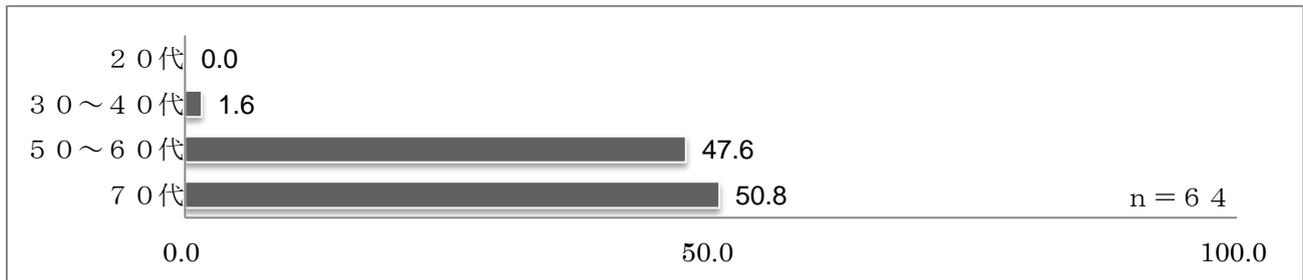
年代は、「50代～60代」が53.3%と最も高く、南調査研究対象地域・県全体と同じ傾向にある。(図(1)-18)



図(1)-18

(ク) 西調査研究対象地域

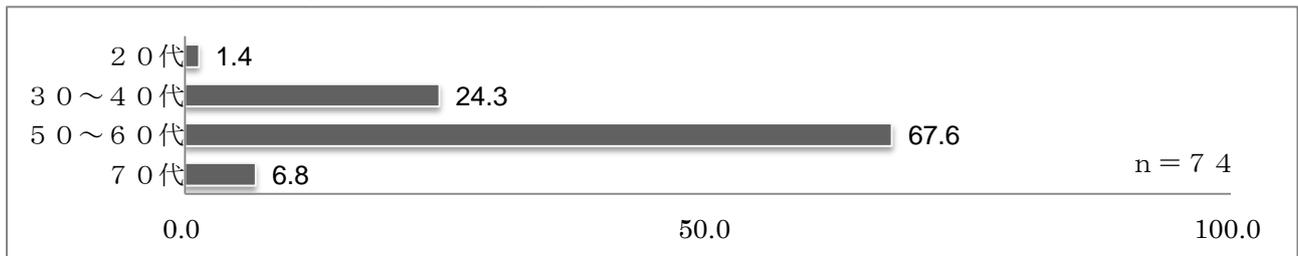
年代は、「70代～」50.8%、「50代～60代」47.6%を合わせると98.4%を占め、「30代～40代」1.6%「10代～20代」は0.0%で非常に低い数値となっている。これは県全体と比較すると高齢化が進んでいることがみてとれる。(図(1)-19)



図(1)-19

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

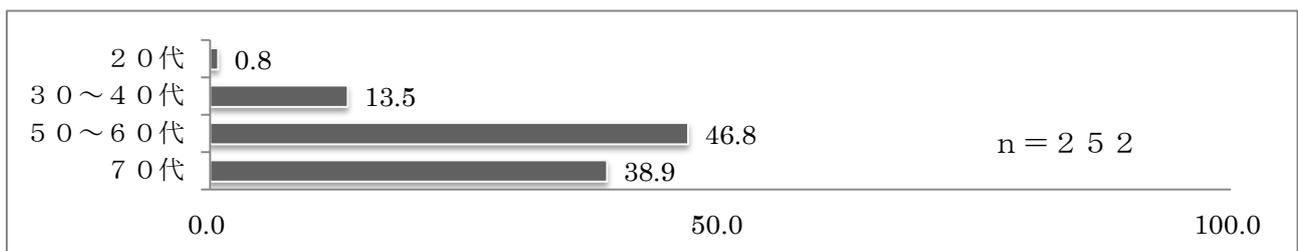
年代は、「50～60代」が67.6%と多く、次に「30～40代」24.3%、「70代」6.8%、「10～20代」は1.4%となっている。これは県全体と比較すると「50～60代」が3割ほど多くなっている。(図(1)-20)



図(1)-20

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

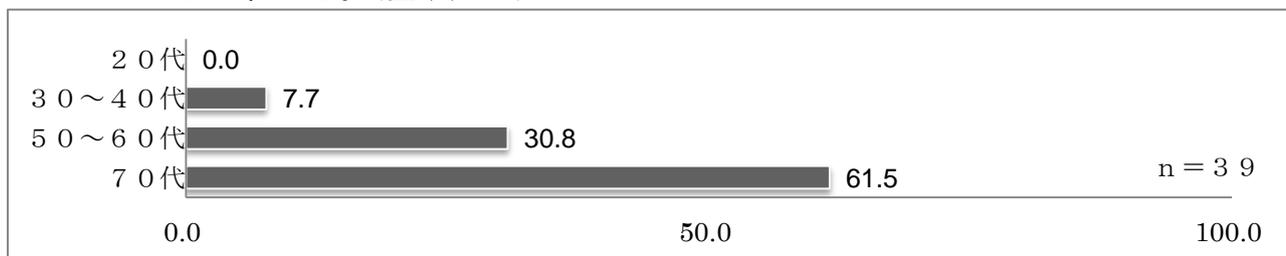
年代は、「50代～60代」が46.8%と多く、次に「70代」38.9%、「30代～40代」13.5%、「10代～20代」は0.8%となっている。県全体と比較すると高齢者が回答していることが分かる。(図(1)-21)



図(1)-21

(サ) 日光市土呂部地区

年代は、「70歳以上」61.5%が最も多く、次いで、「50～60代」30.8%と、9割以上が50歳以上という地域である。また、「30～40代」が7.7%と非常に低く、「20代」がない。県全体と比較しても、高齢者の割合が高い地域であることがわかる。(図(1)-22)

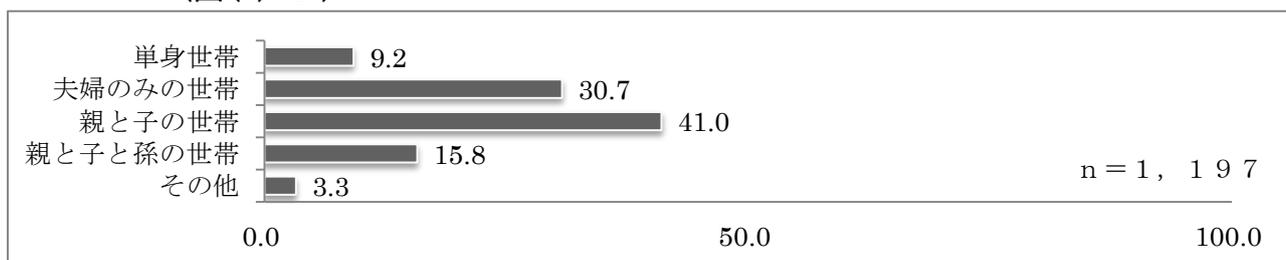


図(1)-22

ウ 家族構成

(ア) 県全体

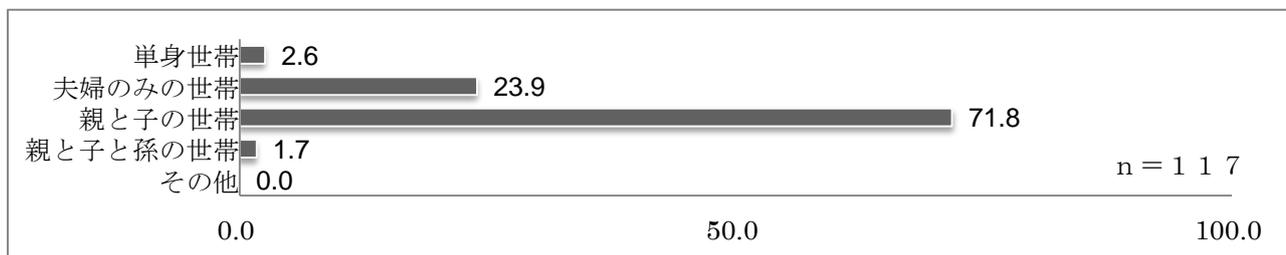
同居している家族の構成は、「二世帯(親と子)」が41.0%「夫婦だけ(一世帯)」30.7%、「親と子と孫(三世帯)」15.8%の順で、単身世帯は9.2%となっている。(図(1)-23)



図(1)-23

(イ) 北調査研究対象地域

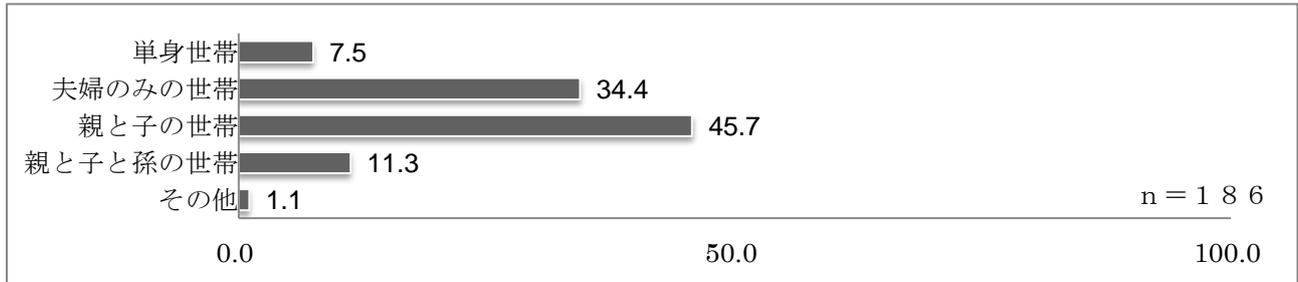
同居している家族の構成は「親と子の世帯(二世帯)」が71.8%と圧倒的に多く、「夫婦のみの世帯(一世帯)」が23.9%、ついで単身世帯2.6%、「親と子と孫の世帯(三世帯)」が1.7%となっている。この団地では(図(1)-13)と併せて見ると若い世代の核家族化が進んでいることがわかる。(図(1)-24)



図(1)-24

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

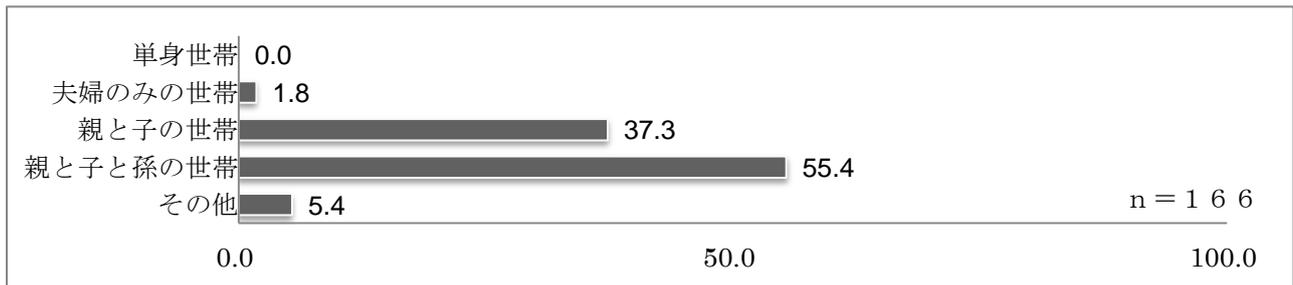
同居している家族の構成は「親と子の世帯（二世帯）」が45.7%、「夫婦のみの世帯（一世帯）」が34.4%、「親と子と孫の世帯（三世帯）」が11.3%、単身世帯が7.5%と、核家族化が見える。しかし、年代と併せて見ると、「夫婦のみ世帯」「単身世帯」ともに高齢者の世帯が多いことが読みとれる。(図(1)-25)



図(1)-25

(エ) 鹿行調査研究対象地域

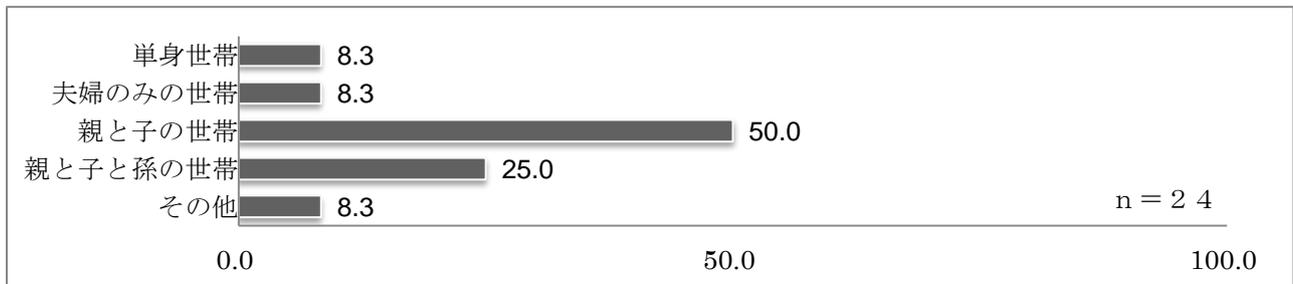
鹿行調査研究対象地域の特性が表れている。旧学区の家族構成に3世代構成が多いことがよくわかり、そうした家族構成の児童が鹿行調査研究対象地域である麻生東小学校へ統合されている。(図(1)-26)



図(1)-26

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

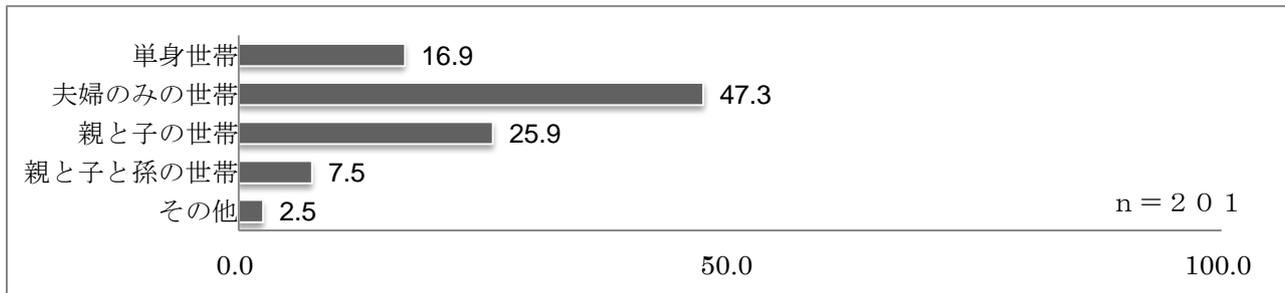
鹿行コミュニティ再生事業対象地域の状況としては商工会関係者の一部のデータではあるが、2世代での家族構成の割合が約50.0%であり、3世代の構成はその半分となっている。鹿行調査研究対象地域である行方市の統合地区とは明確に傾向が異なることがわかる。(図(1)-27)



図(1)-27

(カ) 南調査研究対象地域

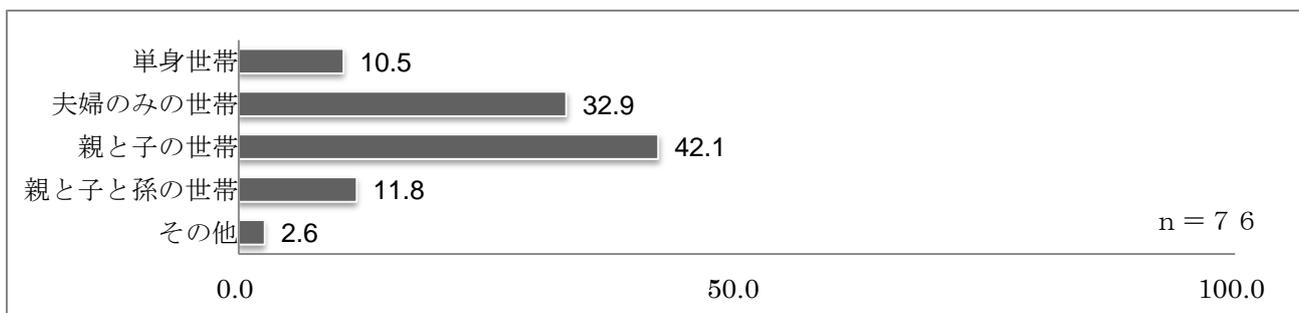
家族の構成は、「夫婦だけ（一世代）」が47.3%と、全体の半分近くを占めている。「親と子と孫（三世代）」は、7.5%と4つの構成のなかで一番低くなっている。（図(1)-28）



図(1)-28

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

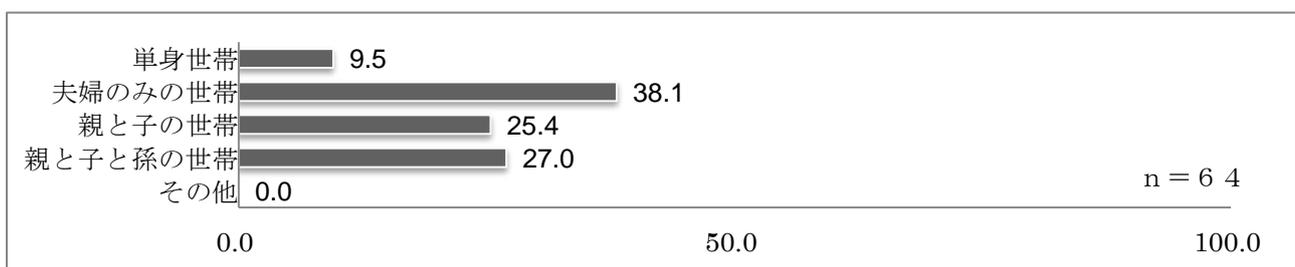
家族構成は、県全体では「親と子と孫（三世代）」41.0%と最も高いが、南調査研究対象地域では「夫婦だけ（一世代）」が一番高く、南コミュニティ再生事業対象地域では「親と子（二世代）」が高い。地域で差が出る結果である。（図(1)-29）



図(1)-29

(ク) 西調査研究対象地域

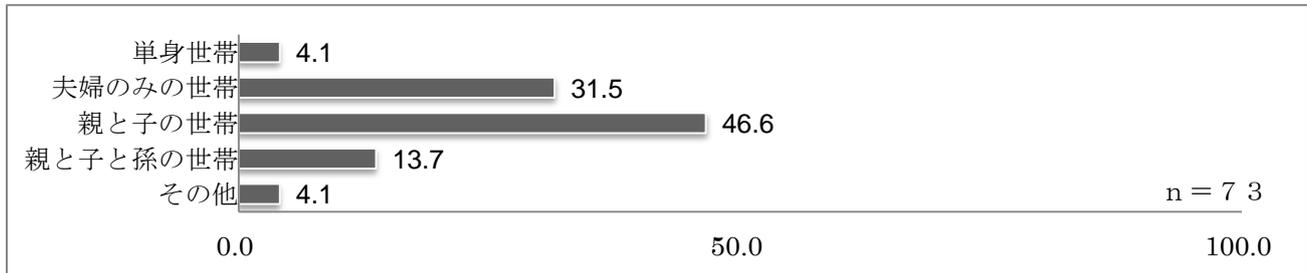
同居している家族の構成は、「夫婦だけ（一世代）」38.1%、「親と子と孫（三世代）」27.0%、「二世代（親と子）」が25.4%の順で、単身世帯は9.5%となっている。県全体と比べると、「二世代（親と子）」15%ほど割合が低く、逆に「親と子と孫（三世代）」は10%ほど高い数値となっている。（図(1)-30）



図(1)-30

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

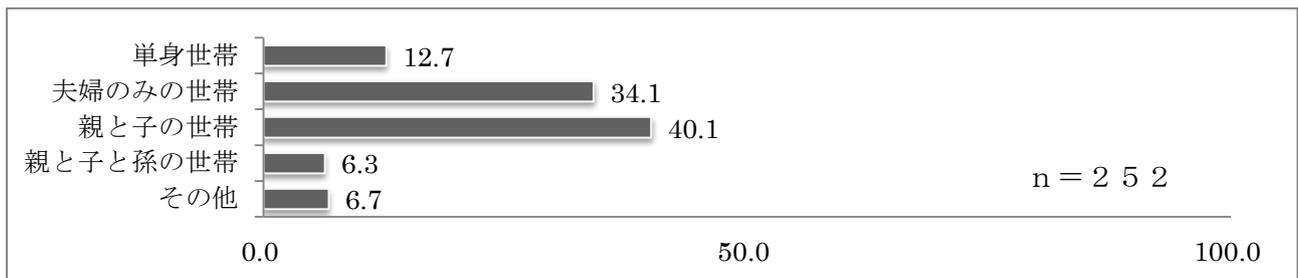
同居している家族の構成は、「二世帯(親と子)」が46.6%、「夫婦だけ(一世代)」31.5%、「親と子と孫(三世帯)」13.7%の順で、単身世帯は4.1%となっている。この割合は県全体とほぼ同じ傾向である。(図(1)-31)



図(1)-31

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

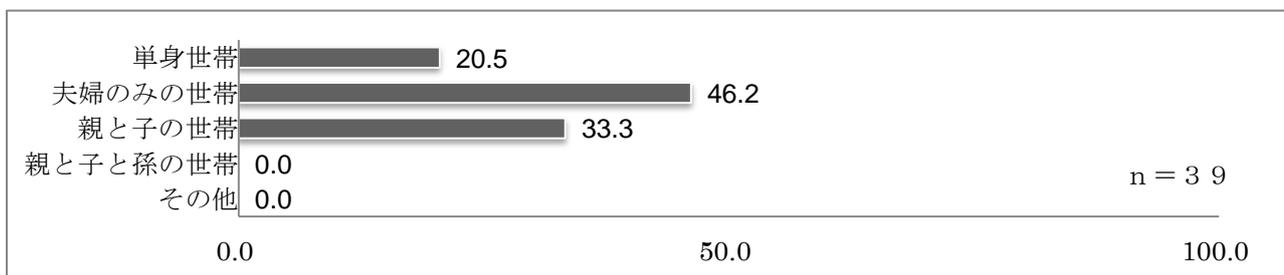
同居している家族の構成は「親と子の世帯」が40.1%、「夫婦のみの世帯」が34.1%、「単身世帯」が12.7%、「親と子と孫の世帯」が6.3%となっている。核家族化が顕著に見られる見える。また、年代と併せて見ると、高齢者の「単身世帯」が多いことが読みとれる。(図(1)-32)



図(1)-32

(サ) 日光市土呂部地区

同居している家族構成は、「夫婦のみ(一世代)」が46.2%と最も多く、次に「親と子(二世帯)」が33.3%、「単身世帯」20.5%の順となっており、「親と子と孫(三世帯)」の世帯がない。全体と比較すると、「一世代」の割合が高く、子の世代が他の地域に移住する傾向が強いことがわかる。(図(1)-33)

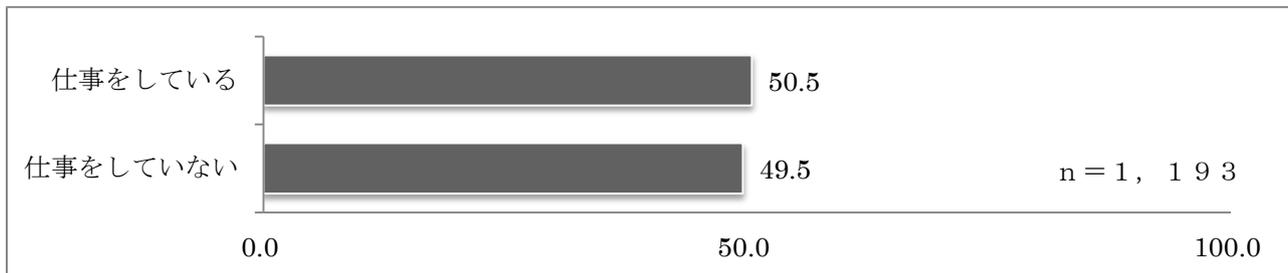


図(1)-33

エ 就業状況

(ア) 県全体

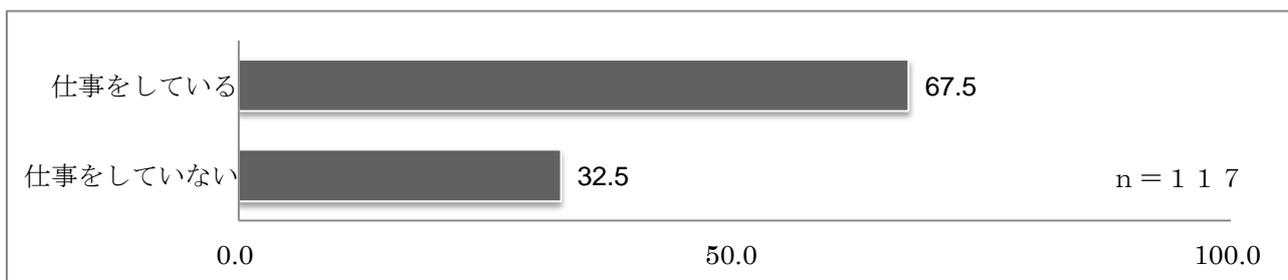
県全体では「仕事をしている」人と「仕事をしていない」人とは、ほぼ同じ割合であると言える。(図(1)-34)



図(1)-34

(イ) 北調査研究対象地域

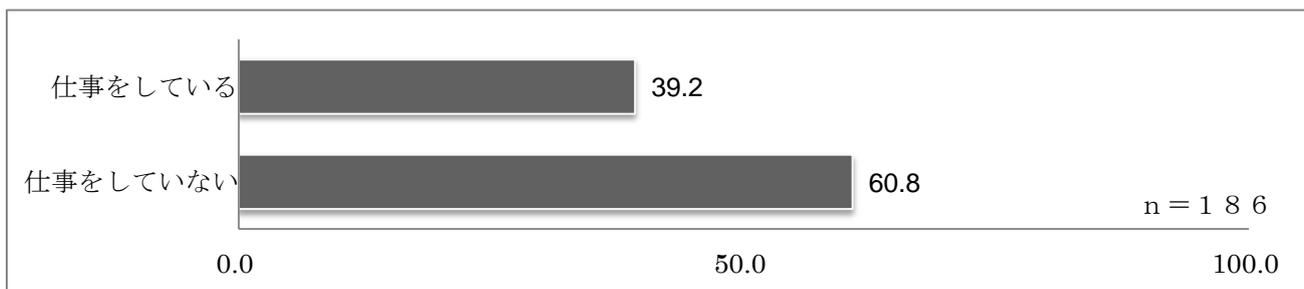
就業状況は、「仕事をしていない」32.5%、「仕事をしている」67.5%で、仕事をしている人の割合がしていない人の2倍となっている。(図(1)-35)



図(1)-35

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

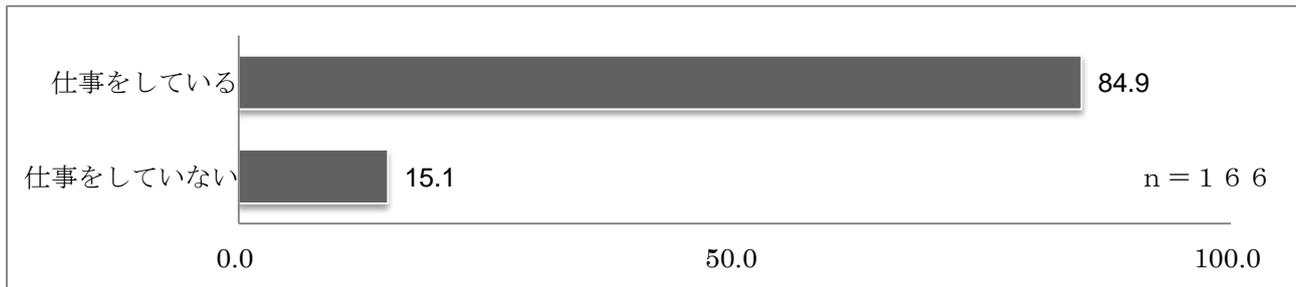
就業状況は「仕事をしていない」60.8%、「仕事をしている」39.2%で仕事をしていない人の割合が高くなっている。(図(1)-36)



図(1)-36

(エ) 鹿行調査研究対象地域

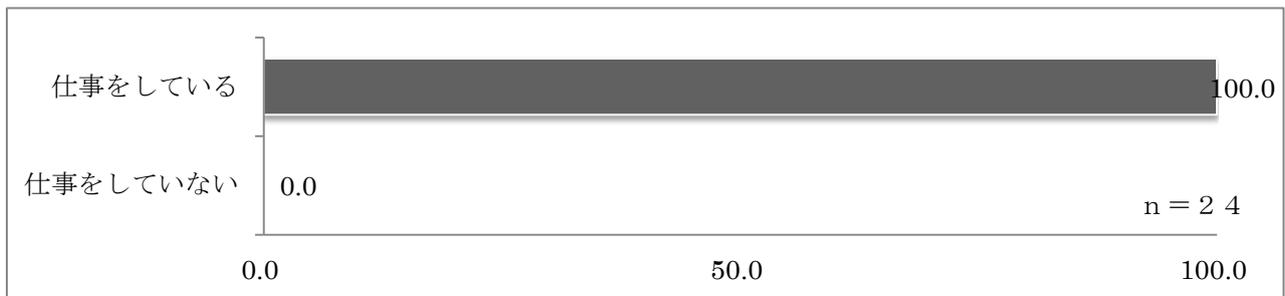
回答者の約85%が何らかの仕事に従事している。このことは、現代社会の状況もあるが、3世代家族構成の割合が高いことも大きな要因の一つになっているが、約15%の回答者が仕事に従事していないことは、意外である。(図(1)-37)



図(1)-37

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

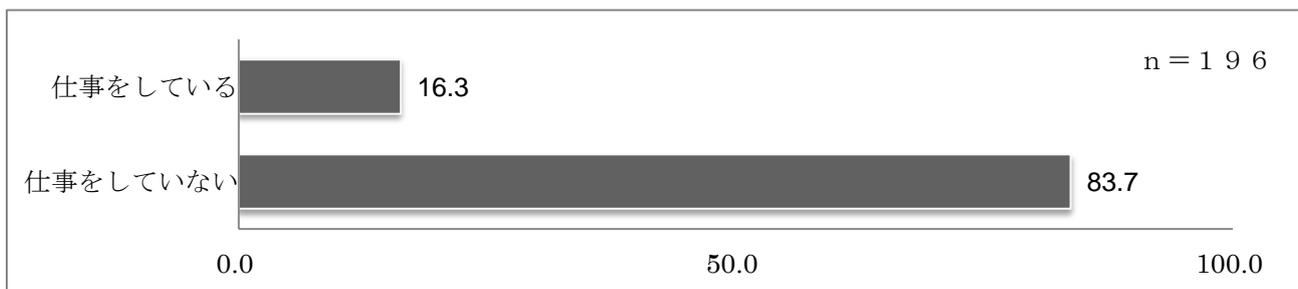
鹿行コミュニティ再生事業対象地域は商工会関係者への調査であるため、100%の回答者が仕事に従事していると回答しているのは、当然の結果である。(図(1)-38)



図(1)-38

(カ) 南調査研究対象地域

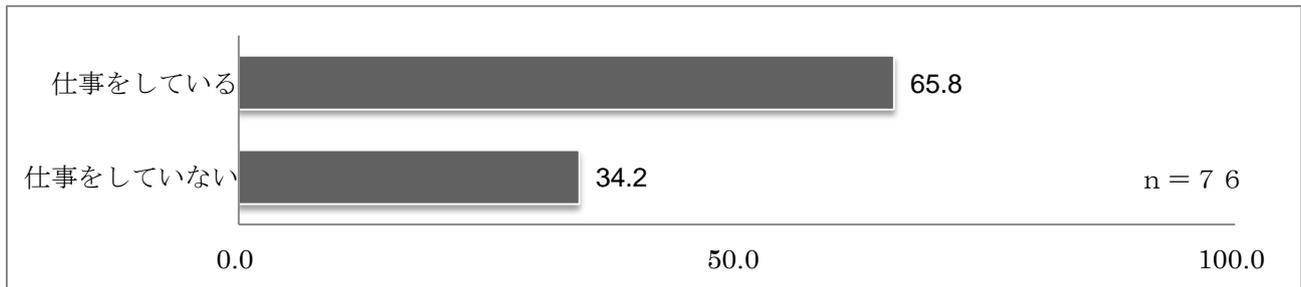
就業状況は、「仕事をしている」16.3%、「仕事をしていない」83.7%で、「仕事をしていない」人の割合が高くなっている。(図(1)-39)



図(1)-39

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

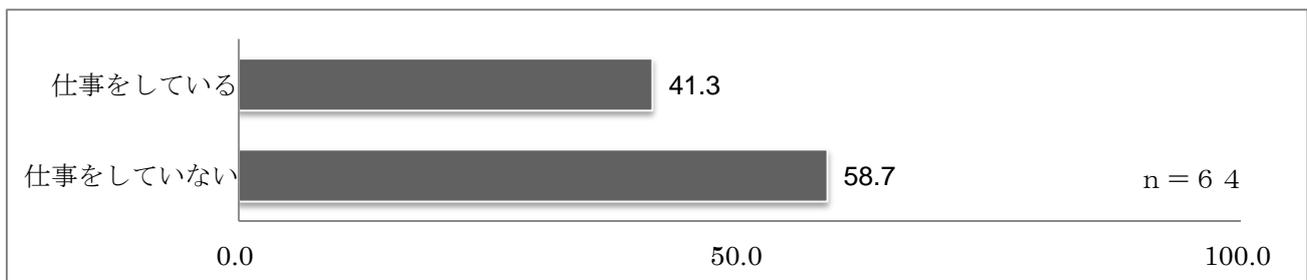
就業状況は、県全体と南調査研究対象地域では「仕事をしていない」比率のほうが高かったのに比べ、南コミュニティ再生事業対象地域では「仕事をしている」人のほうが多い結果である。(図(1)-40)



図(1)-40

(ク) 西調査研究対象地域

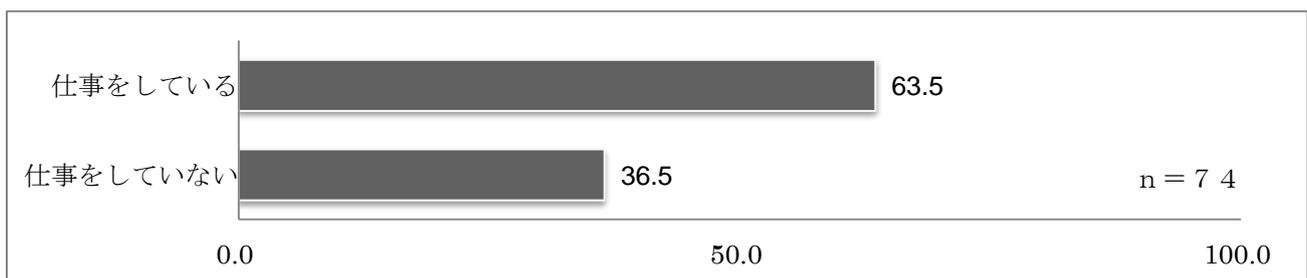
就業状況は、「仕事をしていない」58.7%、「仕事をしている」41.3%で、仕事をしていない人の割合がやや高い。県全体と比べると「仕事をしていない」がやや高い数値を示している。(図(1)-41)



図(1)-41

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

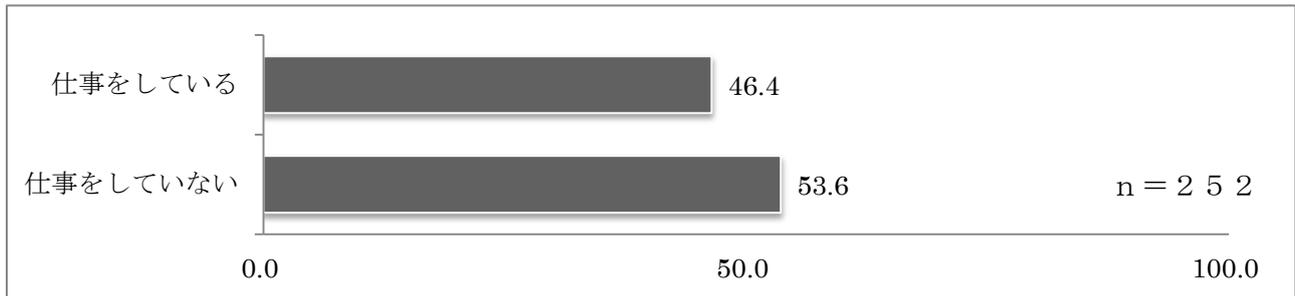
就業状況は、「仕事をしている」63.5%、「仕事をしていない」36.5%で、仕事をしている人の割合が高くなっている。県全体と比べると「仕事をしている」割合は、1割ほど高くなっている。(図(1)-42)



図(1)-42

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

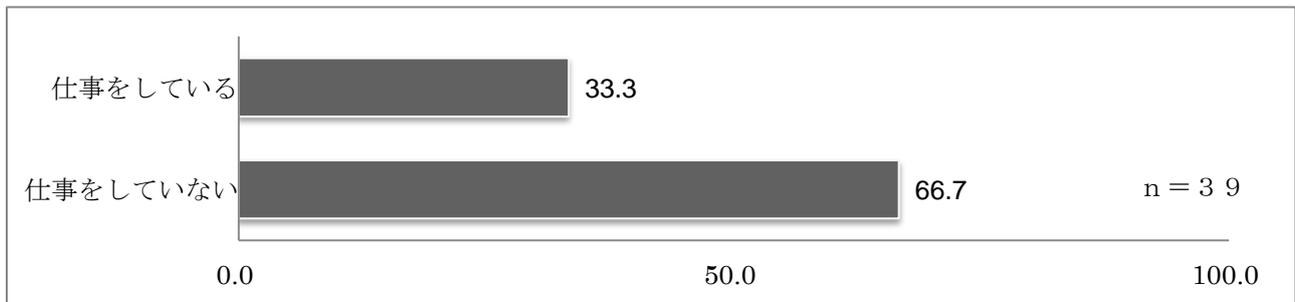
就業状況は、「仕事をしている」46.4%、「仕事をしていない」53.6%で、仕事をしていない人が約7ポイント割合が高くなっている。(図(1)-43)



図(1)-43

(サ) 日光市土呂部地区

就業状況は、「仕事をしていない」66.7%、「仕事をしている」33.3%で、3分の2が就労していない。県全体と比較しても、「仕事をしていない」という割合が高くなっている。(図(1)-44)

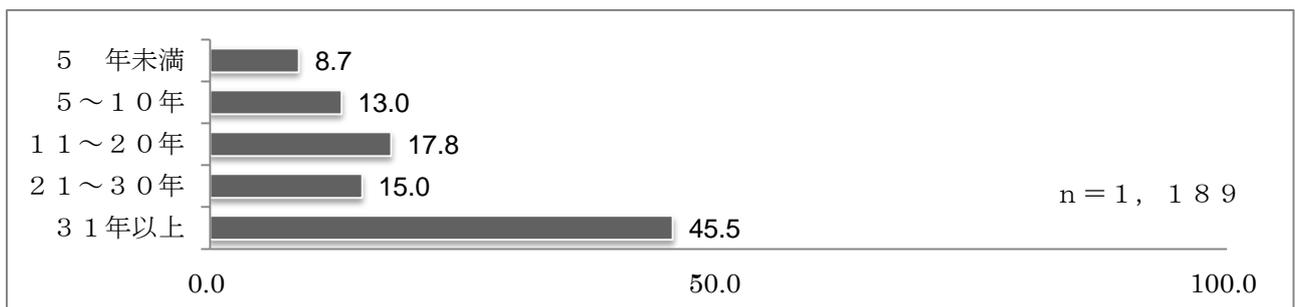


図(1)-44

オ 居住年数

(ア) 県全体

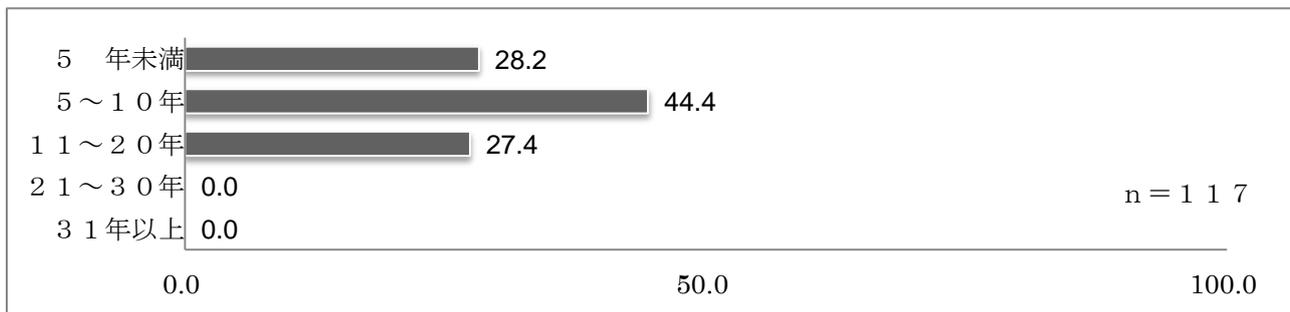
地域での居住年数は「31年以上」45.5%で他の居住年数を大きく上回っている。他の「11~20年」17.8%「21~30年」15.0%、「5~10年」13.0%に大きな違いはなく、「5年未満」8.7%となっている。(図(1)-45)



図(1)-45

(イ) 北調査研究対象地域

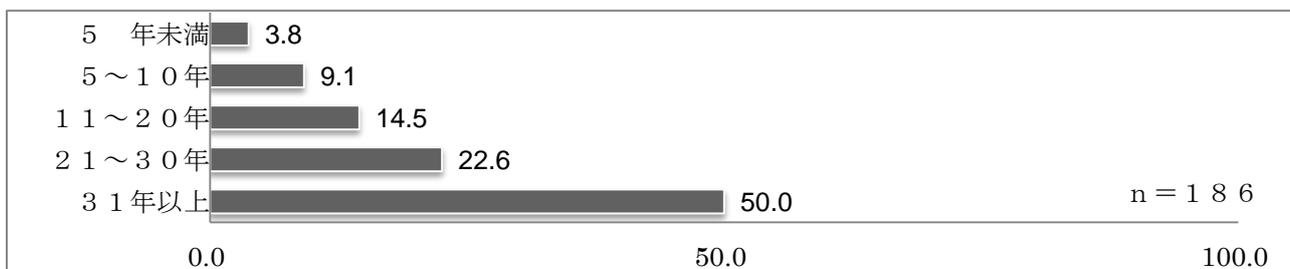
現在の地域での居住年数は、「11～20年」27.4%、「5～10年」44.4%、「5年未満」28.2%と、比較的若い世帯の団地と言える。(図(1)-46)



図(1)-46

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

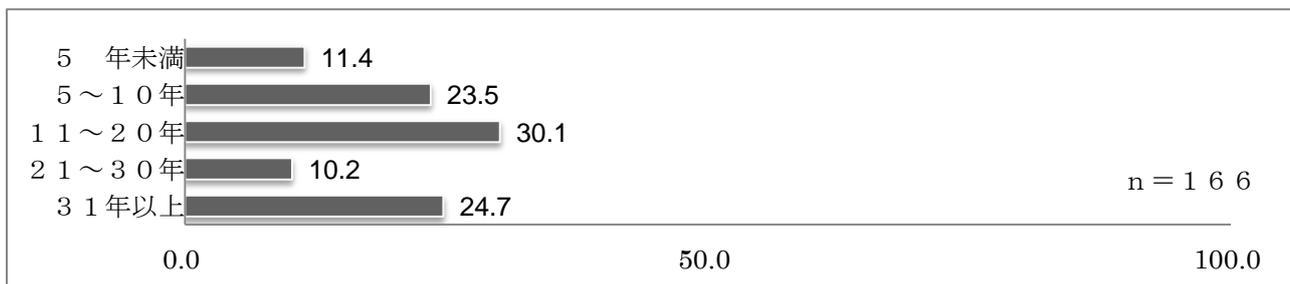
現在の地域での居住年数は「31年以上」50.0%、「21～30年」22.6%で、合わせると7割を超える。「5年未満」3.8%、「5～10年」9.1%、「11～20年」14.5%、で低い回答者の年齢が影響していると言える。(図(1)-47)



図(1)-47

(エ) 鹿行調査研究対象地域

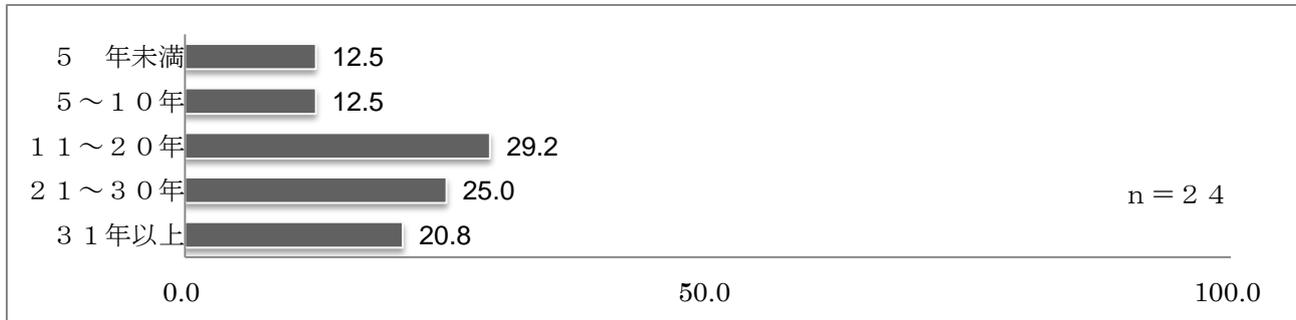
居住年数が10年以下の割合が約35%、11年以上の割合が65.0%となっている。特に、11年～20年の割合が高いのは、アンケート対象者を考えると、他地域から結婚等を契機に移住し始めた回答者が多いと考えられる。(図(1)-48)



図(1)-48

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

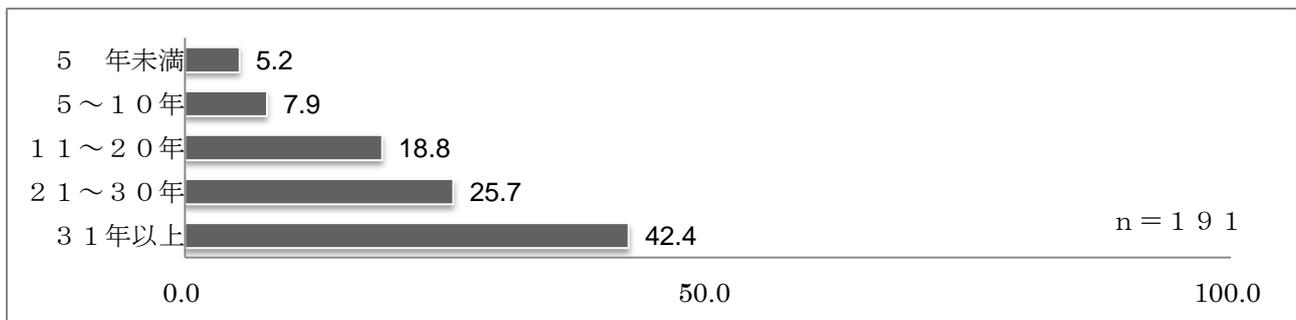
居住年数が10年以下の割合は25.0%、11年以上の割合は75.0%である。鹿行調査研究対象地域と傾向的には似ているが、11年以上居住の割合が少し多いのは、商業関係の回答者が多いことに要因があると考えられる。(図(1)-49)



図(1)-49

(カ) 南調査研究対象地域

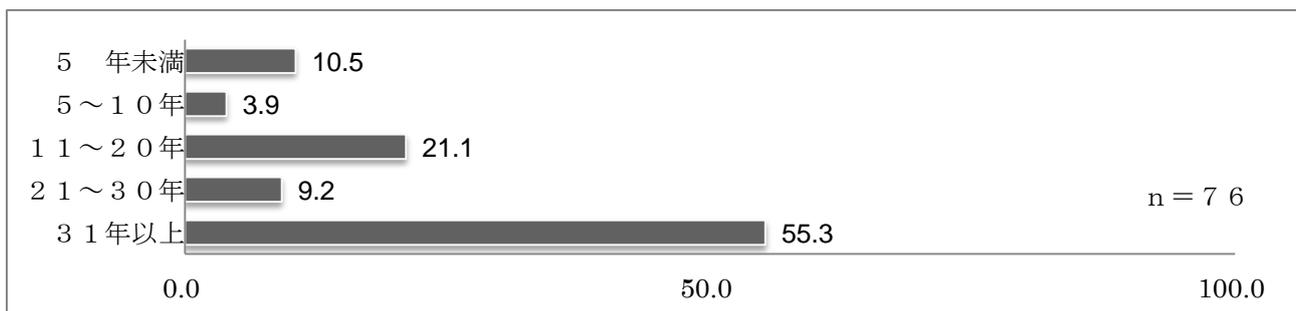
「31年以上」現在の地域に住んでいる人の比率は、42.4%と一番高くなっている。「21～30年」の25.7%と合わせると全体の約7割を占めている。(図(1)-50)



図(1)-50

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

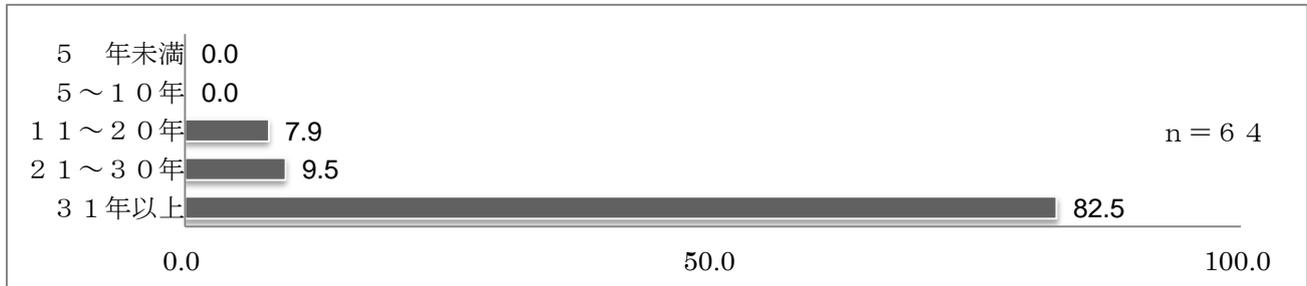
居住年数は、県全体・南調査研究対象地域・南コミュニティ再生事業対象地域、すべてで「31年以上」が最も高くなっている。(図(1)-51)



図(1)-51

(ク) 西調査研究対象地域

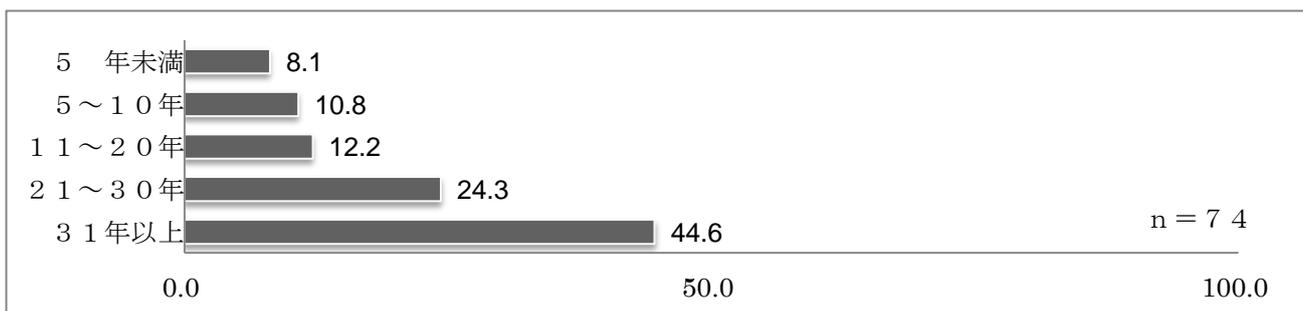
現在の地域での居住年数は、「31年以上」82.5%で最も高く、「21～30年」9.5%、「11～20年」7.9%、「10年未満」は0.0%と結果になった。県全体と比べると「31年以上」は4割ほど高い数値を示しており、(図(1)-19)と併せて見ると、地域継続居住者の高齢化が進んでいることがわかる。(図(1)-52)



図(1)-52

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

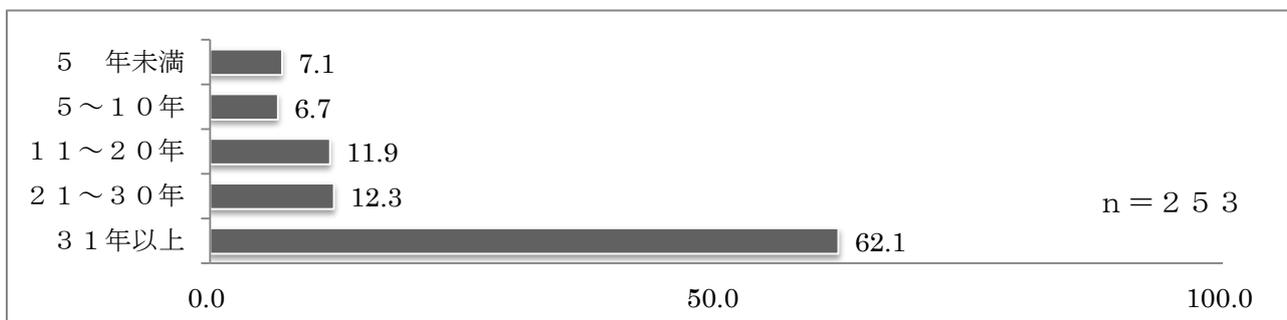
現在の地域での居住年数は、「31年以上」44.6%で最も高く、「21～30年」24.3%、「11～20年」12.2%、「5～10年」は10.8%、「5年未満」は8.1%となった。県全体と比べると「21～30年」と「11～20年」の順位が逆転しており「21～30年」が1割ほど高い数値を示している。(図(1)-53)



図(1)-53

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

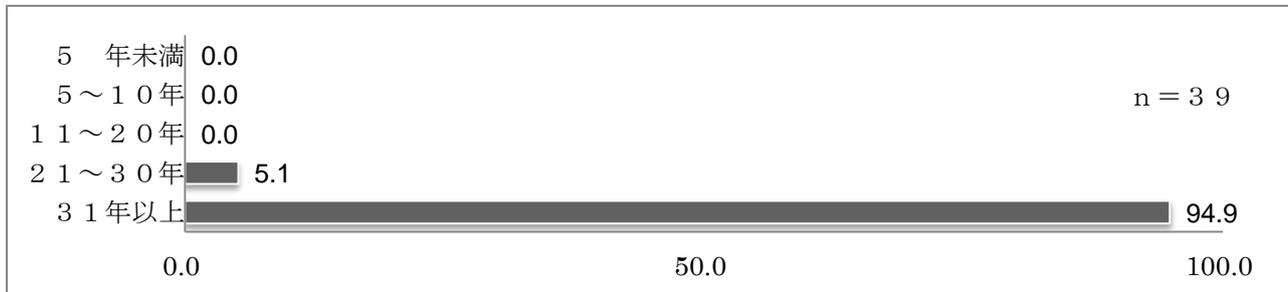
「31年以上」62.1%で最も高く、「21～30年」12.3%、「11～20年」11.9%が続いている。「5～10年」「5年未満」は6.7%、7.1%とほぼ同じ割合と言える。(図(1)-54)



図(1)-54

(サ) 日光市土呂部地区

居住年数は、「31年以上」94.9%、「21～30年」5.1%と、ほとんどが31年以上、現在の地域に居住している。親類が多い状況を見ると、出生後、若しくは、結婚後も同じ地域内で居住している方が多いことがわかる。全体と比較しても、居住年数が長い割合が高くなっている。(図(1)-55)

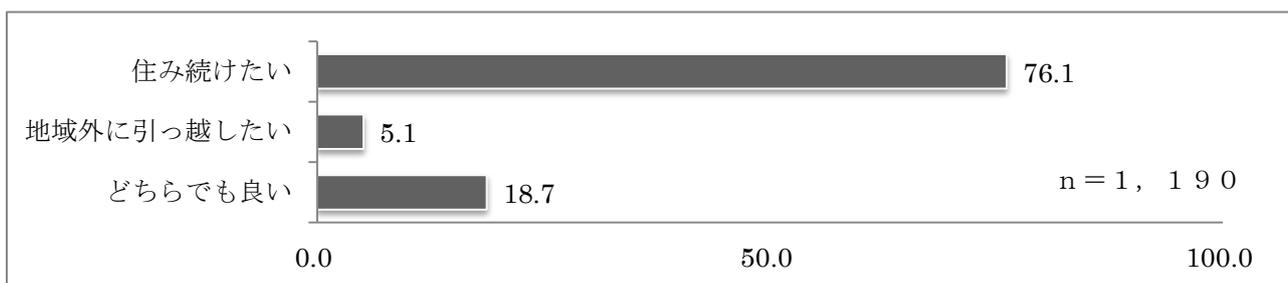


図(1)-55

カ 定住意向

(ア) 県全体

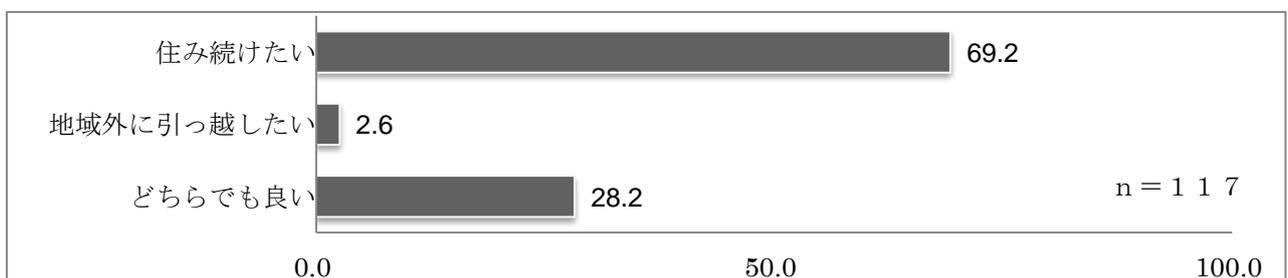
現在居住地域への継続定住意向は、「住み続けたい」が76.1%で最も高く、どちらでもよい」が18.7%、「地域外に引っ越したい」は5.1%となっている。茨城県の魅力度ランキングに反して、居住地域への魅力を感じていることが分かる。(図(1)-56)



図(1)-56

(イ) 北調査研究対象地域

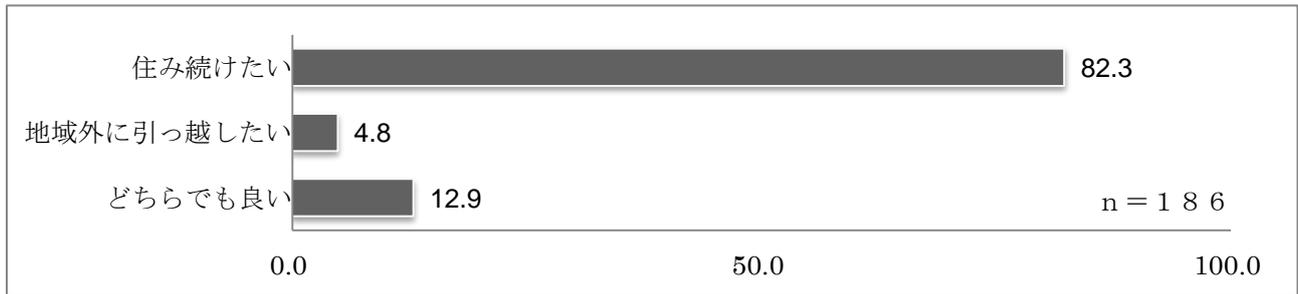
現在居住地域への継続定住意向は、「住み続けたい」が69.2%で最も高く「地域外に引っ越したい」は2.6%で非常に低くなっている。(図(1)-57)



図(1)-57

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

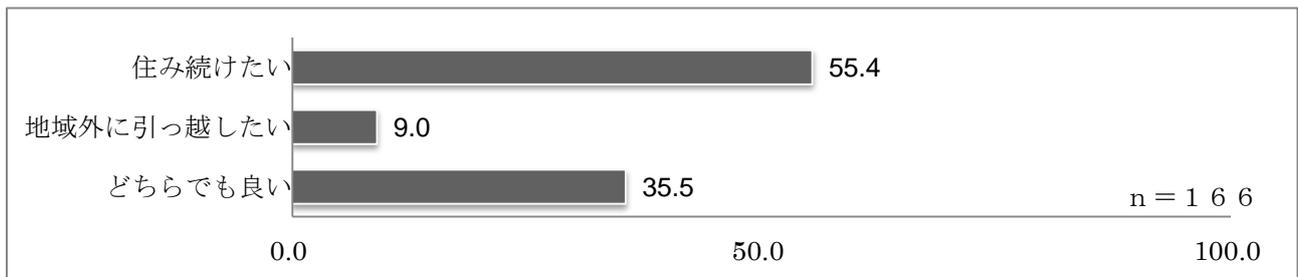
現在居住地域への継続定住意向は、「住み続けたい」が82.3%で最も高く「地域外に引っ越したい」は4.8%で非常に低くなっている。(図(1)-58)



図(1)-58

(エ) 鹿行調査研究対象地域

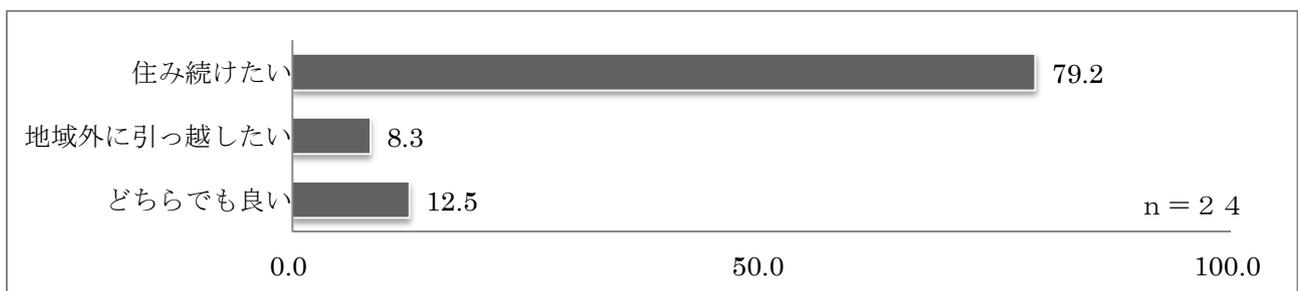
定住意向で住み続けたいと回答した割合は、55.4%である。自分の住んでいる地域にあまり魅力を感じていないと思われる。生活の利便性等の影響があると思われる。(図(1)-59)



図(1)-59

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

鹿行コミュニティ再生事業対象地域の定住意向で住み続けたいと回答した割合は、79.2%で8割近い。事業を継続させたいという意向が大きく反映されているとともに、鹿行調査研究対象地域の生活圈よりもやや利便性が良いことも一因としてあるように思われる。(図(1)-60)

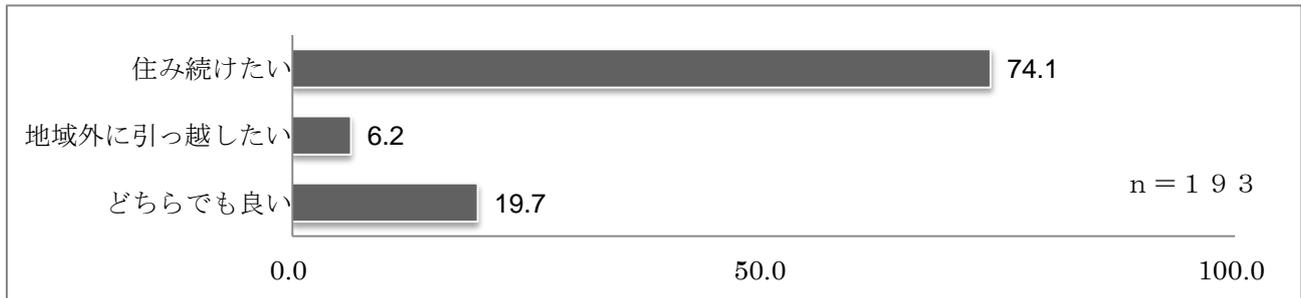


図(1)-60

(カ) 南調査研究対象地域

現在の居住地域へ「住み続けたい」人は、74.1%と、非常に高い比率である。

(図(1)-61)

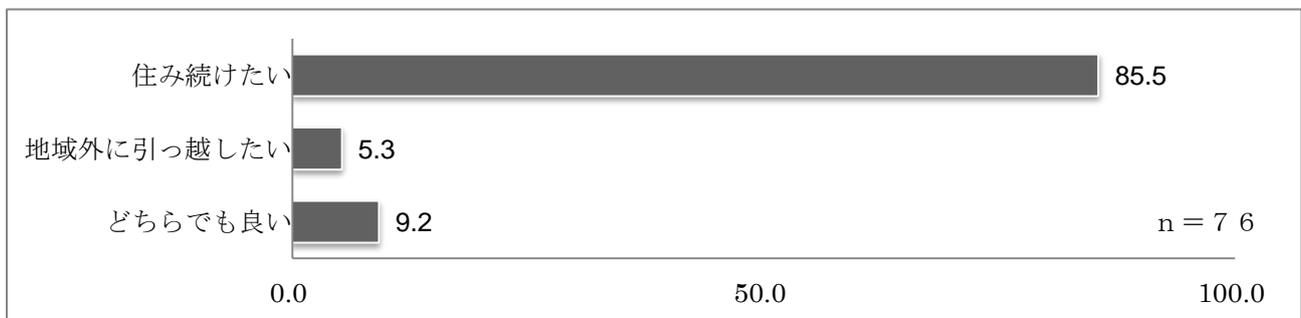


図(1)-61

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

現在の居住地域に「住み続けたい」人は、85.5%と非常に高くなっている。

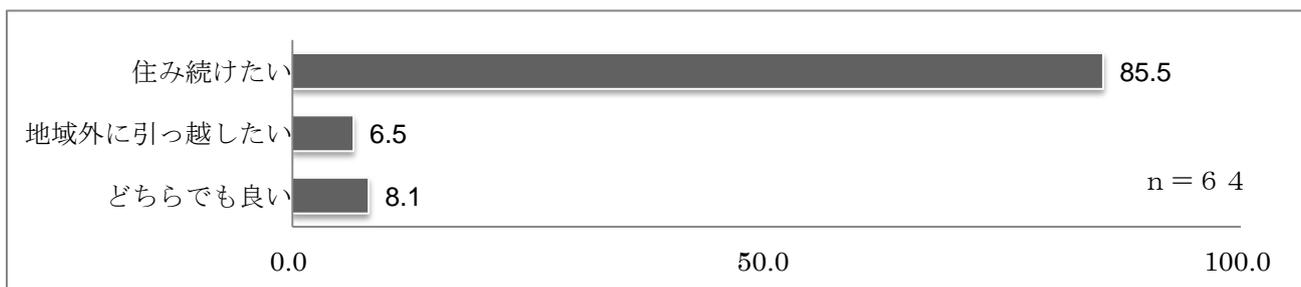
(図(1)-62)



図(1)-62

(ク) 西調査研究対象地域

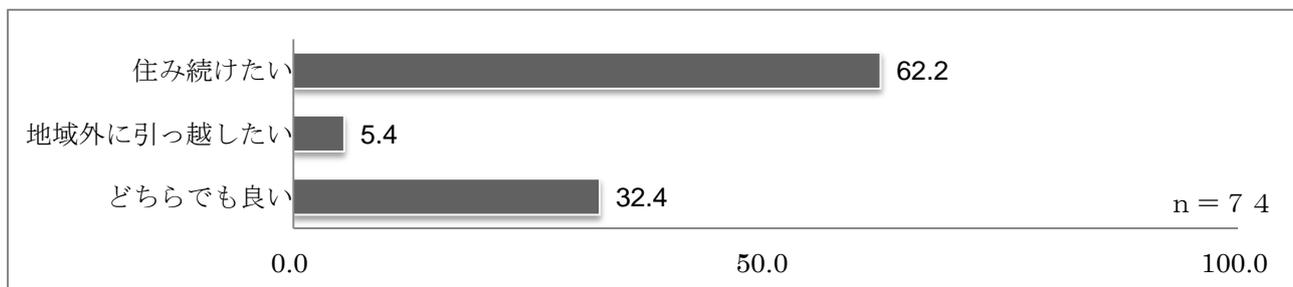
現在居住地域への継続定住意向は、「住み続けたい」が85.5%で最も高く、「どちらでもよい」が8.1%、「地域外に引っ越したい」は6.5%となっている。県全体と比較すると「住み続けたい」が1割ほど高い数値となっている。(図(1)-63)



図(1)-63

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

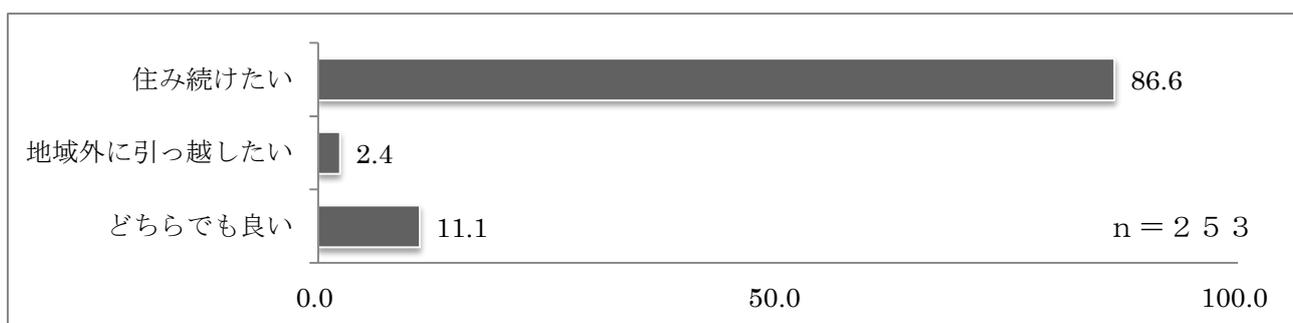
現在居住地域への継続定住意向は、「住み続けたい」が62.2%、「どちらでもよい」が32.4%、「地域外に引っ越したい」は5.4%となっている。県全体と比較すると「住み続けたい」が1割ほど低い数値となり、代わりに「どちらでもよい」が1割ほど高い数値となっている。(図(1)-64)



図(1)-64

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

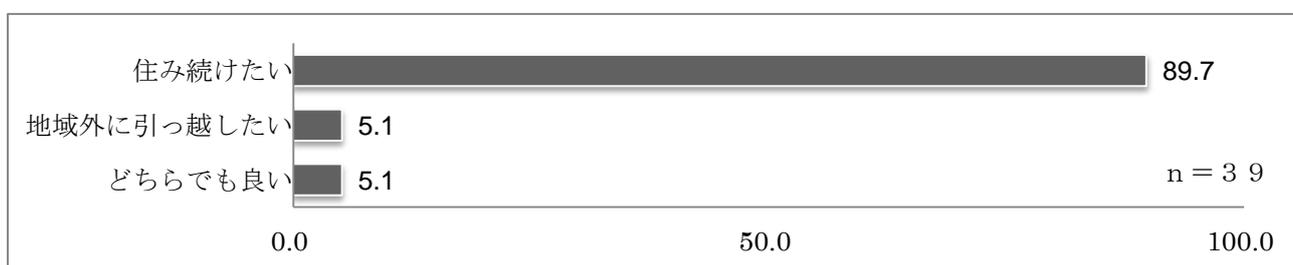
居住地域に「住み続けたい」人は86.6%と高い数値である。「どちらでもよい」が11.1%、「地域外に引っ越したい」は2.4%と低い数値になっている。(図(1)-65)



図(1)-65

(サ) 日光市土呂部地区

定住意向は、「住み続けたい」が89.7%と、約9割が現在の居住定住意向を望んでおり、逆に「どちらでもよい」、「地域外に引っ越したい」がともに5.1%と非常に低い。全体と比較しても、定住意向の割合が高くなっている。(図(1)-66)



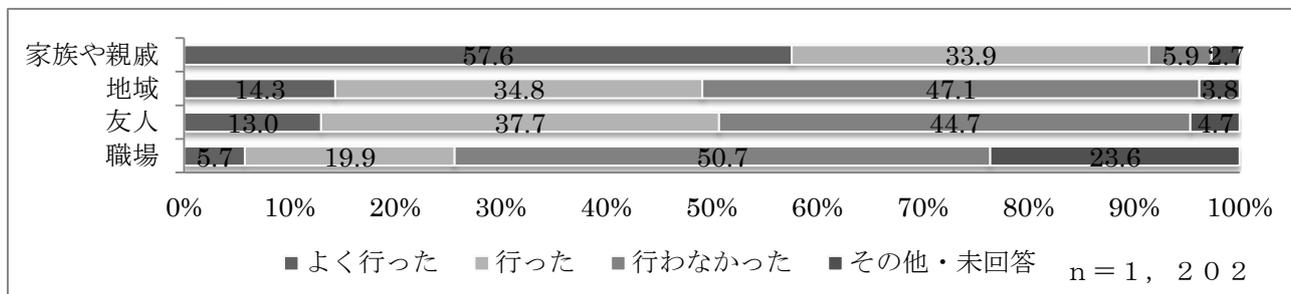
図(1)-66

(2) 「調査項目」別の「縁」と「つながり力」の相関関係について

ア 日常生活における、助け合い・支え合い活動

(ア) 県全体

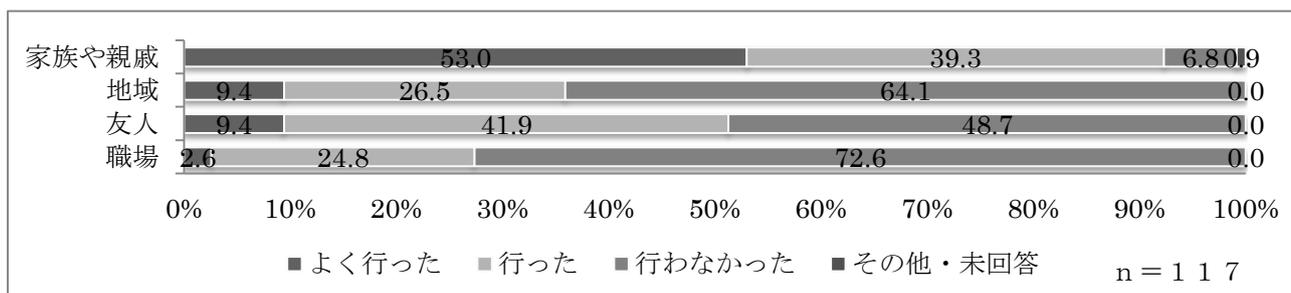
「家族」が「よく行った」57.6%「行った」33.9%を合わせると約92%になり最も高い数値を示している。「友人」が同じく約51%、「地域」が約49%で続き、「職場」は約26%と他の縁との活動の差が見られる。(図(2)-1)



図(2)-1

(イ) 北調査研究対象地域

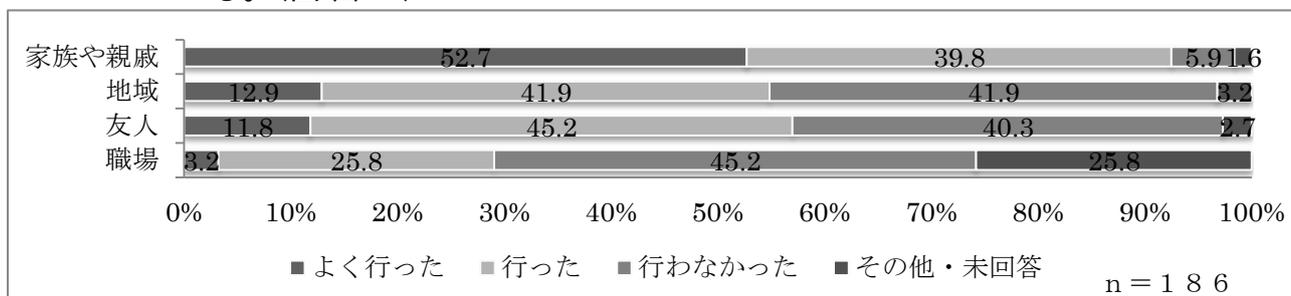
活動状況の日常生活における助け合いは、家族や親戚に関わることが「よく行った」53.0%「行った」39.3%と合わせて92.3%となり高い割合を示している。「友人」との助け合いは「よく行った」「行った」を合わせ51.3%、「地域」では35.9%となっている。(図(2)-2)



図(2)-2

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

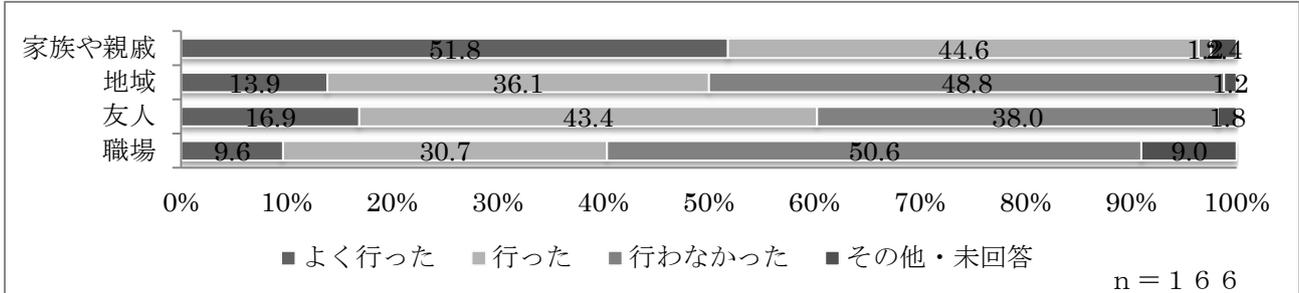
活動状況の日常生活における助け合いは、家族や親戚に関わることが「よく行った」52.7%、「行った」39.8%で合わせて92.5%となり高い割合となっている。「友人」「地域」も合わせて5割を超えているが「職場」では3割と低くなっている。(図(2)-3)



図(2)-3

(エ) 鹿行調査研究対象地域

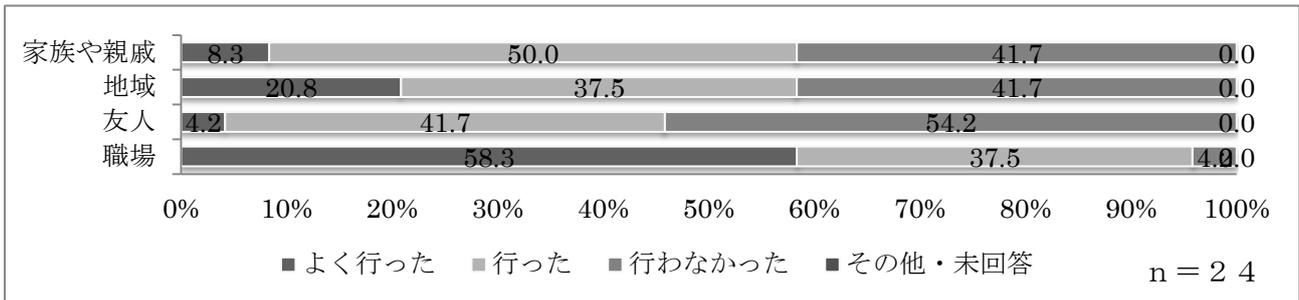
日常生活における助け合いで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」で、「よく行った」「行った」を合わせると96.4%である。続いて、「友人」、「地域」、「職場」と続いている。「友人」が、「よく行った」「行った」を合わせると60.3%と、県全体に比べて高いのは、調査の対象者である保護者の友人関係が、子どもを介して広がっているためと思われる。(図(2)-4)



図(2)-4

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

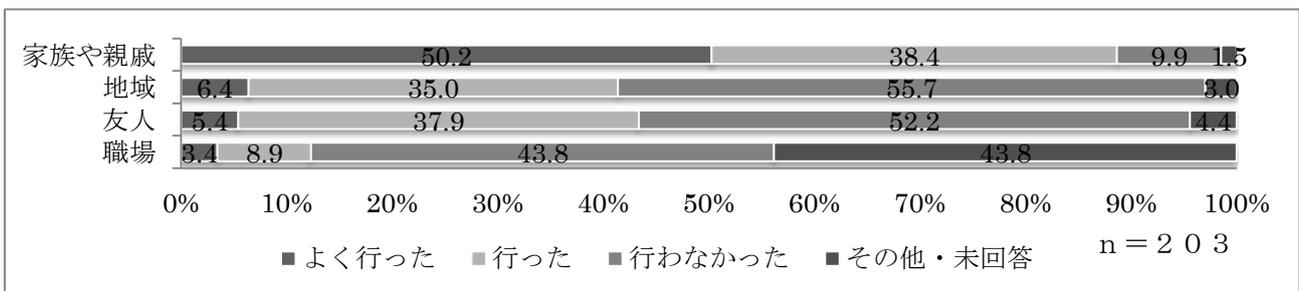
日常生活における助け合いで、最も高い数値を示しているのは、「職場」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると約96%である。続いて、「地域」、「家族や親戚」、「友人」と続いている。「職場」の項目が、県全体に比べて非常に高いのは、調査対象者のほとんどが商工会に関わる人で、活動の拠点が職場である割合が高いためと思われる。(図(2)-5)



図(2)-5

(カ) 南調査研究対象地域

日常生活における助け合いでは、「家族や親戚」との関わりにおいて、「よく行った」が50.2%、「行った」が38.4%と、最も高い。「行わなかった」比率が最も高かったのは、「地域」での関わりという結果である。(図(2)-6)

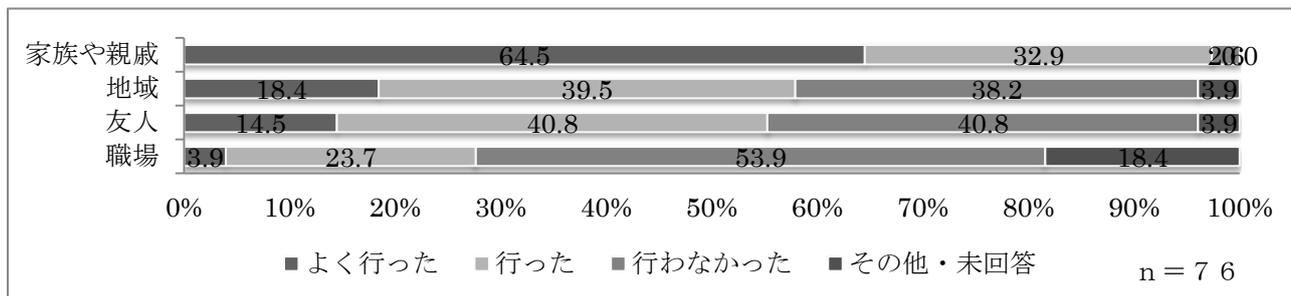


図(2)-6

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

日常生活における助け合いは、南コミュニティ再生事業対象地域では全ての関係において、他の調査よりも「よく行った」「行った」が高くなっている。

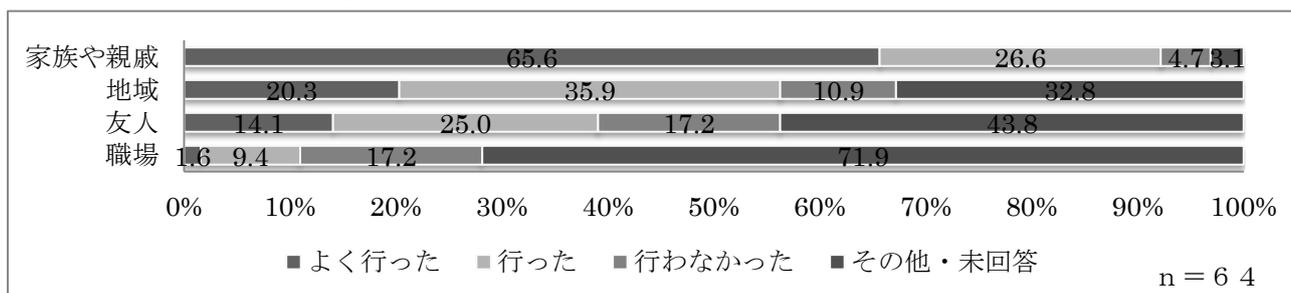
(図(2)-7)



図(2)-7

(ク) 西調査研究対象地域

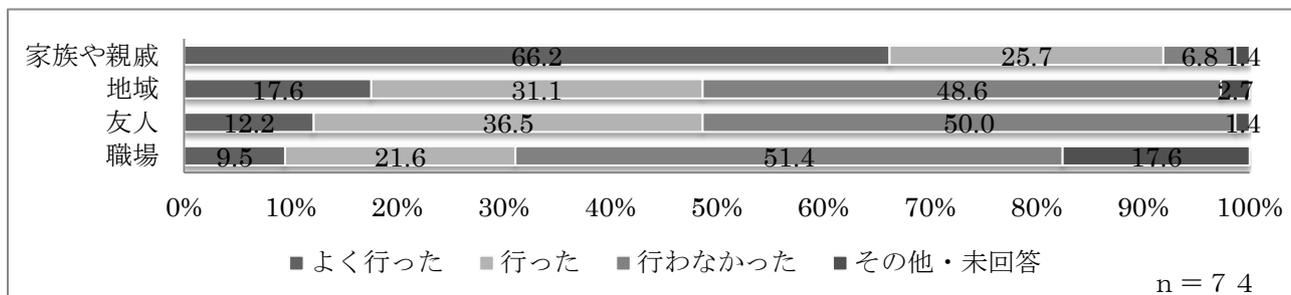
日常生活における助け合いは、「家族や親戚」が高く「よく行った」65.6%、「行った」26.6%を合わせると92.2%になる。「地域」「友人」は「よく行った」と「行った」を合わせると、56.2%・39.1%を示し、県全体と比べると「地域」「友人」の順位が逆転している。また「職場」は「よく行った」と「行った」を合わせても11.0%である。県全体と比べると約15%低い数値となり、回答者の年齢と就業率が影響していることが伺える。(図(2)-8)



図(2)-8

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

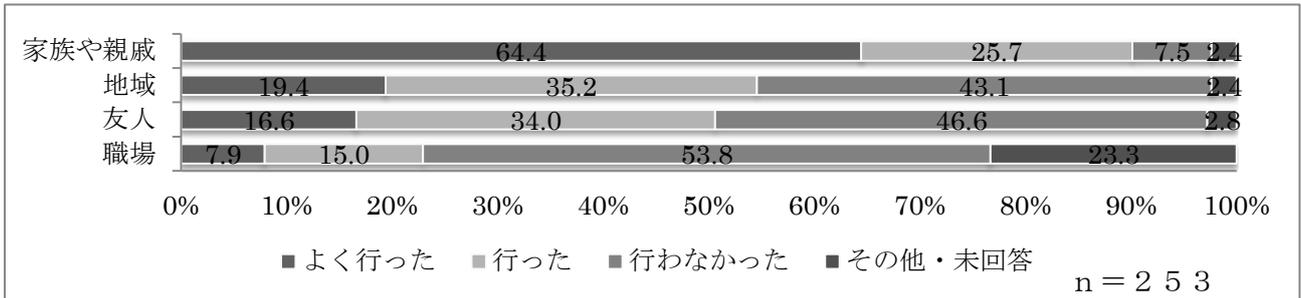
日常生活における助け合いは、「家族や親戚」が高い割合を示し「よく行った」66.2%、「行った」25.7%を合わせると91.9%になる。「地域」「友人」は「よく行った」と「行った」を合わせるとともに48.7%を示し、「職場」に関わることは31.1%になる。これは、県全体と比較するとほぼ同じ傾向である。(図(2)-9)



図(2)-9

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

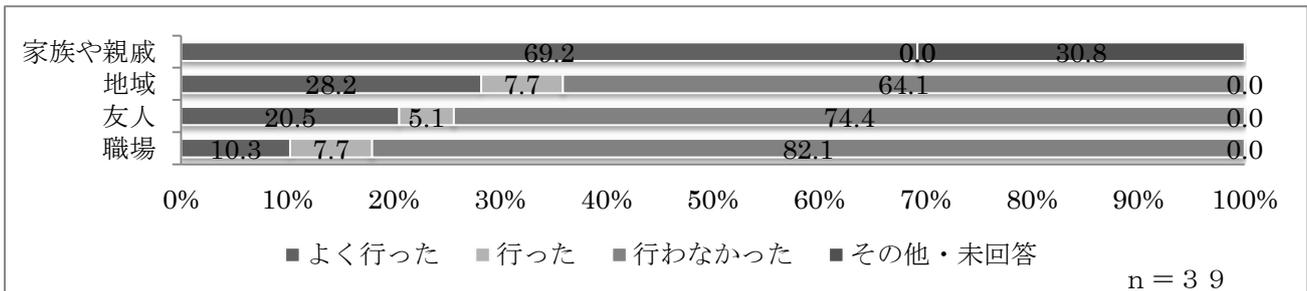
日常生活における助け合いは、「家族や親戚」が「よく行った」64.4%、「行った」25.7%で合わせて90.1%となり高い割合となっている。「友人」「地域」も合わせて5割を超えているが「職場」では3割に満たない割合である。(図(2)-10)



図(2)-10

(サ) 日光市土呂部地区

「家族や親戚」に対して「よく行った」が69.2%と最も高く、約7割が日常生活において何らかの助け合いを行っている。また、県全体と比較しても最も高い数値であり、血縁関係のつながりの強さを示している。続いて、「地域」に「よく行った」28.2%、「友人」に「よく行った」20.5%、「職場」に「良く行った」10.3%と、県全体と比べると数値が高く、その関係性の強さをみることができるが、「行った」と合わせると、全体的に低くなる。小さな地域であり、また、地域内の親類が多いことから、日常的に顔の見える関係であることが地域の特徴としてわかる。(図(2)-11)

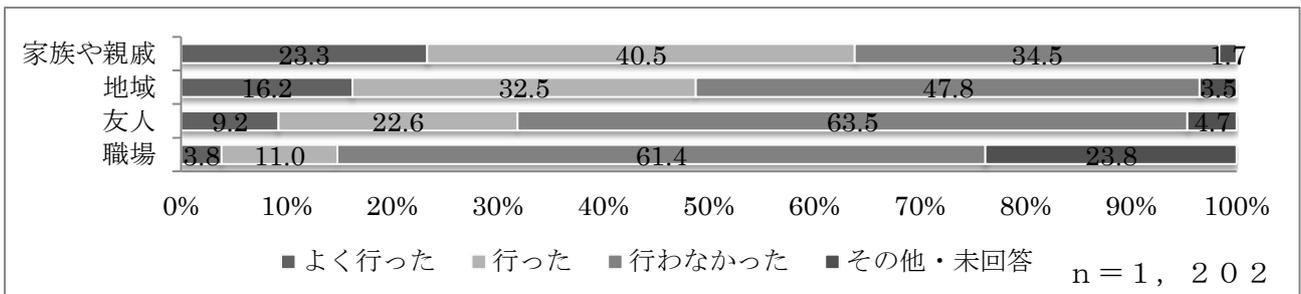


図(2)-11

イ 地域・まちづくりの企画や運営に関する活動

(ア) 県全体

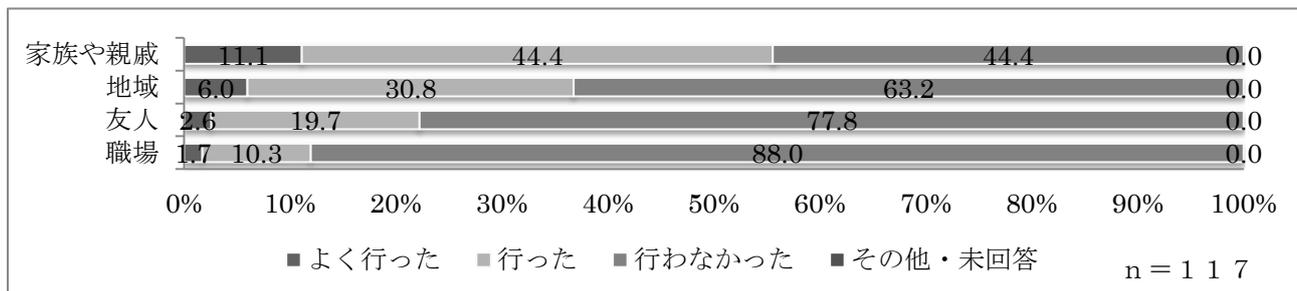
「家族や親戚」が最も高く「よく行った」「行った」を合わせ約64%である。次に「地域」が同じく約49%である。「職場」での活動については約15%である。(図(2)-12)



図(2)-12

(イ) 北調査研究対象地域

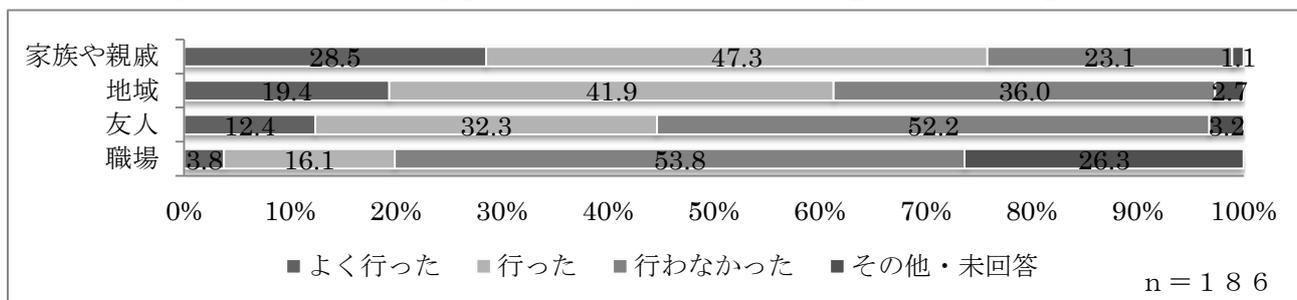
地域・まちづくり活動については、「家族や親戚」と「よく行った」「行った」が55.5%、地域の人と「よく行った」「行った」合わせて36.8%、「友人」「職場」では活動が低い割合を示している。(図(2)-13)



図(2)-13

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

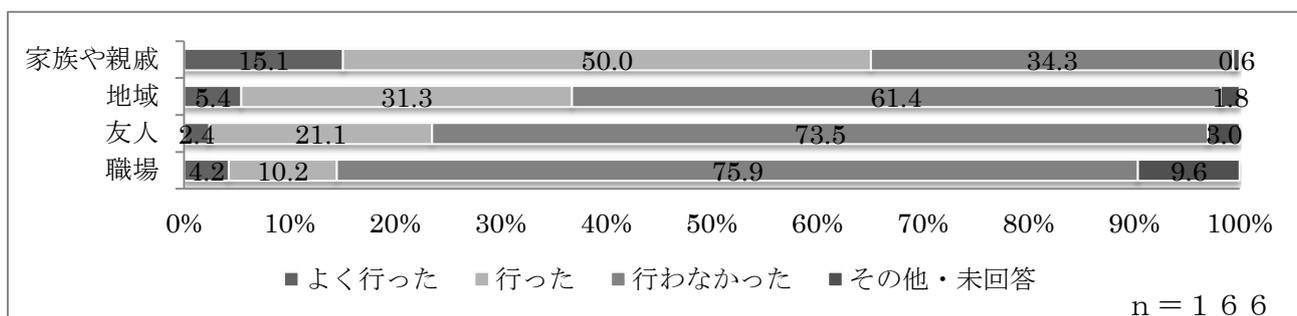
地域・まちづくり活動については、「家族や親戚」と「よく行った」「行った」が75.8%と高い割合を示している。「地域」の人との活動は61.3%、「友人」との活動は44.7%、「職場」の人との活動は19.9%と低くなっている。(図(2)-14)



図(2)-14

(エ) 鹿行調査研究対象地域

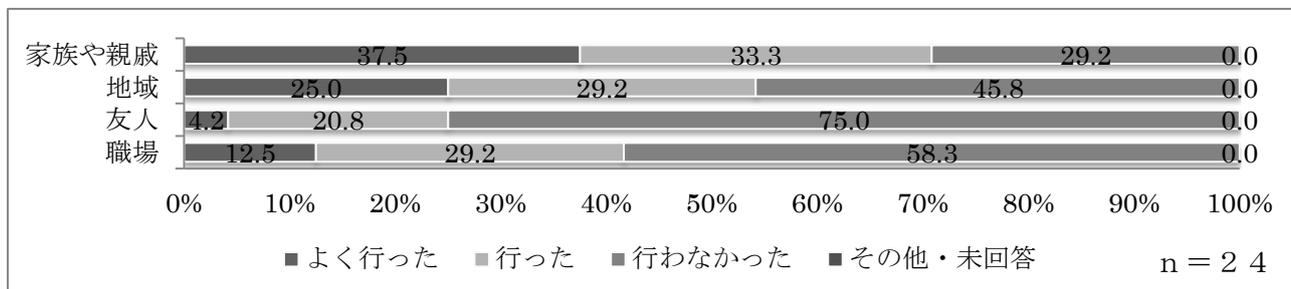
地域・まちづくり活動で、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると65.1%である。続いて、「地域」、「友人」、「職場」と続いており、県全体とほぼ変わらない傾向であるが、「友人」の数値は、「よく行った」「行った」を合わせても23.5%とやや低い。友人との関わりは、日常生活におけるものがほとんどである様子が表れている。(図(2)-15)



図(2)-15

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

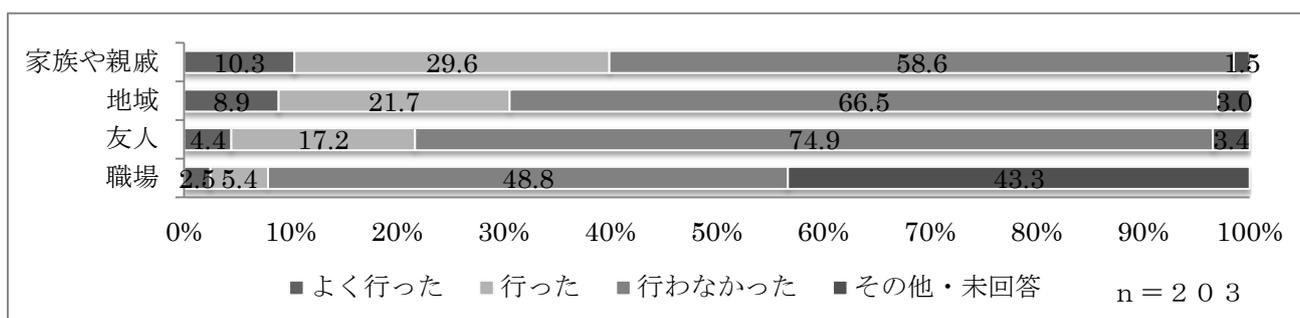
地域・まちづくり活動で、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると70.8%である。「職場」の項目の割合が、「よく行った」「行った」を合わせると41.7%と、県全体に比べてとても高い。職場ぐるみで地域・まちづくり活動が行われている様子が表れている。
(図(2)-16)



図(2)-16

(カ) 南調査研究対象地域

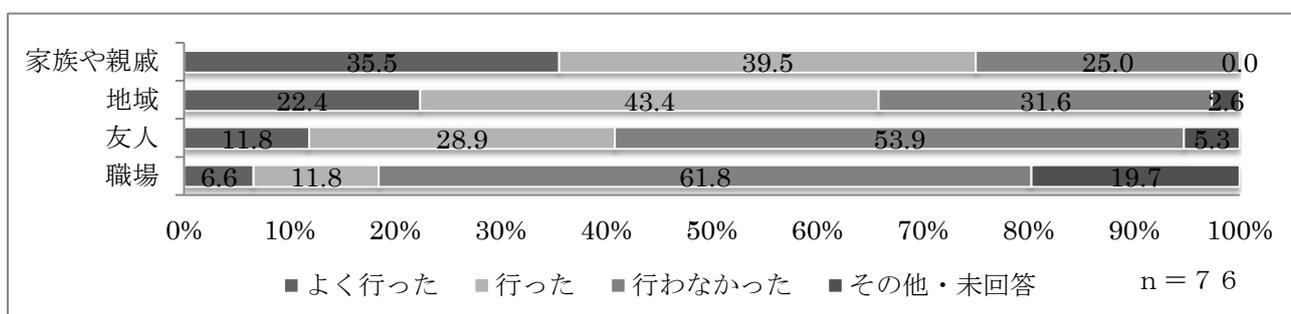
地域・まちづくり活動では、「家族や親戚」との関わりにおける活動が、「よく行った」10.3%、「行った」29.6%と最も高いものの、全体的に活動した人の比率はやや少なくなっている。(図(2)-17)



図(2)-17

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

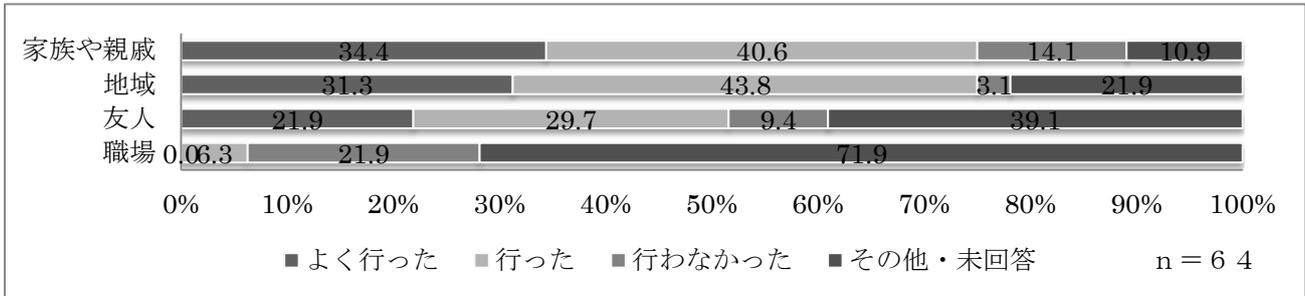
南コミュニティ再生事業対象地域での調査では、「家族や親戚」における活動が最も高い。次いで「地域」における活動が多い。県全体・南調査研究対象地域ともに同じような傾向である。(図(2)-18)



図(2)-18

(ク) 西調査研究対象地域

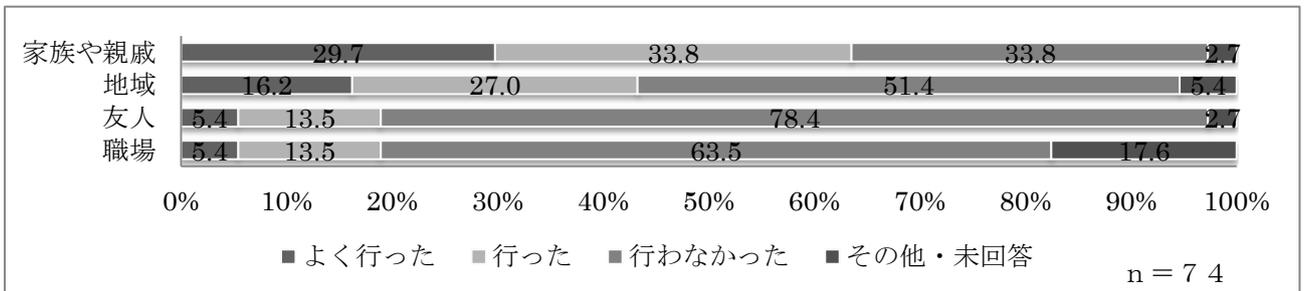
地域・まちづくり活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」34.4%と「行った」40.6%、「地域」に関わることは、「よく行った」31.3%と「行った」43.8%となり、ともに合わせると70%を越える結果となった。「友人」に関わることは、「よく行った」21.9%と「行った」29.7%を合わせると51.6%になる。これは県全体と比較しても高い数値となっており、地域・まちづくり活動は、「家族や親戚」「地域」「友人」に関わることの割合がとて高くなっている。(図(2)-19)



図(2)-19

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

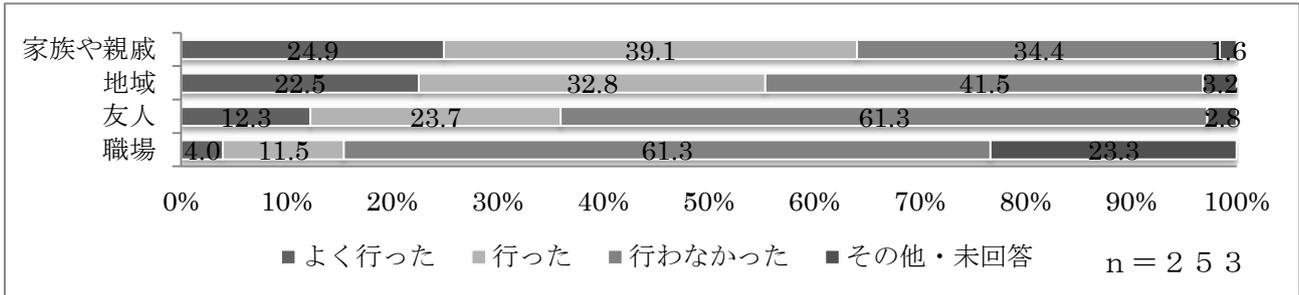
地域・まちづくり活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」29.7%と「行った」33.8%を合わせると63.5%、「地域」に関わることは、「よく行った」16.2%と「行った」27.0%となり43.2%となった。「友人」に関わること「職場」に関わることは、「よく行った」「行った」を合わせると、両方とも18.9%になる。これは県全体と比較すると、「友人」に関わるのが約13%低い数値となっており、それ以外については、ほぼ同じ傾向である。(図(2)-20)



図(2)-20

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

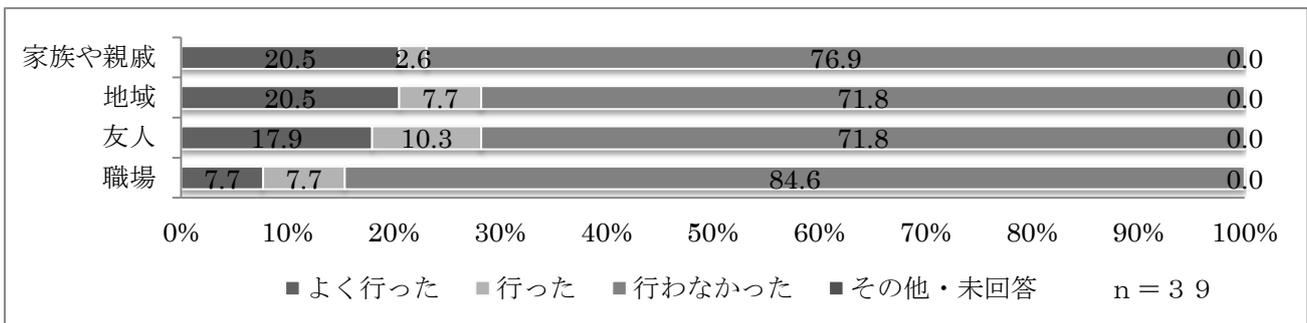
地域・まちづくり活動については、「家族や親戚」と「よく行った」「行った」が64.0%、「地域」では同様に55.3%、「友人」は36.0%、「職場」では活動が低い割合を示している。(図(2)-21)



図(2)-21

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」について、「家族や親戚」、「地域」ともに20.5%と高い数値であるが、県全体の「家族や親戚」23.3%と比較すると数値が低い。また、「よく行った」については、「地域」20.5%、「友人」17.9%、「職場」7.7%と、県全体と比較してもどの縁も高い数値となっているが、「行った」と合わせると、「職場」以外は数値が低くなる。地域・まちづくりについては、自治会が主として行っているため、役員等の役割を担っているか否かの数値が反映されている。また、職場についても、地域内の事業所、または、同じ職場に勤務している方が多いため、数値が高くなっている。(図(2)-22)

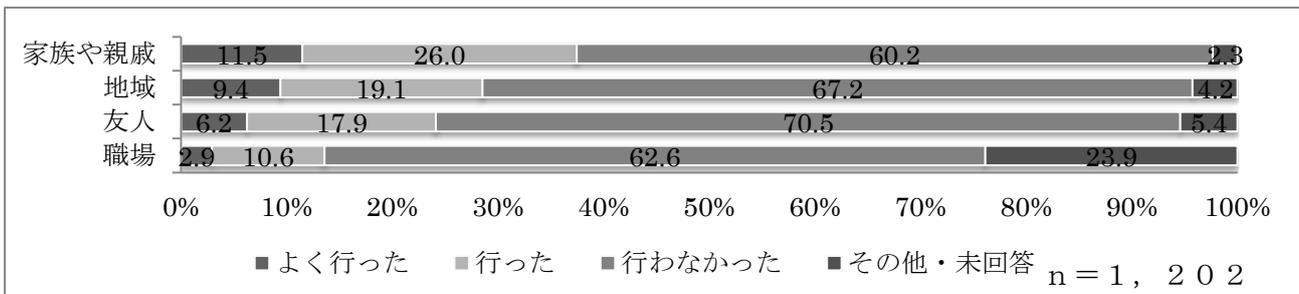


図(2)-22

ウ 学習会の企画や広報、ボランティア等に関する活動

(ア) 県全体

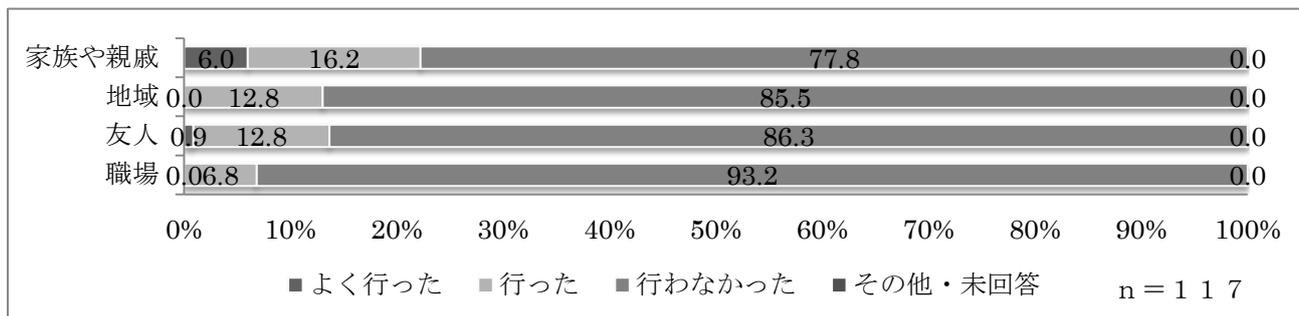
全体的にどの項目割合も低くなっているが、「家族や親戚」は、約38%で比較的活発であると言える。(図(2)-23)



図(2)-23

(イ) 北調査研究対象地域

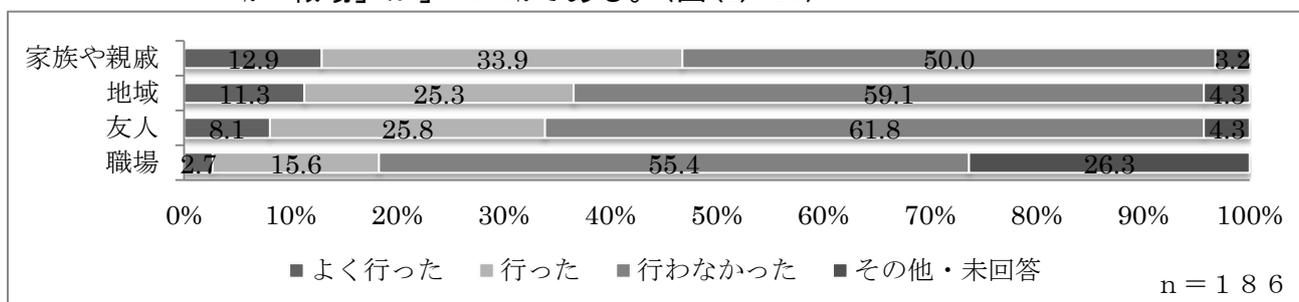
学習会への参加は「家族や親戚」と行ったが22.2%、「友人」13.7%、「地域」は12.8%「職場」の人が6.8%と、全体的に低い傾向が見える。(図(2)-24)



図(2)-24

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

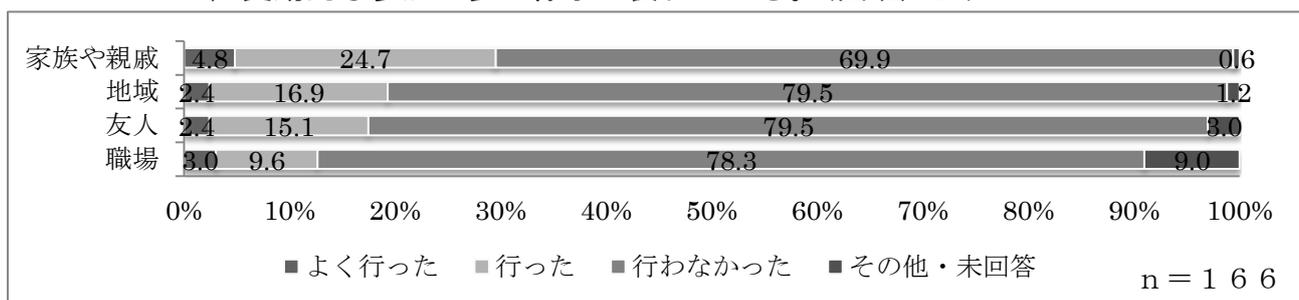
学習会への関わりは「家族や親戚」と行ったが46.8%、「地域」36.6%、「友人」33.9%「職場」が18.3%である。(図(2)-25)



図(2)-25

(エ) 鹿行調査研究対象地域

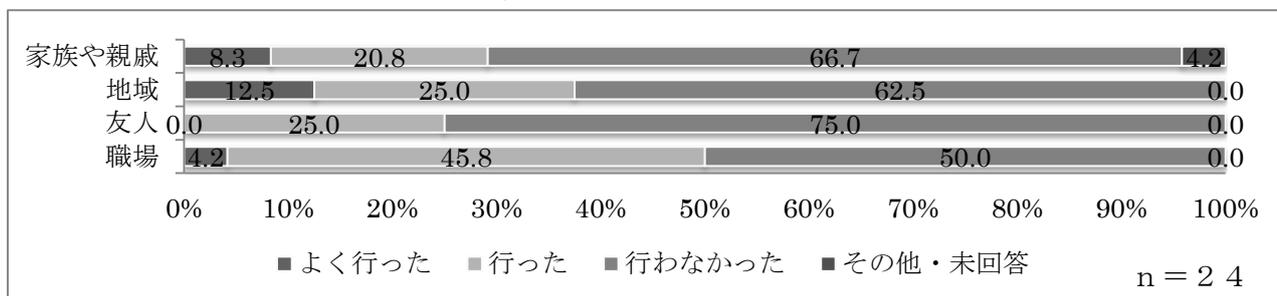
学習会への関わりで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると29.5%であるが、他のどの項目においても、同様に低い割合である。学習会の企画や広報といった活動には消極的で、受動的な参加が多い様子が表れている。(図(2)-26)



図(2)-26

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

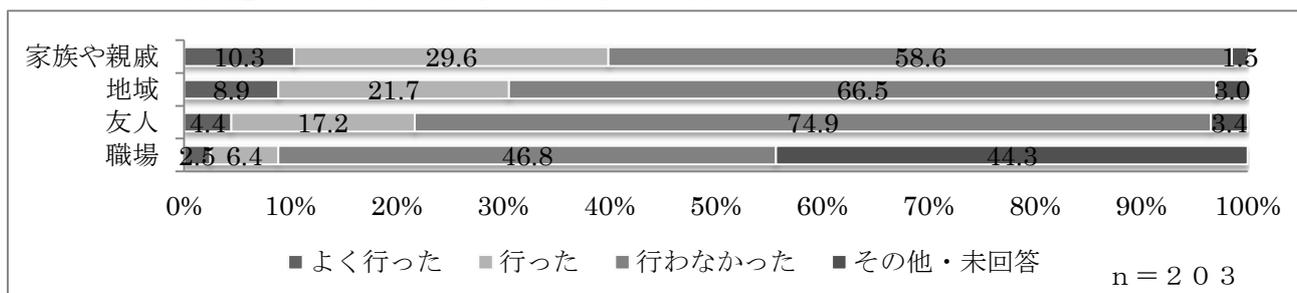
学習会への関わりで、高い数値を示しているのは、「職場」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると50.0%である。県全体の数値に比べて、非常に高い。(図(2)-16)同様、学習会の企画や参加等について、職場ぐるみで積極的に行われている様子が表れている。(図(2)-27)



図(2)-27

(カ) 南調査研究対象地域

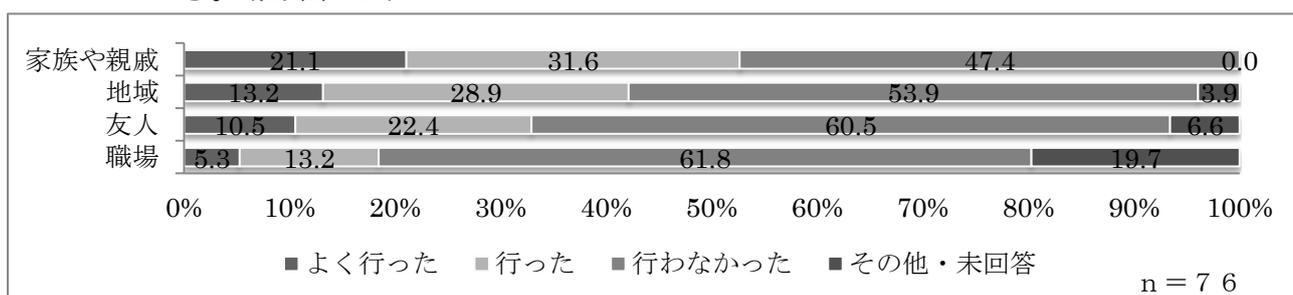
地域で実施される学習会への関わりは、「家族や親戚」との関わりにおいての活動が、「よく行った」10.3%、「行った」29.6%と最も高く『地域・まちづくり活動』とほぼ同じ結果である。(図(2)-28)



図(2)-28

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

学習会への関わりは、「家族や親戚」とともに行った場合が一番多くなっている。(図(2)-29)

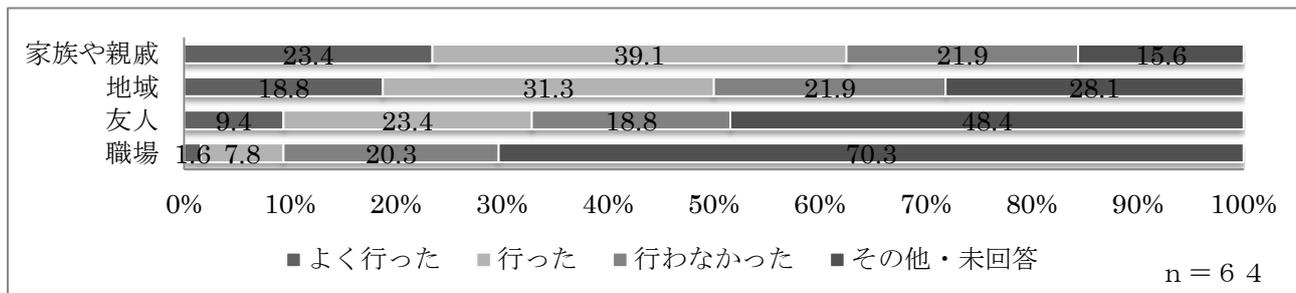


図(2)-29

(ク) 西調査研究対象地域

学習会への関わりでは、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」23.4%と「行った」39.1%を合わせると62.5%、「地域」に関わることは「よく行った」18.8%と「行った」31.3%となり、合わせると50.1%という結果となった。「友人」に関わることは、「よく行った」9.4%と「行った」23.4%を合わせると32.8%にとどまるも、県全体と比較すると、「家族や親戚」に関わることでは約25%以上の高い数値を示すなど、「地域」「友人」に関わることの割合も高くなっている。

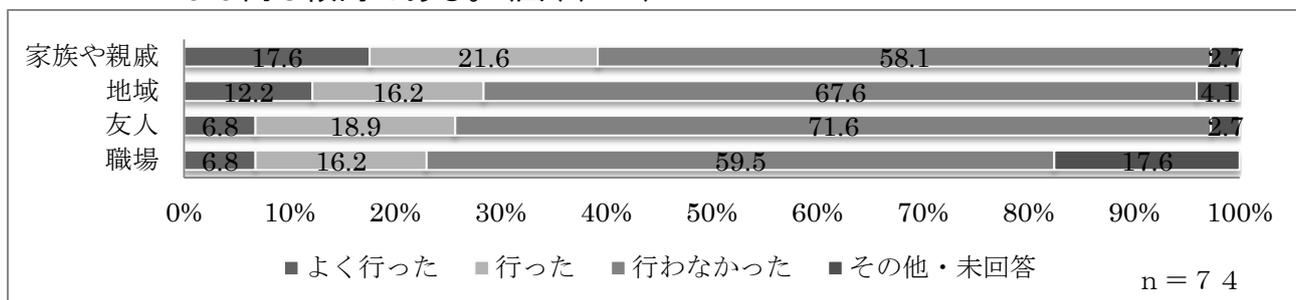
(図(2)-30)



図(2)-30

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

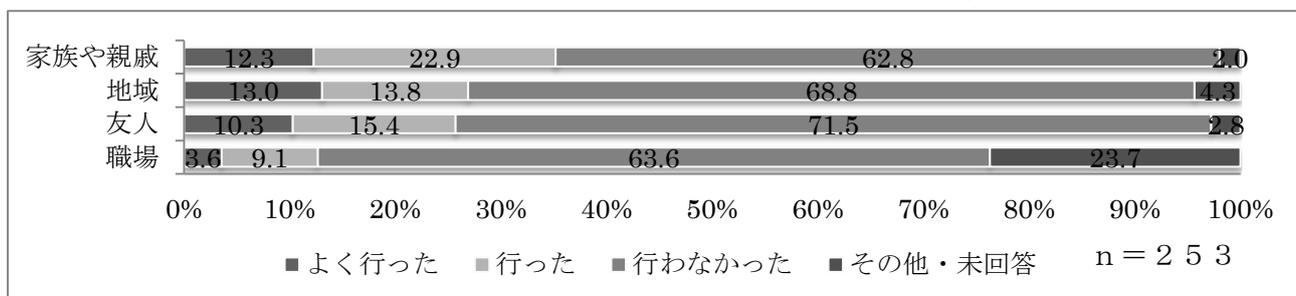
学習会への関わりでは、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」17.6%と「行った」21.6%を合わせると39.2%、「地域」に関わることは「よく行った」12.2%と「行った」16.2%となり、合わせると28.4%という結果となった。この割合は県全体と比較すると、「友人」に関わること、「職場」に関わることも含め、ほぼ同じ傾向である。(図(2)-31)



図(2)-31

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

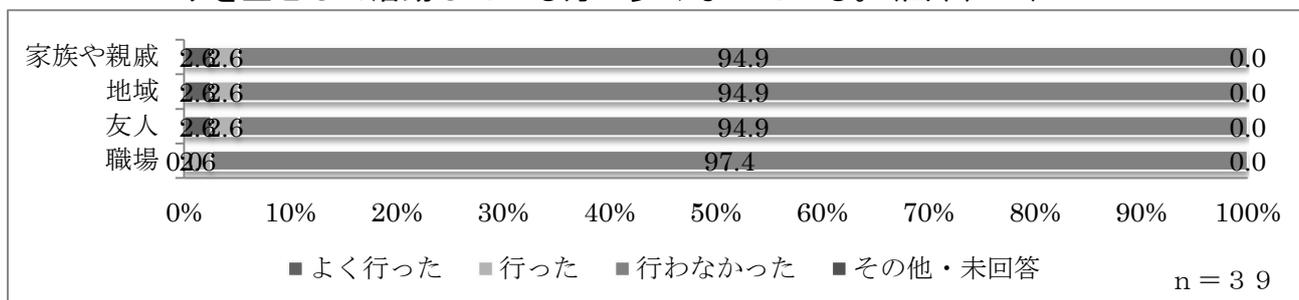
学習会への参加は「家族や親戚」と行ったが35.2%、「地域」26.8%、「友人」は25.7%「職場」の人が12.7%と、全体的に低い傾向が見える。(図(2)-32)



図(2)-32

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」について、「家族や親戚」、「地域」、「友人」がともに2.6%、「職場」0%と、「行った」を合わせても1割にも満たず、全体と比較しても非常に低い。この活動の割合は低いが、畑作業など、自らの趣味や生きがいを主として活動している方が多くなっている。(図(2)-33)

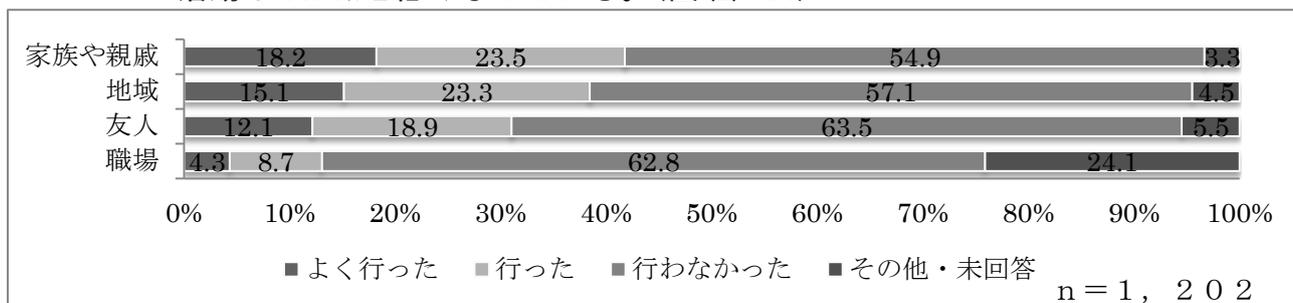


図(2)-33

エ 青少年の健全育成に関する活動

(ア) 県全体

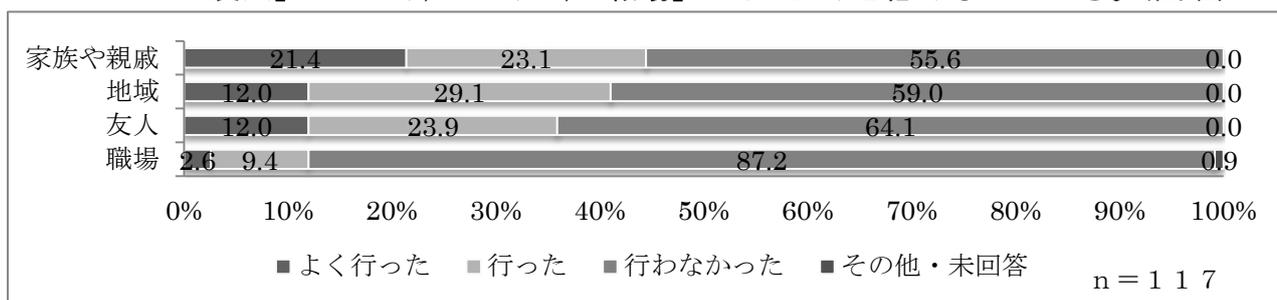
「家族や親戚」「地域」での活動が約40%となっている。反対に「職場」での活動は13.0%と低くなっている。(図(2)-34)



図(2)-34

(イ) 北調査研究対象地域

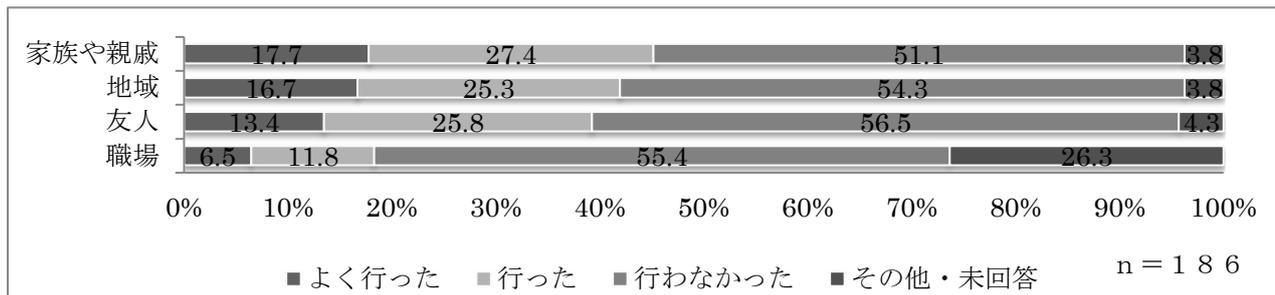
青少年の健全育成活動については「家族や親戚」と行ったが44.5%、「地域」、「友人」が41.1%、35.9%で、「職場」では12.0%と低くなっている。(図(2)-35)



図(2)-35

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

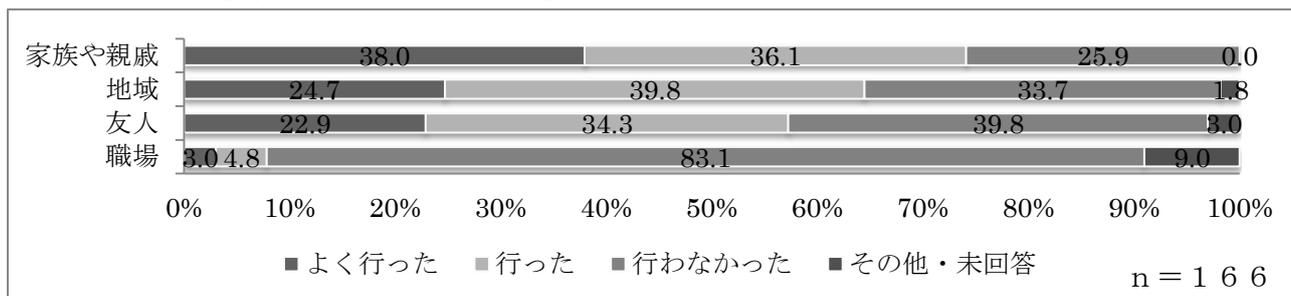
青少年の健全育成活動については「家族や親戚」と行ったが45.1%、「地域」「友人」が42.0%、39.2%で「職場」では18.3%と低くなっている。(図(2)-36)



図(2)-36

(エ) 鹿行調査研究対象地域

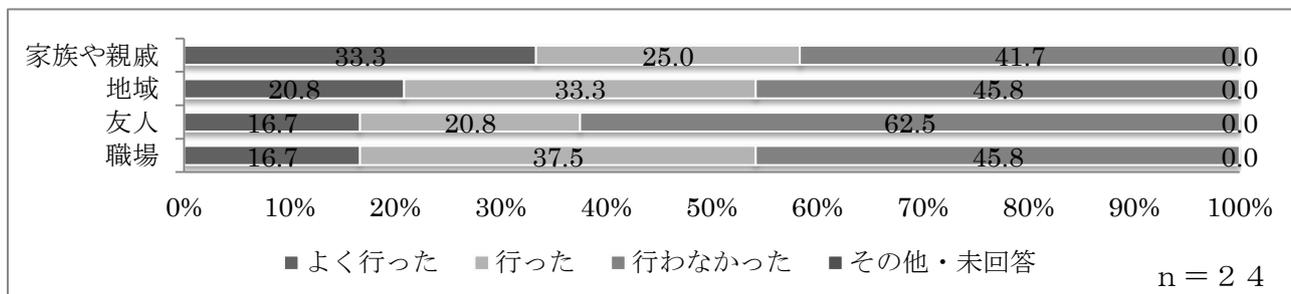
青少年の健全育成に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると74.1%である。「地域」や「友人」の項目も約6割と、県全体に比べてとても高い数値を示している。調査の対象者が、小学生の保護者であることから、青少年の健全育成活動に関わる割合が高いと思われる。(図(2)-37)



図(2)-37

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

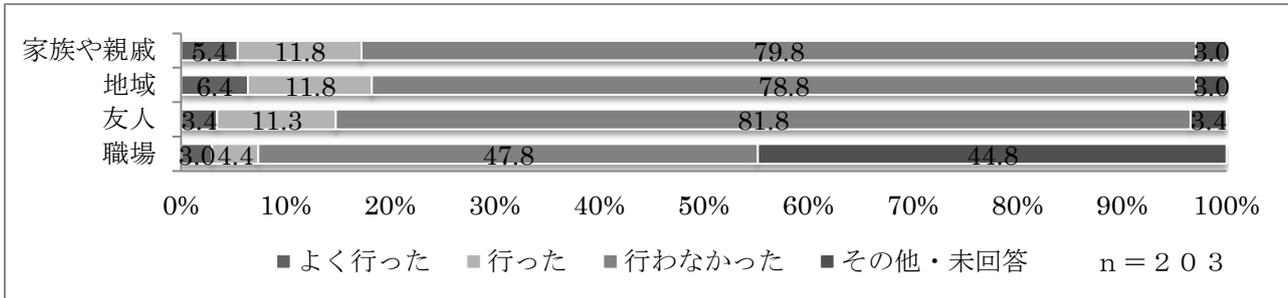
青少年の健全育成に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると58.3%である。「地域」もほぼ同様の数値を示している。また、「職場」の項目の割合が54.2%と、県全体に比べて非常に高い。様々な活動場面において、「職場」の人とのつながりが深いことが表れている。(図(2)-38)



図(2)-38

(カ) 南調査研究対象地域

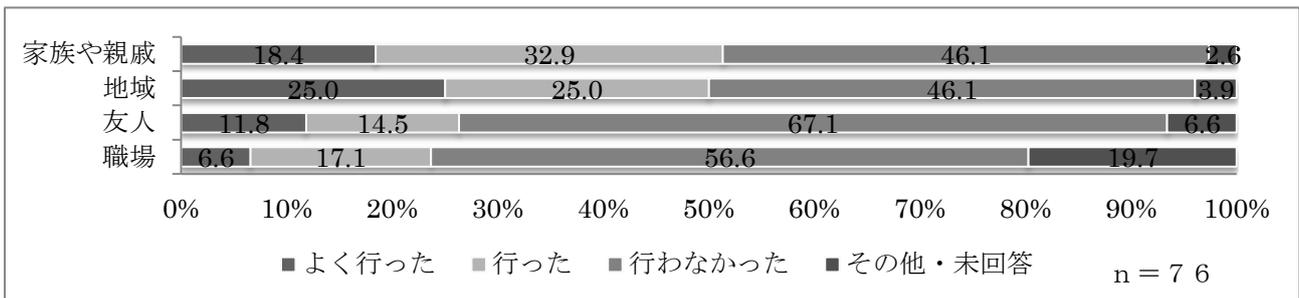
青少年の健全育成に関する活動は、「地域」での比率が、「よく行った」6.4%、「行った」11.8%と1番高い。また、「家族や親戚」とともに行った比率も、「よく行った」5.4%、「行った」11.8%とほぼ同じ比率である。(図(2)-39)



図(2)-39

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

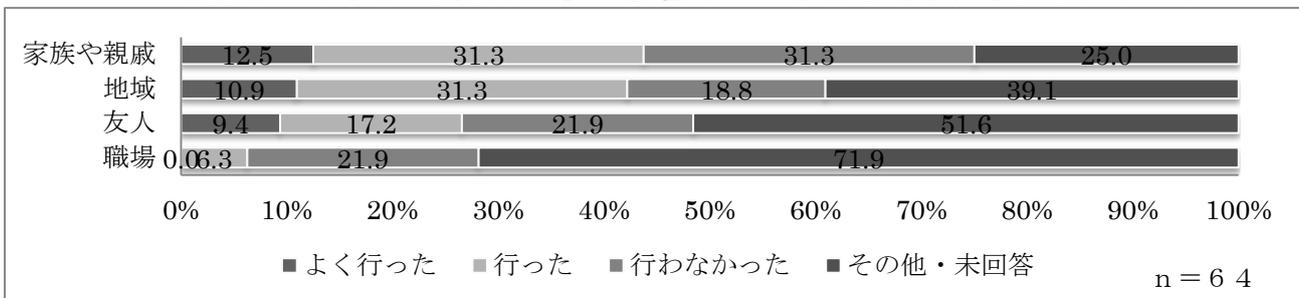
青少年の健全育成に関する活動は、南コミュニティ再生事業対象地域及び南調査研究対象地域、県全体とも同じような傾向ではあったが、南コミュニティ再生事業対象者の「よく行った」、「行った」は他よりもかなり高い数値を示している。(図(2)-40)



図(2)-40

(ク) 西調査研究対象地域

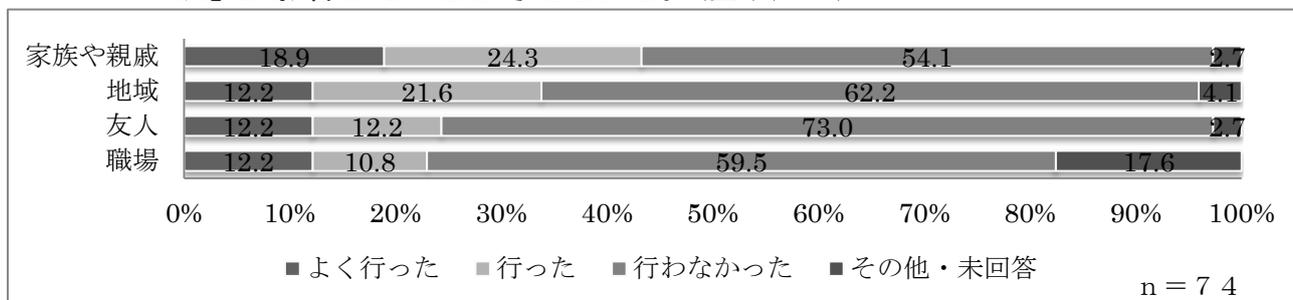
青少年の健全育成について、「家族や親戚」で「よく行った」12.5%、「行った」31.3%となり合わせると43.8%となった。「地域」と友人でも県全体と比較してほぼ同じ傾向にあるが、「職場」では同様に6.3%と低い値となった。(図(1)-41)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。(図(2)-41)



図(2)-41

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

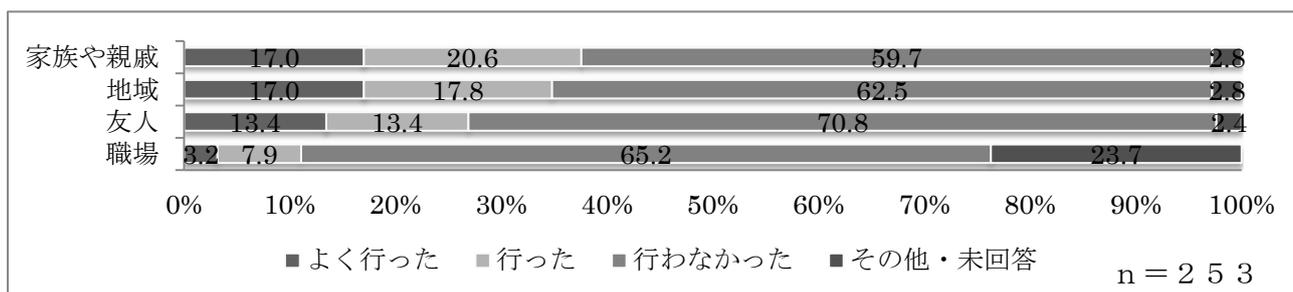
青少年の健全育成について、「家族や親戚」では「よく行った」18.9%、「行った」24.3%となり、合わせると43.2%である。「地域」と「友人」でも県全体と比較してほぼ同じ傾向にあるが、「職場」では「よく行った」12.2%、「行った」10.8%となり、1割程度高い数値となっている。(図(1)-42)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。(図(2)-42)



図(2)-42

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

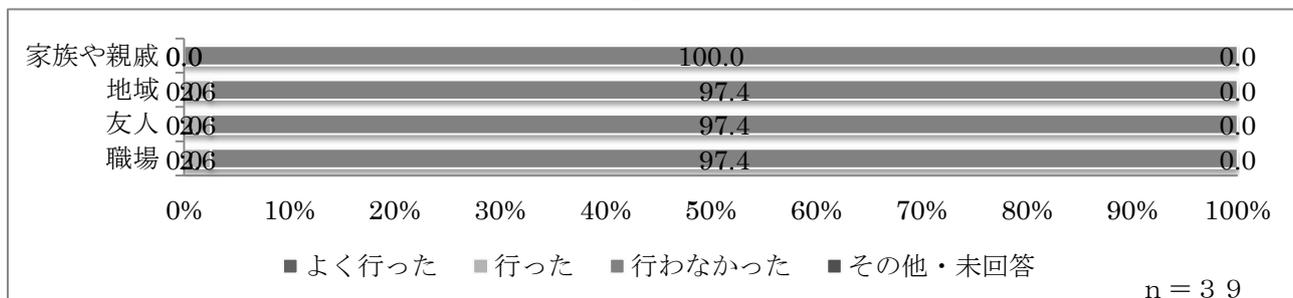
青少年の健全育成活動については「家族や親戚」と「行った」「よく行った」を合わせる37.6%である。「地域」「友人」が34.8%、26.8%で続き、「職場」では11.1%と低くなっている。(図(2)-43)



図(2)-43

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」について、全ての縁において0%であり、「行った」についても「地域」、「友人」、「職場」ともに2.6%と、非常に低い割合である。地域に子どもがいないため、交流や活動を企画する機会がないことがわかる。(図(2)-44)

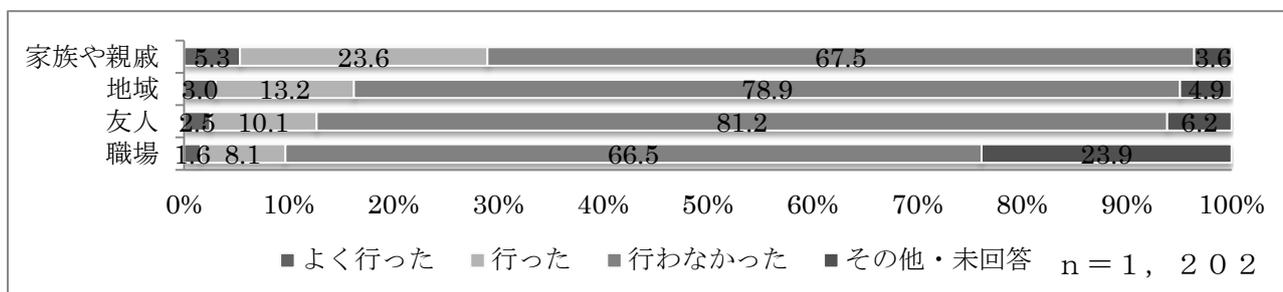


図(2)-44

オ 非常災害時に協力や支援をする活動

(ア) 県全体

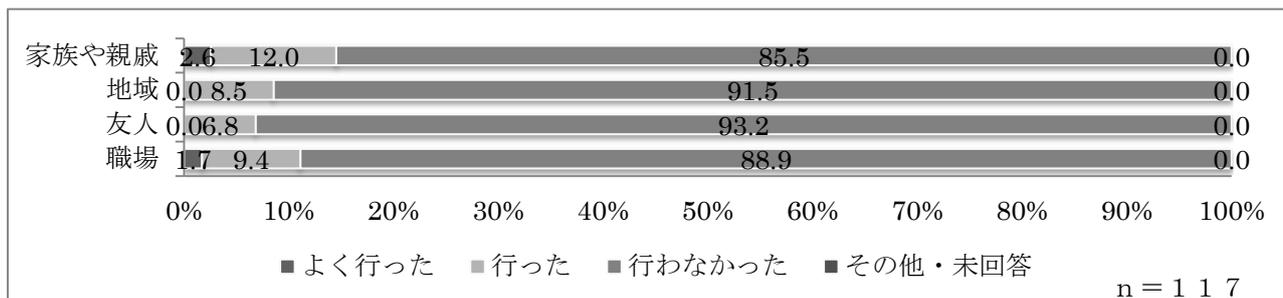
どの項目も割合が低くなっている。その中でも「家族や親戚」では、「よく行った」「行った」を合わせても約29%である。(図(2)-45)



図(2)-45

(イ) 北調査研究対象地域

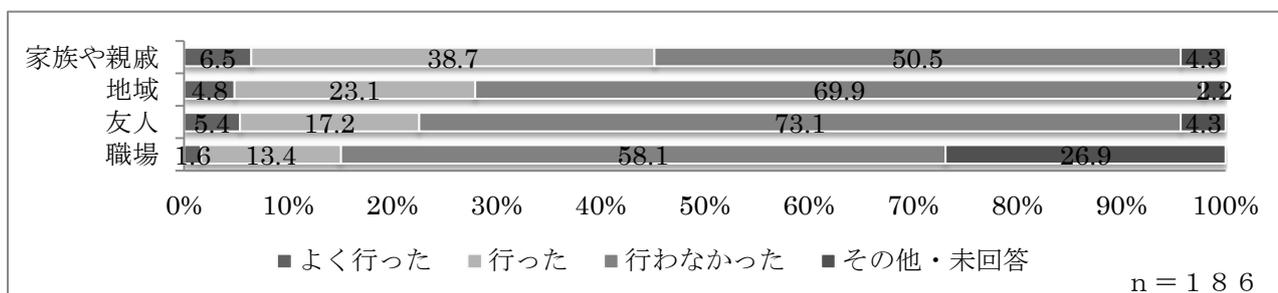
非常時の協力・支援活動について「家族や親戚」に、「よく行った」2.6%「行った」12.0%と合わせて14.6%、「職場」に「よく行った」1.7%「行った」9.4%と合わせて11.1%と低い。しかし、県全体などと比較すると「家族や親戚」の次に「職場」が高い割合を占めるのは特徴がある。また「地域」「友人」においては8.5%、6.8%と同じように低くなっている。(図(2)-46)



図(2)-46

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

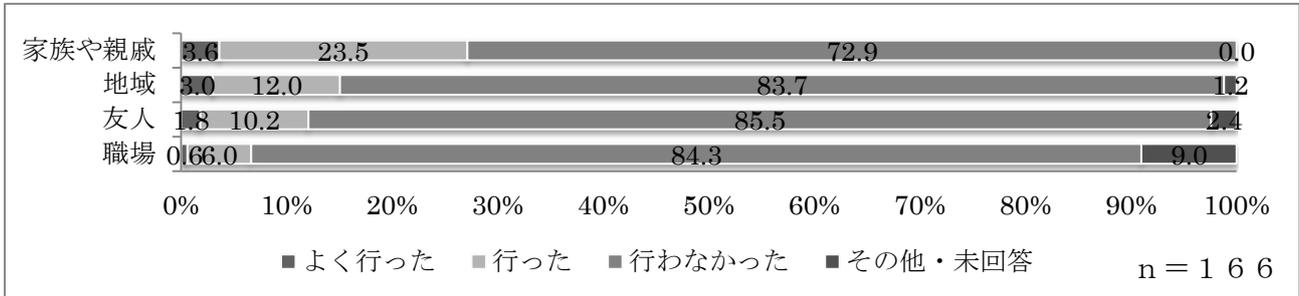
非常時の協力・支援活動について「家族や親戚」では、「よく行った」「行った」を合わせると45.2%と高く、以下「地域」27.9%、「友人」22.6%、「職場」15.0%の順である。(図(2)-47)



図(2)-47

(エ) 鹿行調査研究対象地域

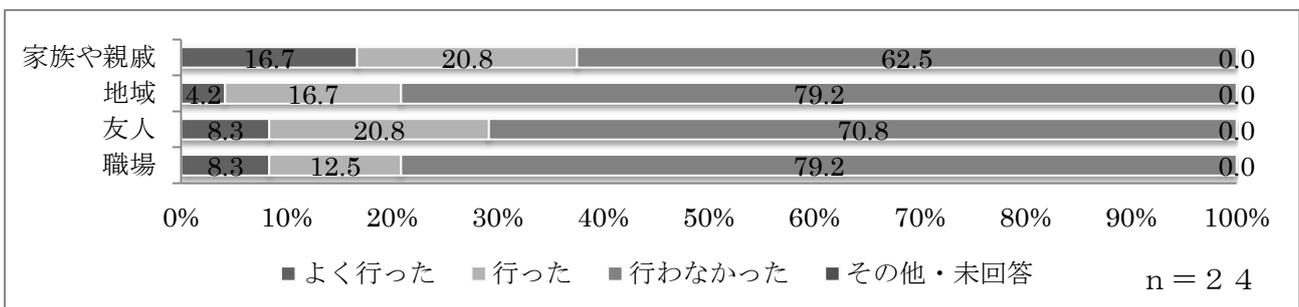
非常時の協力・支援に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると27.1%である。どの項目も、全体的に数値が低い。大きな災害から時間が経過し災害時のボランティアに対する意識にも変化が見られていることが推察できる。(図(2)-48)



図(2)-48

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

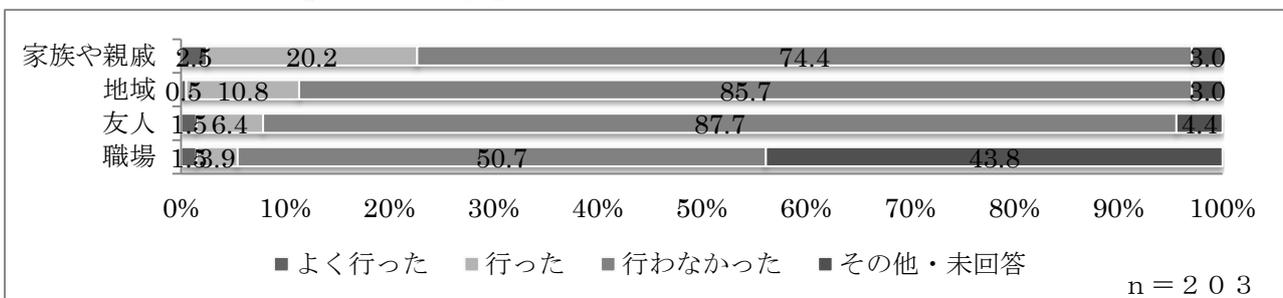
非常時の協力・支援に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると37.5%である。続いて、「友人」、「地域」、「職場」という順であり、どの項目も約20~30%の数値であるが、特に「職場」は、県全体の数値より高く、2倍以上の割合を示している。(図(2)-49)



図(2)-49

(カ) 南調査研究対象地域

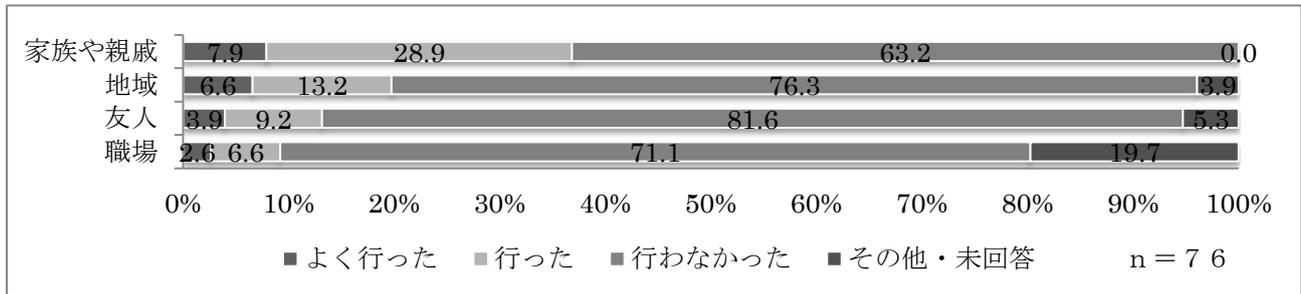
非常災害時における活動は、「家族や親戚」間で最も高く、「よく行った」2.5%、「行った」20.2%である。(図(2)-50)



図(2)-50

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

非常災害時における活動は、「家族や親戚」との協力・支援が1番高い比率を示し、「地域」の人との活動が次に高い比率を示している。(図(2)-51)

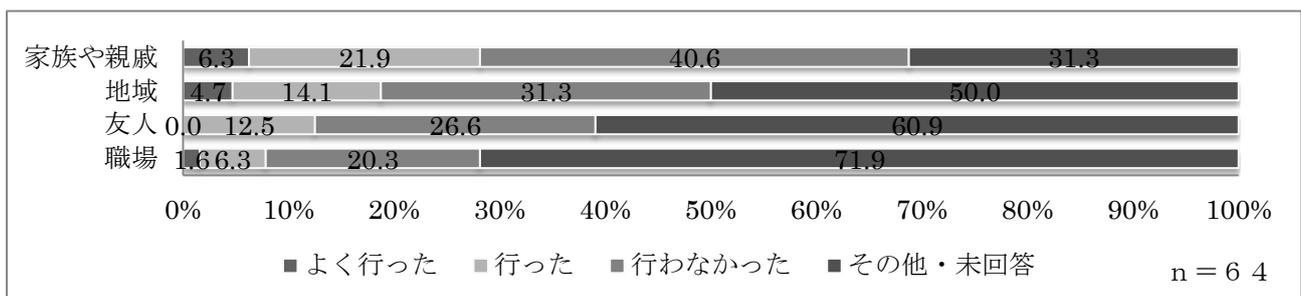


図(2)-51

(ク) 西調査研究対象地域

「家族や親戚」は、「よく行った」6.3%と「行った」21.9%を合わせると28.2%である。「地域」での数値を同様に見ると18.8%にとどまる結果となった。県全体と比較すると全体的に若干低い値となっており、東日本大震災被害が県内でも比較的小さい地域であったため活動にも影響していると推察できる。

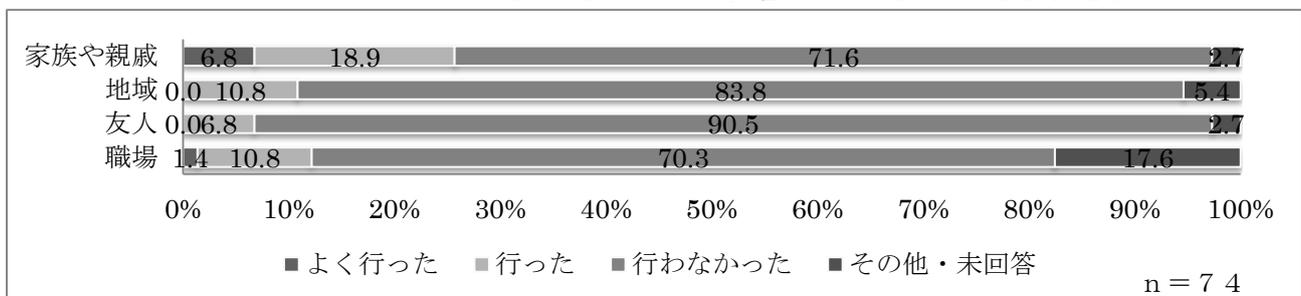
(図(2)-52)



図(2)-52

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

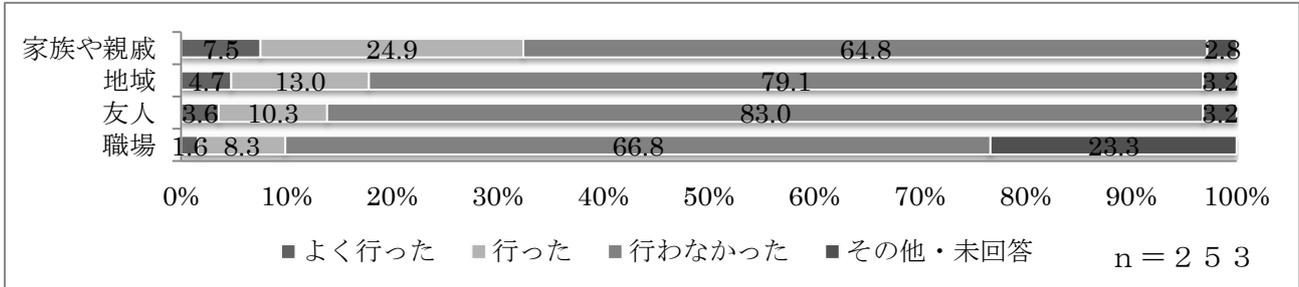
「家族や親戚」では、「よく行った」6.8%と「行った」18.9%を合わせると25.7%である。「職場」での数値を同様に見ると12.2%にとどまる結果となった。県全体と比較すると、「職場」のみ約3%高くなっており、それ以外は全体的に低い値となっている。東日本大震災被害が県内でも比較的小さい地域であったことや、(図(1)-41)と併せてみると就業状況が影響していると考えられる。(図(2)-53)



図(2)-53

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

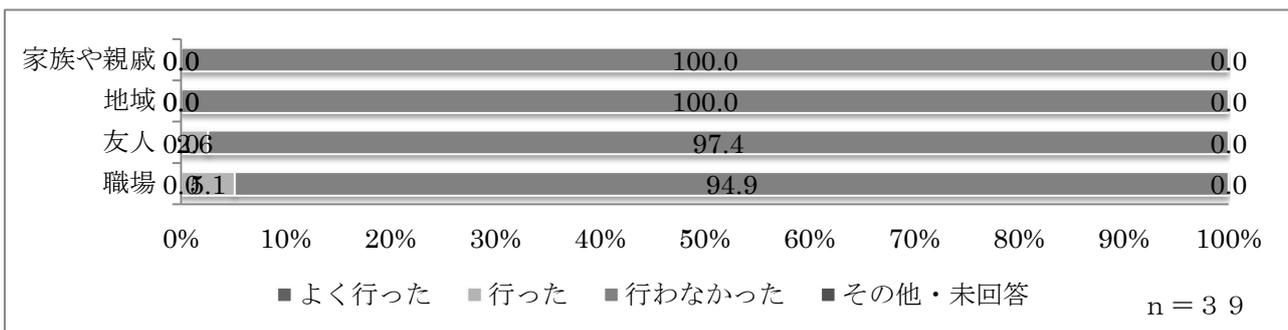
「家族や親戚」では「よく行った」7.5%、「行った」24.9%を合わせた32.4%が最も高い割合で、「職場」の「よく行った」1.6%、「行った」8.3%を合わせた9.9%が最も低い割合である。「地域」「友人」においては17.7%、13.9%と同じく低い割合になっている。(図(2)-54)



図(2)-54

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」について、全ての縁において0.0%であり、「行った」についても、「職場」5.1%、「友人」2.6%と、非常に低い割合である。日常生活の助け合いが頻繁に行われていることを踏まえれば、緊急性のある非常災害が発生しなかったことが、数値が低かった要因ではないかと推測できる。(図(2)-55)

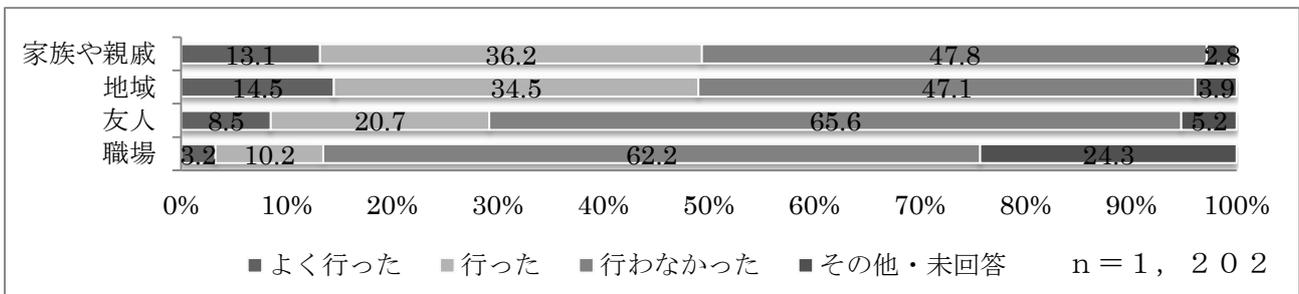


図(2)-55

カ 環境保全を図る企画や運営に関する活動

(ア) 県全体

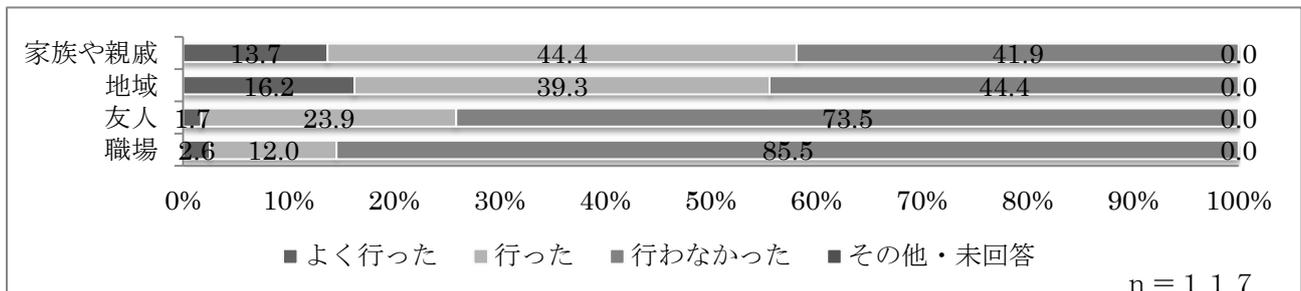
「家族や親戚」「地域」がほぼ同数で、「よく行った」「行った」を合わせると約49%である。「友人」が約30%で続くが、「職場」は約14%で低くなっている。(図(2)-56)



図(2)-56

(イ) 北調査研究対象地域

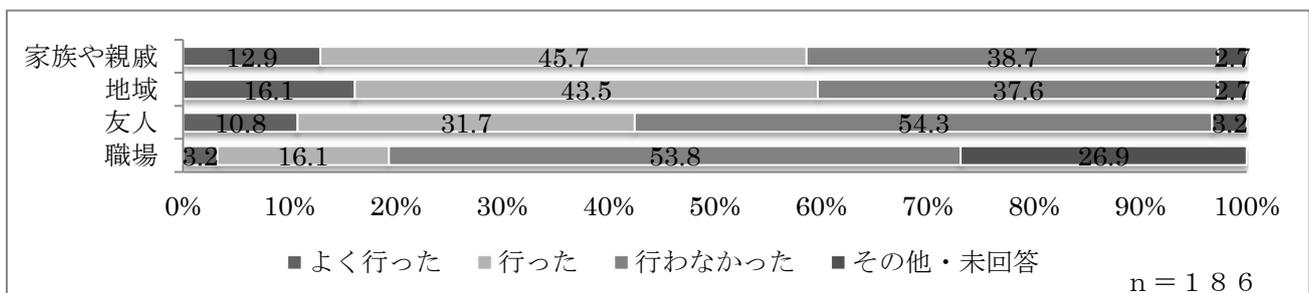
環境保全活動について「家族や親戚」,「地域」で58.1%, 55.5%, と高く,「友人」25.6%,「職場」では14.6%, と低くなっている。(図(2)-57)



図(2)-57

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

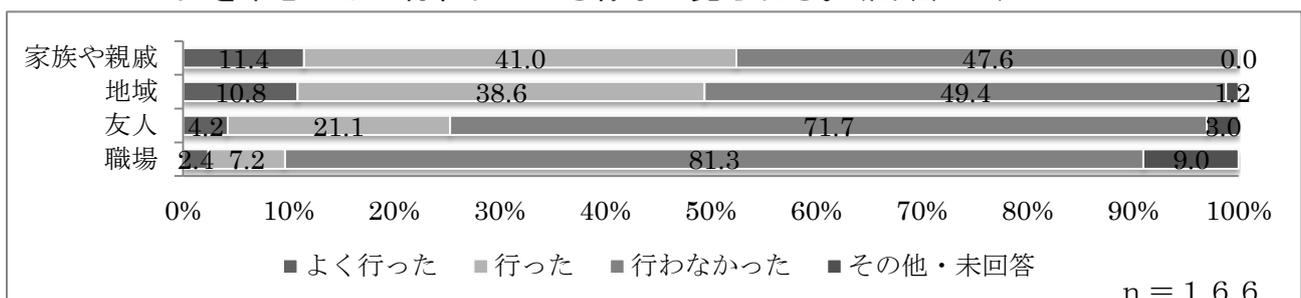
環境保全活動について「地域」,「家族や親戚」で59.6%, 58.6%と高い。「友人」については42.5%,「職場」は19.3%, である。(図(2)-58)



図(2)-58

(エ) 鹿行調査研究対象地域

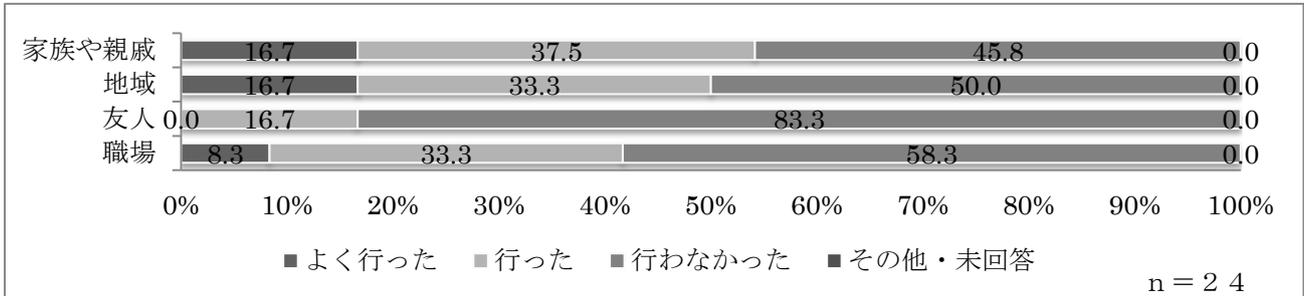
環境保全活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは,「家族や親戚」の項目で,「よく行った」「行った」を合わせると52.4%である。続いて,「地域」の項目が49.4%となっている。環境保全という身の回りに関わる活動は,居住区を中心にして行われている様子が見られる。(図(2)-59)



図(2)-59

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

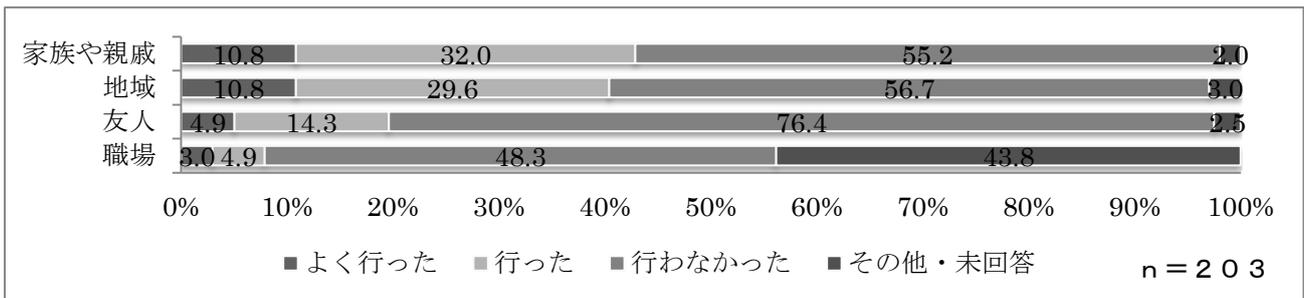
環境保全活動に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると54.2%、続いて、「地域」の項目が50.0%である。「職場」の項目も41.6%と、県全体の数値の3倍以上の割合を示し、環境保全に活動に対する意識が高いことがわかる。(図(2)-60)



図(2)-60

(カ) 南調査研究対象地域

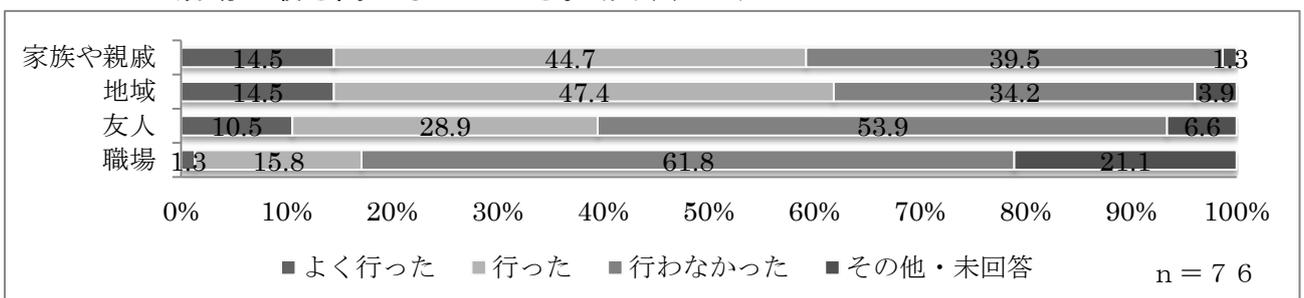
地域の環境全活動と一緒に参加した人は、「家族や親戚」が「よく行った」10.8%、「行った」32.0%と最も多く、次いで「地域」の「よく行った」10.8%、「行った」29.6%という結果である。(図(2)-61)



図(2)-61

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

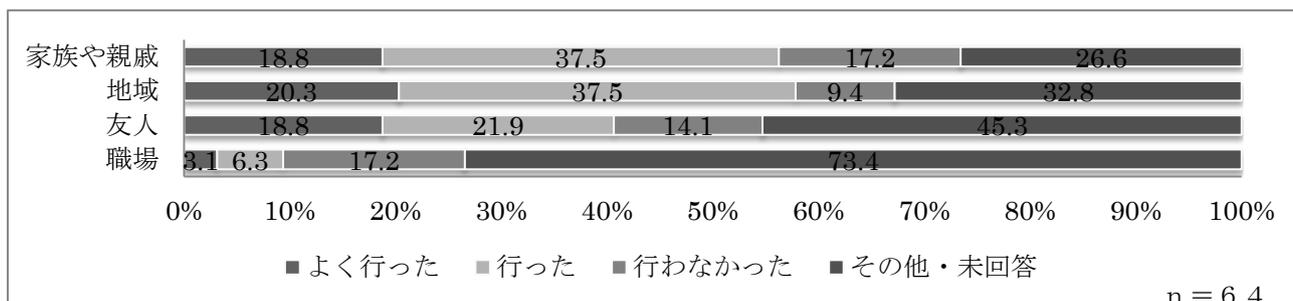
環境保全活動は、南調査研究対象地域と県全体では、「家族や親戚」の活動率が最も高いのに対し、南コミュニティ再生事業対象地域では、「地域」の人との活動が最も高くなっている。(図(2)-62)



図(2)-62

(ク) 西調査研究対象地域

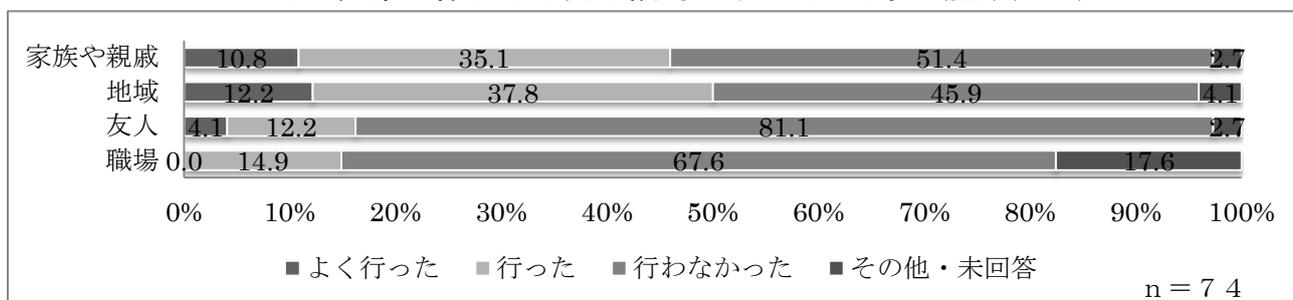
環境保全活動について、「地域」に関わることは、「よく行った」20.3%と「行った」37.5%、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」18.8%と「行った」37.5%となり、どちらも合わせると60%に近い結果となった。「友人」に関わることは、「よく行った」18.8%と「行った」21.9%を合わせると約40%になり、県全体と比較しても、自然環境に恵まれている立地の影響からか高い数値となっている。しかしながら、「職場」に関することは県全体の数値より低くなっており、(図(1)-41)と併せてみると就業状況が影響していると考えられる。
(図(2)-63)



図(2)-63

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

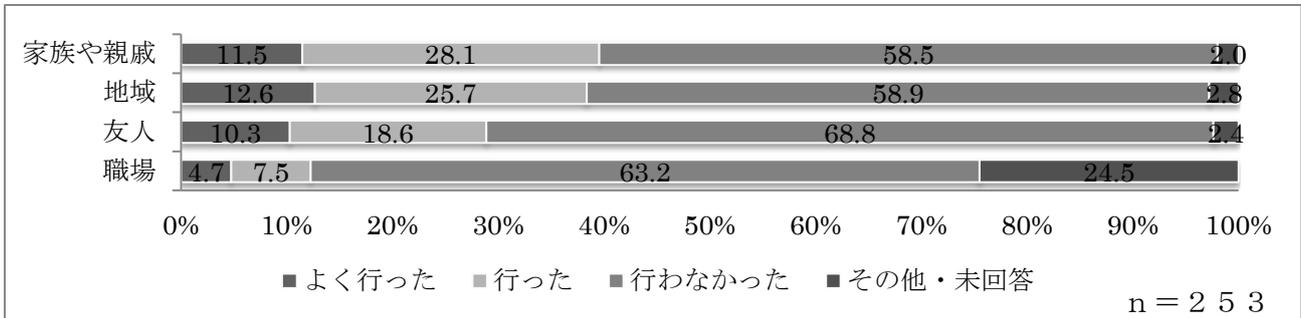
環境保全活動について、「地域」に関わることは、「よく行った」12.2%と「行った」37.8%を合わせると50.0%、「家族や親戚」に関わることは45.9%となった。友人に関わることは、「よく行った」4.1%と「行った」12.2%を合わせると16.3%になり、県全体と比較すると約13%低い値となった。「友人」に関わること以外については、県全体とほぼ同じ傾向になっている。(図(2)-64)



図(2)-64

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

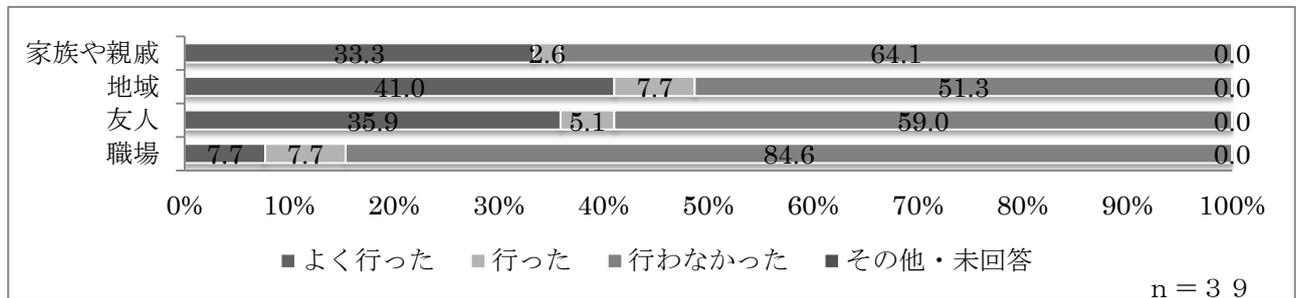
環境全活動では、「家族や親戚」が「よく行った」11.5%、「行った」28.1%を合わせた39.6%が最も高く、次いで「地域」が同様に38.3%という結果である。職場以外の3つの縁で「よく行った」割合が比較的高い。(図(2)-65)



図(2)-65

(サ) 日光市土呂部地区

「地域」で「よく行った」41.0%と最も高く、「行った」7.7%と合わせると約5割が活動に取り組んでいる。その他の縁の「よく行った」については、「友人」35.9%、「家族や親戚」33.3%、「職場」7.7%の順となっており、全体と比較しても数値が高い。地域内での親類関係や友人関係が重なっていることもあり、血縁、友縁に関しても数値が高くなっている。また、清掃活動については、自治会や老人会等、地域での活動が多く、役員等の役割を担っている方は、必然的に活動の企画、運営に携わるため、数値が高くなっている。(図(2)-66)

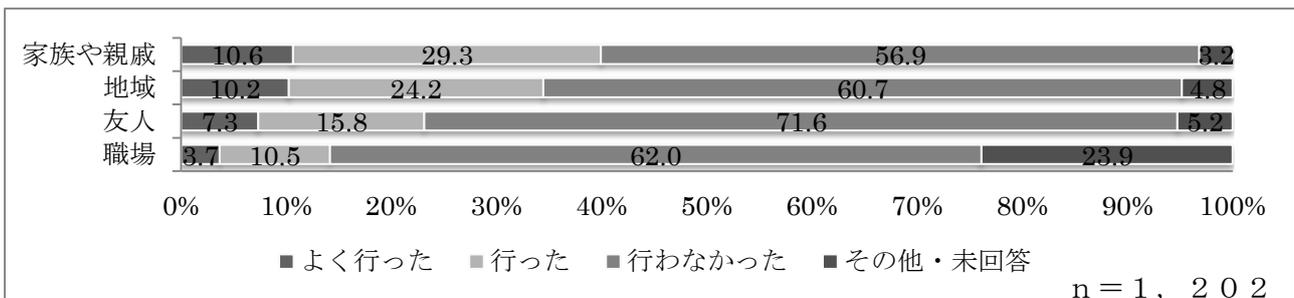


図(2)-66

キ 安全を守る活動

(ア) 県全体

「よく行った」「行った」を合わせると、「家族や親戚」「地域」の割合が約34%～約40%で比較的高い。「友人」が約23%で続いている。(図(2)-67)

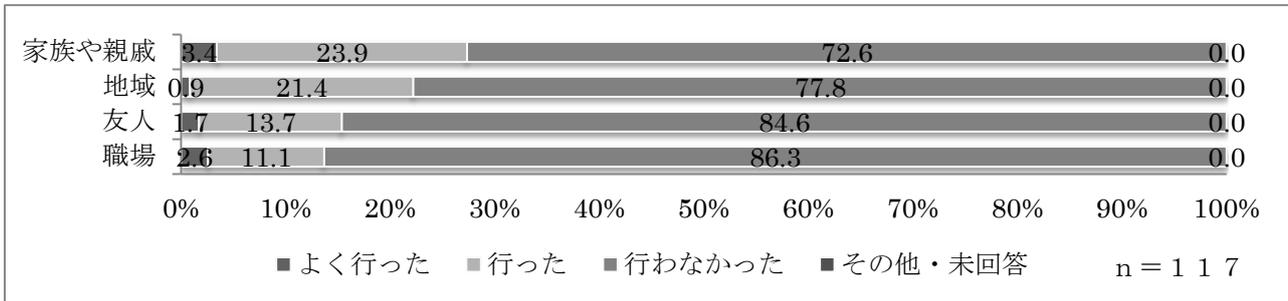


図(2)-67

(イ) 北調査研究対象地域

安全を守る活動について「家族や親戚」27.3%、「地域」22.3%、「友人」15.4%、「職場」13.7%であり、県全体と比較して全体に活動は低い傾向である。

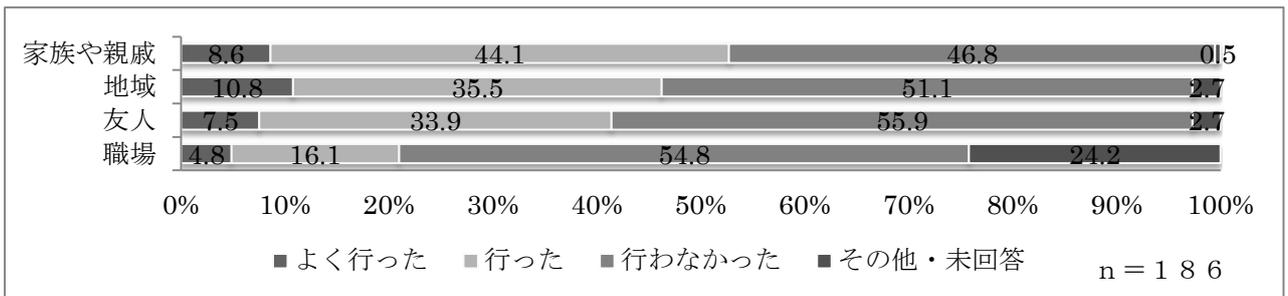
(図(2)-68)



図(2)-68

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

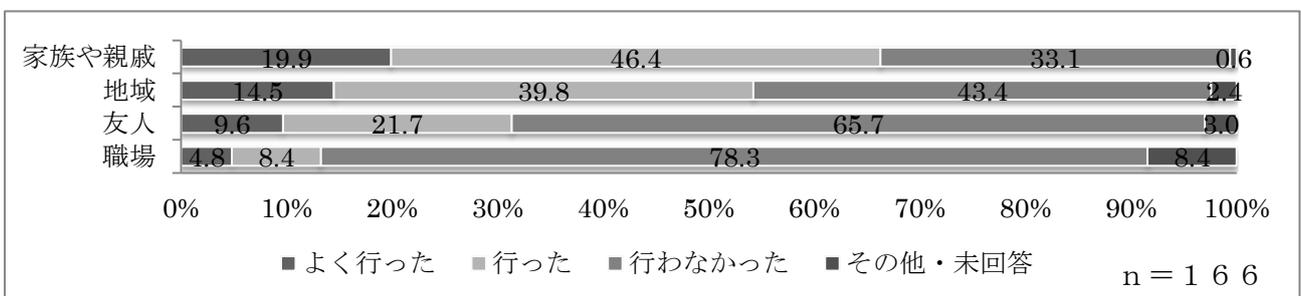
安全を守る活動について「家族や親戚」52.7%「地域」46.3%、「友人」41.4%、「職場」20.9%であり「家族や親戚」「地域」の割合が県全体と比較して高い割合を示している。(図(2)-69)



図(2)-69

(エ) 鹿行調査研究対象地域

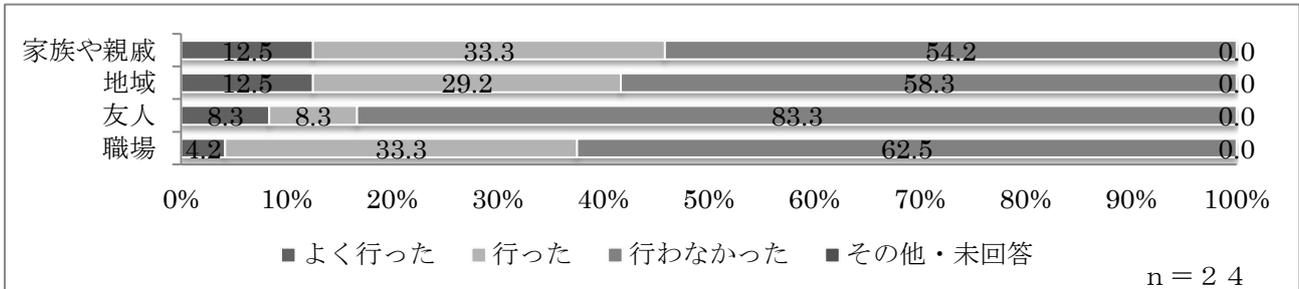
安全を守る活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると66.3%である。続いて、「地域」の項目が54.3%である。どの項目においても県全体の数値より高く、日頃から子どもを取り巻く地域の中での安全に対する意識が高い様子が表れている。(図(2)-70)



図(2)-70

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

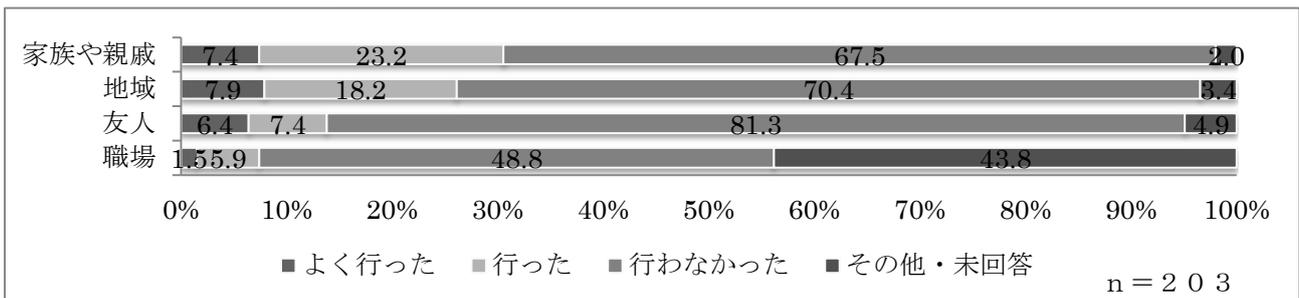
安全を守る活動に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると45.8%である。続いて、「地域」の項目が41.7%である。また、「職場」の項目が37.5%となっており、県全体の数値に比べて高く、職場全体での安全を守る活動への意識が高いことがわかる。(図(2)-71)



図(2)-71

(カ) 南調査研究対象地域

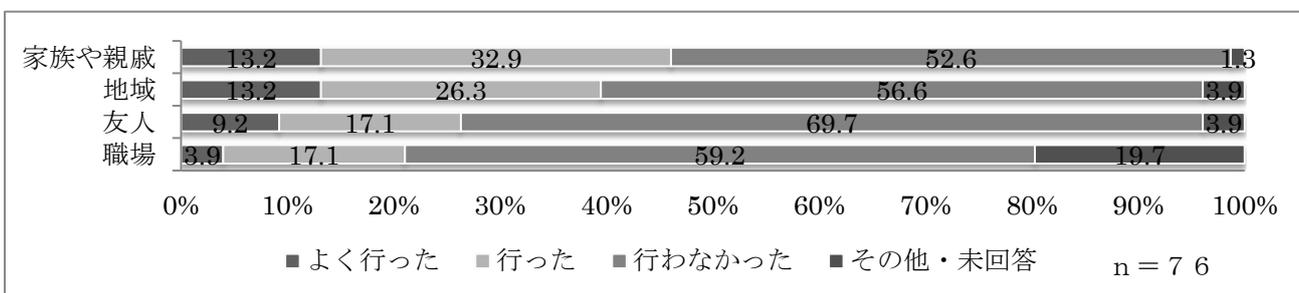
地域の安全を守る活動は、「よく行った」7.4%、「行った」23.2%を合わせた場合で見ると、「家族や親戚」と行うことが最も多い。「よく行った」だけで見ると、「地域」の人との7.9%が1番高い比率を示している。(図(2)-72)



図(2)-72

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

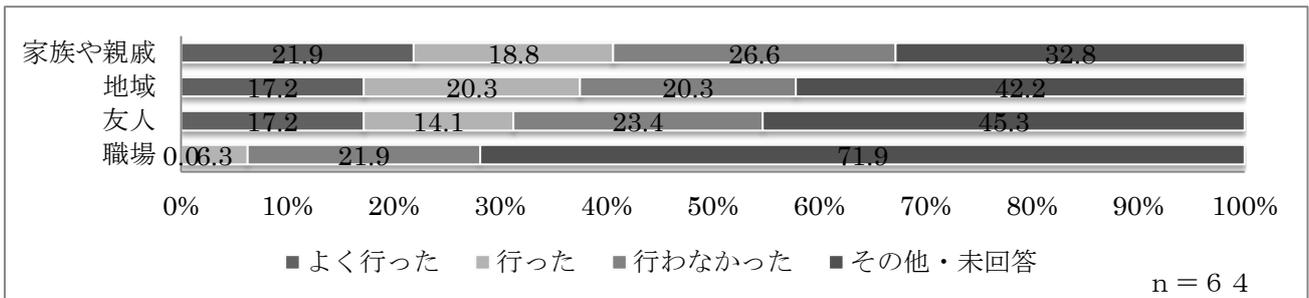
地域の安全を守る活動は、南コミュニティ再生事業対象地域、南調査研究対象地域、県全体すべてにおいて、「家族や親戚」との関わりの比率が1番高く、「地域」「友人」「職場」との関わりの順に少なくなっていく傾向である。(図(2)-73)



図(2)-73

(ク) 西調査研究対象地域

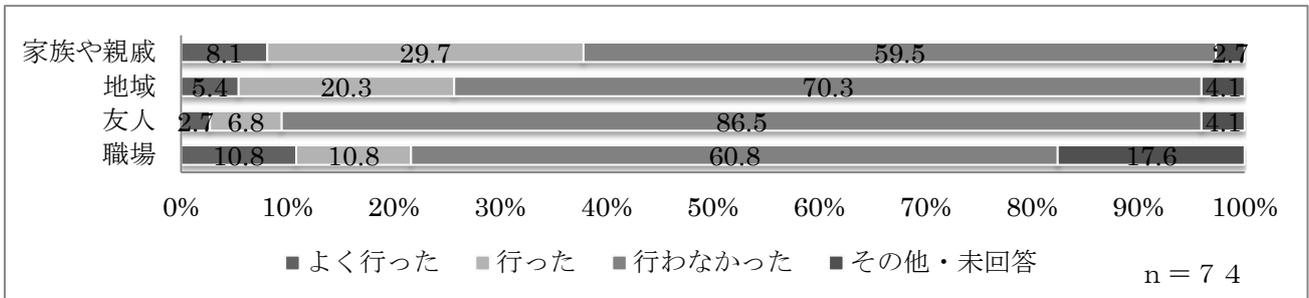
安全を守る活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」21.9%、「行った」18.8%を合わせると40.7%、「地域」に関わることは、「よく行った」17.2%、「行った」20.3%となり、合わせると37.5%という結果となった。友人に関わることは、「よく行った」17.2%と「行った」14.1%を合わせると31.3%にとどまるも県全体と比較すると高い数値となっている。しかしながら、「職場」に関することは県全体の数値より低くなっており、(図(1)-41)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。(図(2)-74)



図(3)-74

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

安全を守る活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」8.1%、「行った」29.7%を合わせると37.8%となった。「地域」に関わることは、「よく行った」5.4%、「行った」20.3%を合わせると25.7%、「友人」に関わることは、「よく行った」2.7%、「行った」6.8%を合わせると9.5%にとどまり、両項目とも県全体と比較すると10%程度低い数値となった。「職場」に関することについては、県全体の数値より7.4%高くなっており、(図(1)-45)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。(図(2)-75)

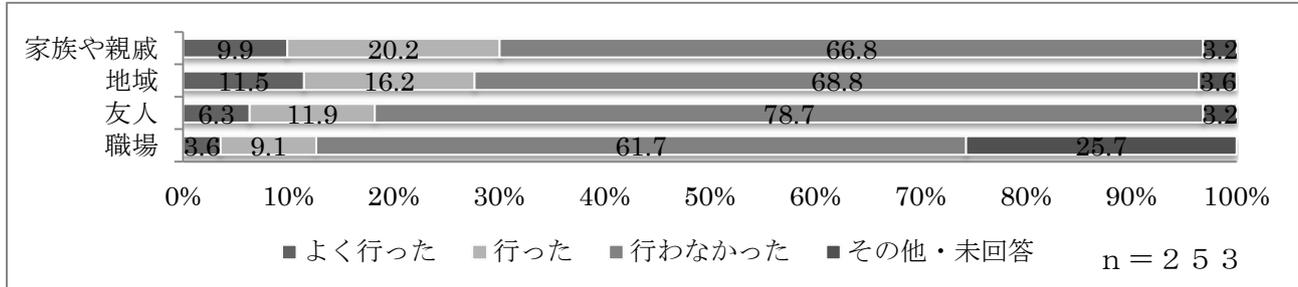


図(3)-75

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

安全を守る活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると30.1%である。続いて、「地域」が同様に27.7%である。「職場」の12.7%は比較的高いと言える。

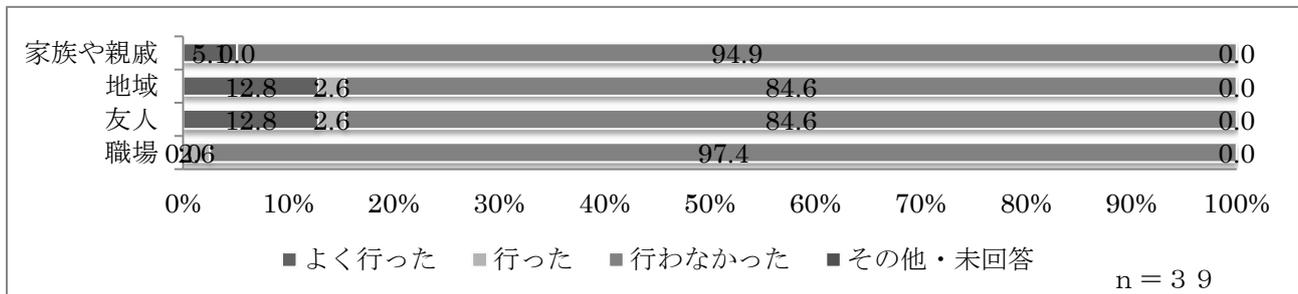
(図(2)-76)



図(2)-76

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」と「行った」を合わせると、「地域」、「友人」がともに15.4%であるが、全体と比較しても低い数値となっている。また、「家族や親戚」5.1%、「職場」2.6%と、1割にも満たない数値となっている。この地域は、高齢者が多く、小さな子どもがいないという特徴があり、なかなか活動に結びつきにくい状況にある。実際の活動者は、消防団に所属している比較的若い年代の方であり、「地域」と「友人」が同じ数値となっているのは、地域の消防団員であり、地域における友人でもあるためである。(図(2)-77)

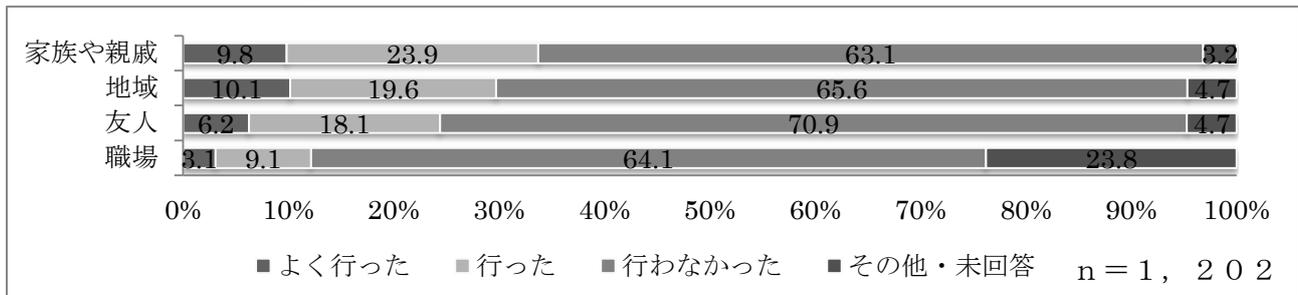


図(2)-77

ク 高齢者や障がい者支援活動

(ア) 県全体

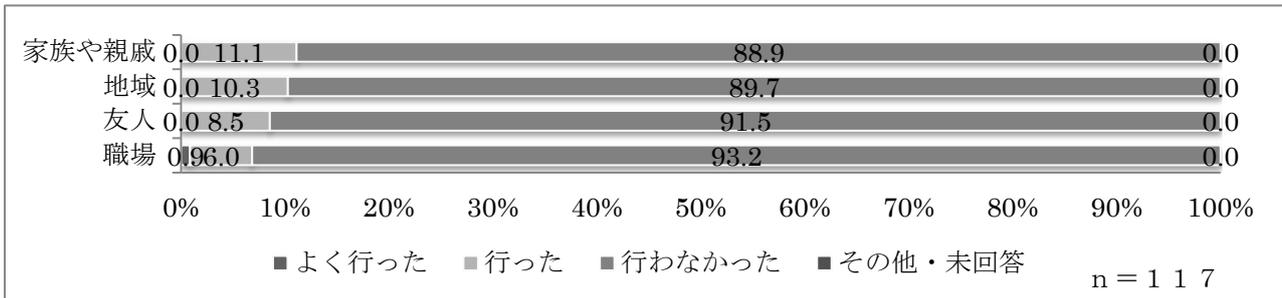
どの項目も関わりの割合が低く、「よく行った」「行った」を合わせても「家族や親戚」の約34%が最も高くなっている。(図(2)-78)



図(2)-78

(イ) 北調査研究対象地域

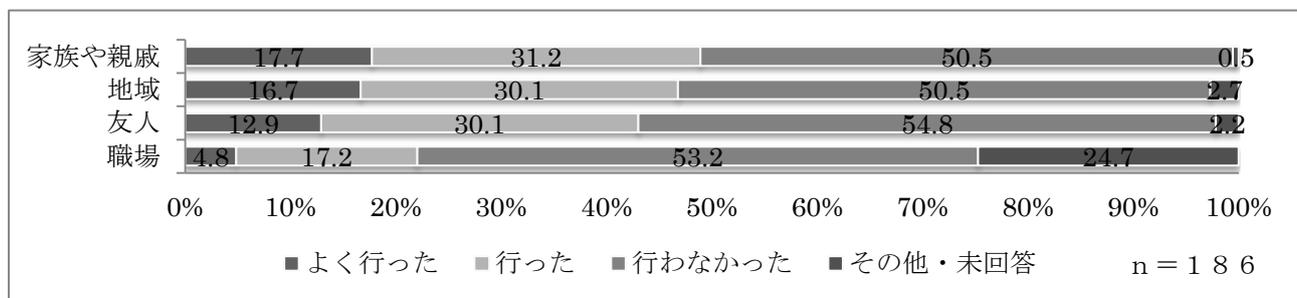
高齢者・障がい者支援活動については、どの項目についても1割程度の低い活動である。県全体や他地域と比較しても低い値である。(図(2)-79)



図(2)-79

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

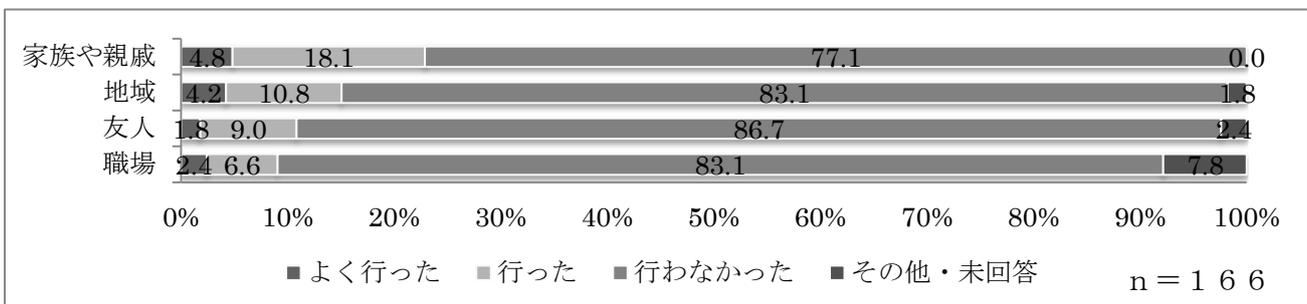
高齢者・障がい者支援活動については「家族や親戚」「地域」「友人」に対し48.9%, 46.8%, 43.0%と高いが、「職場」は22.0%と低くその半数となっている。(図(2)-80)



図(2)-80

(エ) 鹿行調査研究対象地域

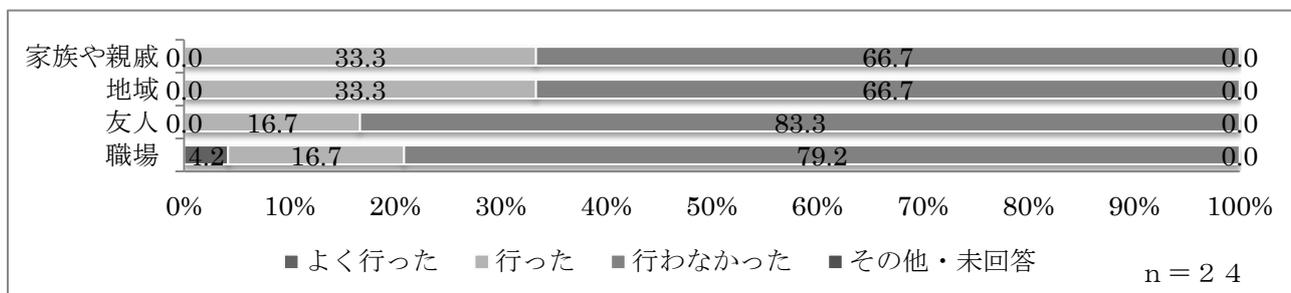
高齢者・障がい者支援に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると22.9%であるが、どの項目も全体的に数値が低い。地域高齢化が進む中、対象者は身近にたくさん存在しているはずだが、積極的に関わりをもっている人は少ない様子が見られる。(図(2)-81)



図(2)-81

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

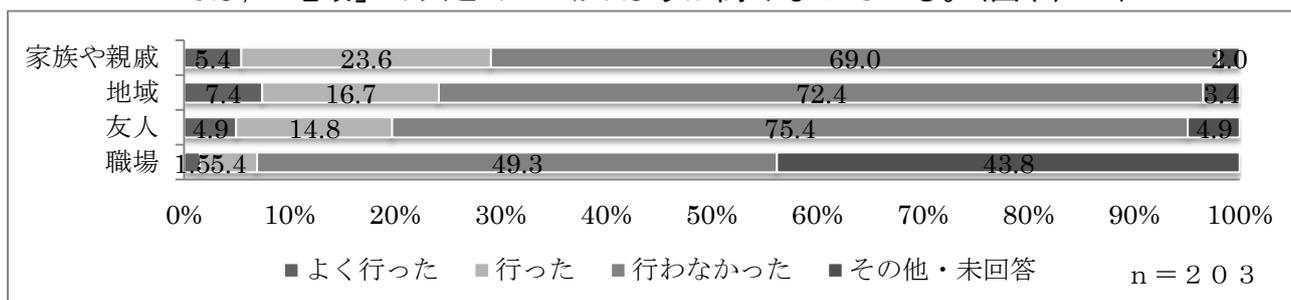
高齢者・障がい者支援に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」「地域」の項目で、ともに「よく行った」「行った」を合わせると、33.3%である。県全体の数値とほぼ同様であるが、他の活動に比べ、社会的少数者に関わる活動に対して、積極的でない様子が見られる。(図(2)-82)



図(2)-82

(カ) 南調査研究対象地域

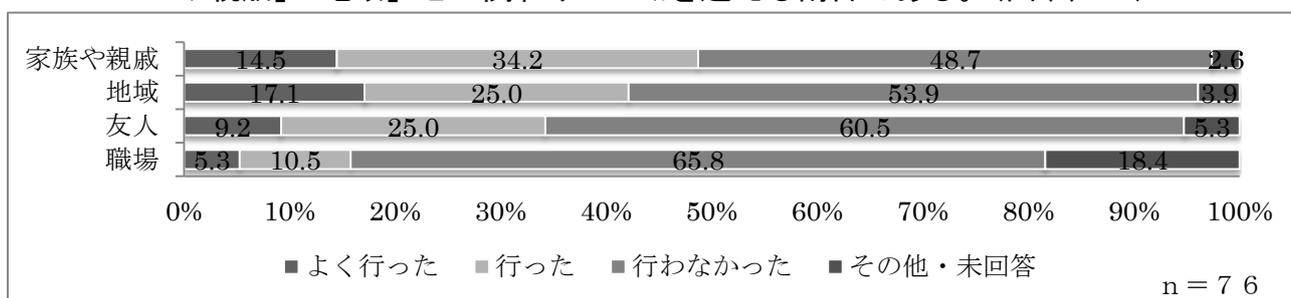
高齢者・障がい者への支援活動は、「家族や親戚」とともに行ったことが「よく行った」5.4%、「行った」23.6%を合わせると1番高いが、「よく行った」だけでは、「地域」の人との7.4%のほうが高くなっている。(図(2)-83)



図(2)-83

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

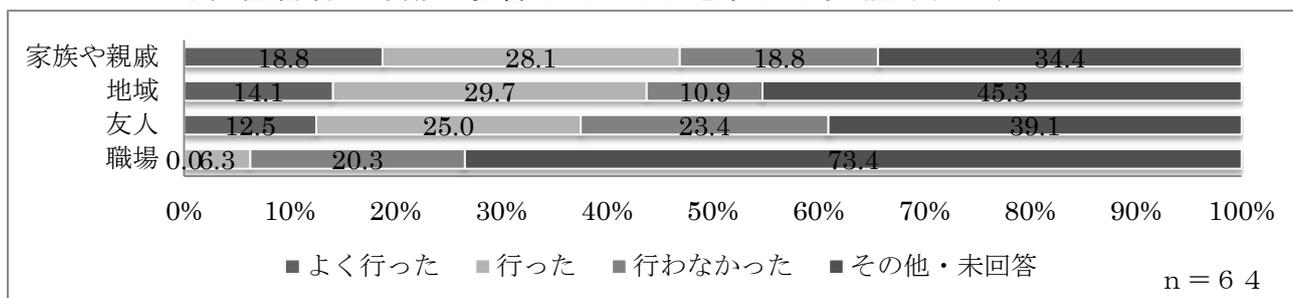
高齢者・障がい者に対する支援は、南調査研究対象地域と県全体が各項目とも40%を下回っているのに対して、南コミュニティ再生事業対象地域では、「家族や親戚」「地域」との関わりが40%を超える割合である。(図(2)-84)



図(2)-84

(ク) 西調査研究対象地域

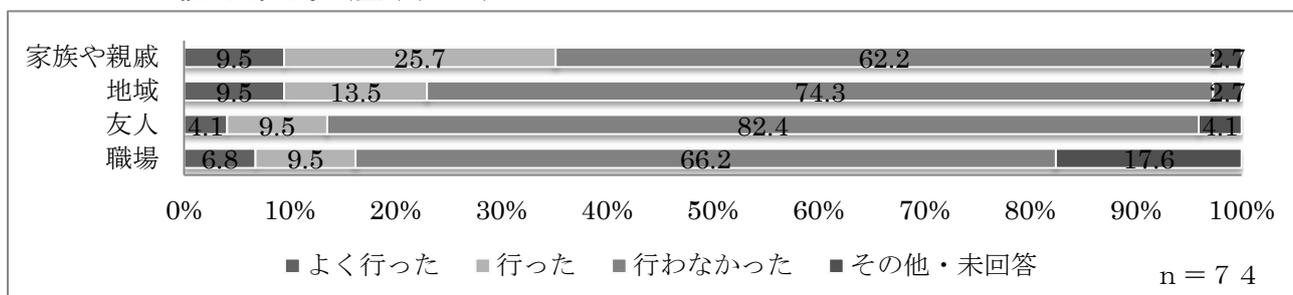
高齢者・障がい者支援について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」18.8%、「行った」28.1%を合わせると46.9%、「地域」に関わることは、「よく行った」14.1%、「行った」29.7%となり、合わせると43.8%となった。「友人」に関わることは、「よく行った」12.5%と「行った」25.0%を合わせると37.5%にとどまるも、県全体と比較すると3項目すべてにおいて、高い数値となっており、回答者の年齢が影響していると思われる。(図(2)-85)



図(2)-85

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

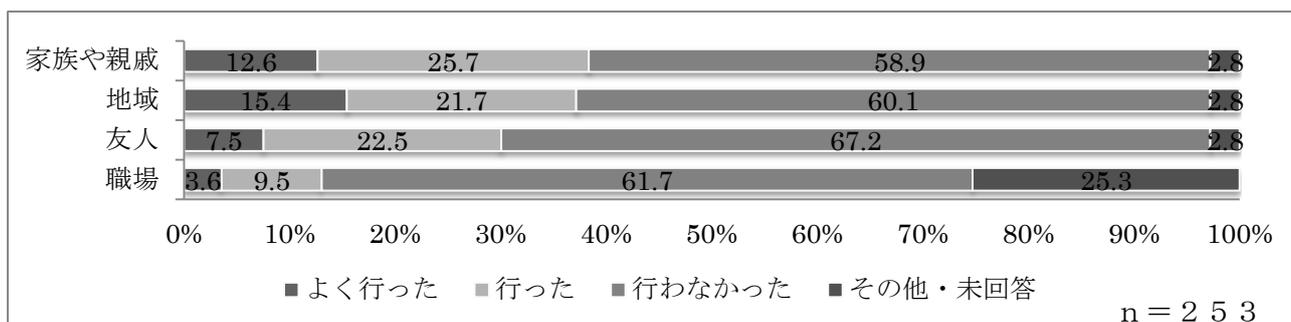
高齢者・障がい者支援について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」9.5%、「行った」25.7%を合わせると35.2%、「地域」に関わることは、「よく行った」9.5%、「行った」13.5%となり、合わせると23.0%となった。全体と比較してもほぼ同じような傾向にあるが、「友人」に関わることでは、「よく行った」4.1%と「行った」9.5%を合わせても13.6%にとどまり、比較すると約1割低い数値である。(図(2)-86)



図(2)-86

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

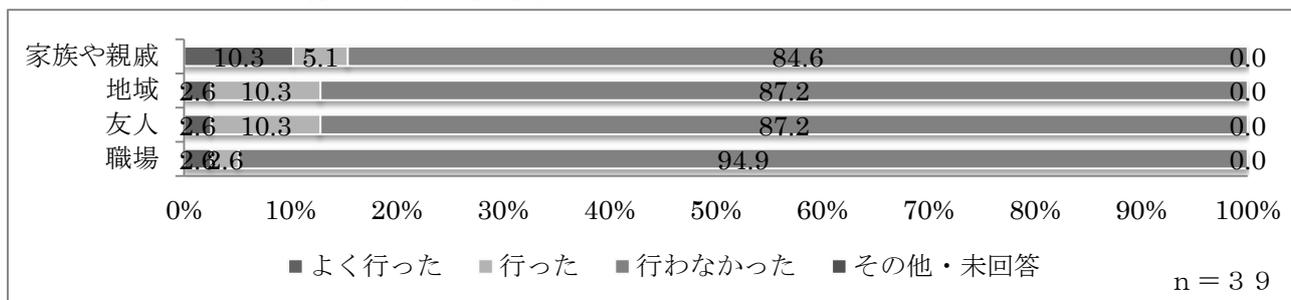
高齢者・障がい者支援に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると38.3%であるが、どの項目も全体的に数値が低い。「地域」の「よく行った」の15.4%や「友人」の「行った」の22.5%は高い割合を示し特筆できる。これは高齢化が進む中で対象者も支援する側も高齢化しているため「地域」や「友人」が積極的に関わりをもっていると思われる。(図(2)-87)



図(2)-87

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行っている」と「行っている」を合わせると、「家族や親戚」15.4%が最も高く、次いで、「地域」、「友人」がともに12.9%、「職場」5.2%の順となっている。全体と比較しても低い数値となっており、あまり取り組まれていないことがわかる。決して支援をしないということではないが、高齢者が多い地域であるため、まずは、他者に迷惑をかけず、自立した生活を営むこと（自助）の意識が強い傾向である。(図(2)-88)

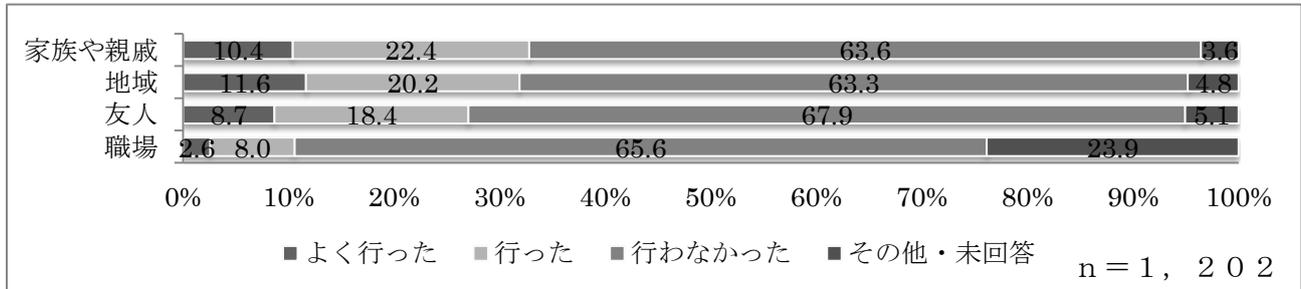


図(2)-88

ケ 芸術・文化・スポーツ分野の企画や運営に関する活動

(ア) 県全体

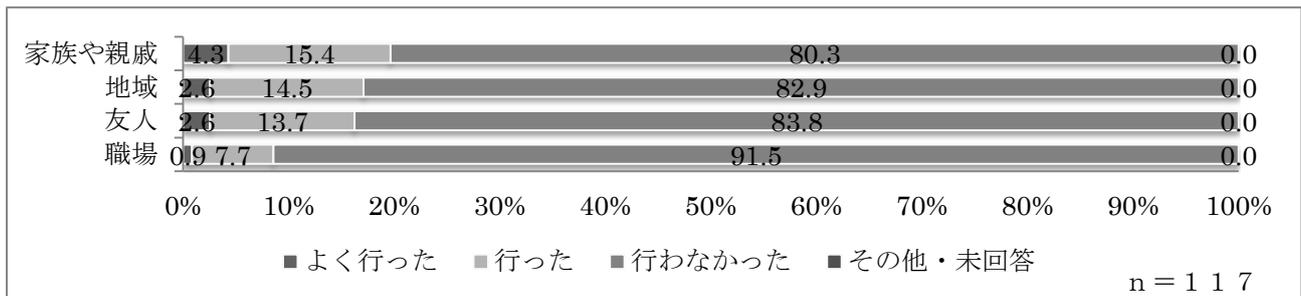
「よく行った」「行った」を合わせると、「地域」に関する割合が約32%、「家族や親戚」に関する割合が約33%、「友人」に関する割合が約27%、「地域」「家族や親戚」に関する割合が他の縁と比較して高くなっている。(図(2)-89)



図(2)-89

(イ) 北調査研究対象地域

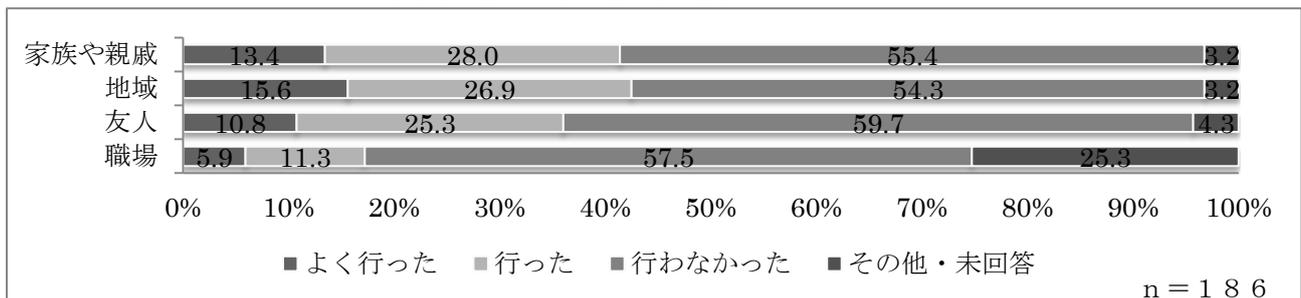
芸術・文化・スポーツ活動について、どの項目も2割に満たない低い値である。県全体や他地域と比較しても低くなっている。(図(2)-90)



図(2)-90

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

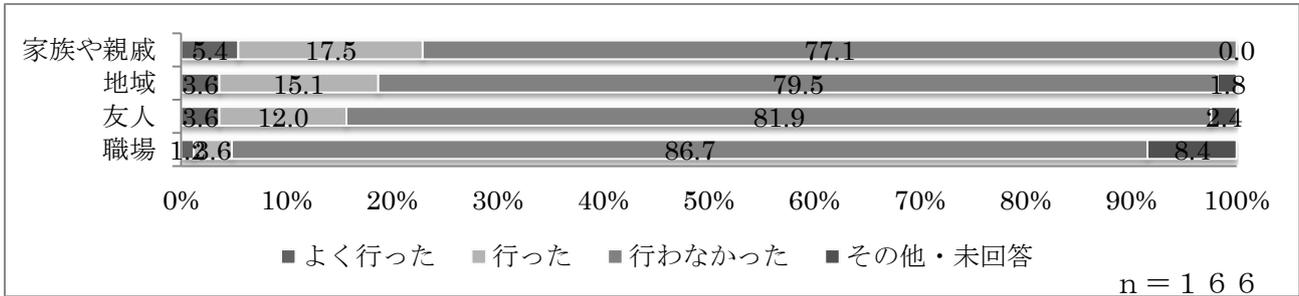
芸術・文化・スポーツ活動について、「家族や親戚」41.4%、「地域」42.5%、「友人」36.1%という高い値である。(図(2)-91)



図(2)-91

(エ) 鹿行調査研究対象地域

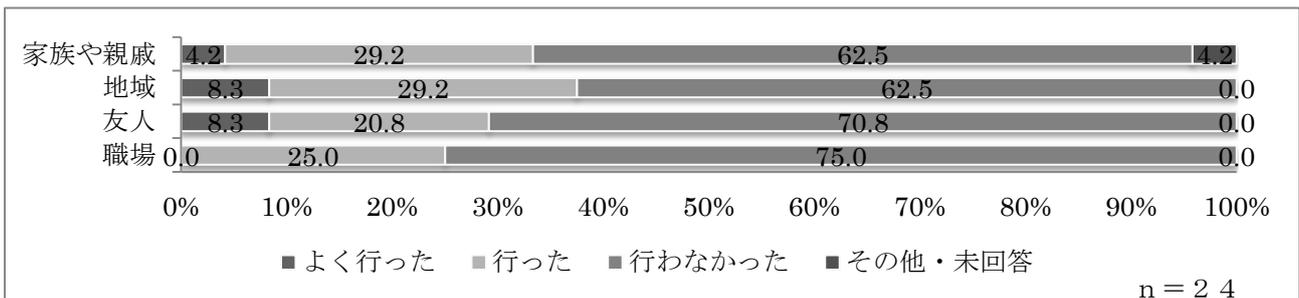
芸術・文化・スポーツ活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると22.9%である。県全体に比べ、どれも約1割程度低い数値を示している。この地域においては、サークル運営等に参加したり、活動したりしている人の割合が比較的少ない様子が見られる。(図(2)-92)



図(2)-92

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

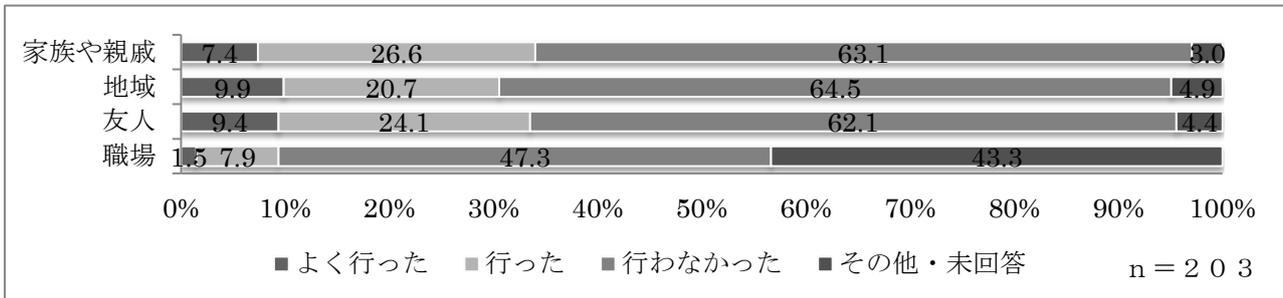
芸術・文化・スポーツ活動に関わることで高い数値を示しているのは、「地域」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると37.5%である。続いて、「家族や親戚」が33.4%、「友人」が29.1%となっている。「職場」の項目は、県全体に比べやや高く、25.0%となっている。この分野において、職場での関わりが多岐にわたり、広がっている様子が見られる。(図(2)-93)



図(2)-93

(カ) 南調査研究対象地域

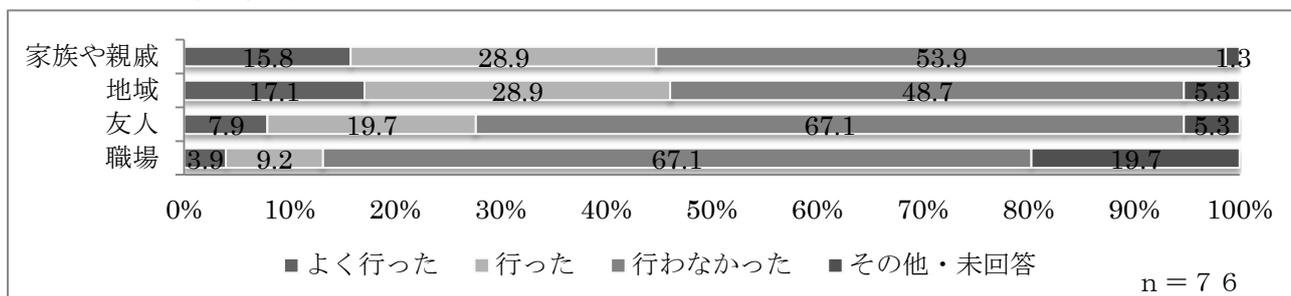
芸術・文化・スポーツに関する活動は、「よく行った」9.9%で「地域」での活動が1番高く、次に「友人」が9.4%である。「行った」は、26.6%で「家族や親戚」が1番高くなっている。(図(2)-94)



図(2)-94

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

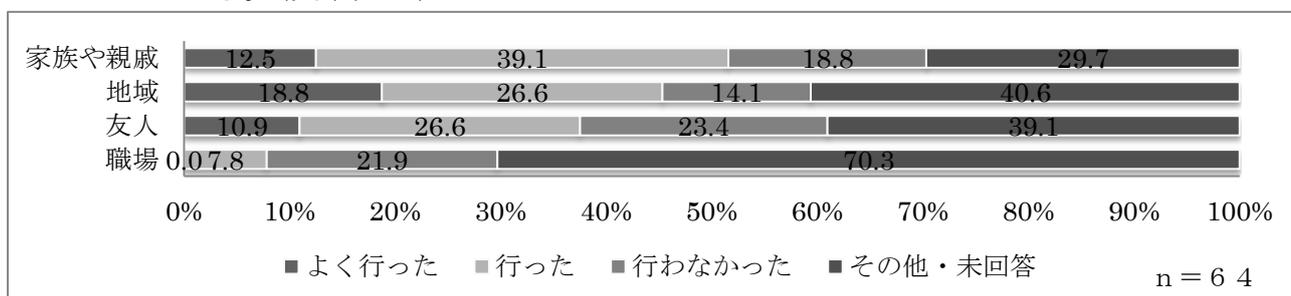
芸術・文化・スポーツに関する活動は、南調査研究対象地域は家族や「親戚と友人」の活動比率が高いのに対して、南コミュニティ再生事業対象地域は、「地域」での活動が1番高く、次いで「家族や親戚」との活動が高いという結果である。(図(2)-95)



図(2)-95

(ク) 西調査研究対象地域

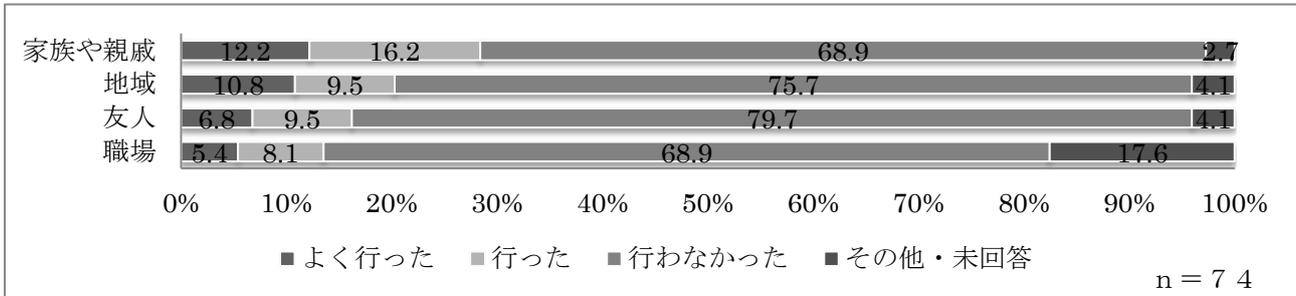
芸術・文化・スポーツ活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」12.5%と「行った」39.1%を合わせると51.6%、「地域」に関わることは、「よく行った」18.8%と「行った」26.6%となり合わせると45.4%という結果となった。「友人」に関わることは、「よく行った」10.9%と「行った」26.6%を合わせると37.5%にとどまるも、県全体と比較すると3項目において高い数値となっている。(図(1)-41)と併せてみると「就業状況」や、回答者の年齢が影響していると考えられ、芸術・文化・スポーツ活動は、個人のニーズ的要素が強いこともあり、「家族や親戚」「地域」「友人」に関わることの割合が特に高くなっている。(図(2)-96)



図(3)-96

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

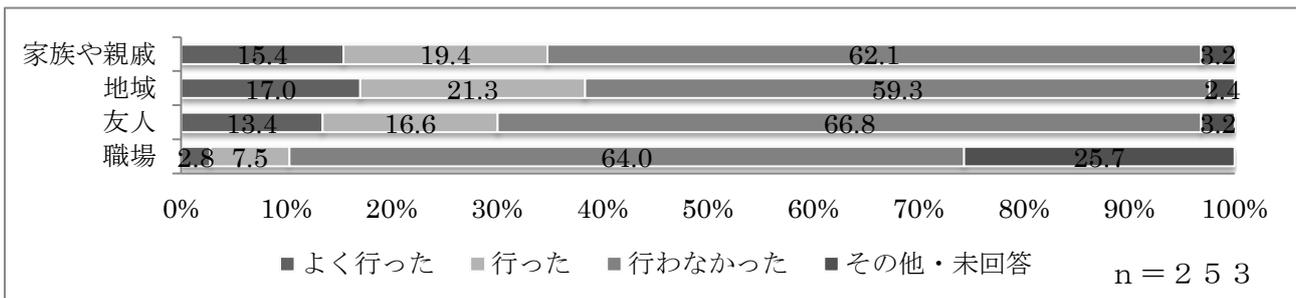
芸術・文化・スポーツ活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」12.2%と「行った」16.2%を合わせると28.4%、「地域」に関わることは、「よく行った」10.8%と「行った」9.5%となり合わせると20.3%という結果となった。「友人」に関わることは、「よく行った」6.8%と「行った」9.5%を合わせると16.3%にとどまり、県全体と比較して割合が低くなっている。また、「職場」に関することでは、約3%高くなっており（図(1)-42）と併せて見ると、就業率の影響があると考えられる。（図(2)-97）



図(2)-97

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

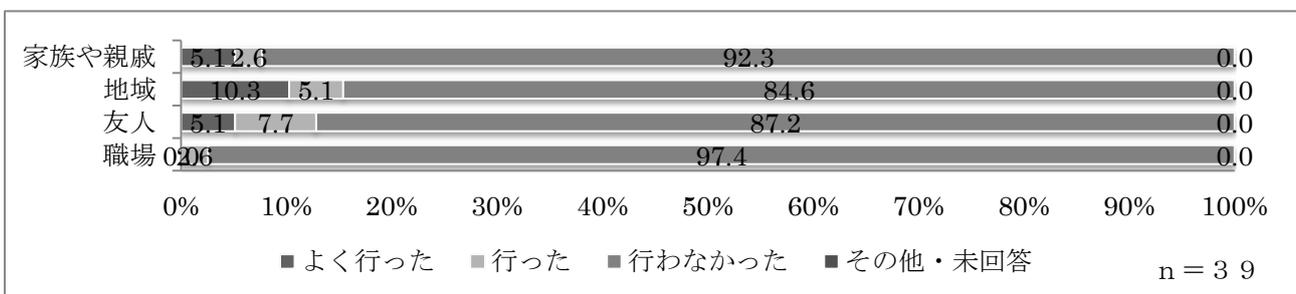
高い数値を示しているのは、「よく行った」「行った」を合わせると「地域」の項目で38.3%である。続いて、「家族や親戚」が34.8%、「友人」が30.0%となっている。「職場」の項目は10.3%で1番割合が低い事が分かる。（図(2)-98）



図(2)-98

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行っている」と「行っている」を合わせると、「地域」15.4%が最も高く、次いで、「友人」12.8%、「家族や親戚」7.7%、「職場」2.6%の順となっている。全体と比較しても低い数値となっており、あまり取り組まれていないことが分かる。（図(2)-99）

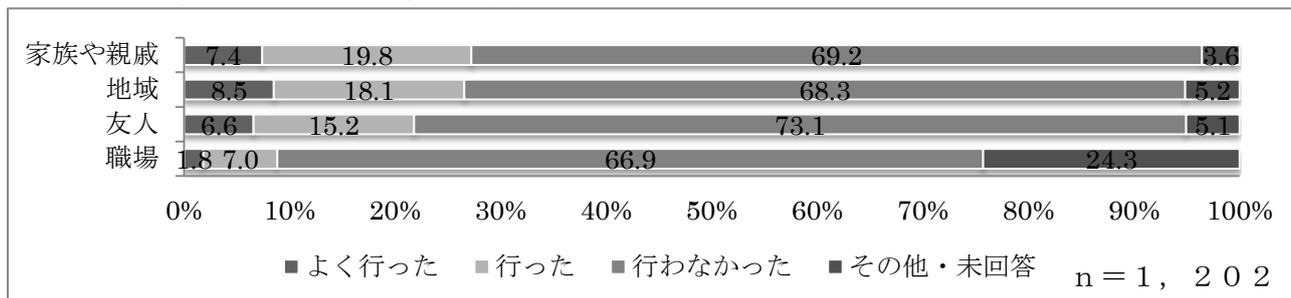


図(2)-99

コ 文化の保存や伝統行事の継承活動の企画や運営に関する活動

(ア) 県全体

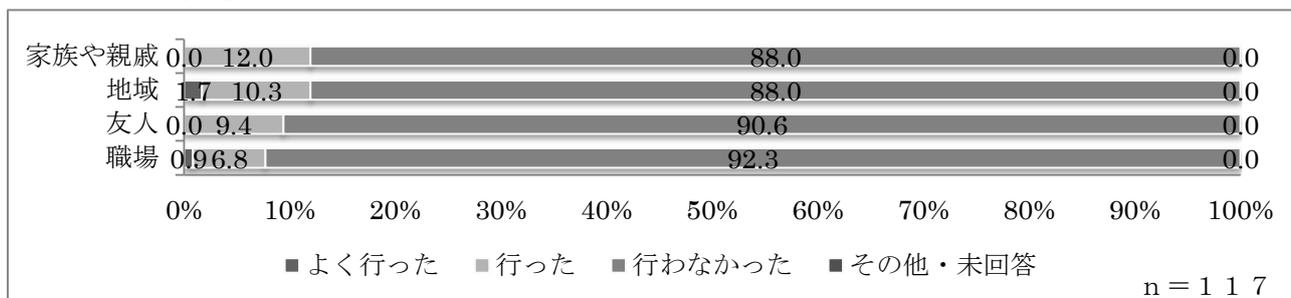
どの項目も関わりは比較的低い、「家族や親戚」「地域」での関わりが「よく行った」「行った」合わせた割合が約27%である。「職場」に関する割合は非常に低くなっている。(図(2)-100)



図(2)-100

(イ) 北調査研究対象地域

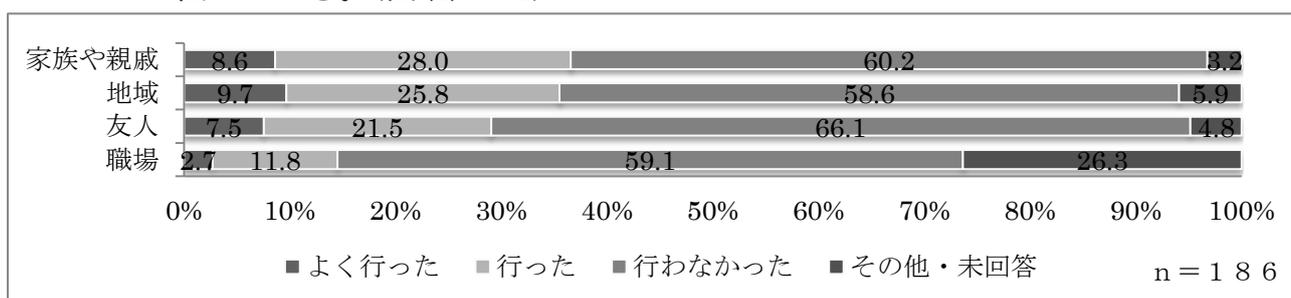
文化の保存・伝統行事の継承活動は「家族や親戚」12.0%、「地域」12.0%、「友人」9.4%「職場」7.7%とかなり低い。県全体や他地域と比較して見ると顕著である。(図(2)-101)



図(2)-101

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

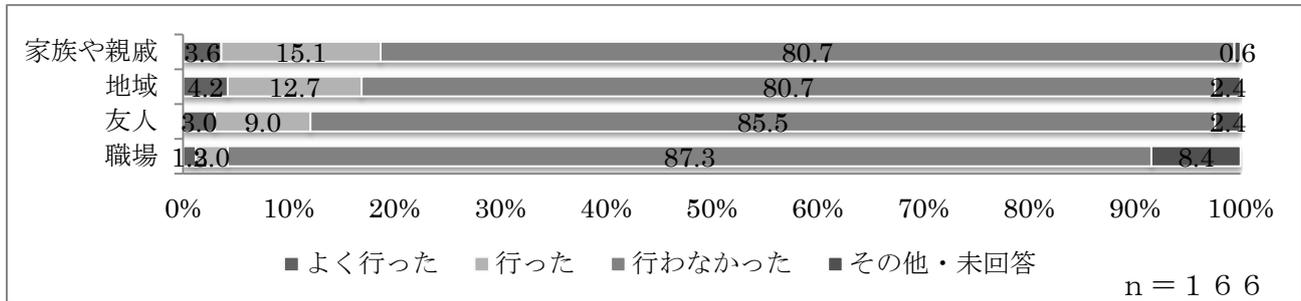
文化の保存・伝統行事の継承活動は「家族や親戚」36.6%、「地域」35.5%、「友人」29.0%、「職場」14.5%となっている。これは、どの項目を見ても県全体を上回っている。(図(2)-102)



図(2)-102

(エ) 鹿行調査研究対象地域

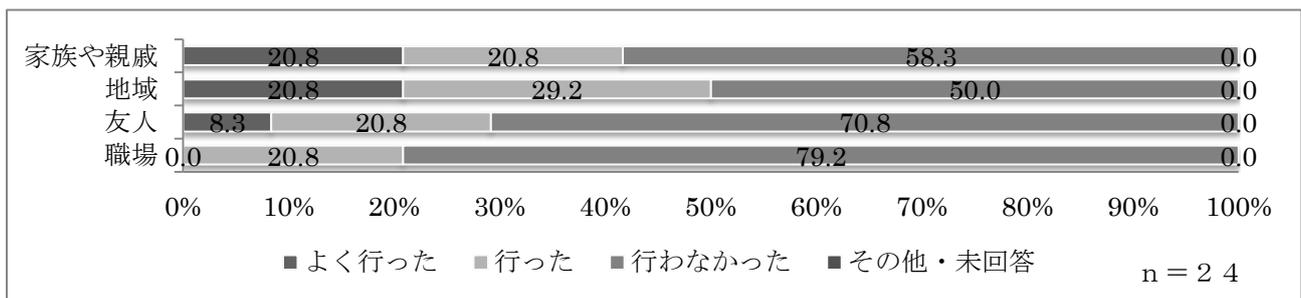
文化の保存・伝統行事の継承活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「家族や親戚」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると18.7%である。どの項目も県全体に比べて数値が低い。伝統的行事である地域の祭事等の開催が減少したため、そうした行事に関わる活動機会も必然的に減少していることも要因の一つに考えられる。(図(2)-103)



図(2)-103

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

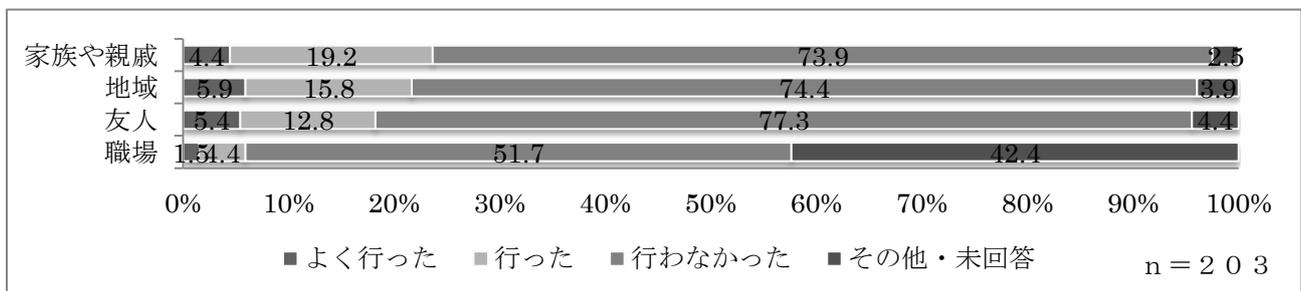
文化の保存・伝統行事の継承活動に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「地域」の項目で、「よく行った」「行った」を合わせると50.0%である。「家族や親戚」も41.6%と、県全体に比べて数値が高い。地域における伝統的行事や祭事等が、地域住民主体で行われている背景の表れであると思われる。(図(2)-104)



図(3)-104

(カ) 南調査研究対象地域

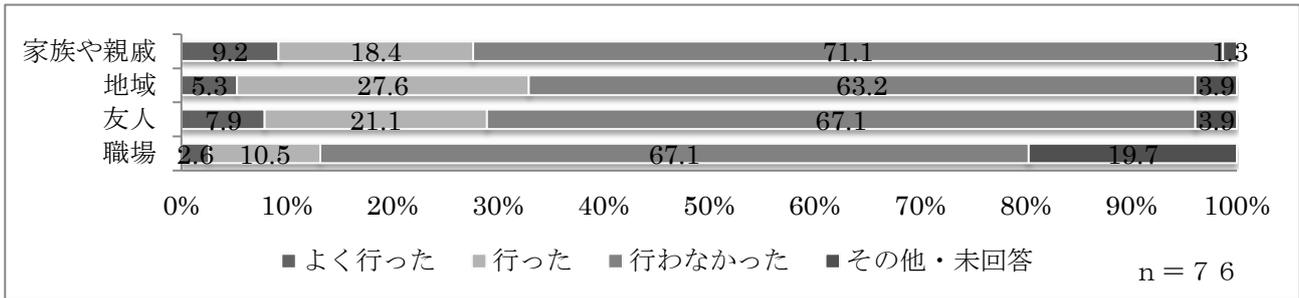
文化の保存・伝統行事の継承活動においては、「よく行った」5.9%で「地域」での活動が1番高く、次いで「友人」との活動が5.4%になっている。全般的に活動の割合は低い事が分かる。(図(2)-105)



図(2)-105

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

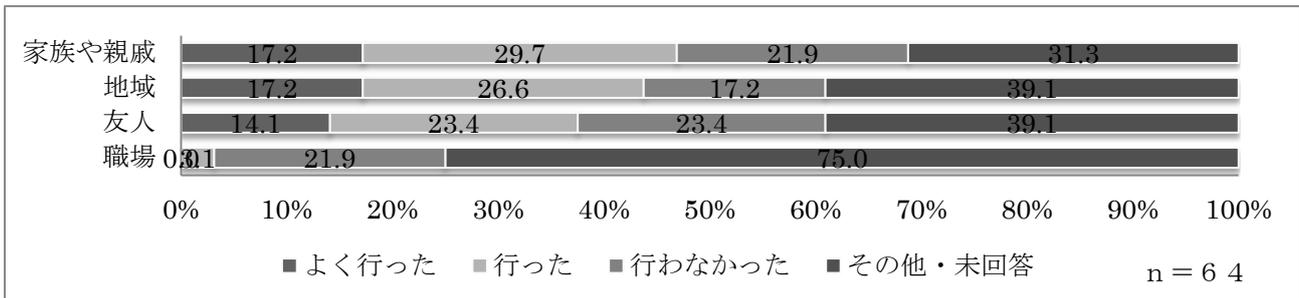
文化の保存・伝統行事の継承活動は、南コミュニティ再生事業対象地域では「地域」での関わりが最も高く、南調査研究対象地域、県全体とは異なる傾向である。(図(2)-106)



図(2)-106

(ク) 西調査研究対象地域

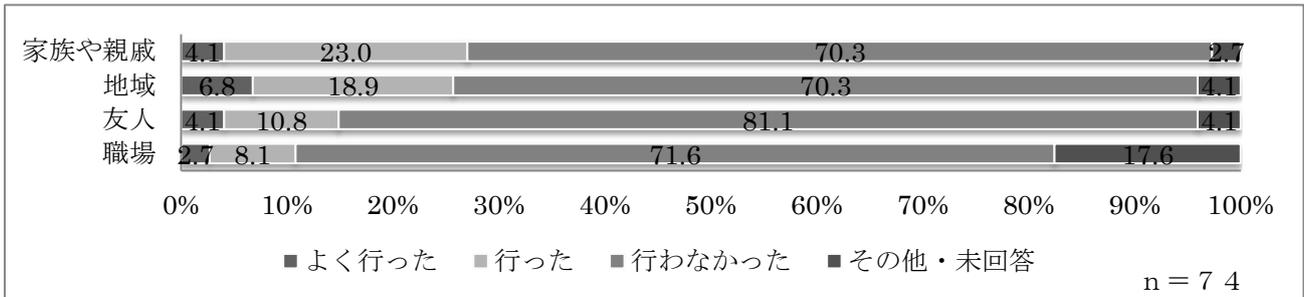
文化の保存・伝統行事の継承活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」17.2%と「行った」29.7%を合わせると46.9%である。「地域」に関わることは、「よく行った」17.2%と「行った」26.6%となり合わせると43.8%とである。「友人」に関わることは、「よく行った」14.1%と「行った」23.4%を合わせると37.5%にとどまるも、県全体と比較して、3項目において高い数値となっている。(図(1)-41)と併せてみると「就業状況」や、回答者の年齢が影響していると考えられ、文化の保存・伝統行事の継承活動は、「家族や親戚」「地域」「友人」に関わることの割合が高く、地域ぐるみの活動として定着していると考えられる。(図(2)-107)



図(2)-107

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

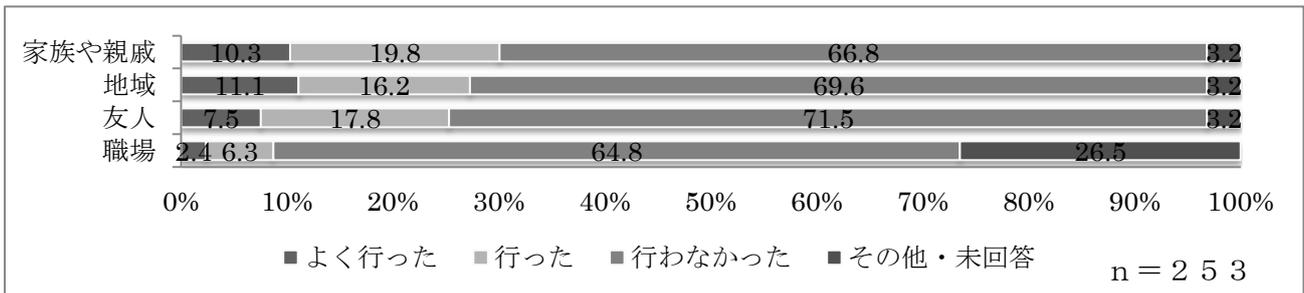
文化の保存・伝統行事の継承活動について、「家族や親戚」に関わることは、「よく行った」4.1%と「行った」23.0%を合わせると27.1%となる。「地域」に関わることは、「よく行った」6.8%と「行った」18.9%となり合わせると25.7%という結果である。「友人」に関わることは、「よく行った」4.1%と「行った」10.8%を合わせると14.9%にとどまり、県全体と比較して、3項目とも若干低い数値となっている。「職場」に関わることについては、2.0%ほど高い数値となり、(図(1)-42)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。
(図(2)-108)



図(2)-108

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

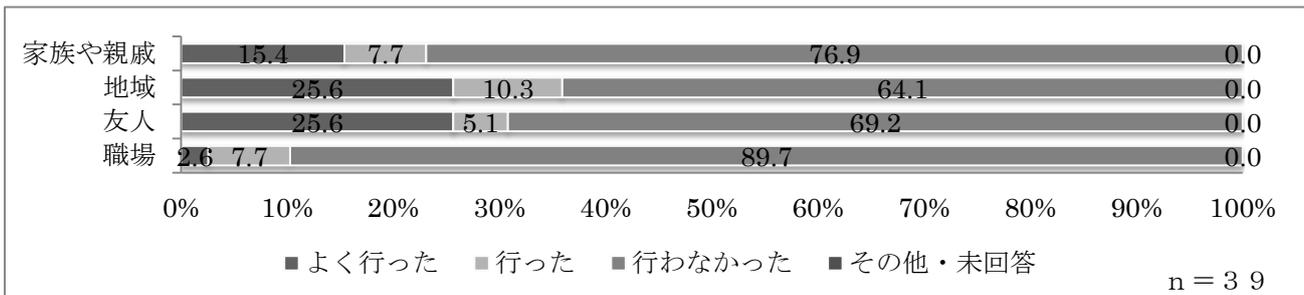
文化の保存・伝統行事の継承活動で「よく行った」「行った」を合わせると、「家族や親戚」30.1%、「地域」27.3%、「友人」25.3%、「職場」8.7%となっている。(図(2)-109)



図(2)-109

(サ) 日光市土呂部地区

「よく行った」について、「地域」「友人」ともに25.6%、これに「行った」と合わせると、「地域」35.9%、「友人」30.7%と、全体と比較しても高い数値を示している。「家族や親戚」と「職場」については、ほぼ同じような数値となっている。この地域には元来、地域の象徴である伝統や文化(お祭りなど)を継承するという風土が根付いており、地域独自の特徴であることが分かる。
(図(2)-110)

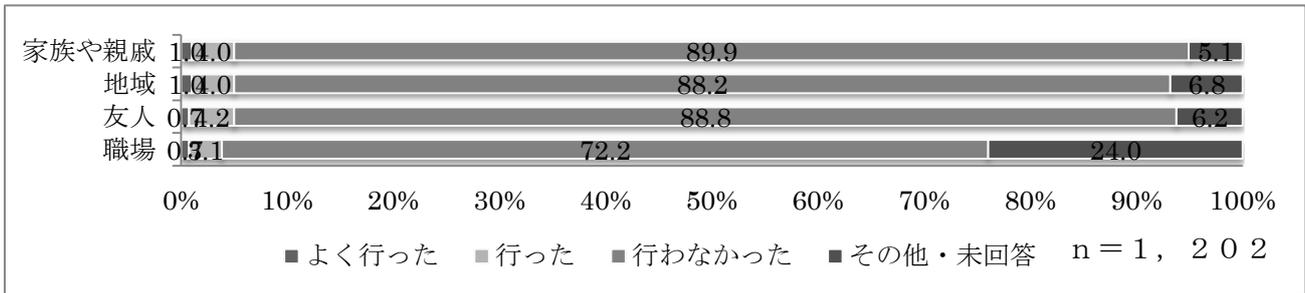


図(2)-110

サ 国際協力・在日外国人支援に関する活動

(ア) 県全体

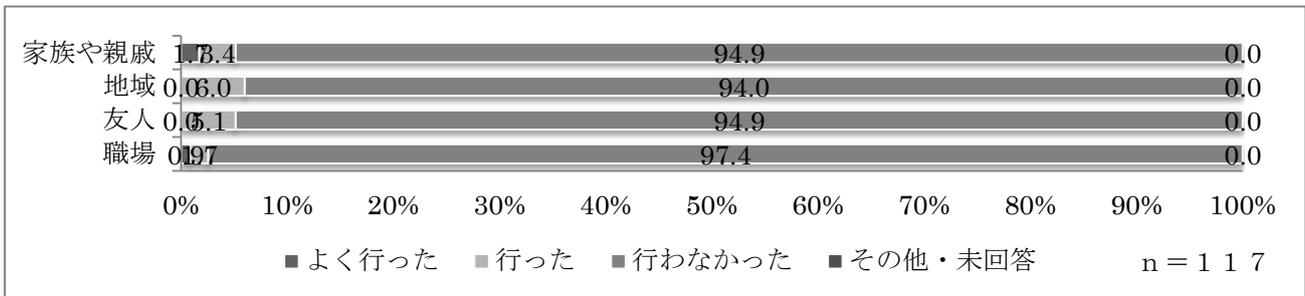
「よく行った」「行った」を合わせても、「家族や親戚」5.0%、「地域」5.0%、「友人」4.9%、「職場」3.8%となっている。項目による差がほとんど見られず、全ての項目で非常に低い数値を示している。(図(2)-111)



図(2)-111

(イ) 北調査研究対象地域

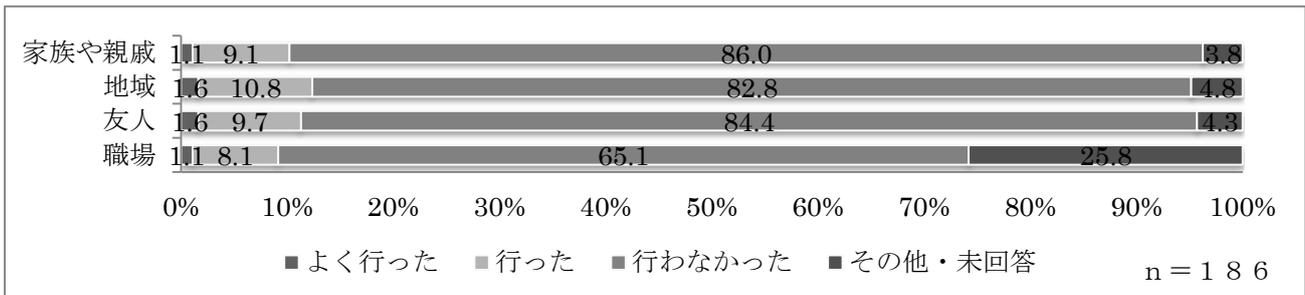
国際協力・理解について、どの項目も1割に満たない低い値である。この傾向は県全体や他地域を見ても同じではあるが、割合は下回っている。(図(2)-112)



図(2)-112

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

国際協力・理解について、どの項目も10%前後と低い値であるが、傾向としては、県全体と同じであり、活動割合は上回っている。(図(2)-113)

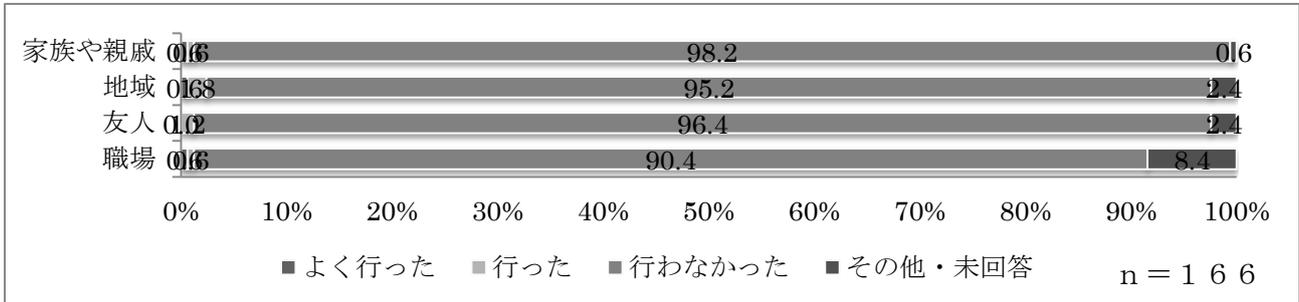


図(2)-113

(エ) 鹿行調査研究対象地域

国際協力・理解に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「地域」の項目であるが、「よく行った」「行った」を合わせても2.4%である。県全体に比べ、どの項目の数値も非常に低い。他地域と比べると、居住地域における在日外国人の定住割合が少なく、関わるのが少ないことも要因の一つと思われる。

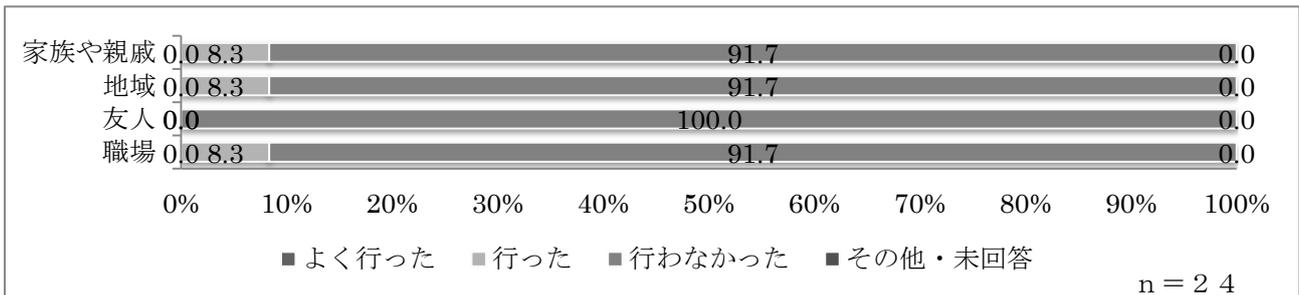
(図(2)-114)



図(2)-114

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

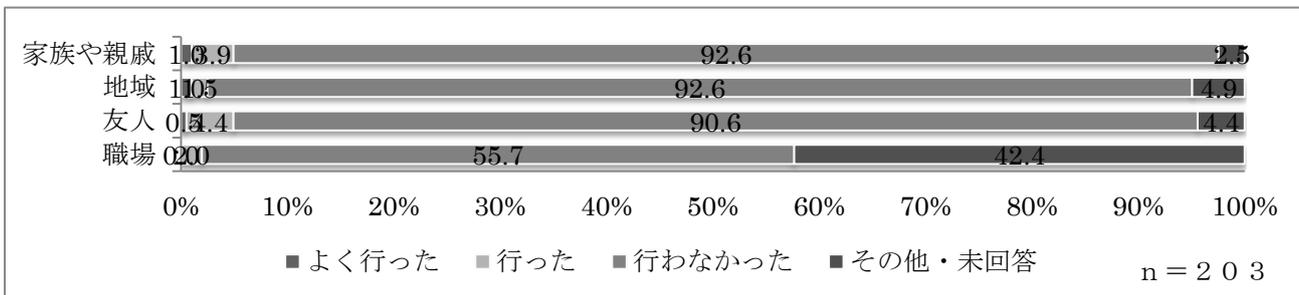
国際協力・理解に関わることで高い数値を示しているのは、「家族や親戚」「地域」「職場」の項目であるが、各項目とも「よく行った」「行った」を合わせても8.3%である。全体的に数値が低いのは、(図(2)-114)と同様に地域における在日外国人の定住割合が少なく、身近に関わるのが少ないことが要因の一つと思われる。(図(2)-115)



図(2)-115

(カ) 南調査研究対象地域

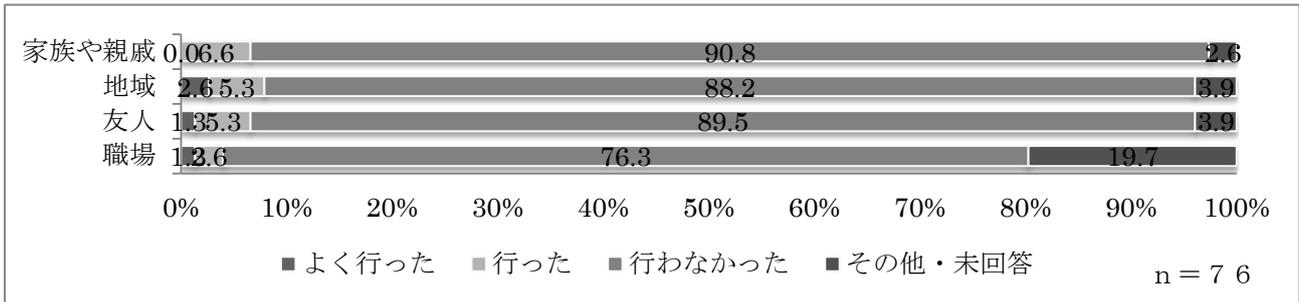
国際協力・在日外国人支援に関する活動は全体的に少なく、「職場」での活動はほぼ行われていないと言える。(図(2)-116)



図(2)-116

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

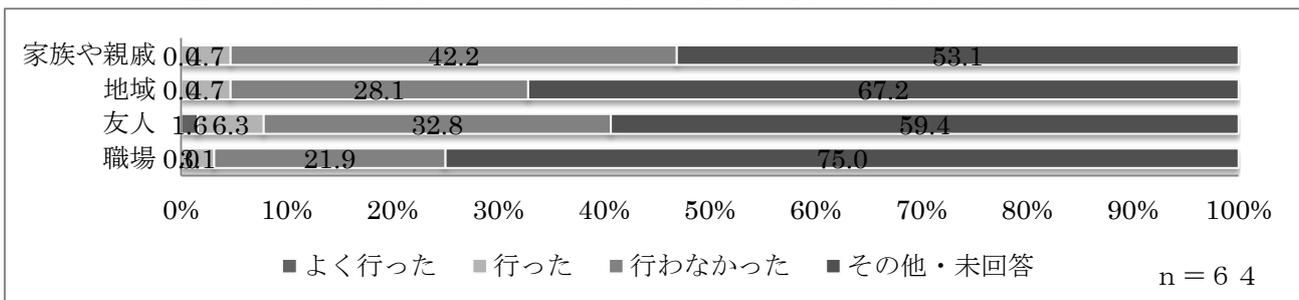
国際協力・在日外国人への支援をしている比率はどの調査でも低いですが、南コミュニティ再生事業対象地域では「地域」での活動が、南調査研究対象地域では「友人」との活動が他の項目よりも若干高くなっている。(図(2)-117)



図(2)-117

(ク) 西調査研究対象地域

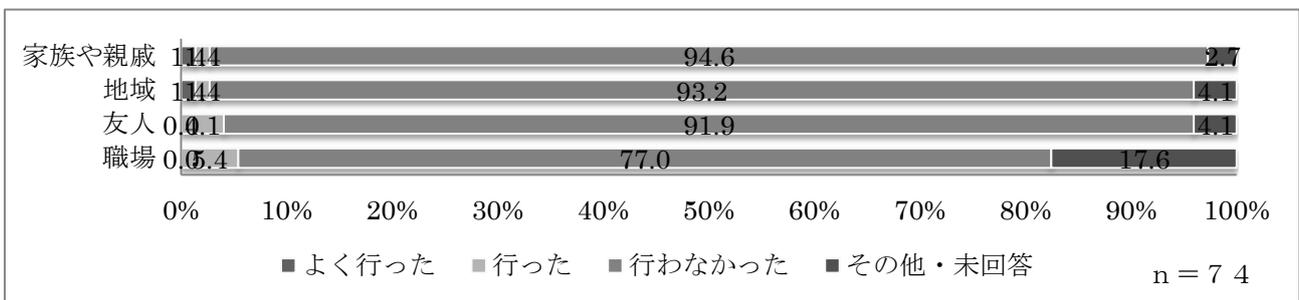
国際協力・理解について、「友人」に関わることは、「よく行った」1.6%、「行った」6.3%を合わせると7.9%、「家族や親戚」に関わることは、「地域」に関わることは、ともに「よく行った」0.0%と「行った」4.7%という結果となった。県全体と比較してもほぼ同じ傾向である。国際協力・支援については、全体を通して、他の活動に比べかなり低い結果と言える。(図(2)-118)



図(2)-118

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

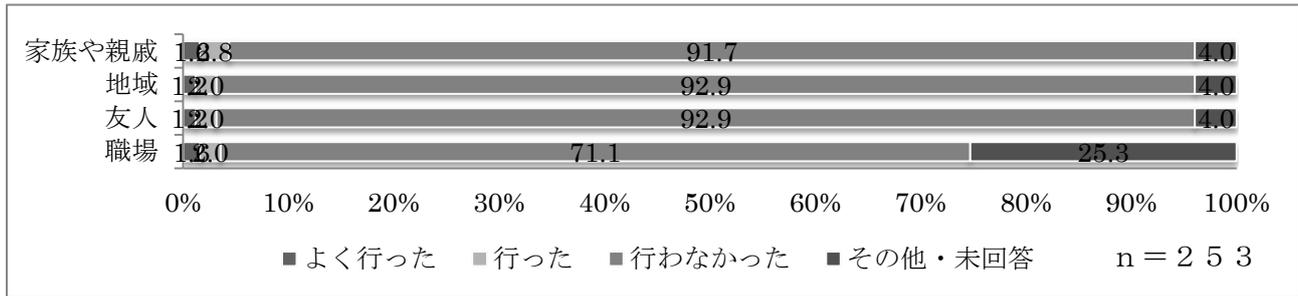
国際協力・理解について、「職場」に関わること「よく行った」「行った」を合わせると5.4%となり、県全体と比較して約2%高い数値となっている。その他の項目については、県全体と比較すると低い値となっており、(図(1)-42)と併せてみると「就業状況」が影響していると考えられる。国際協力・支援については、全体を通して、他の活動に比べかなり低い結果と言える。(図(2)-119)



図(2)-119

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

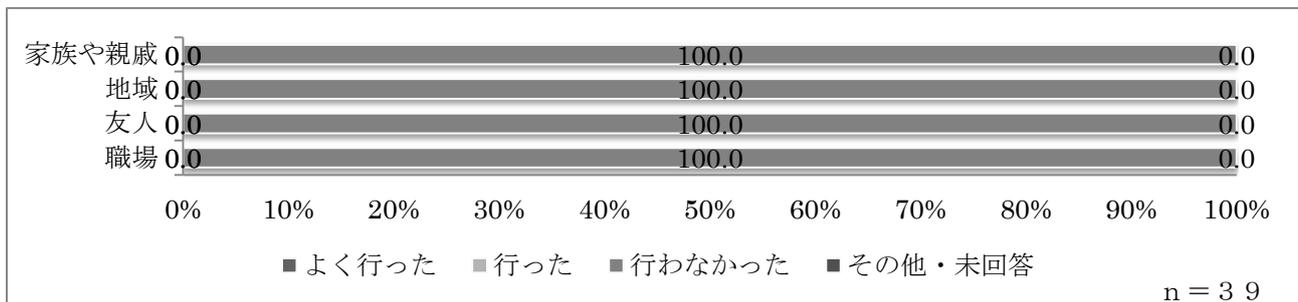
「よく行った」「行った」を合わせても、「家族や親戚」4.4%、「地域」3.2%、「友人」3.2%、「職場」3.6%となっている。全ての項目で非常に低い割合を示している。(図(2)-120)



図(2)-120

(サ) 日光市土呂部地区

全ての縁において、全く取り組んでいない。(図(2)-121)

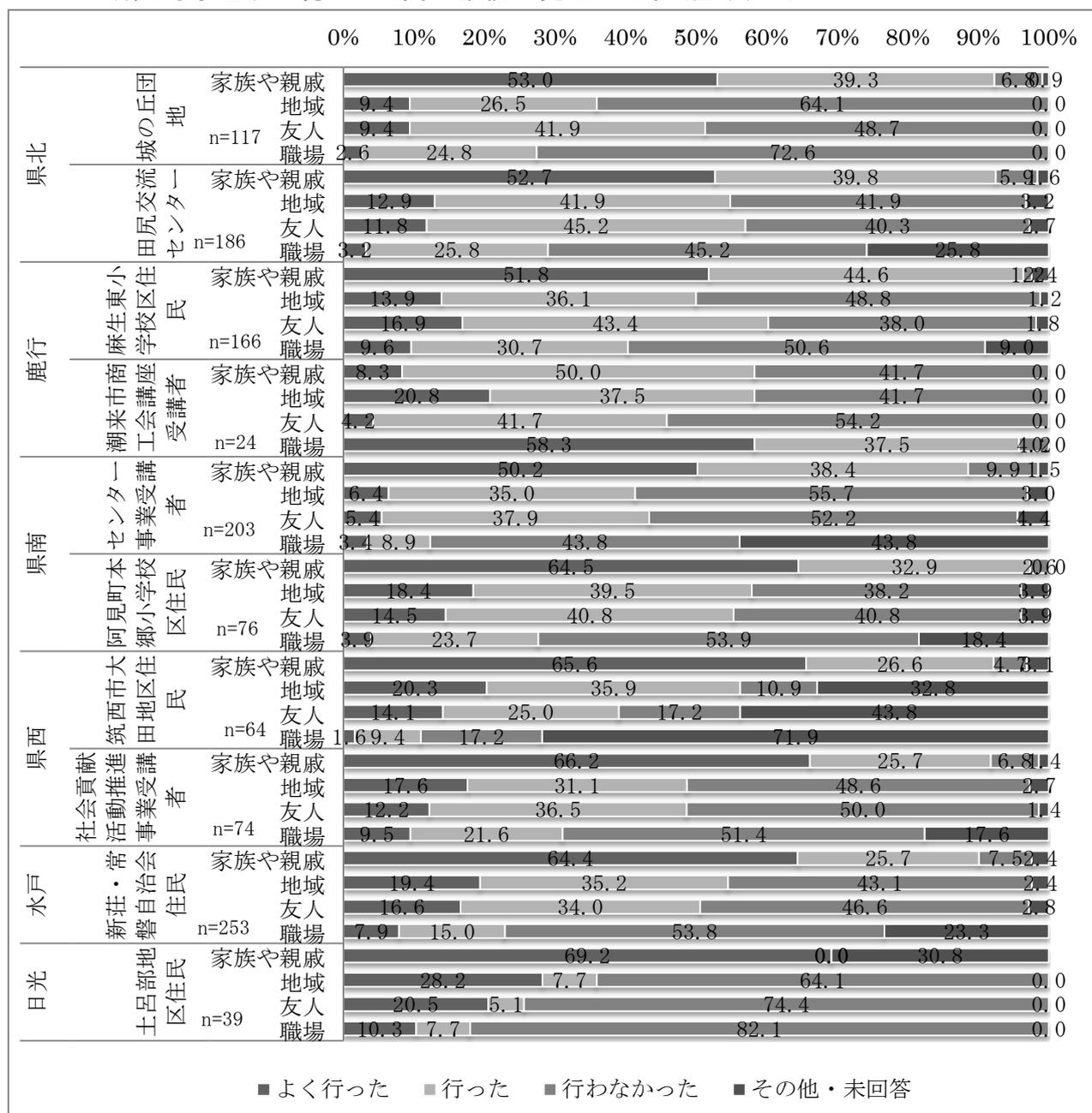


図(2)-121

(3) 「調査対象地域」別の「縁」と「つながり力」の相関関係について

ア 日常生活における、助け合い・支え合い活動

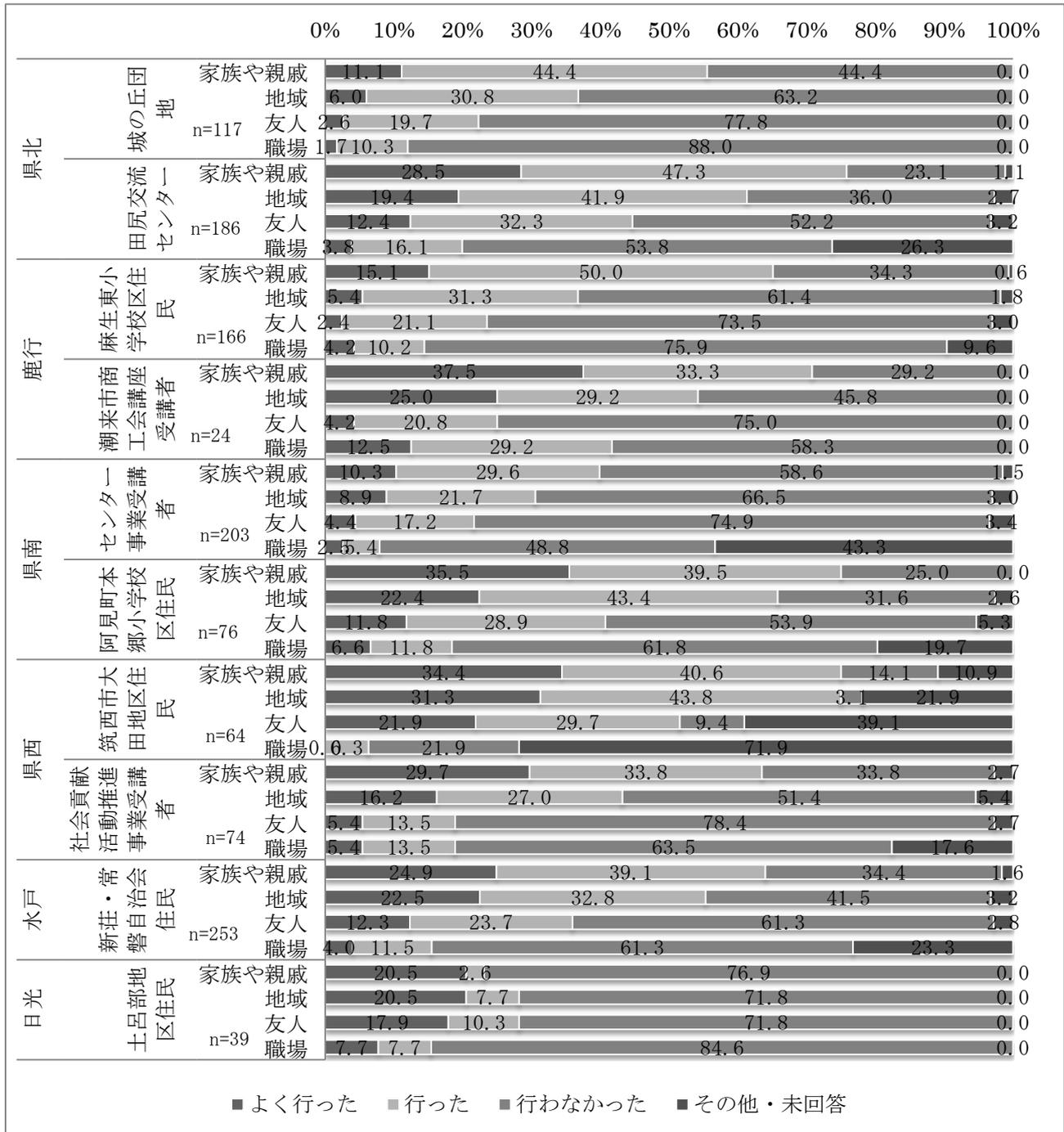
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」はどの地域も「よく行った」「行った」を合わせると約90%を超えており、活発な活動をしていることが分かる。南コミュニティ再生事業対象地域は「地域」での活動が約58%, 西調査研究対象地域が約56%, 鹿行調査研究対象地域や北コミュニティ再生事業対象地域が「友人」との活動がそれぞれ約60%, 57%で顕著な対象地域といえる。職場での活動については、鹿行調査研究対象地域が約40%で高い数値が見られる。(図(3)-1)



図(3)-1

イ 地域・まちづくりの企画や運営に関する活動

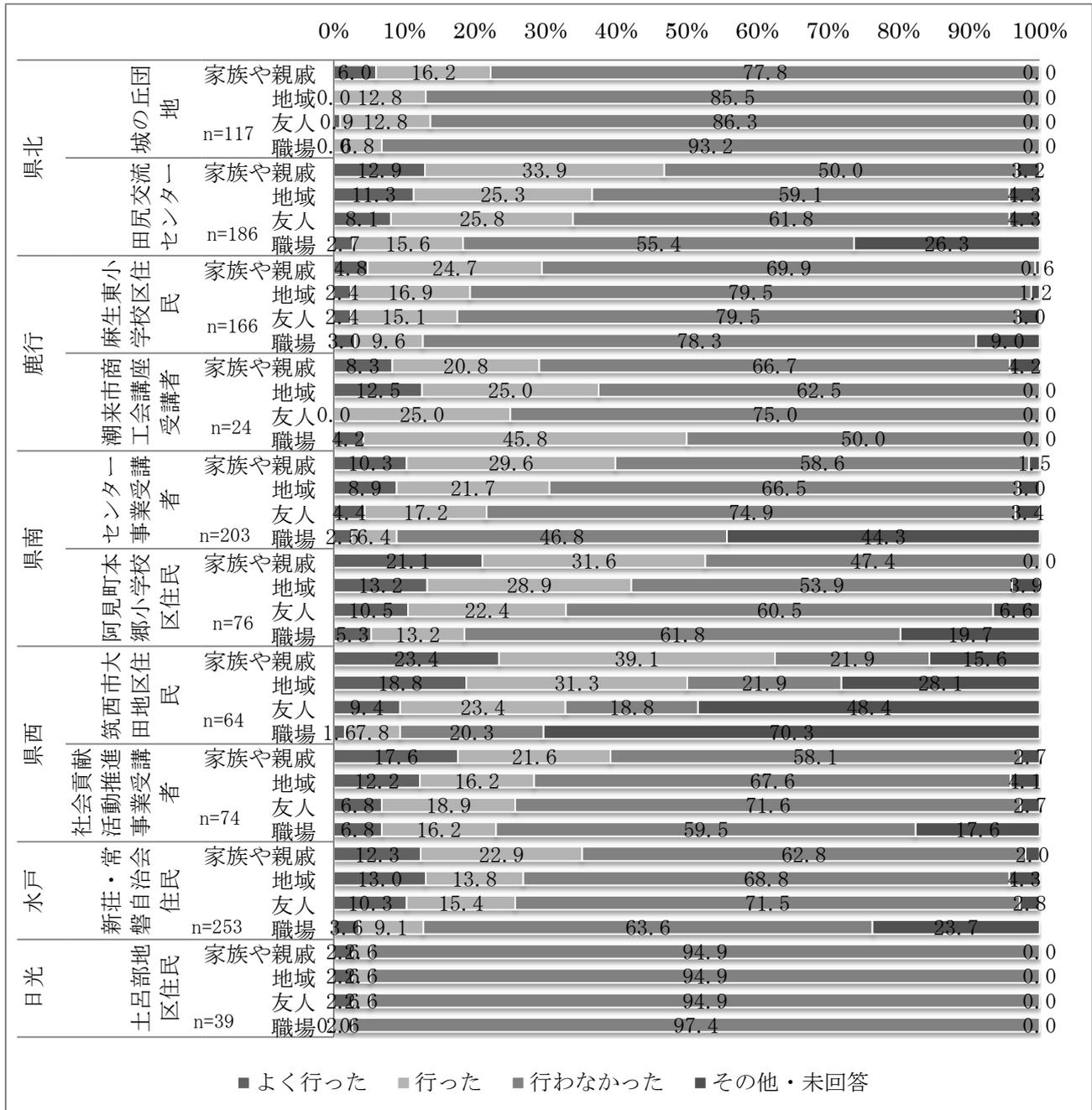
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」は北コミュニティ再生事業対象地域や南コミュニティ再生事業対象地域が約75%で高い数値を示している。「地域」での活動でも西調査研究対象地域が約75%と非常に高い数値である。「友人」との活動も同じく西調査研究対象地域が約52%、北コミュニティ再生事業対象地域が約45%が続いている。(図(3)-2)



図(3)-2

ウ 学習会の企画や広報、ボランティア等に関する活動

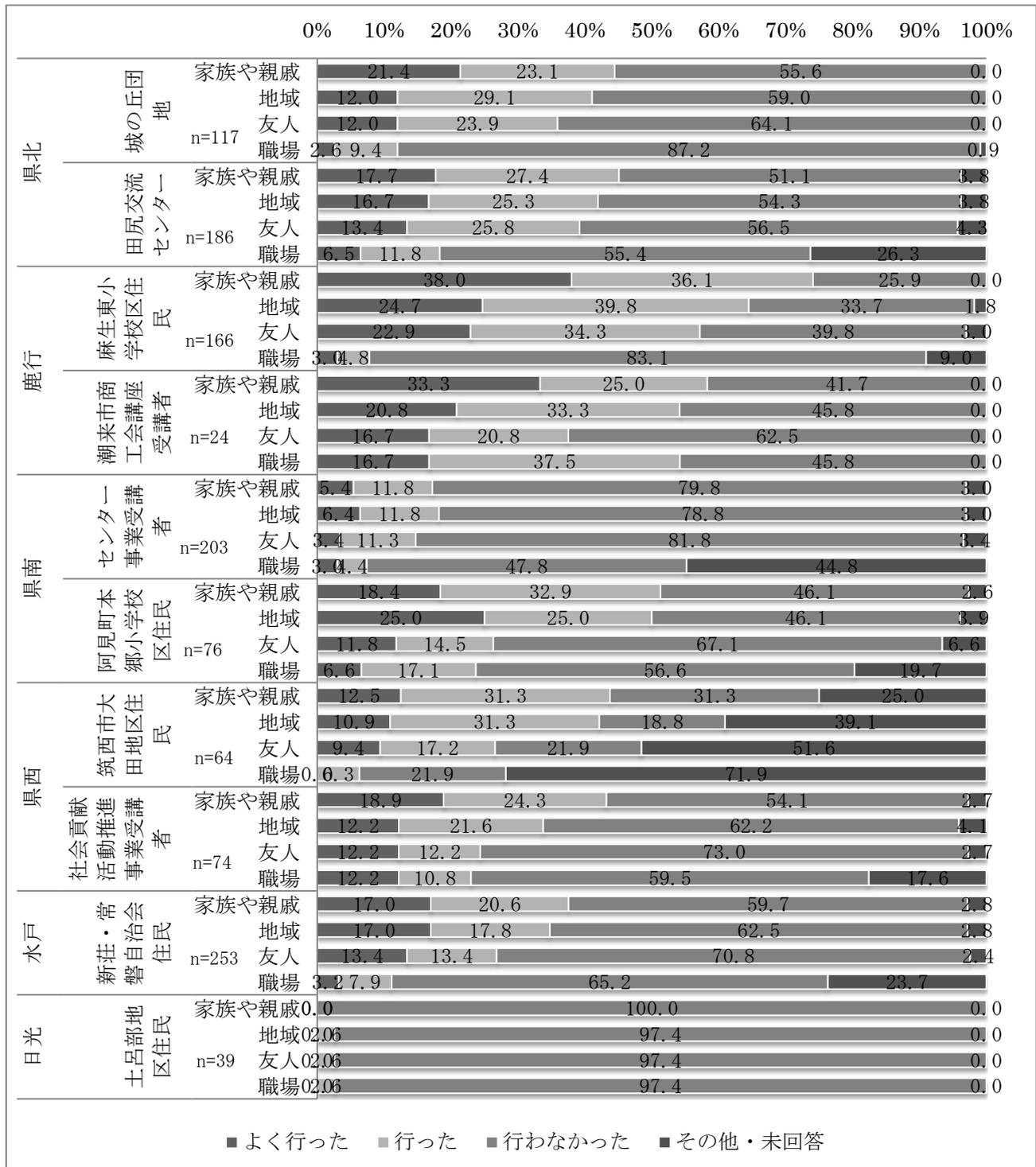
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」は西調査研究対象地域が約 63%，南コミュニティ再生事業対象地域が約 53%で活発な活動の様子分かる。「地域」での活動は、同じく西調査研究対象地域が約 50%，南コミュニティ再生事業対象地域が約 42%で高くなっている。「友人」との活動では、「地域」での活動の割合が高い二つの地域に加え、北コミュニティ再生事業対象地域が約 34%となっている。「職場」での活動は比較的低い西社会貢献活動推進事業受講者が 23.0%である。(図(3)-3)



図(3)-3

エ 青少年の健全育成に関する活動

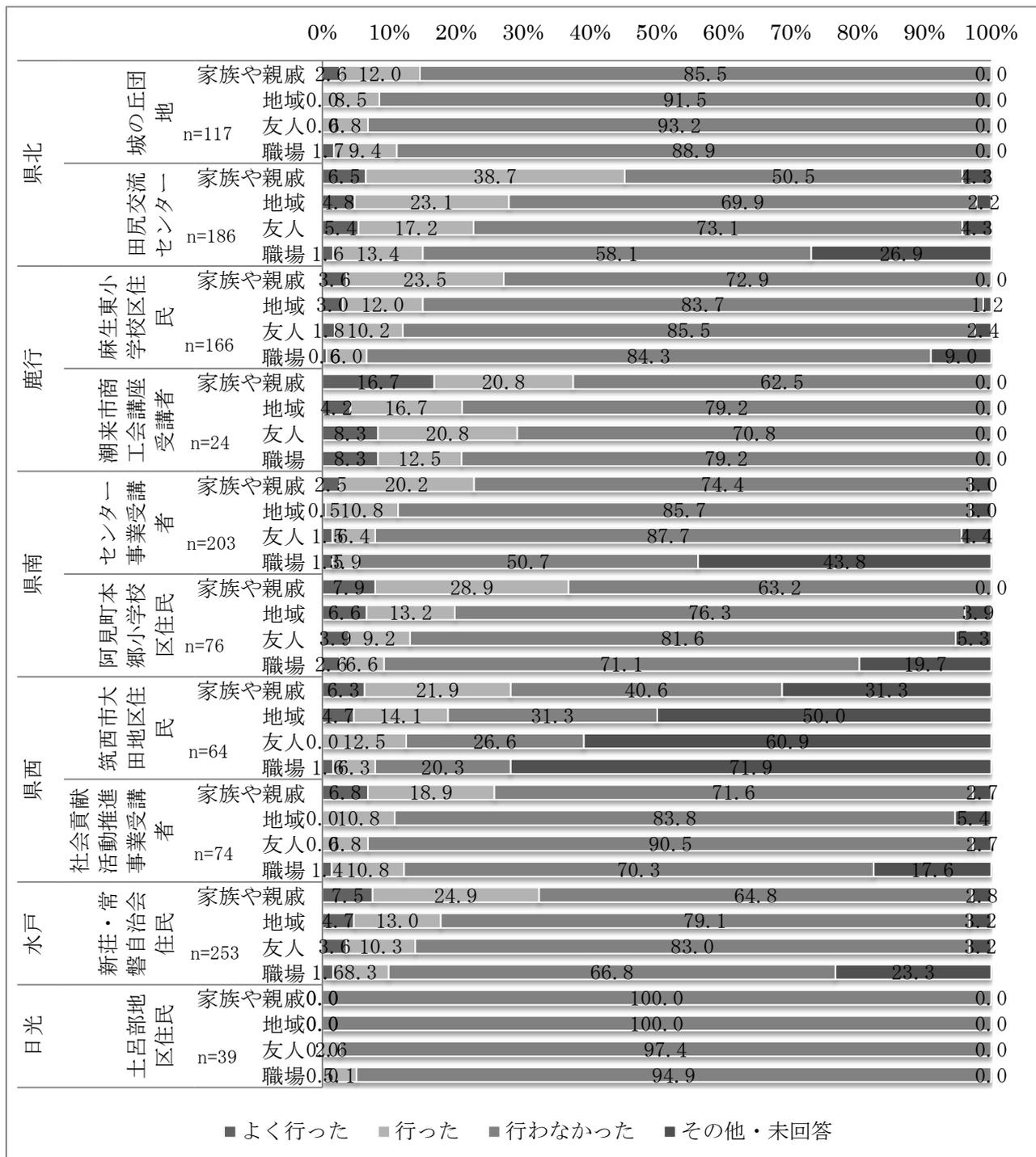
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」が約74%、「地域」が約65%、「友人」が約57%と、ともに鹿行調査研究対象地域が特に顕著に活動をしていることが分かる。他地域はどの地域も比較的活動の値は低くなっている。(図(3)-4)



図(3)-4

オ 非常災害時に協力や支援をする活動

どの地域、どの縁でも低い割合で、「よく行った」が10%を超えるものが見られない。「家族や親戚」で北コミュニティ再生事業対象地域は「よく行った」「行った」を合わせると約45%で高い値が見られる。(図(3)-5)

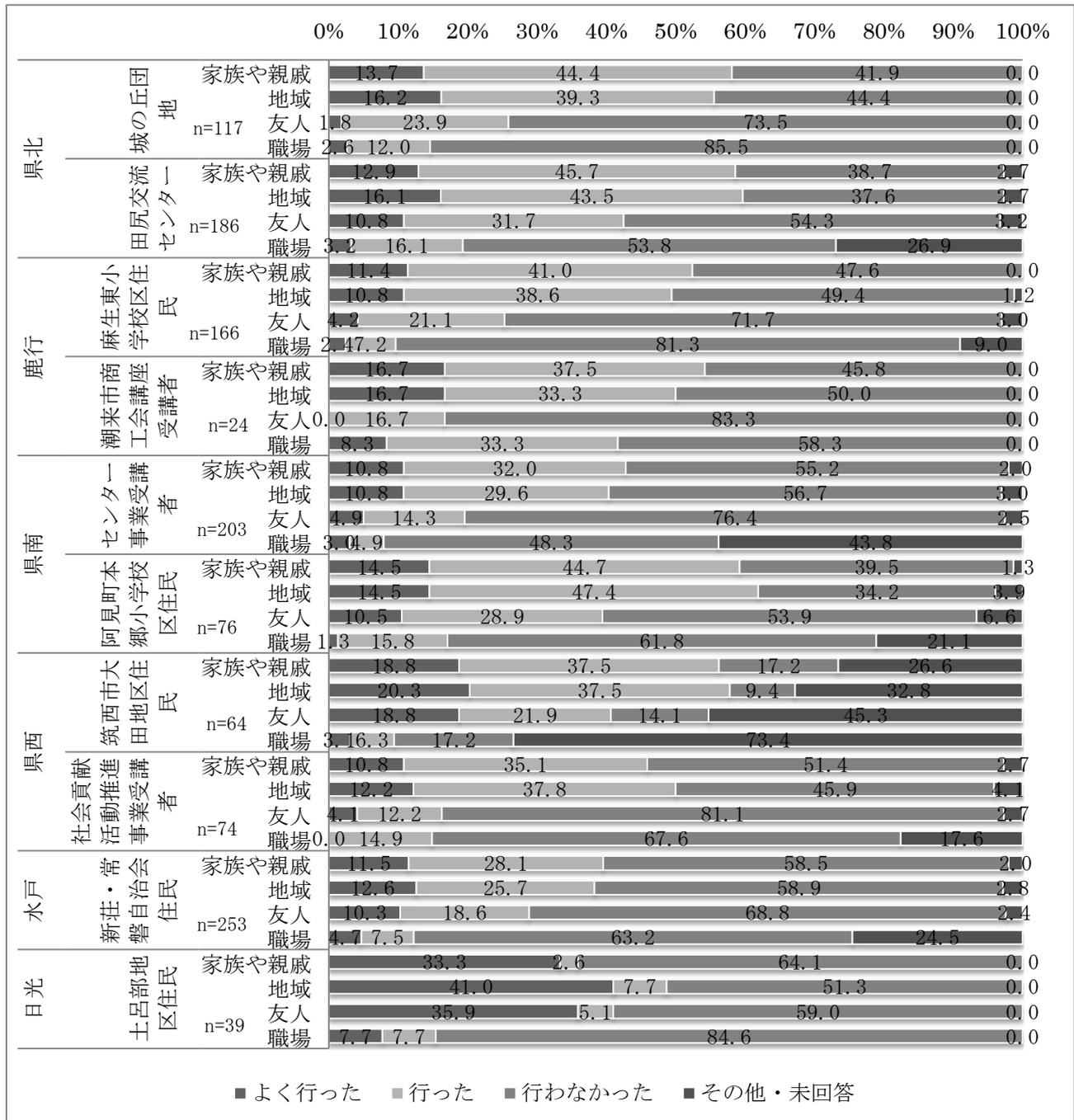


図(3)-5

カ 環境保全を図る企画や運営に関する活動

調査対象地域別で見ると、どの地区も「家族や親戚」「地域」での活動が顕著である。北調査研究対象地域、北コミュニティ再生事業対象地域、南コミュニティ再生事業対象地域でそれぞれ「よく行った」「行った」を合わせて約60%の割合になっている。「友人」での活動は、西調査研究対象地域が約40%と比較的高い割合と言える。

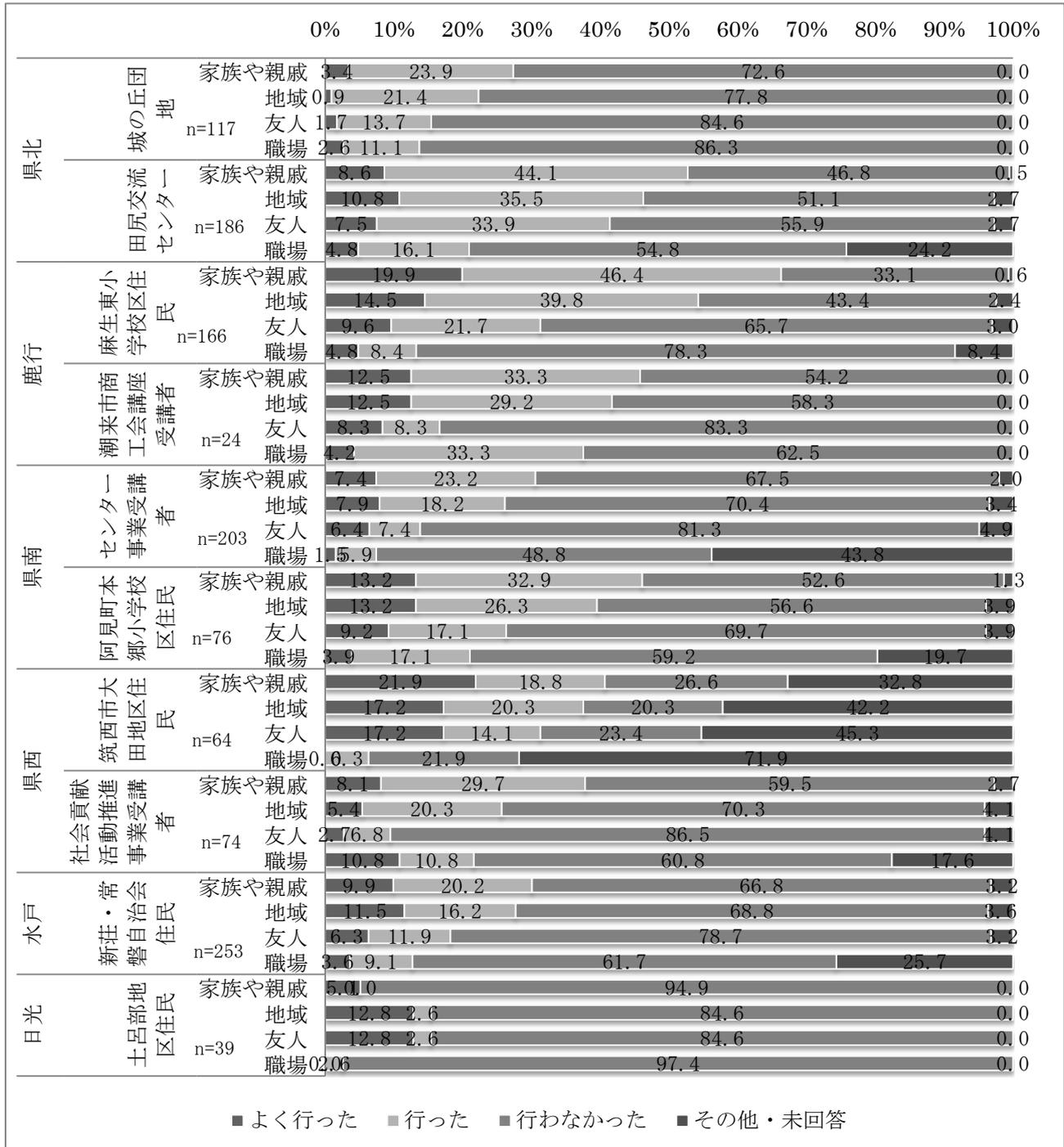
(図(3)-6)



図(3)-6

キ 安全を守る活動

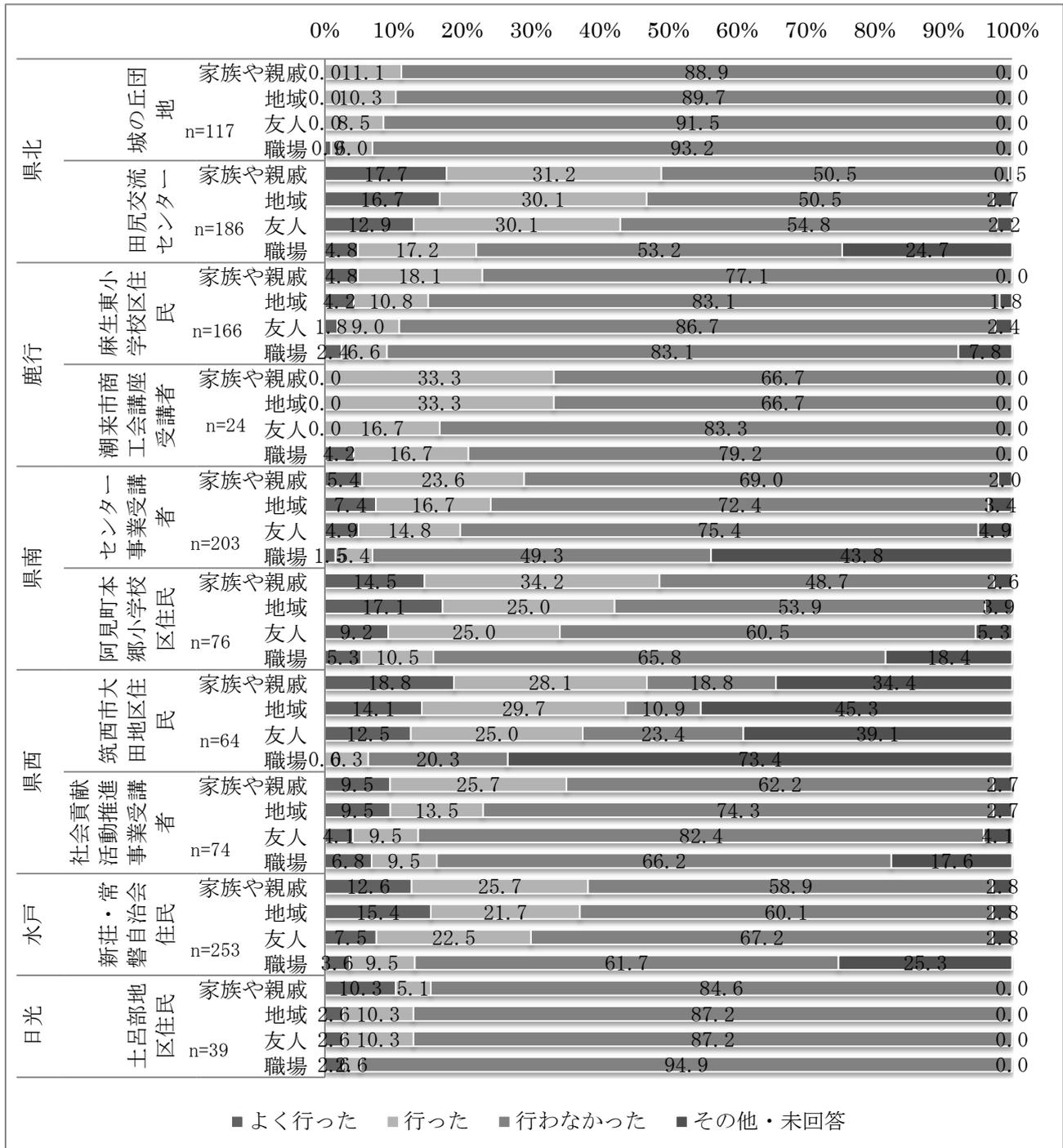
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」での活動で鹿行調査研究対象地域が「よく行った」「行った」を合わせると約67%で最も高い割合を示している。「地域」での活動も鹿行調査研究対象地域と北コミュニティ再生事業対象地域は同じく約45～55%で顕著であると言える。(図(3)-7)



図(3)-7

ク 高齢者や障がい者支援活動

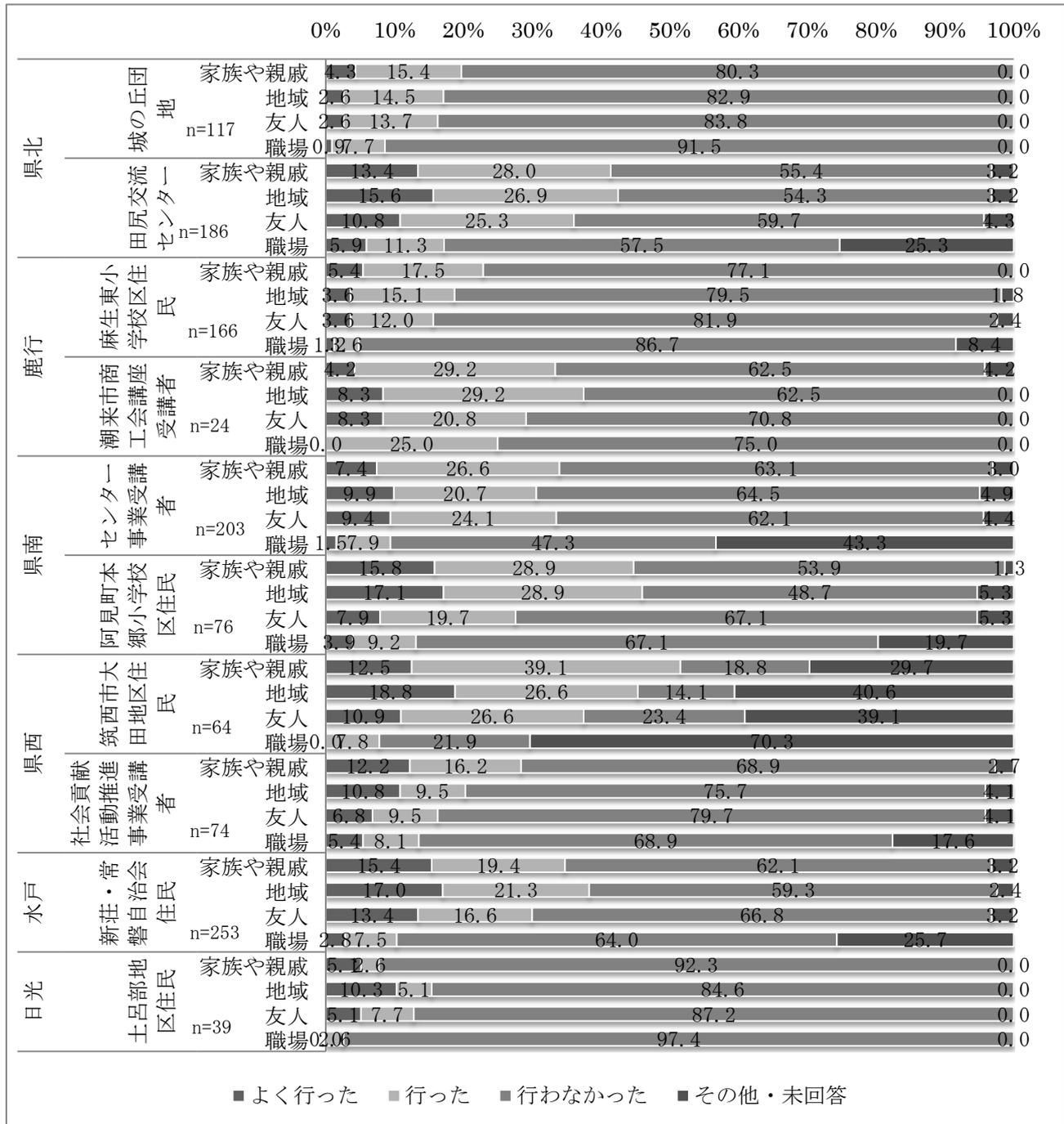
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」「地域」「友人」「職場」ともに「よく行った」「行った」を合わせた割合で見ると、北コミュニティ再生事業対象地域が約22%~49%で全般的に高い割合を示している。西調査研究対象地域の「地域」「友人」も同じくそれぞれ約44%, 38%と高い割合を示している。(図(3)-8)



図(3)-8

ケ 芸術・文化・スポーツ分野の企画や運営に関する活動

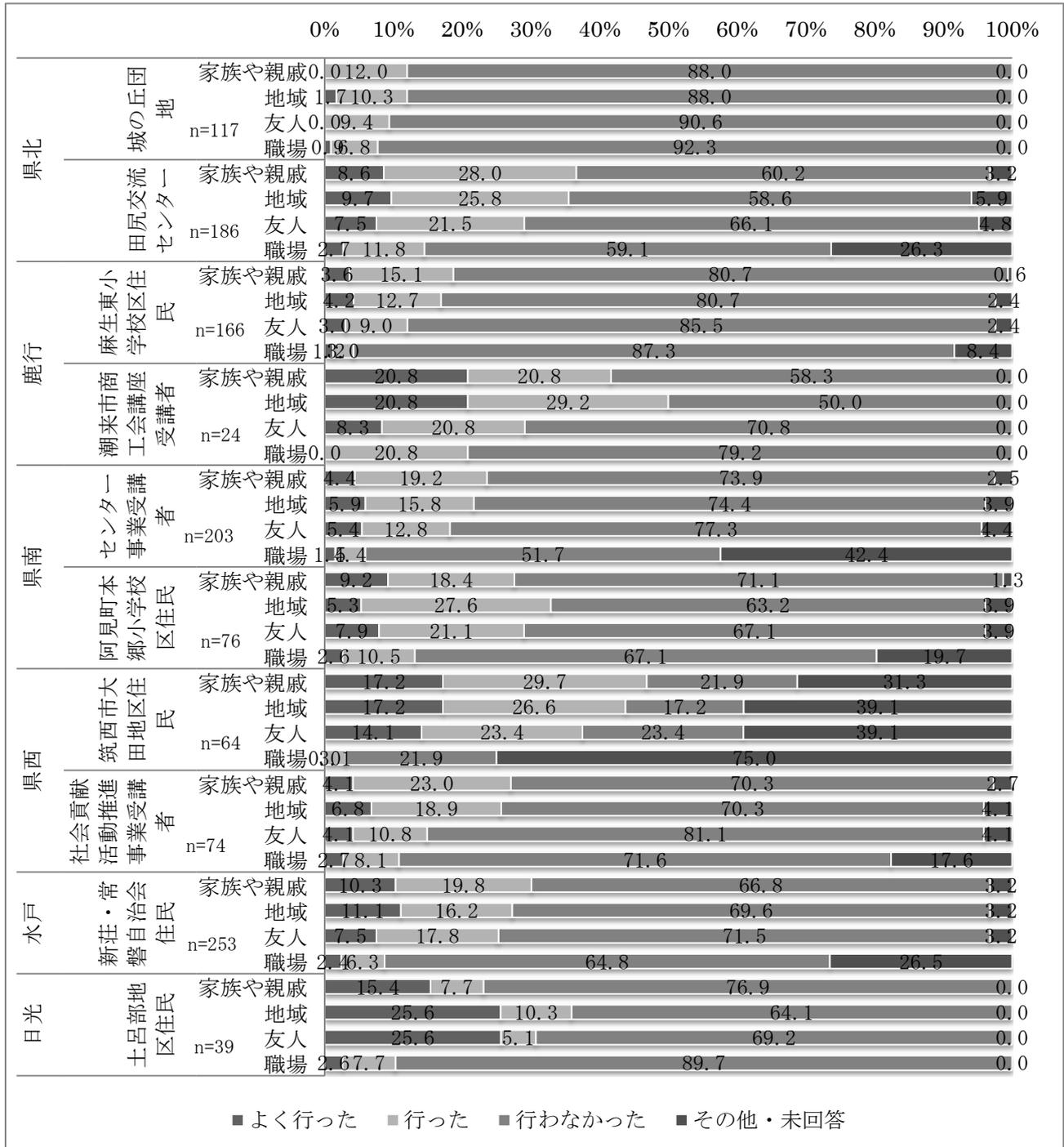
調査対象地域別で見ると、西調査研究対象地域の「家族や親戚」に関する割合が高く、「よく行った」「行った」を合わせると約52%である。次に「地域」での割合は、南コミュニティ再生事業対象地域と西調査研究対象地域が約46%と高い。「家族や親戚」の割合よりも「地域」の割合が上回る地域が複数見られる。(図(3)-9)



図(3)-9

コ 文化の保存や伝統行事の継承活動の企画や運営に関する活動

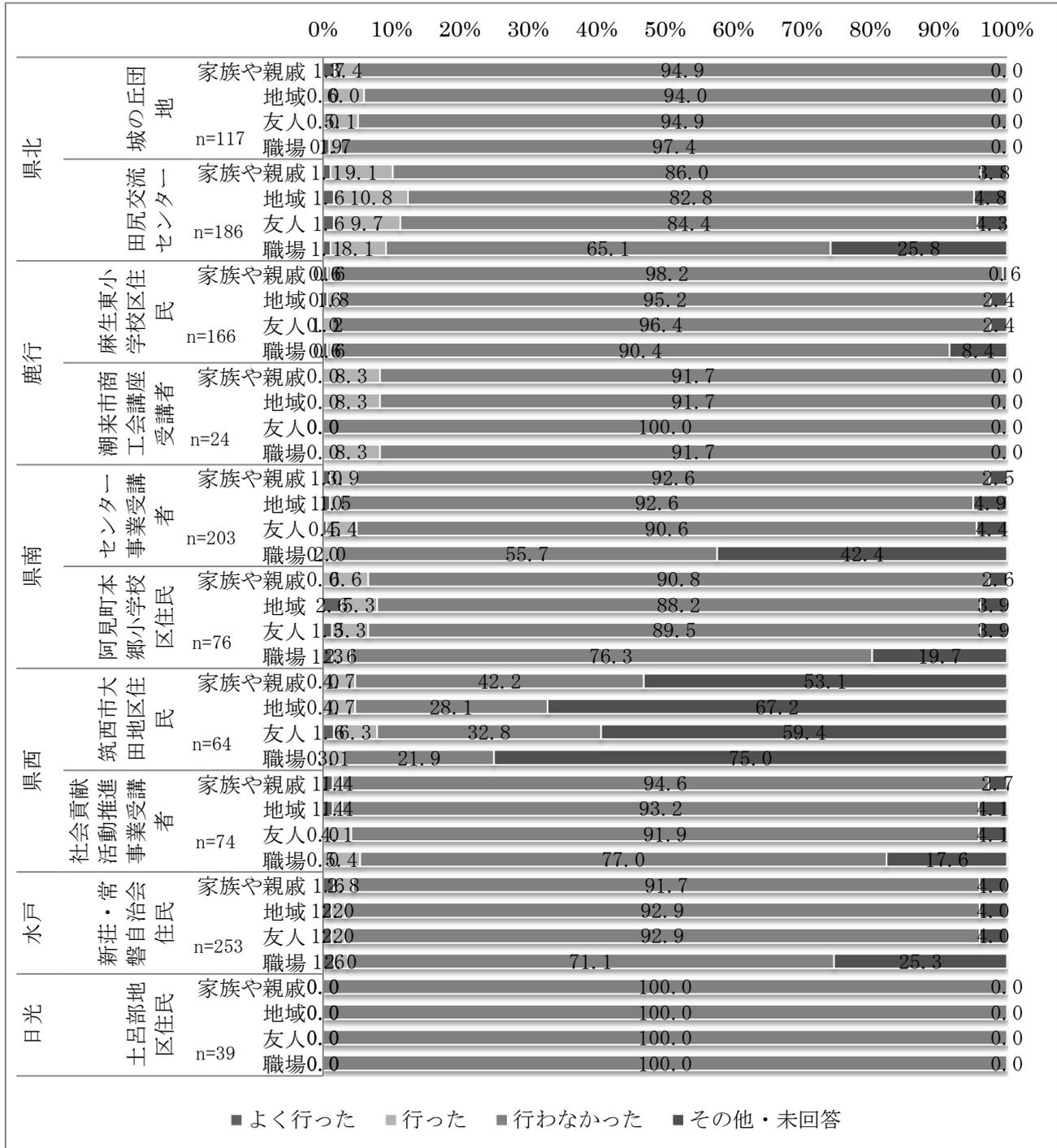
調査対象地域別で見ると、「家族や親戚」「地域」「友人」の関わりで「よく行った」「行った」を合わせた割合で見ると、西調査研究対象地域が約38%~47%で全般的に高い割合を示している。北コミュニティ再生の「友人」が同じく合わせて29.0%と比較的高い割合を示している。(図(3)-10)



図(3)-10

サ 国際協力・在日外国人支援に関する活動

調査対象地域別で見ると、どの地区においても割合が低い。活動が見受けられるのは北コミュニティ再生事業対象地域、南コミュニティ再生事業対象地域であるが割合はわずかである。(図(3)-11)



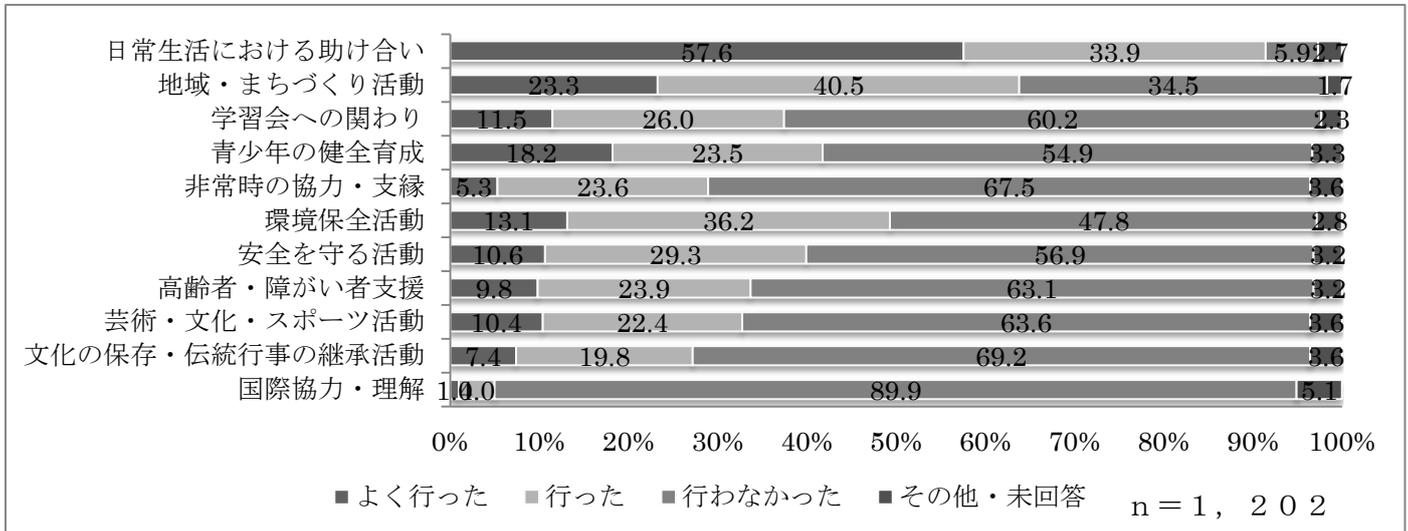
図(3)-11

(4) 「縁」と「調査項目」の相関関係について

ア 家族や親戚に関わること【血縁】

(ア) 県全体

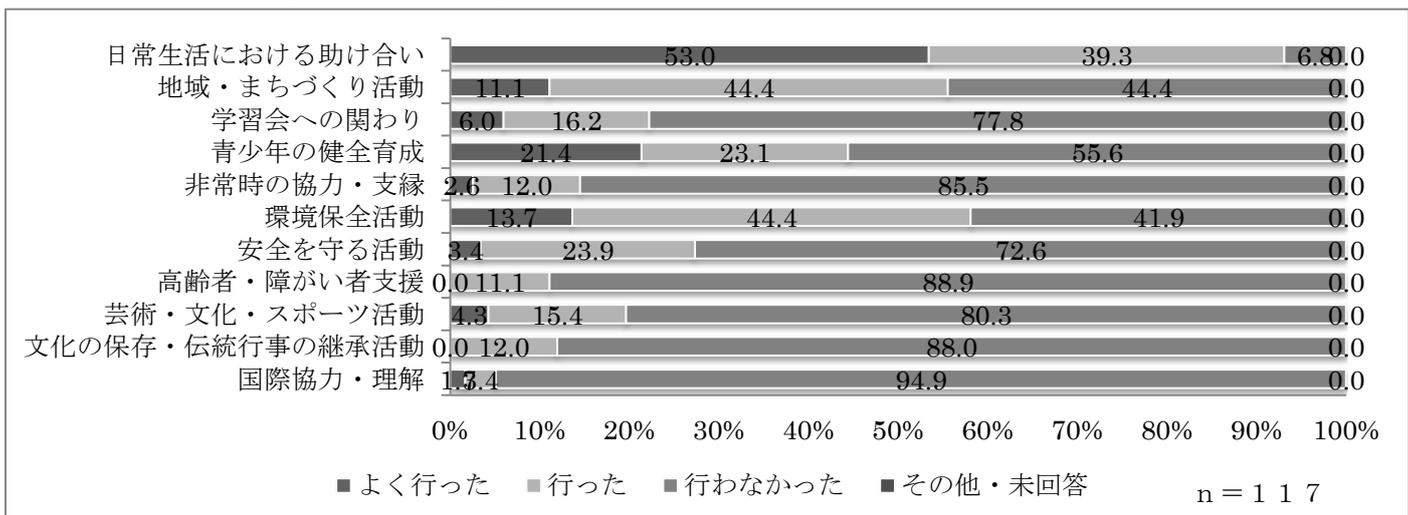
「日常生活における助け合い」が最も高い割合で、「よく行った」「行った」を合わせると約92%になる。次いで「地域・まちづくり活動」が同じく約64%、「環境保全活動」が約50%である。他は40%前後である。また、国際協力や外国人との交流等の活動はほとんど見られない事が分かる。(図(4)-1)



図(4)-1

(イ) 北調査研究対象地域

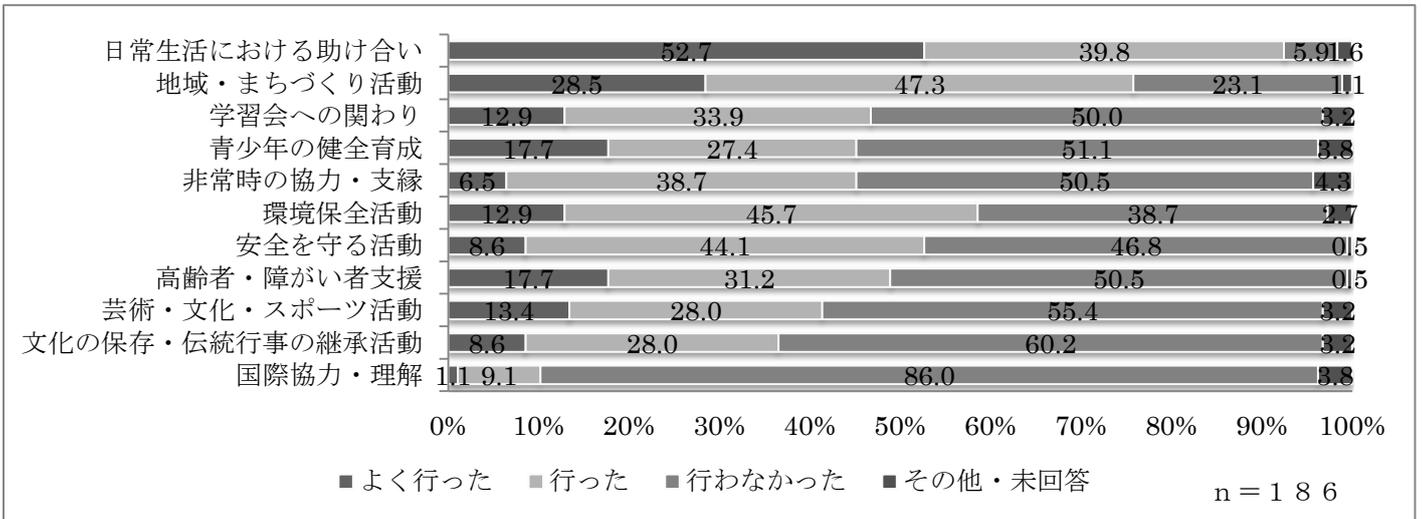
家族や親戚に関わることは、どの活動内容でも高い数値である。最も高いのは、「日常生活における助け合い」92.3%、続いて「環境保全活動」58.1%、「地域・まちづくり活動」55.5%、「青少年の健全育成」44.5%、「安全を守る活動」27.3%である。次に「学習会への関わり」「芸術・文化・スポーツ活動」と個人の趣味教養に関するものへと移行している。生活や子どもに関わる活動は上位に挙がっているが、社会的少数者に関わる活動は下位である。(図(4)-2)



図(4)-2

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

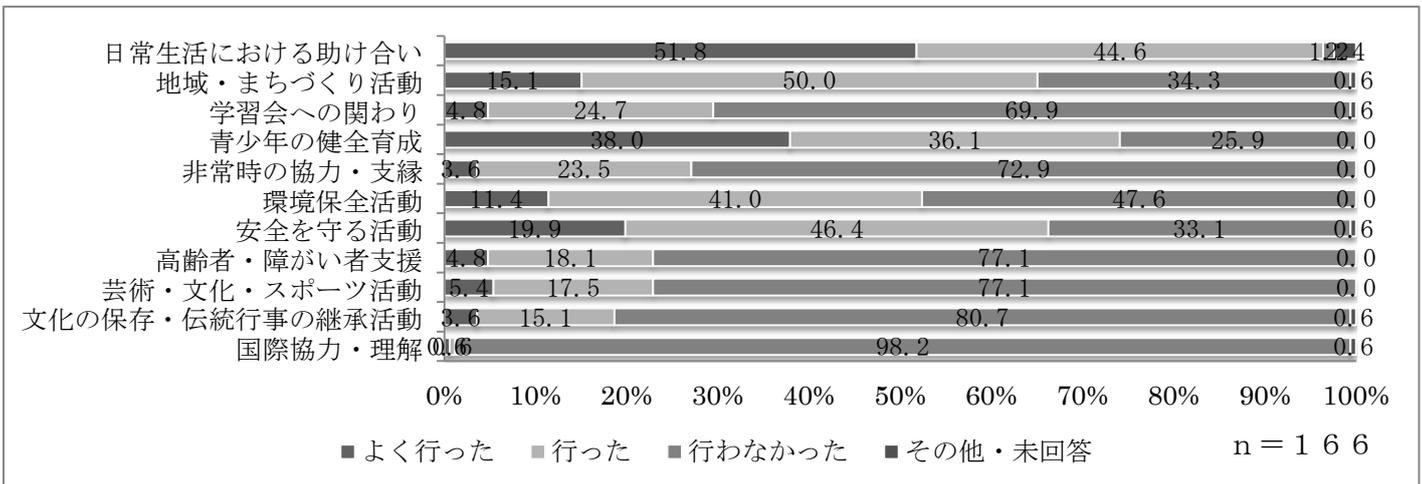
家族や親戚に関わることは、どの活動内容でも高い数値を示している。最も高いのが、「日常生活における助け合い」92.5%，続いて「地域・まちづくり活動」75.8%，「環境保全活動」58.6%，「安全を守る活動」52.7%，「高齢者・障がい者支援」48.9%となっている。また、個人の趣味教養に関することも活発である。しかし国際協力・理解については低くなっている。(図(4)-3)



図(4)-3

(エ) 鹿行調査研究対象地域

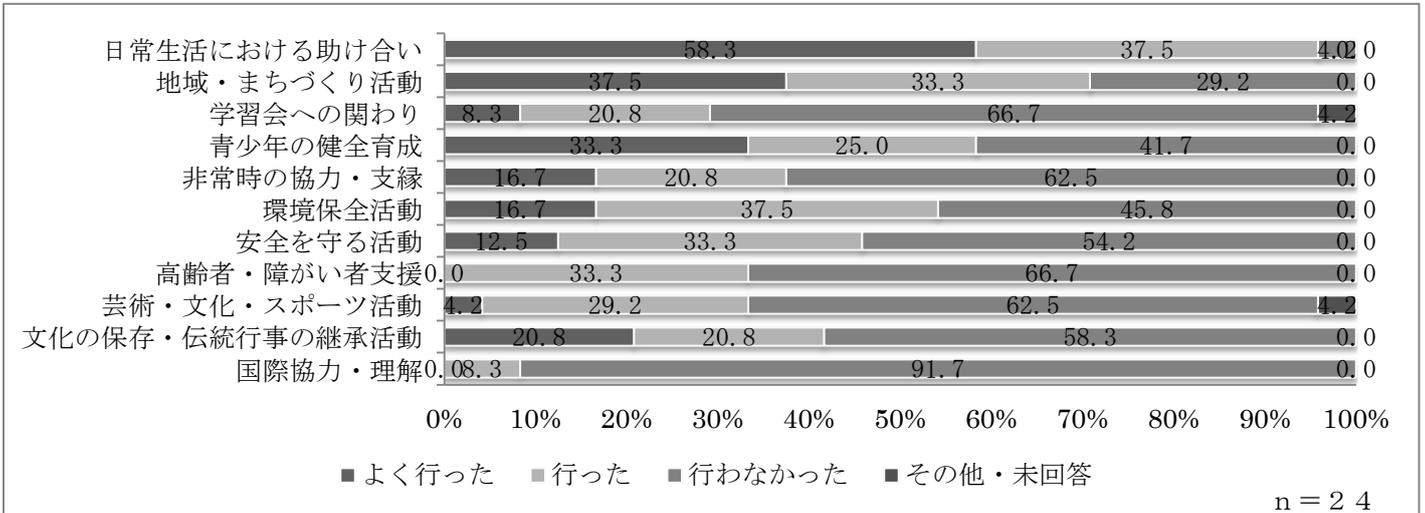
高い数値を示す活動内容が多い。「日常生活における助け合い」が最も高く、「よく活動した」「活動した」を合わせると9割以上になる。続いて、「安全を守る活動」,「地域・まちづくり活動」,「青少年の健全育成」と続いている。一方、「高齢者,障がい者」への活動は約2割程度である。外国人への支援活動に関してはほとんど見られない。地域全体に関わる活動は多いが、社会的少数者に関わる活動に対しては、積極的でない様子が見られる。(図(4)-4)



図(4)-4

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

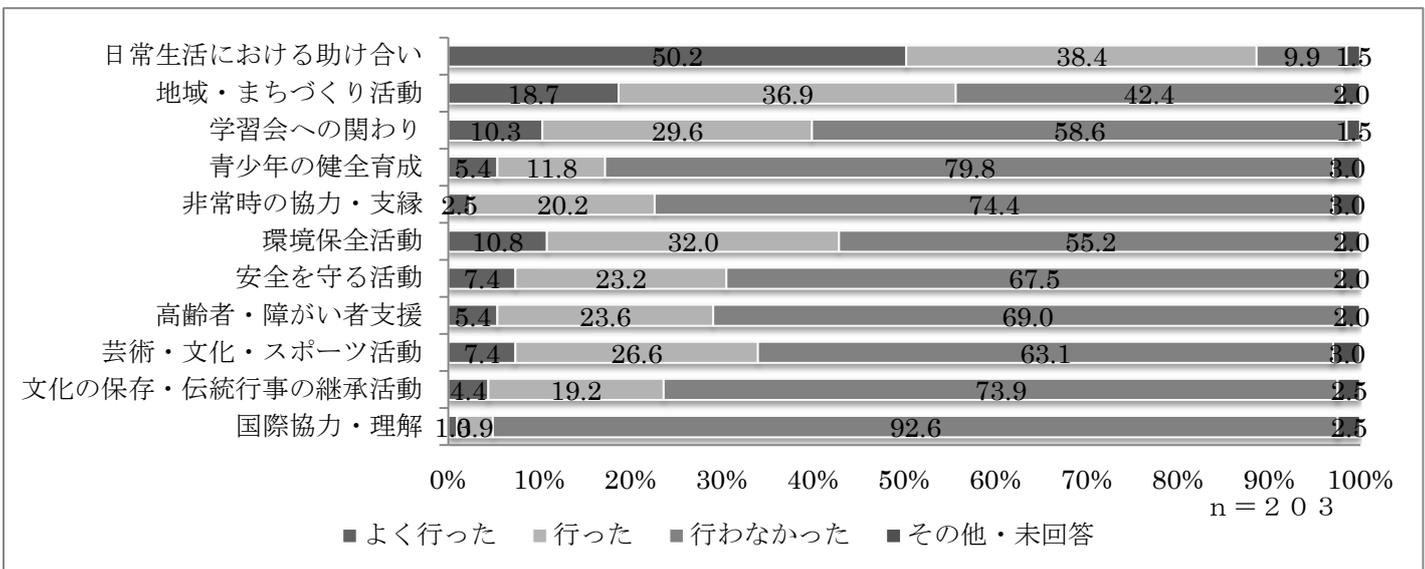
高い数値を示しているのは、「日常生活における助け合い」で、9割以上である。続いて、「地域・まちづくり活動」、「青少年の健全育成」、「環境保全活動」と続き、「文化の保存・伝統行事の継承活動」の項目が41.6%と、他地域に比べて高いのは、古くから伝わり、毎年開催されている「潮来祇園祭禮」や「水郷潮来あやめ祭り」に関わっている人が多いためと思われる。(図(4)-5)



図(4)-5

(カ) 南調査研究対象地域

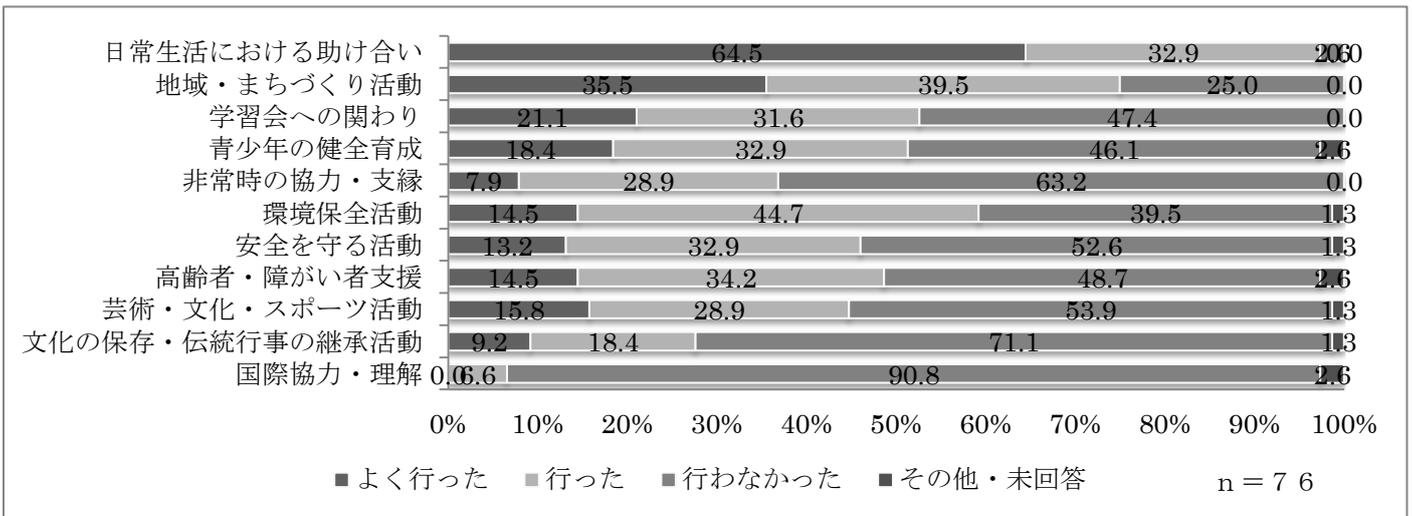
家族や親戚に関わることは、全体的に他の項目よりも「よく行った」「行った」比率が高い。特に、「日常生活における助け合い」と「地域・まちづくり活動」が高くなっている。(図(4)-6)



図(4)-6

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

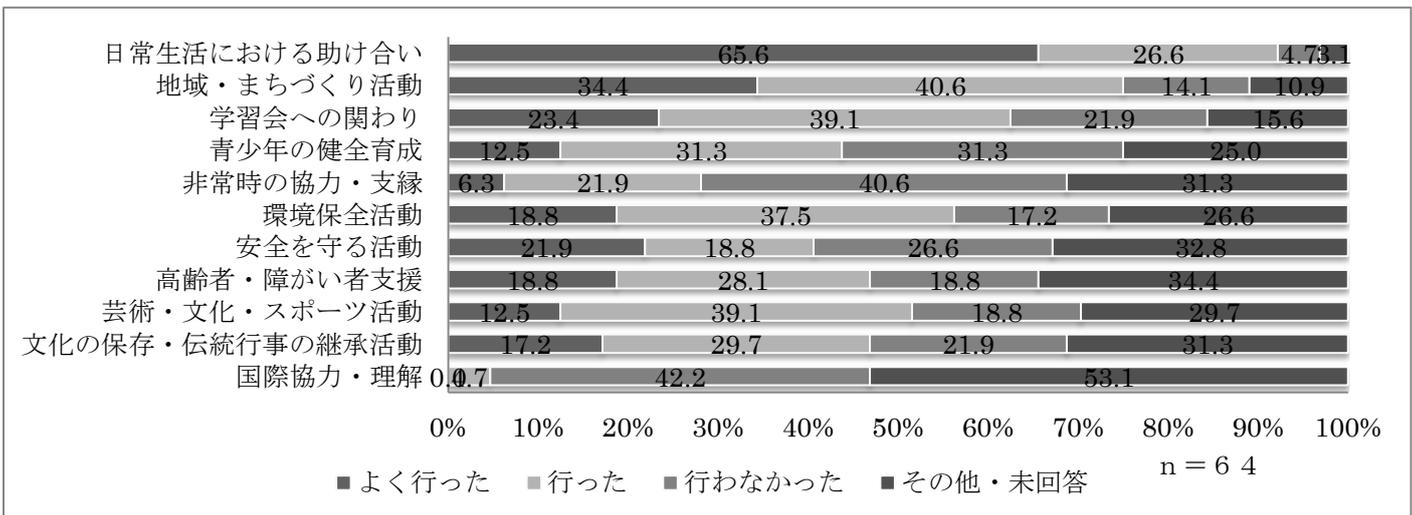
家族や親戚に関わることは、「青少年の健全育成」の項目において活動した人の比率が、南コミュニティ再生事業対象地域と県全体では上位であるのに対して、南調査研究対象地域では下位である。(図(4)-7)



図(4)-7

(ク) 西調査研究対象地域

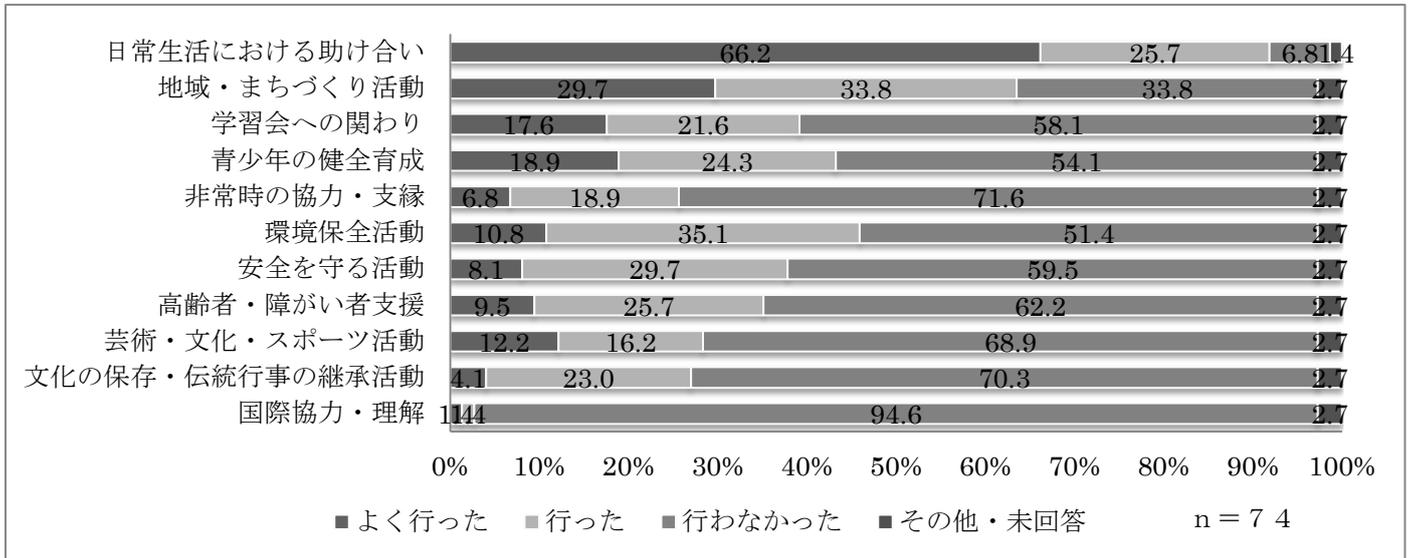
家族や親戚に関わることは、どの内容であっても高い数値を示している。最も高いのは、「日常生活における助け合い」92.2%, 続いて「地域まちづくり活動」75.0%, 「学習会への関わり」62.5%, 「環境保全活動」56.3%, 「芸術・文化・スポーツ活動」51.6%, 「高齢者・障がい者支援」46.9%となっている。「文化の保存・伝統行事の継承活動」46.9%, 「青少年の健全育成」43.8%, 「安全を守る活動」40.7%で地域の活動へつながり、次に「非常時の協力・支縁」28.2%, 「国際協力・理解」4.7%となる。生活や地域、趣味教養に関わる活動は上位にあがり、続いて子どもに関わる活動、そして社会的少数者に関わる活動は下位となっている。(図(4)-8)



図(4)-8

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

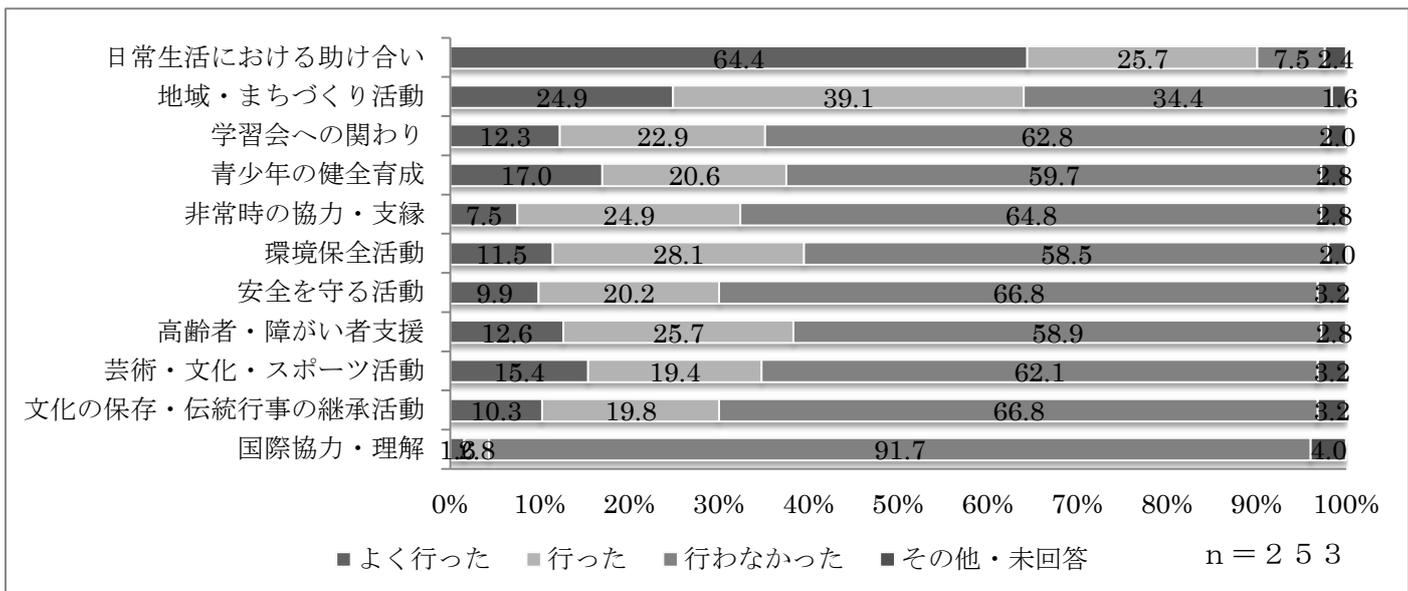
家族や親戚に関わることは、どの内容であっても高い数値を示している。最も高いのは、「日常生活における助け合い」91.9%、続いて「地域まちづくり活動」63.5%、「環境保全活動」45.9%、「青少年の健全育成」43.2%、「学習会への関わり」39.2%、「安全を守る活動」37.8%、「高齢者・障がい者支援」35.2%と、地域活動へつながり、「芸術・文化・スポーツ活動」28.4%、「文化の保存・伝統行事の継承活動」27.1%と個人の趣味教養に関わるものへと移行している。次に「非常時の協力・支縁」25.7%、「国際協力・理解」2.8%となる。生活や子ども、地域や趣味教養に関わる活動は上位に上がり、社会的少数者に関わる活動は下位となっている。(図(4)-9)



図(4)-9

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

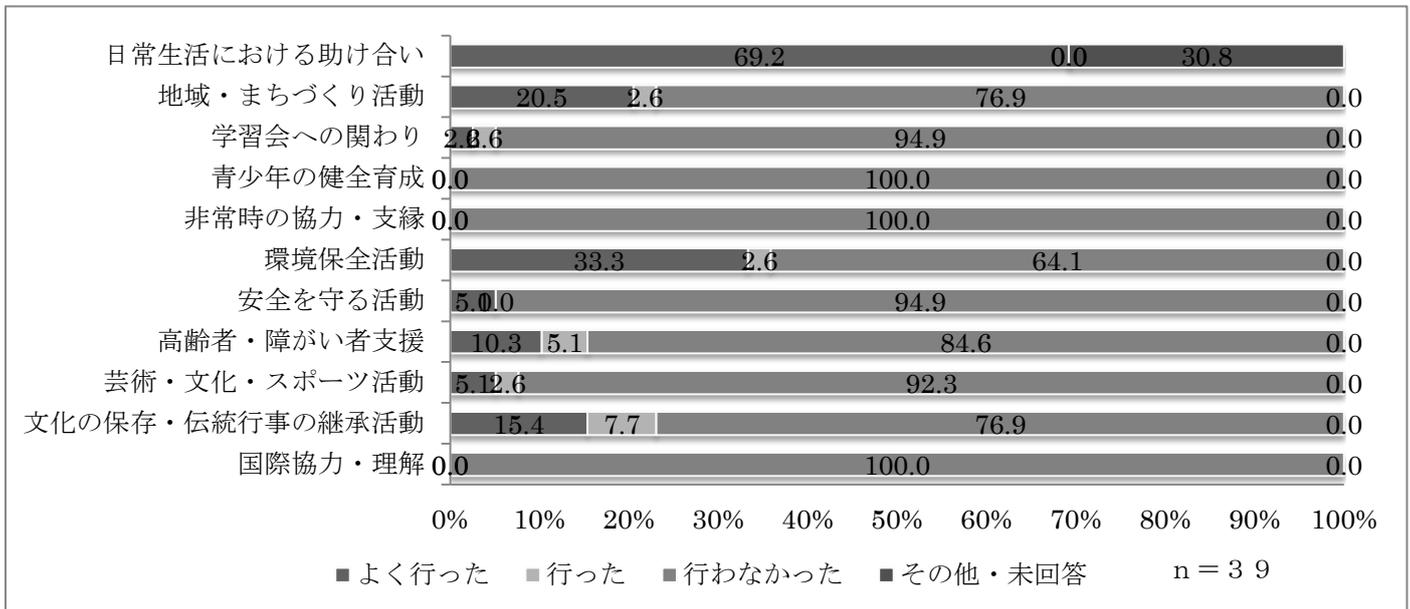
「日常生活における助け合い」が最も高い割合で「よく行った」「行った」を合わせると約90%になる。次いで「地域・まちづくり活動」が同じく64.0%、他は40%前後である。また、国際協力や外国人との交流等の活動はほとんど見られない事が分かる。(図(4)-10)



図(4)-10

(サ) 日光市土呂部地区

「日常生活における助け合い」では「よく行った」と「行った」を合わせると69.2%が最も高い数値を示している。日常生活においては、【血縁】による役割が重要な位置を占めている。次いで、「環境保全活動」35.9%、「地域・まちづくり活動」と「文化保存・伝統行事」ともに23.1%、「高齢者・障がい者支援」15.4%の順となっているが、それ以外は1割にも満たない割合であり、【血縁】による活動は、ほぼ日常生活に関する活動が中心となっている。(図(4)-11)

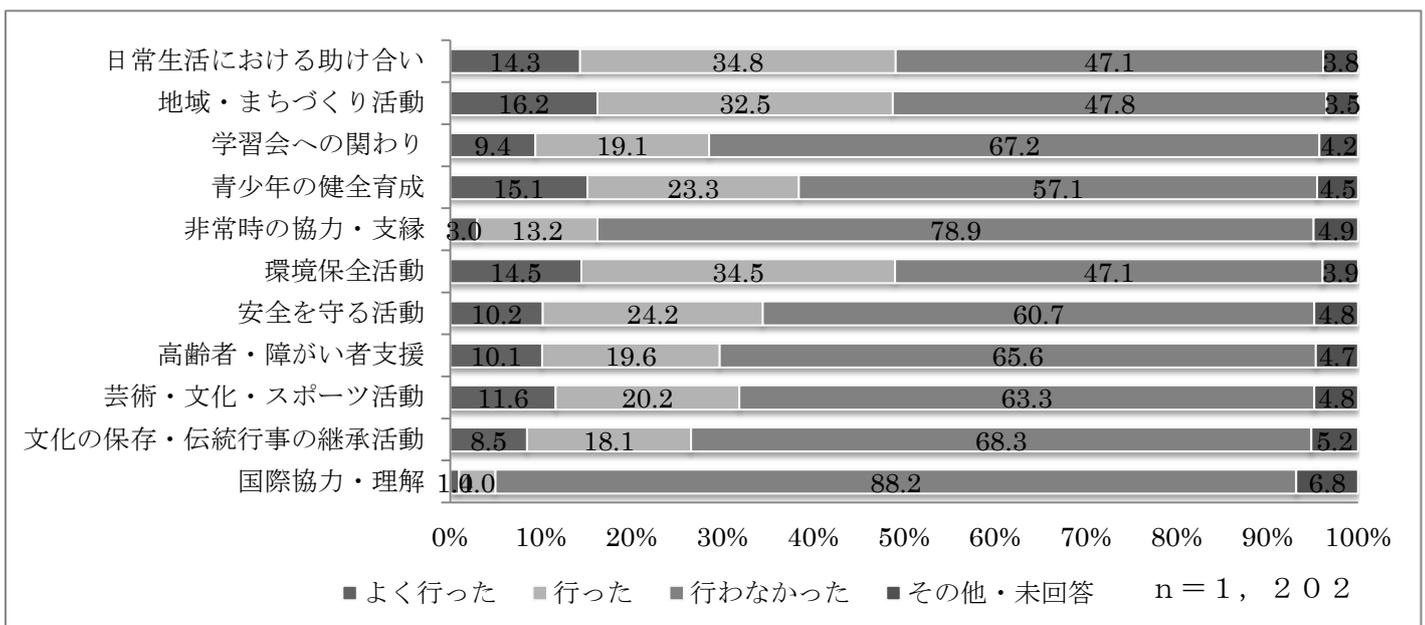


図(4)-11

イ 地域に関わること【地縁】

(ア) 県全体

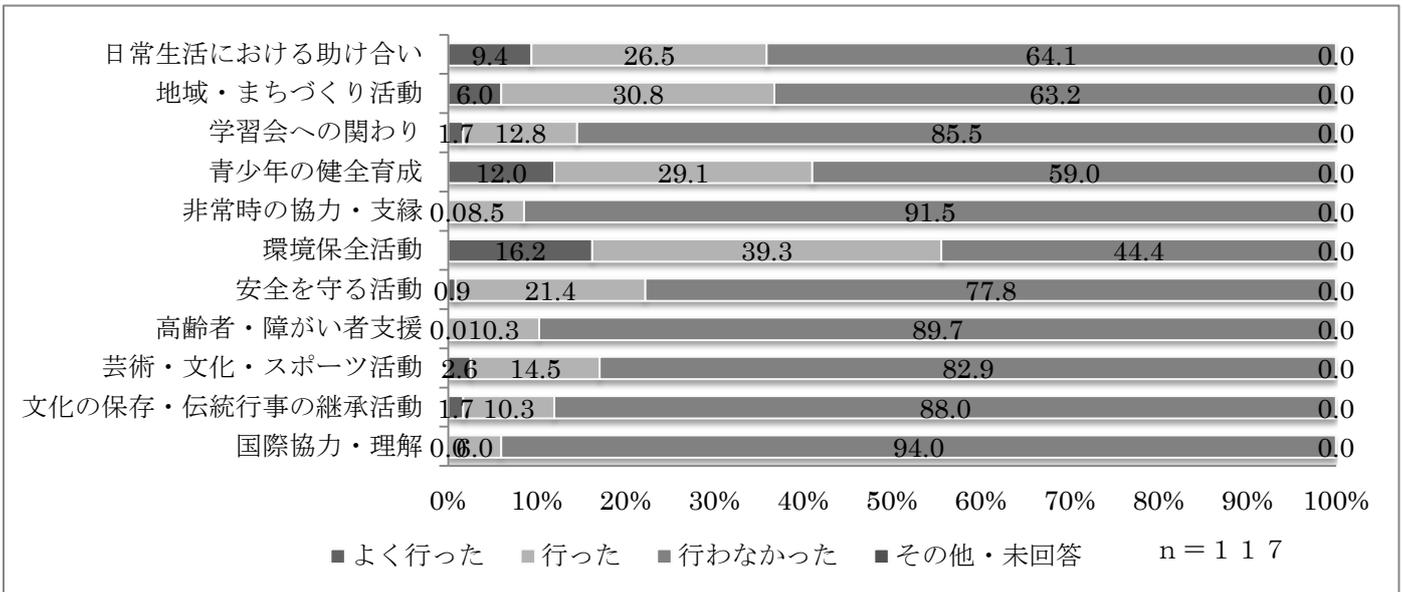
「日常生活における助け合い」「地域・まちづくり活動」「環境保全活動」が約50%で高い割合を示している。「非常時の協力・支援」が地域においては、つながり力が十分に発揮されていない傾向にあることが分かる。(図(4)-12)



図(4)-12

(イ) 北調査研究対象地域

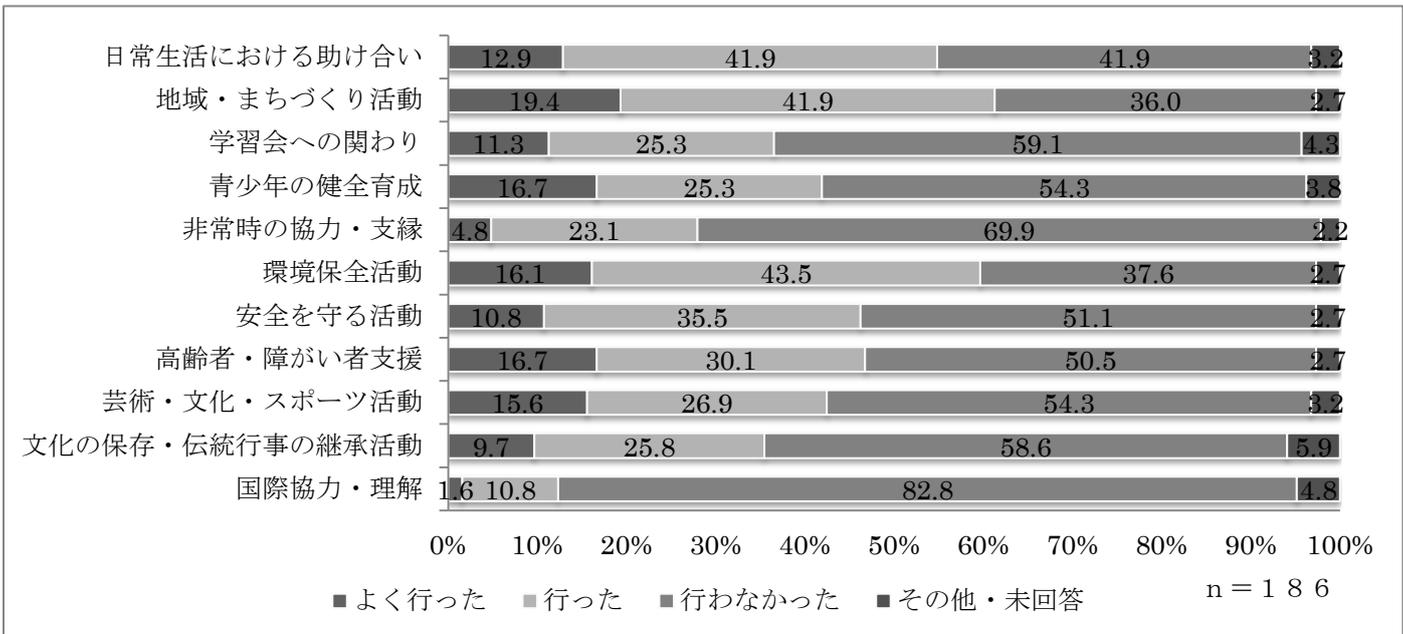
地域に関わることについては、「環境保全活動」が55.5%と最も高く、次に「青少年の健全育成」41.1%となっている。しかし、「日常生活における助け合い」が35.9%ということは「家族や親戚に関わること」と比較すると1/3に減少する。また、「非常時の協力・支援」は8.5%、「文化の保存・伝統行事の継承活動」12.0%、「国際協力・理解」6.0%と、社会的少数者に関する活動には低い値となっている。(図(4)-13)



図(4)-13

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

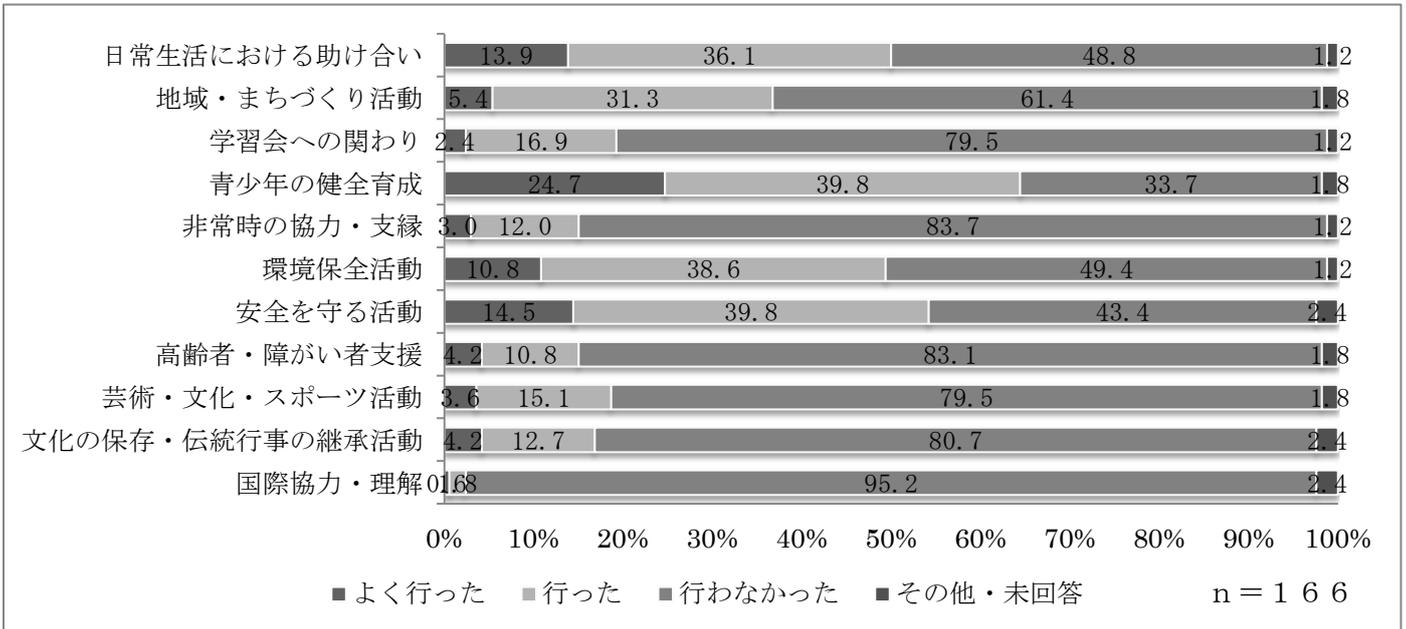
地域に関わることで最も高いのが「日常生活における助け合い」54.8%である。これは家族や親戚に関わるグラフ(図(4)-3)と比較すると約5割減である。「環境保全活動」59.6%、「安全を守る活動」46.3%、「高齢者・障がい者支援」46.8%、まちづくり活動や地域活動に関する内容が上位になっている。(図(4)-14)



図(4)-14

(エ) 鹿行調査研究対象地域

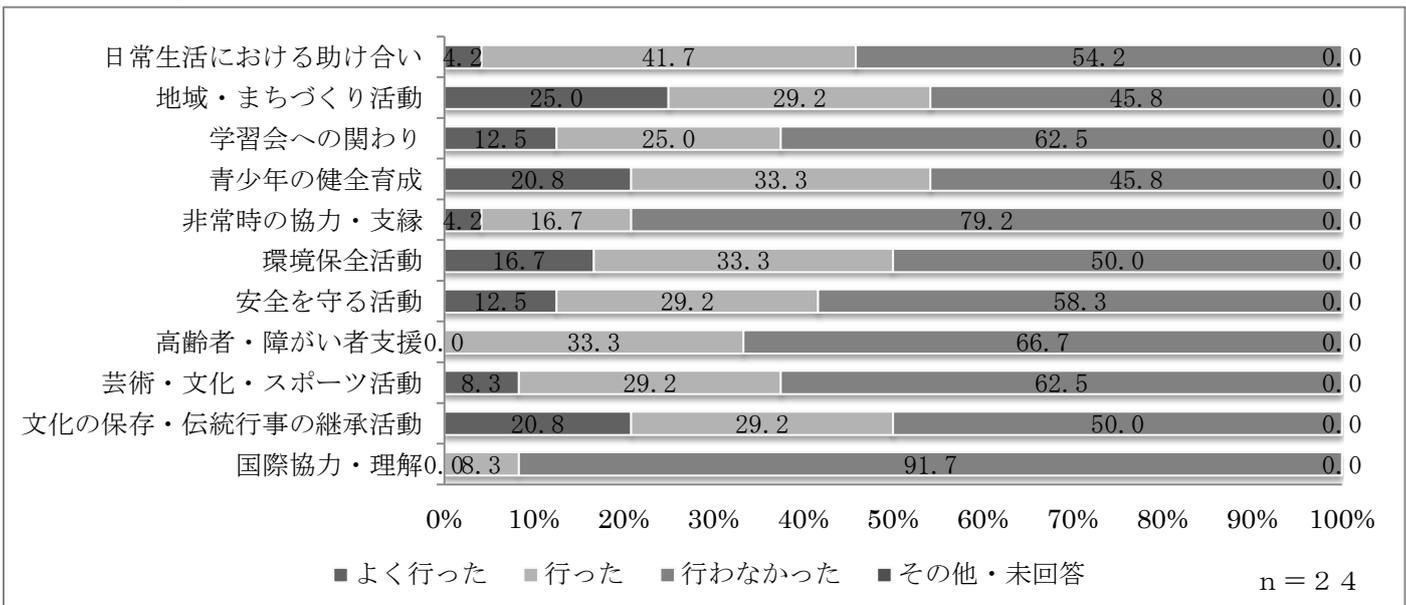
地域に関わることで、最も高い数値を示しているのは、「青少年の健全育成」で 64.5% である。この項目は、他の地域全体に比べて数値がとて高い。調査の対象者が小学生の保護者であることから、必然的に我が子に関わる活動が多くなっていると思われる。また、逆に言えば、地域の人との関わりは、子どもを介してのみ行われている割合が高いとも言える。(図(4)-15)



図(4)-15

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

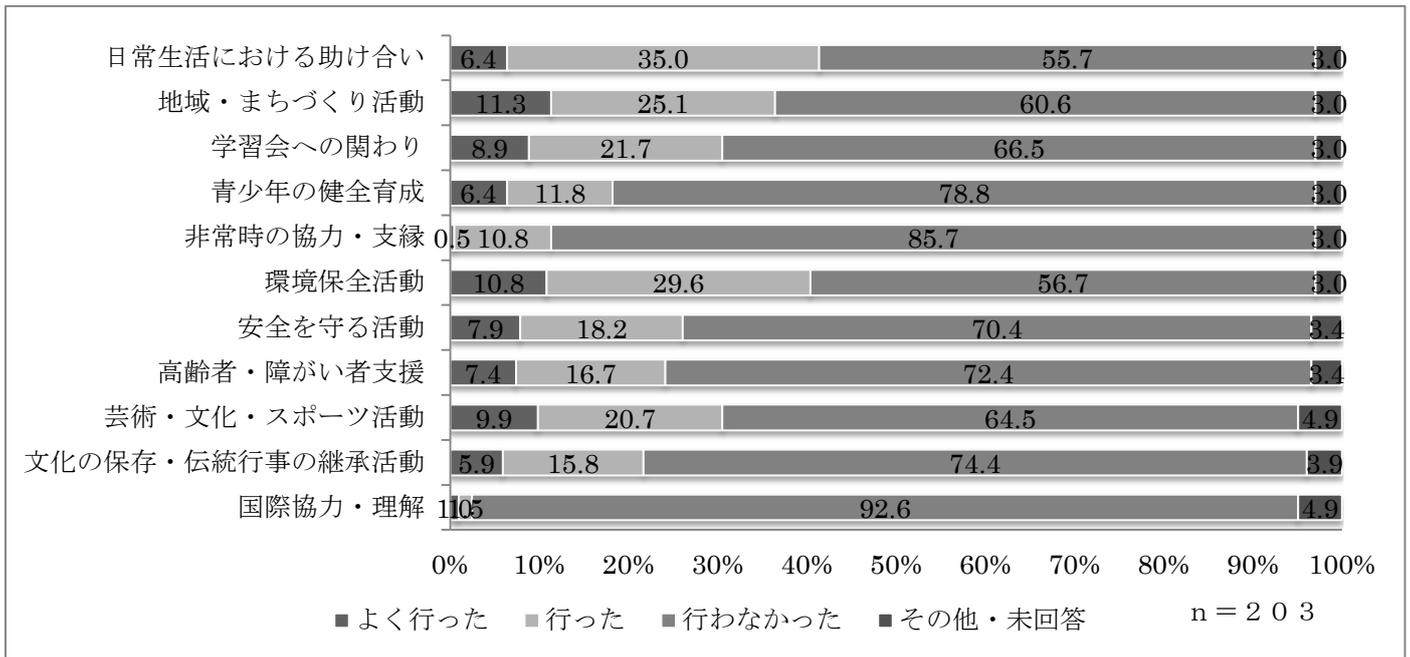
高い数値を示しているのは、「地域・まちづくり活動」、「青少年の健全育成」、「文化の保存・伝統行事の継承活動」である。(図(4)-5) 同様、伝統的な祭りに、地域全体で関わっていることが要因と思われる。また、「高齢者・障がい者支援」に対する割合が他の地域に比べてやや高いのは、居住年数の長さから関わりが深い地域との関係が影響しているものと思われる。(図(4)-16)



図(4)-16

(カ) 南調査研究対象地域

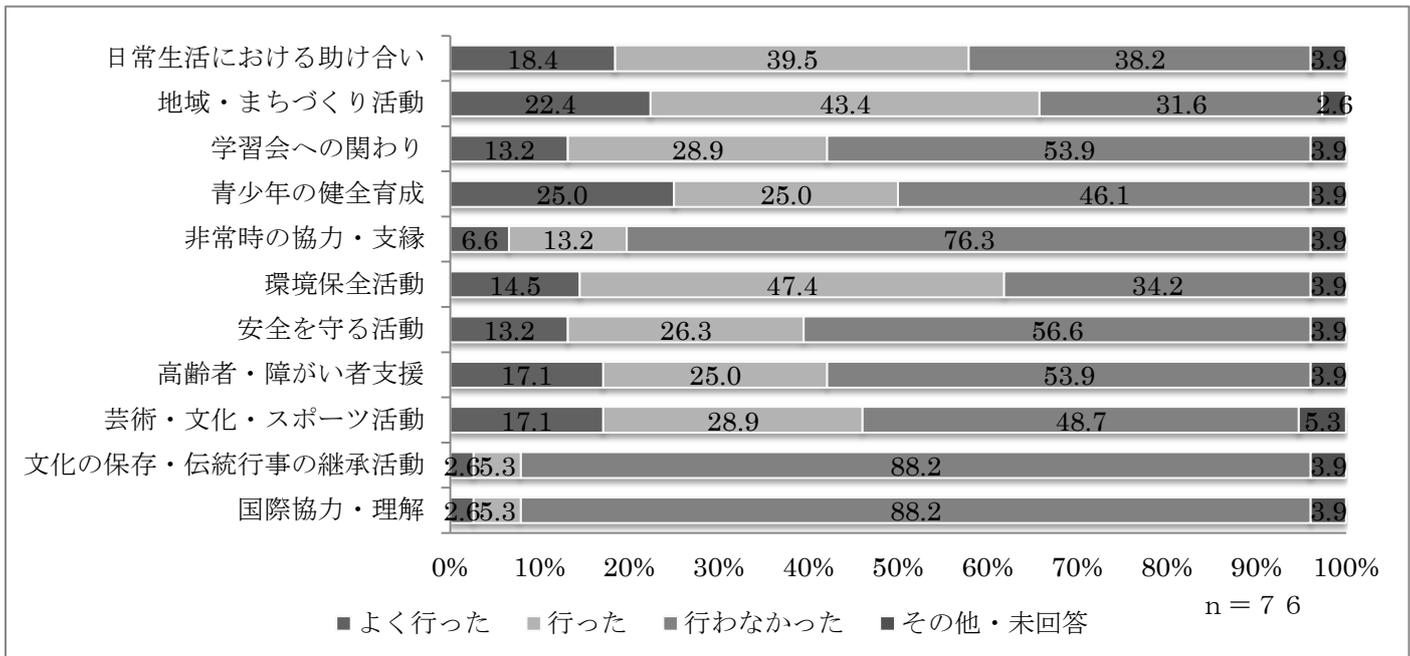
地域の人と一緒にいった、「日常生活における助け合い」と「環境保全活動」がほぼ同じ比率で、全体の中では活動を行ったことが多い項目である。次いで、「地域・まちづくり活動」が高い数値を示している。(図(4)-17)



図(4)-17

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

地域に関わることは、南調査研究対象地域と県全体では、最も活動している項目が「日常生活における助け合い」であるが、南コミュニティ再生事業対象地域では「地域・まちづくり活動」が最も高いという結果である。(図(4)-18)

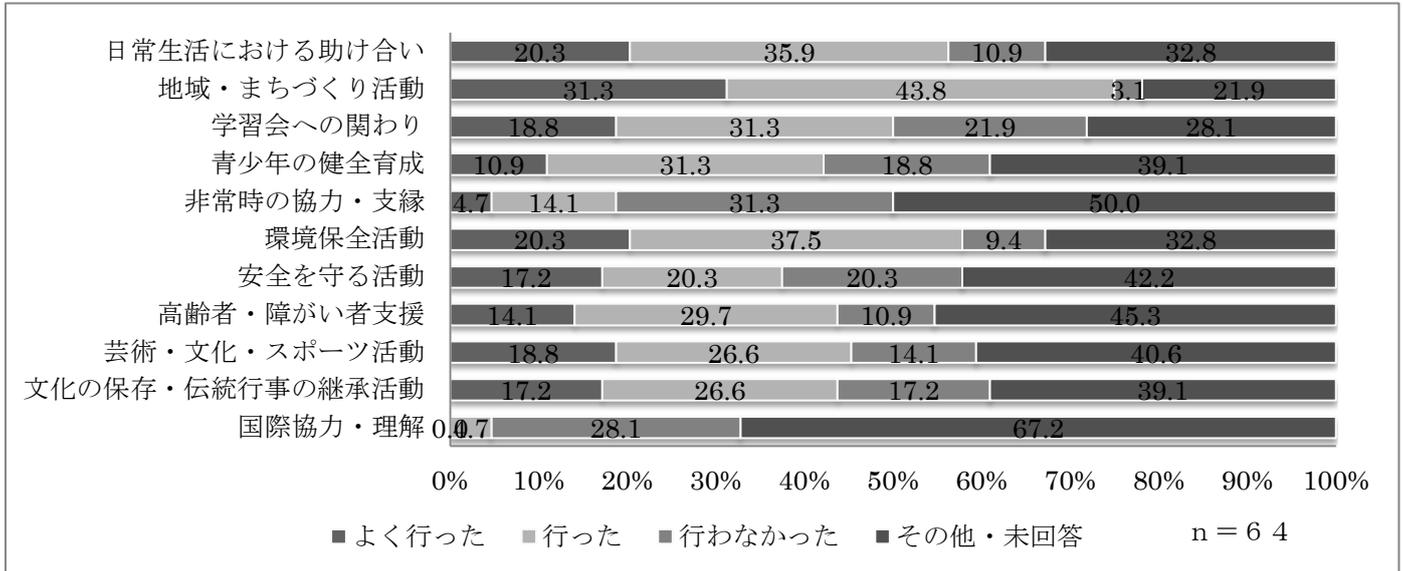


図(4)-18

(ク) 西調査研究対象地域

地域に関わることについては、「地域まちづくり活動」75.1%、「環境保全活動」57.8%、「日常生活における助け合い」56.2%となっている。続いて「学習会への関わり」50.1%、「芸術・文化・スポーツ活動」45.4%と、個人の趣味教養に関するものへと移行し、「非常時の協力・支縁」18.8%、「国際協力・理解」4.7%となる。生活や地域、趣味教養に関わる活動は上位にあがり、社会的少数者に関わる活動は下位となっている。

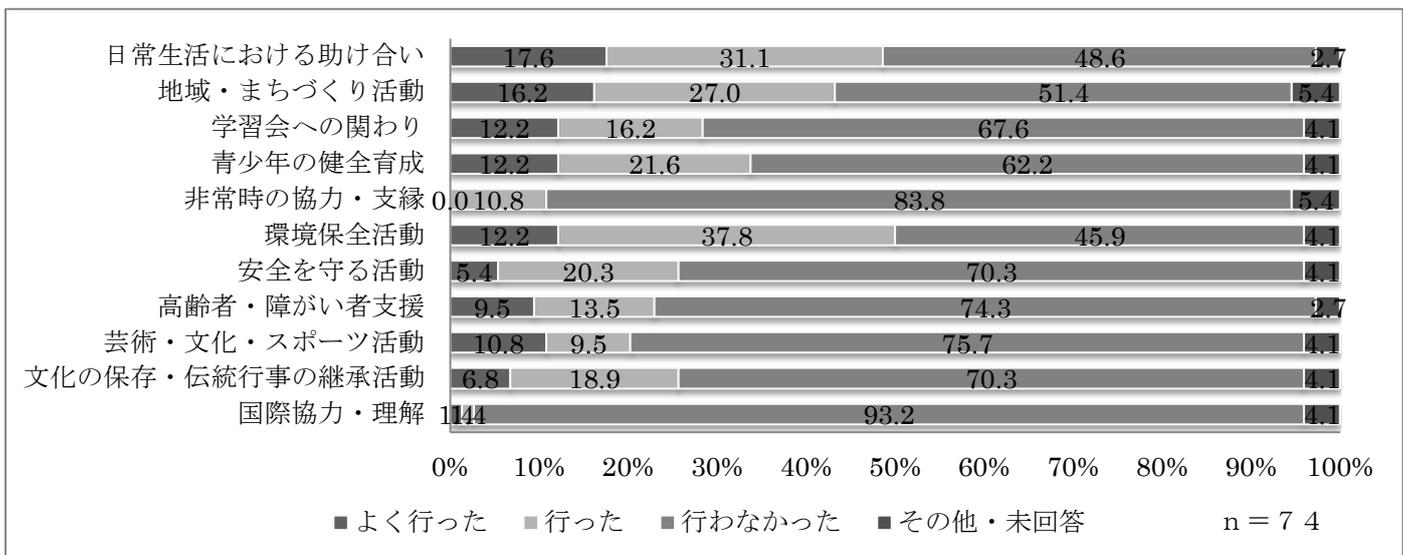
(図(4)-19)



図(4)-19

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

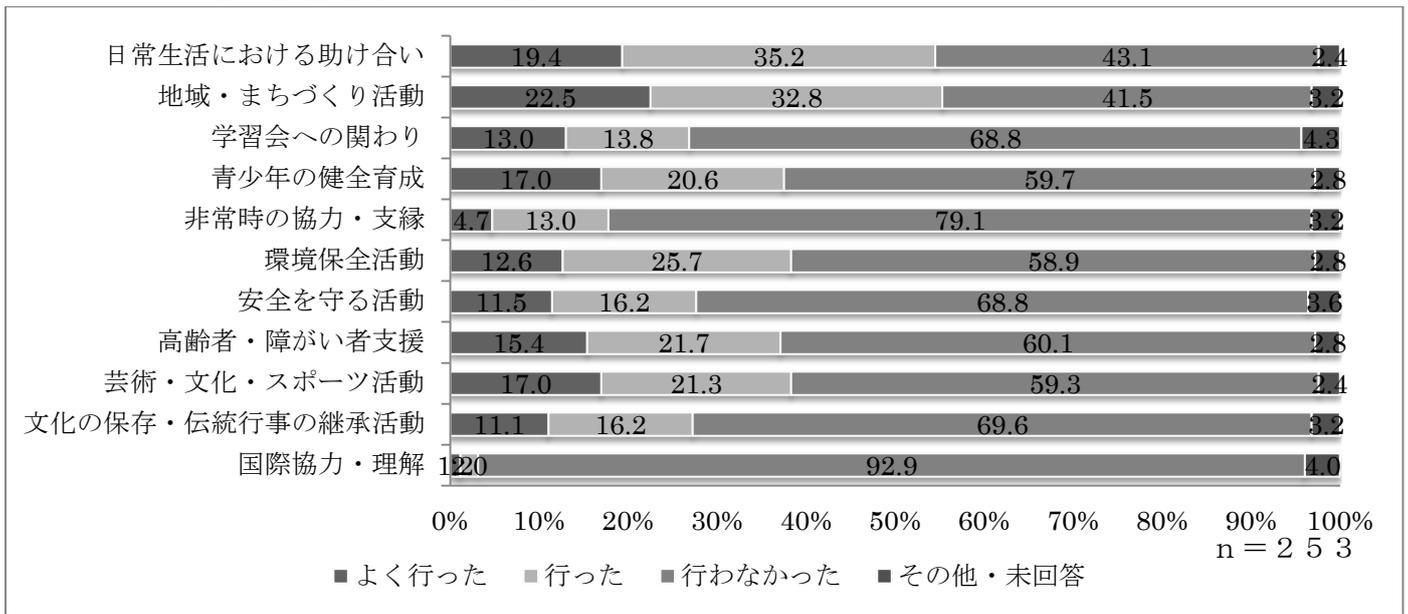
地域に関わることについては、「環境保全活動」50.0%、「日常生活における助け合い」48.7%、「地域まちづくり活動」43.2%、「青少年の健全育成」33.8%となっている。続いて「学習会への関わり」28.4%、「安全を守る活動」及び「文化の保存・伝統行事の継承活動」は共に25.7%となる。そして「高齢者・障がい者支援」23.0%「芸術・文化・スポーツ活動」20.3%と続き「非常時の協力・支縁」10.8%、「国際協力・理解」2.8%となる。生活や地域、こどもに関わる活動は上位にあがり、社会的少数者に関わる活動は下位となっている。(図(4)-20)



図(4)-20

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

「地域・まちづくり活動」が 55.3%で最も高く、次いで「日常生活における助け合い」が 54.6%で続いている。「国際協力・理解」の 3.2%や「非常時の協力・支援」の 17.7%が低い数値となっている。(図(4)-21)

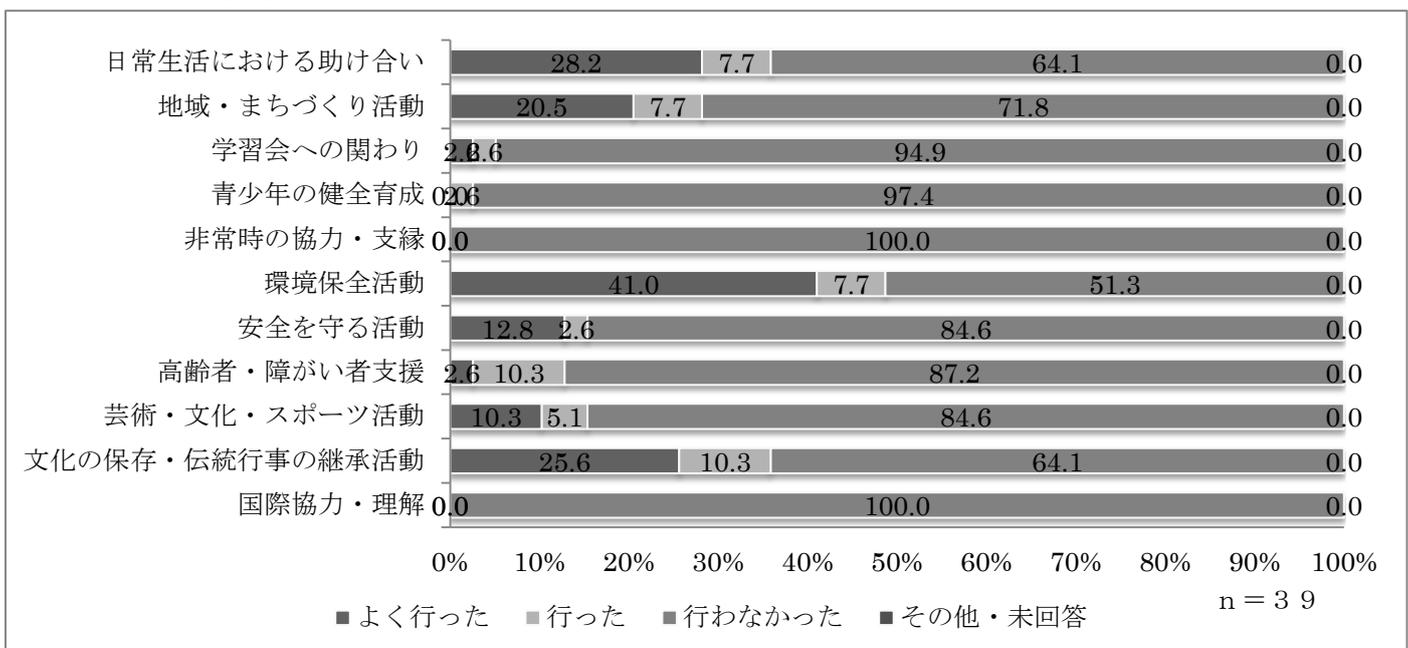


図(4)-21

(サ) 日光市土呂部地区

「環境保全活動」48.7%が最も高く、次いで、「日常生活における助け合い」と「文化保存・伝統行事」がともに 35.9%、「地域・まちづくり活動」28.2%の順となっており、【地縁】に関わる活動が上位である。日常生活での活動は上位となっているが、【血縁】のグラフと比較すると、5割程度低くなっている。また、全体と比較すると、「文化保存・伝統行事」の数値が高いのが特徴である。中山間地域の高齢化集落特有の地域性が見られ、自治会や老人会等以外で行う活動の割合が非常に低くなっている。

(図(4)-22)

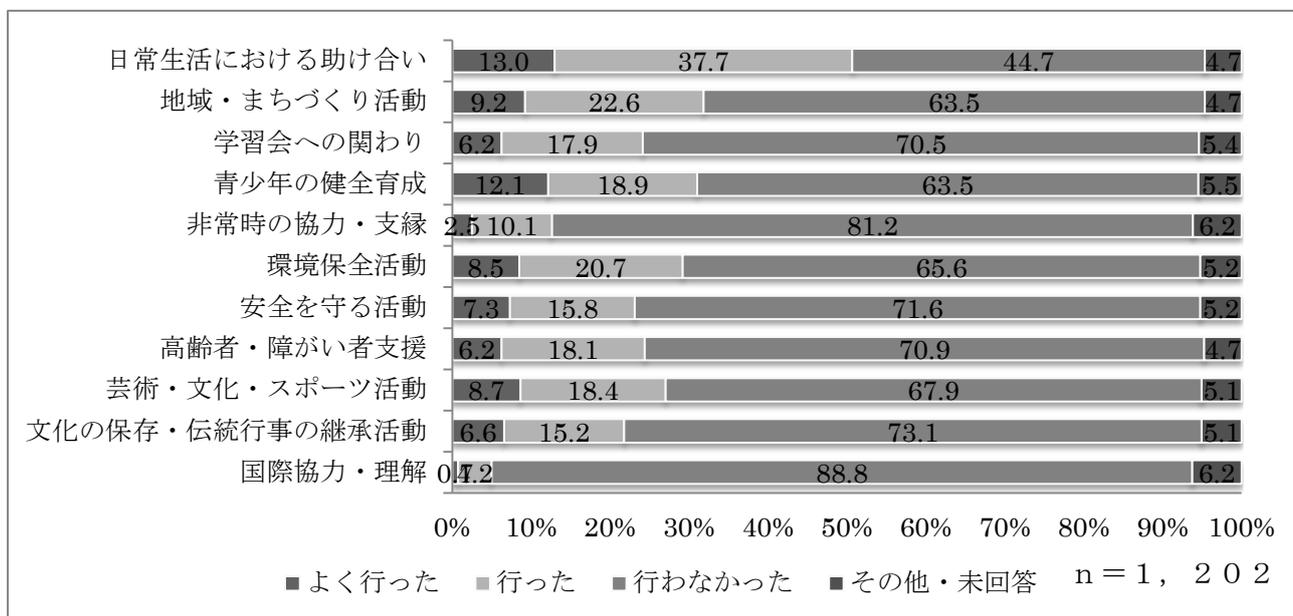


図(4)-22

ウ 友人に関わること【友縁】

(ア) 県全体

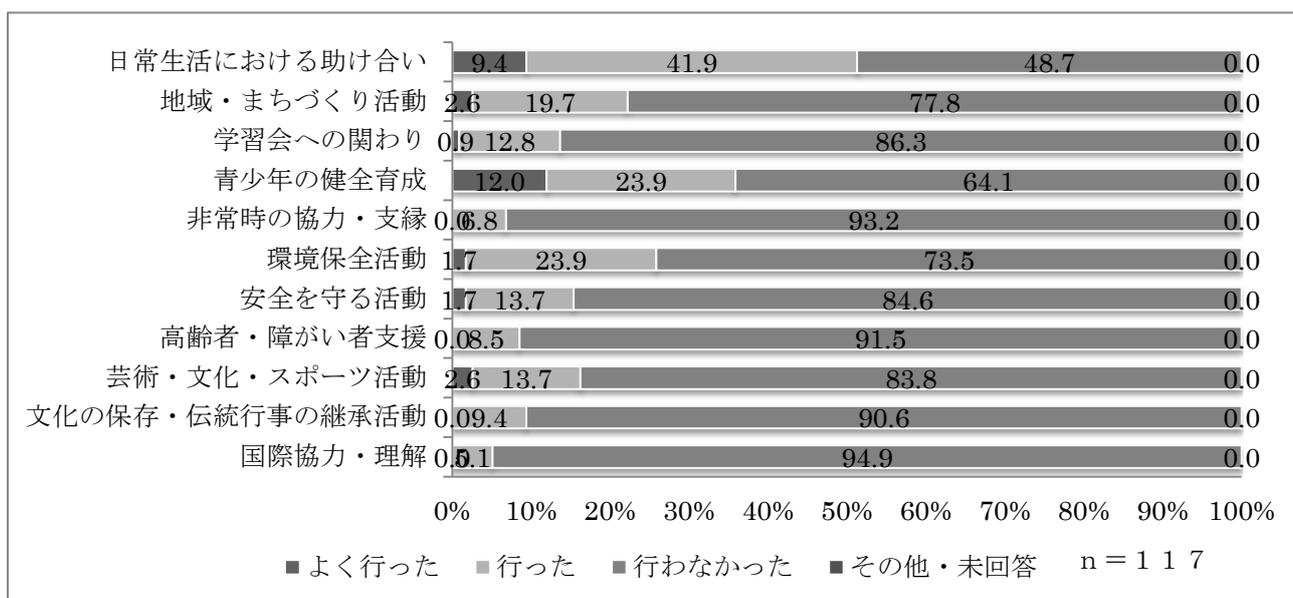
友人に関わることで、最も高いのが「日常生活における助け合い」の50.7%である。他は30%前後の割合を示している。これは、友人とのつながりを保ちながら活動している割合が30%であり、友人と共に活動する機会が少ない傾向にあると言える。(図(4)-23)



図(4)-23

(イ) 北調査研究対象地域

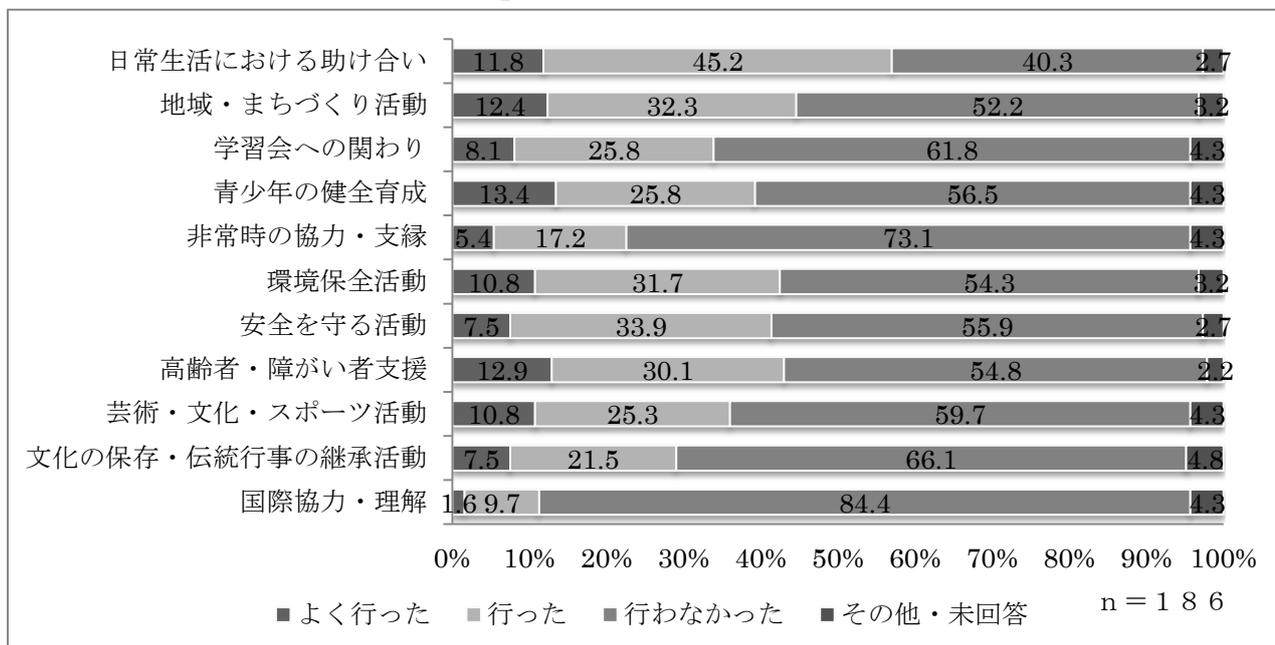
友人に関わることで、最も高いのが「日常生活における助け合い」51.3%、「青少年の健全育成」35.9%、「環境保全活動」25.6%と、地域や子どもに関する活動内容が高い。続いて、「学習会への関わり」や「芸術・文化・スポーツ活動」については同様の数値を示している。「国際協力・理解」については下位である。(図(4)-24)



図(4)-24

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

友人に関わることで、最も高いのが「日常生活における助け合い」57.0%、以下「地域・まちづくり活動」「青少年の健全育成」「環境保全活動」「安全を守る活動」「高齢者・障がい者支援」は同様な数値である。続いて「学習会への関わり」「芸術・文化・スポーツ活動」など趣味教養活動が続いている。社会的少数者の「国際協力・理解」については11.3%と低い数値である。(図(4)-25)

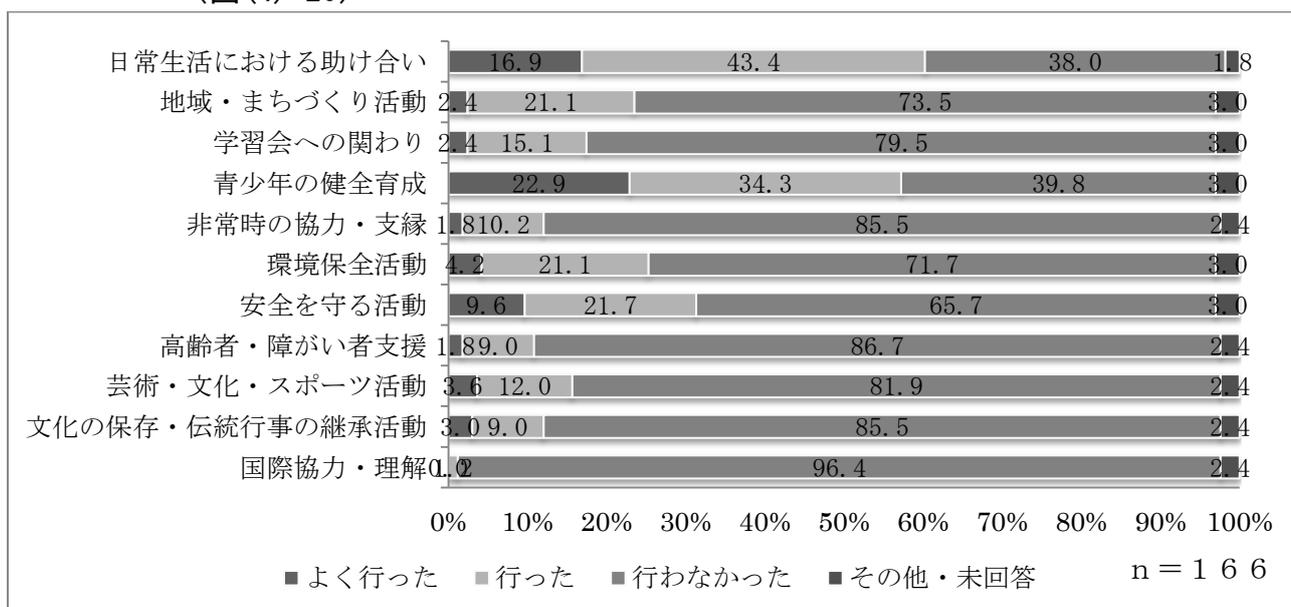


図(4)-25

(エ) 鹿行調査研究対象地域

高い数値を示しているのは、「日常生活における助け合い」と「青少年の健全育成」であり、どちらも約6割である。(図(4)-15)と同様、調査の対象者が小学生の保護者であることから、子どもに関わる活動における友人関係が多く、それ以外の活動においては、友人関係がやや希薄である様子が表れている。

(図(4)-26)

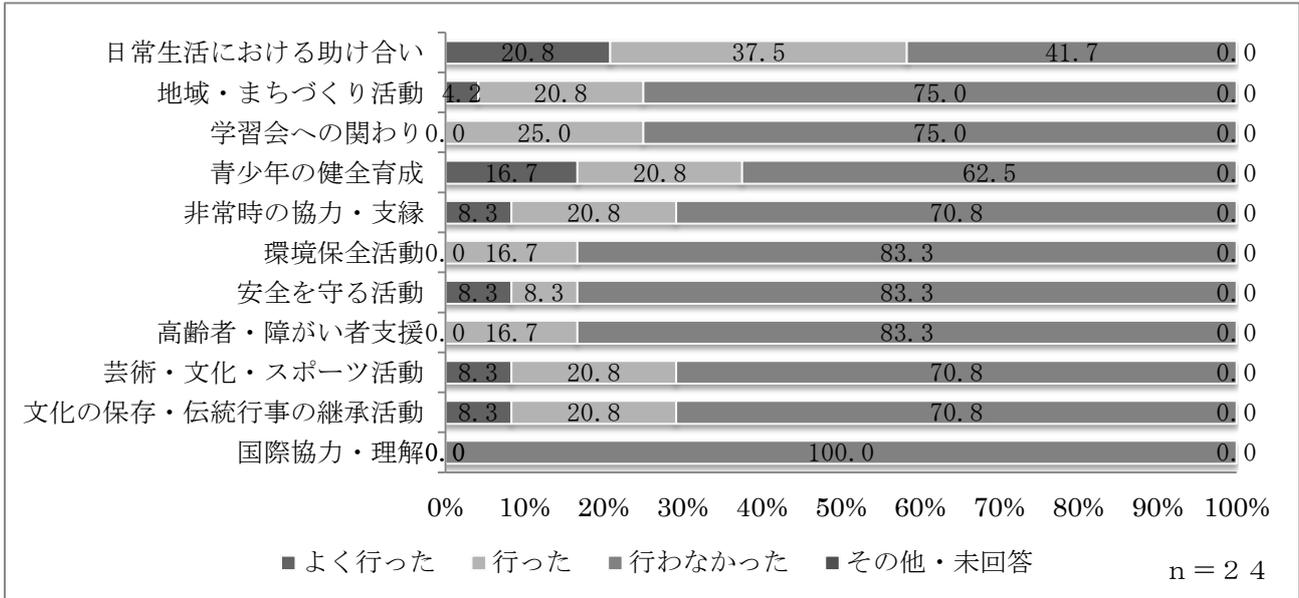


図(4)-26

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

高い数値を示しているのは、「日常生活における助け合い」で、約6割である。また、「青少年の健全育成」の項目については、(図(4)-26)に比べて数値が低い。回答者に男性・50~60代が多いことも要因の一つと思われる。一方、「非常時の協力・支援」においては、約3割が活動したと答えており、他地域に比べて数値が高い。調査地域である潮来市地域は、東日本大震災による被害が大きく、そのときの実体験に基づいた「助け合い」の精神が表れていると思われる。

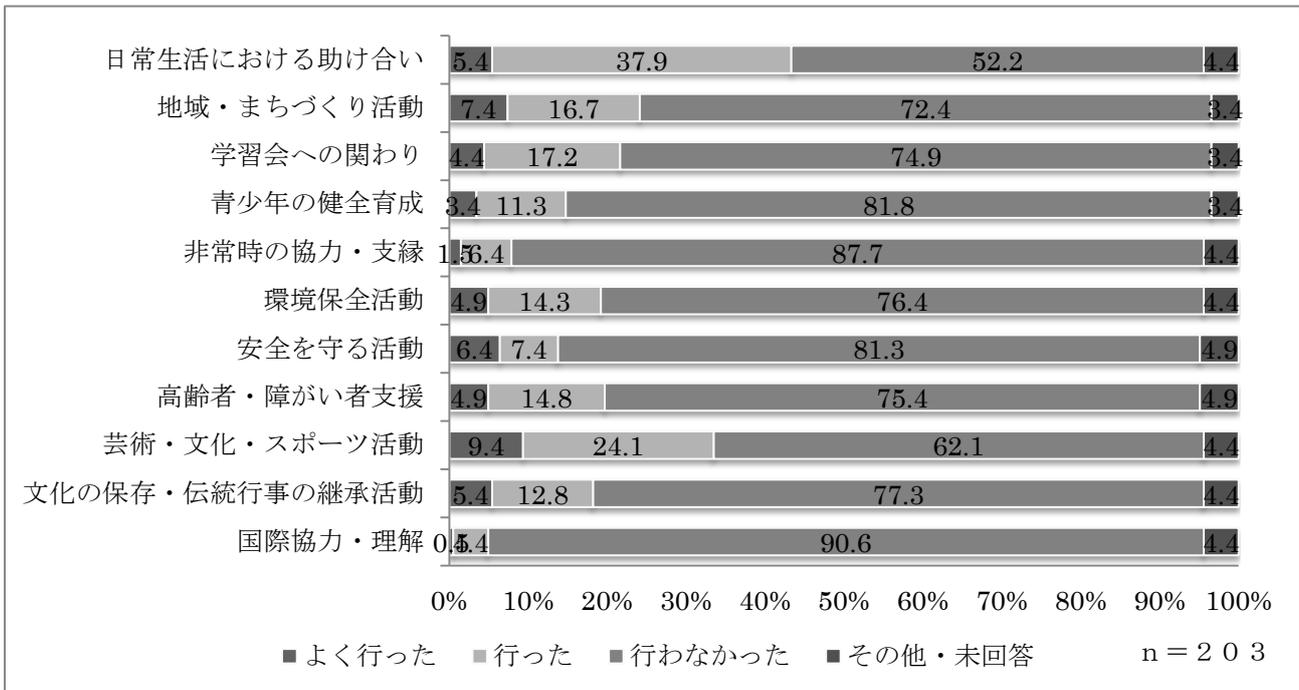
(図(4)-27)



図(4)-27

(カ) 南調査研究対象地域

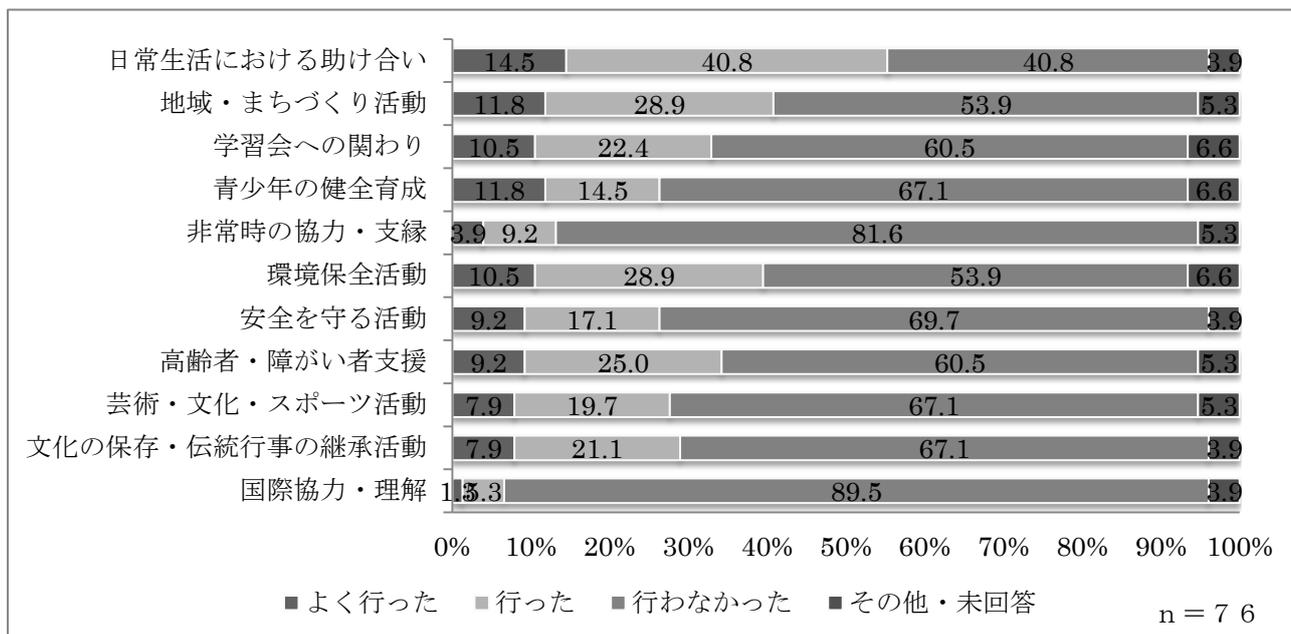
友人と共に活動したことに関しては、「日常生活における助け合い」が最も多く活動しており、他の活動と比べてもかなり差が大きいと言える。(図(4)-28)



図(4)-28

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

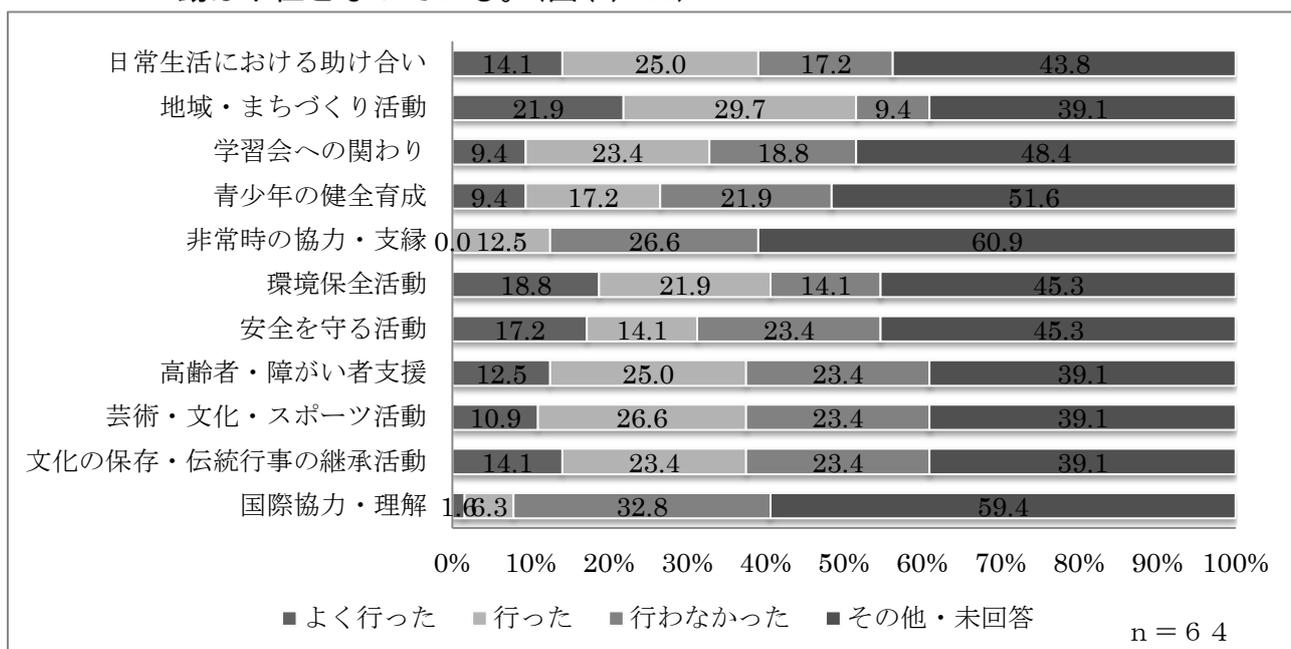
友人に関わることでは、南調査研究対象地域においては、「地域・まちづくり活動」の活動率が2番目に高いという特徴がみられる。(図(4)-29)



図(4)-29

(ク) 西調査研究対象地域

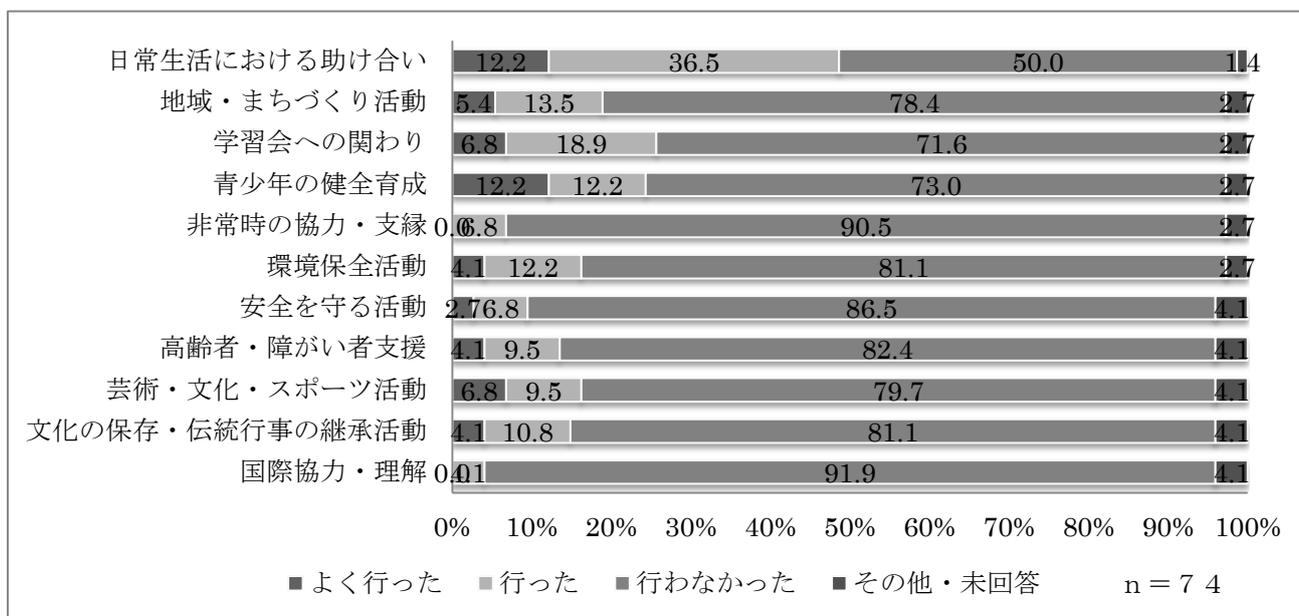
友人に関わることについては、「地域まちづくり活動」51.6%、「環境保全活動」40.7%、「日常生活における助け合い」39.1%となっている。続いて「高齢者・障がい者支縁」「芸術・文化・スポーツ活動」は37.5%である。「学習会への関わり」32.8%、「安全を守る活動」31.3%、「青少年の健全育成」26.6%と子どもに関わる活動へ移行し、「非常時の協力・支縁」12.5%、「国際協力・理解」7.9%となる。生活や地域、趣味教養に関わる活動は上位にあがり、社会的少数者に関わる活動は下位となっている。(図(4)-30)



図(4)-30

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

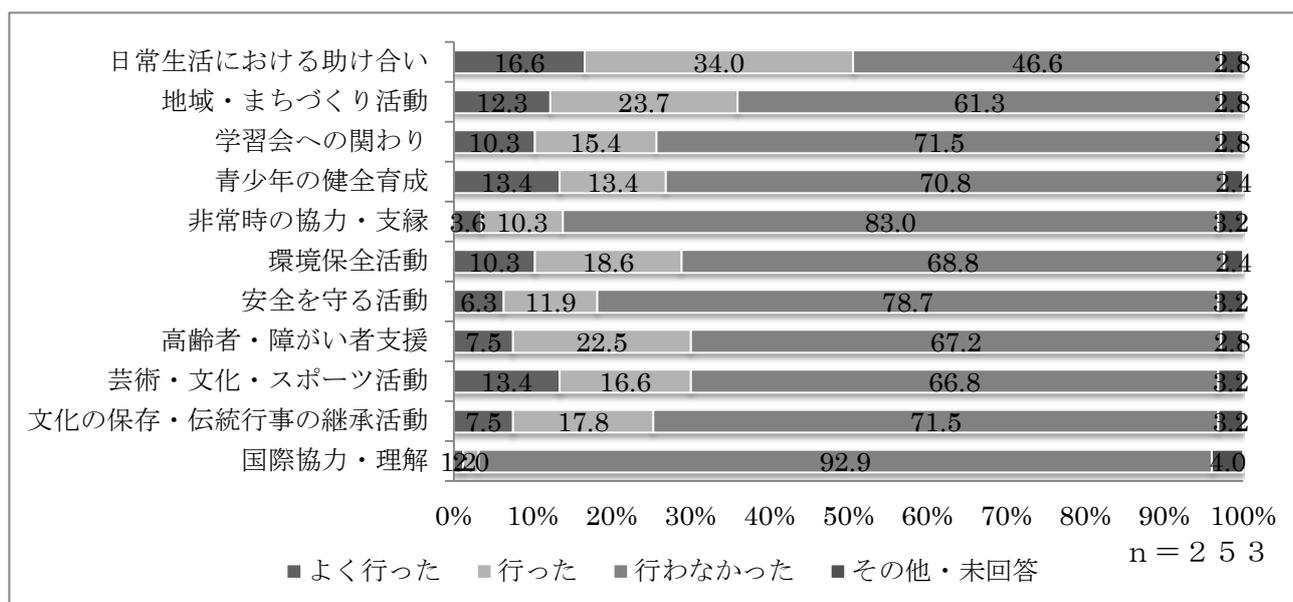
友人に関わることについては、「日常生活における助け合い」48.7%、「学習会への関わり」25.7%、「青少年の健全育成」24.4%となっている。「地域・まちづくり活動」18.9%、「環境保全活動」「芸術・文化・スポーツ活動」は共に16.3%、「文化の保存・伝統行事の継承活動」14.9%となり、そして「高齢者・障がい者支援」13.6%「安全を守る活動」9.5%となっている。生活や地域、こどもに関わる活動は上位にあがり、高齢者や障がい者等社会的少数者に関わる活動は下位となっている。(図(4)-31)



図(4)-31

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

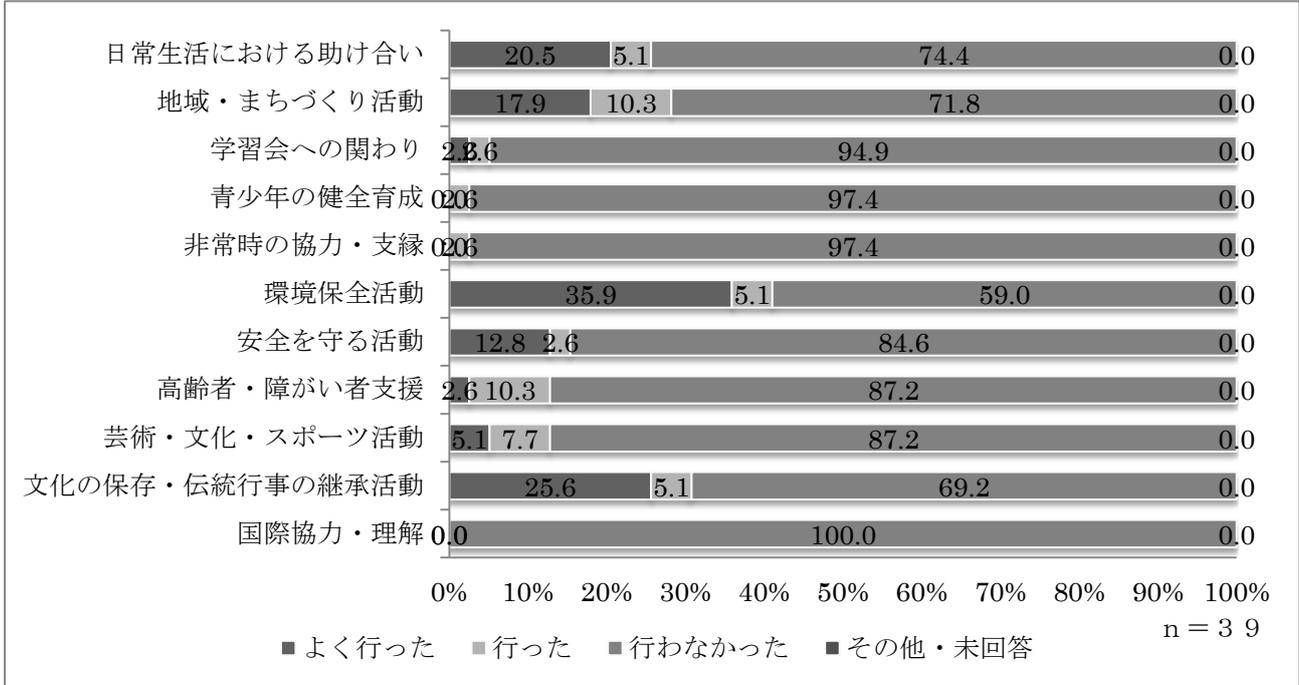
「日常生活における助け合い」50.6%が最も高く、次いで「地域まちづくり活動」が36.0%である。「非常時の協力・支援」「安全を守る活動」が低い数値を示している。(図(4)-32)



図(4)-32

(サ) 日光市土呂部地区

【地縁】と同様に、「環境保全活動」41.0%と最も高く、次いで、「文化保存・伝統行事」30.7%、「地域・まちづくり活動」28.2%、「日常生活における助け合い」25.6%の順となっている。【地縁】のグラフと比較すると、若干数値は低くなっているが、同じような順位の傾向となっている。地域の中に友人がいる、つまり、【地縁】と【友縁】がほぼ同じ関係であるのが特徴である。県全体と比較すると、日常生活に関する活動が、5割程度低くなっている。(図(4)-33)

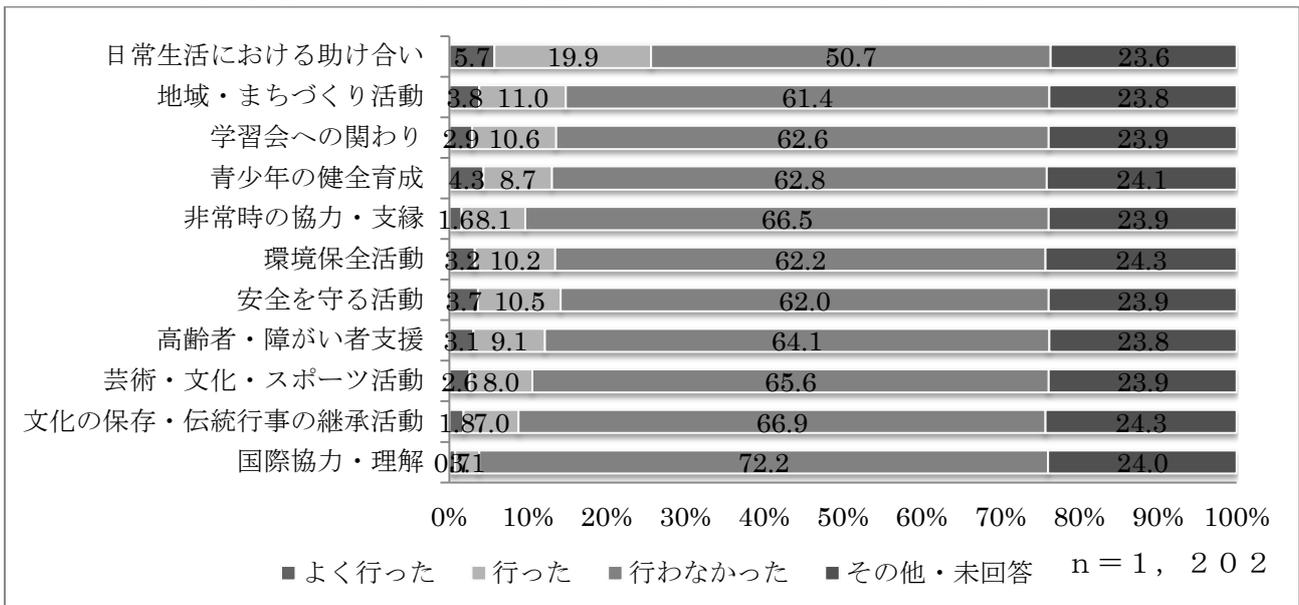


図(4)-33

エ 職場に関わること【職縁】

(ア) 県全体

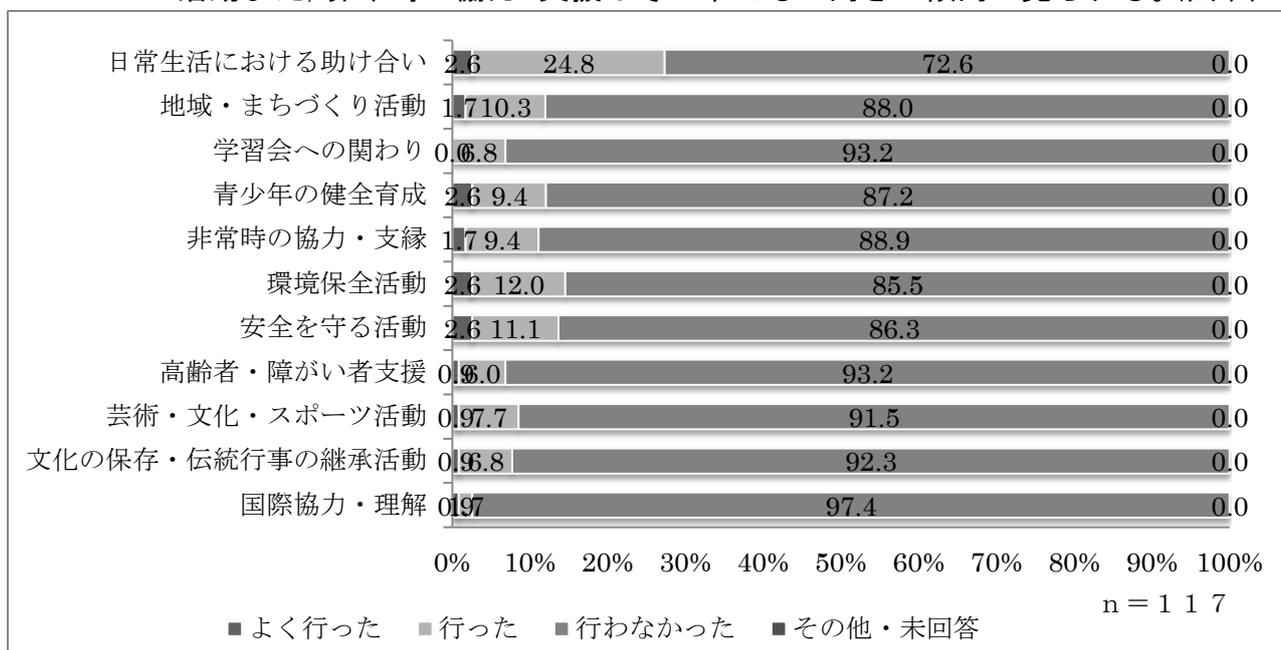
全体的につながり力が低い傾向にあるが、「日常生活における助け合い」や「地域・まちづくり活動」「安全を守る活動」が高い割合を示す。(図(4)-34)



図(4)-34

(イ) 北調査研究対象地域

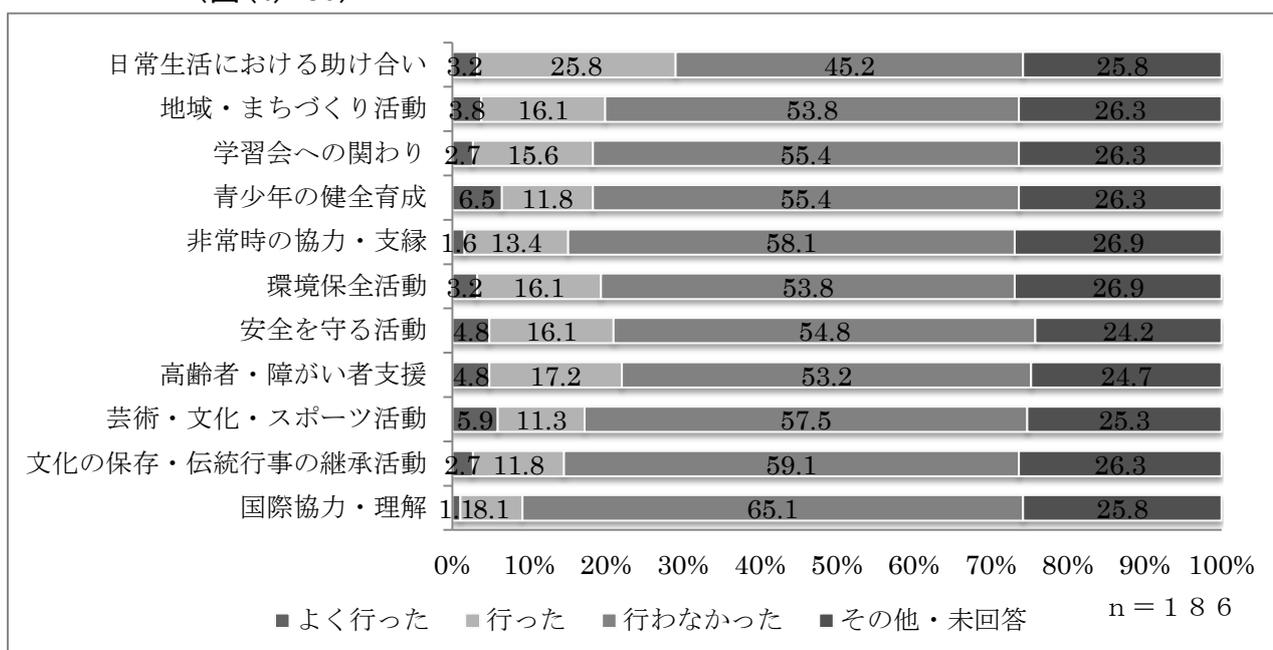
職場に関わることで、最も高いのが「日常生活における助け合い」27.4%であるが以下の内容は、全て同様に低い割合である。他のグラフと比較すると、「地域・まちづくり活動」、「環境保全活動」、「安全を守る活動」など、地域に関する活動また、非常時の協力・支援はその中でも上向きの傾向が見られる。(図(4)-35)



図(4)-35

(ウ) 北コミュニティ再生事業対象地域

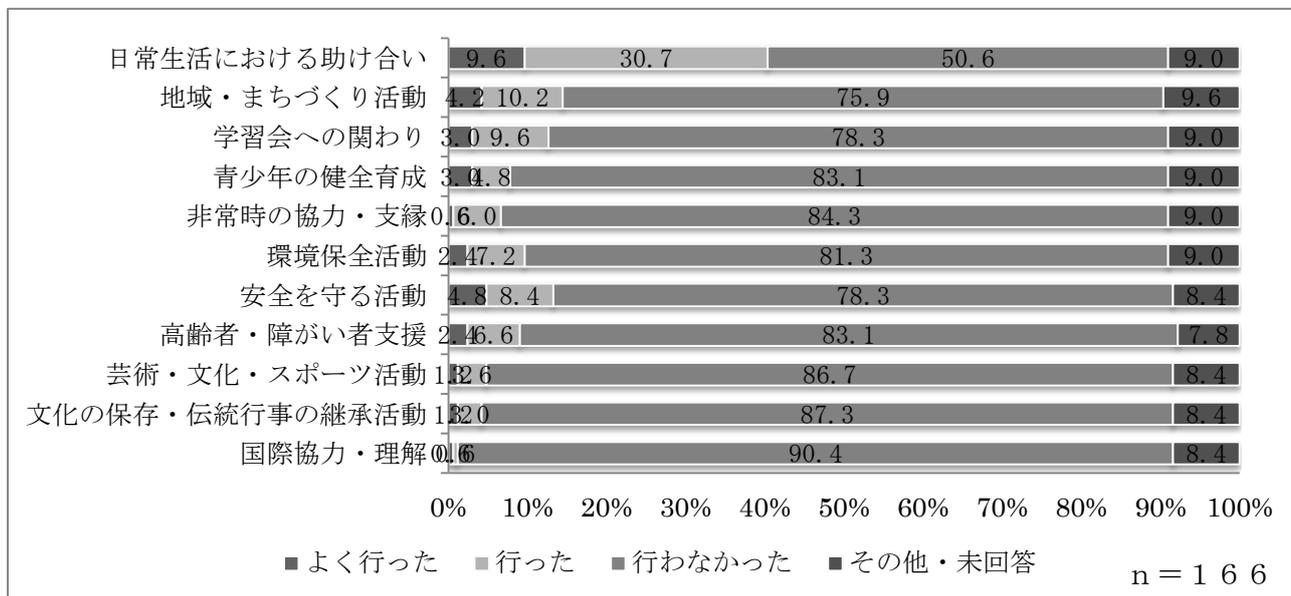
職場に関わることで、最も高いのが「日常生活における助け合い」29.0%であるが、それ以外の活動内容は全て同様に低い割合である。他のグラフと比較すると、「高齢者・障がい者支援」、「安全を守る活動」がやや上回っている。(図(4)-36)



図(4)-36

(エ) 鹿行調査研究対象地域

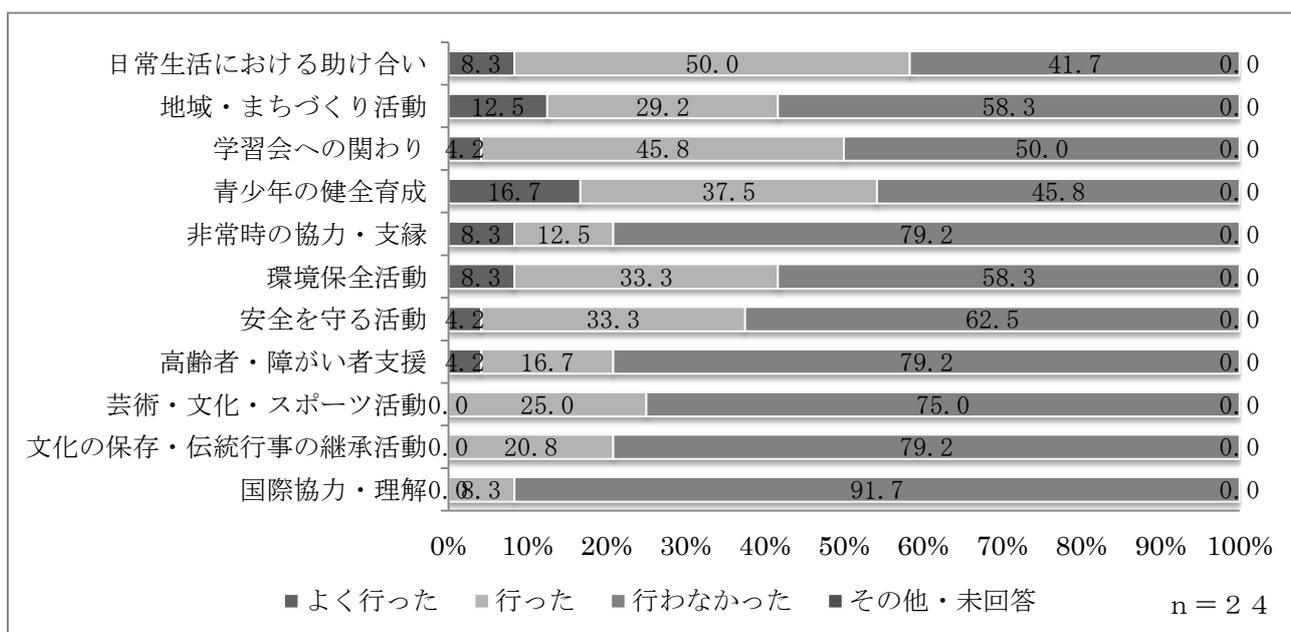
最も高い数値を示しているのは、「日常生活における助け合い」で約4割を占めているが、他の活動内容は、全て同様に低い割合である。職場の人とは、職場以外のところでは、あまり関わりがもたれていない様子が見取れる。また、この項目における結果については、調査対象者の15.1%が仕事に従事していないことも要因の一つと思われる。(図(4)-37)



図(4)-37

(オ) 鹿行コミュニティ再生事業対象地域

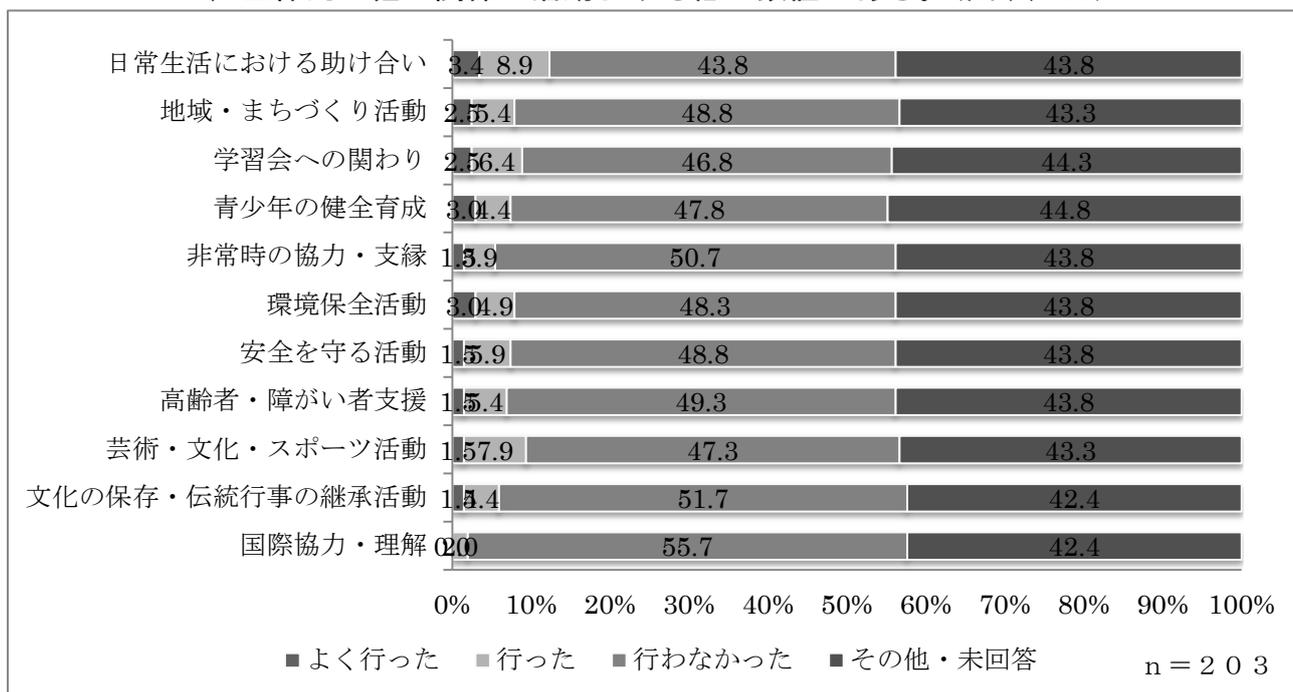
高い数値を示しているのは「日常生活における助け合い」で約6割、続いて、「青少年の健全育成」、「学習会への関わり」で約5割であり、他地域に比べ、どの項目においても数値がやや高い。調査対象者全員が仕事をもっており、商工会に関わる人がほとんどであることから、活動の拠点が職場である割合が高いと思われる。(図(4)-38)



図(4)-38

(カ) 南調査研究対象地域

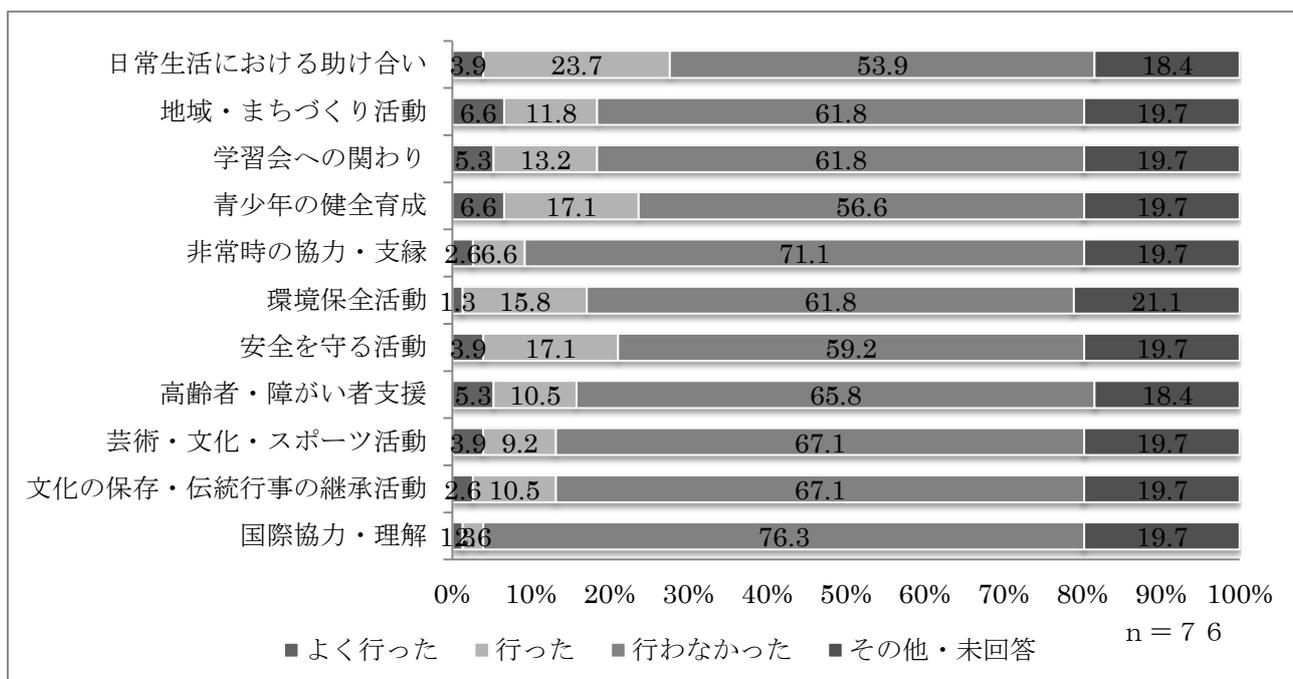
職場の人との活動では、最も高いものが「日常生活における助け合い」であるが、全体的に他の関係の活動よりも低い数値である。(図(4)-39)



図(4)-39

(キ) 南コミュニティ再生事業対象地域

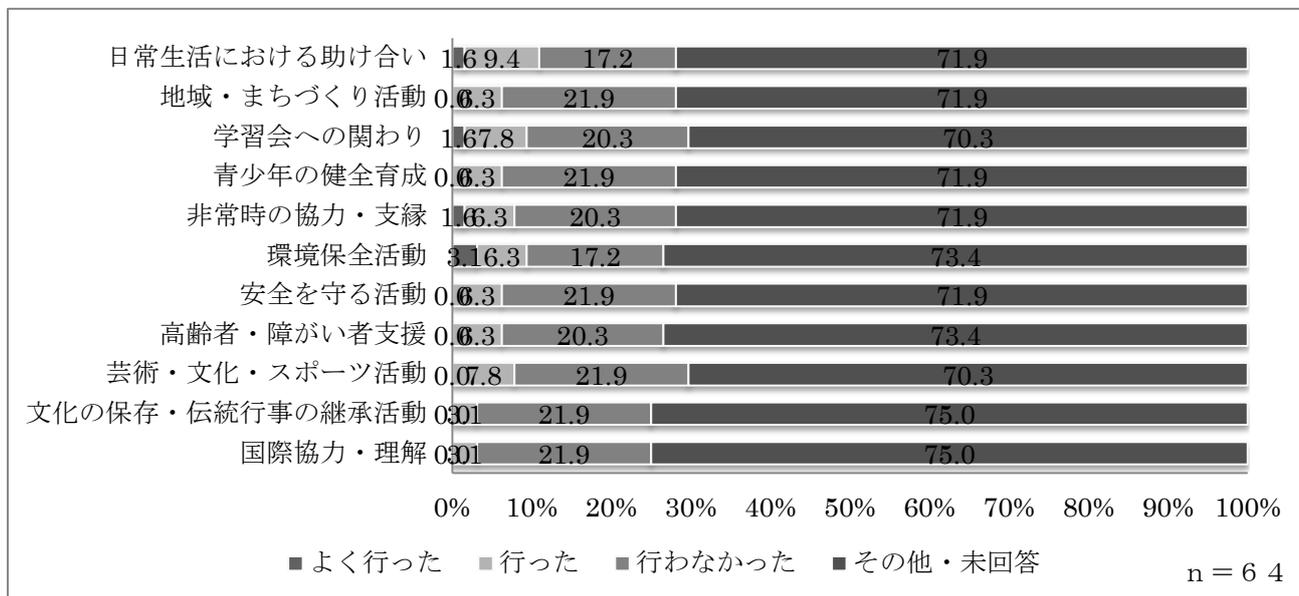
職場に関わることは、南コミュニティ再生事業対象地域と県全体では下位にある「芸術・文化・スポーツ活動」が、南調査研究対象地域では2番目に位置している。「青少年の健全育成」は、南調査研究対象地域と県全体では下位にあるが、南コミュニティ再生事業対象地域では2番目に高くなっている。(図(4)-40)



図(4)-40

(ク) 西調査研究対象地域

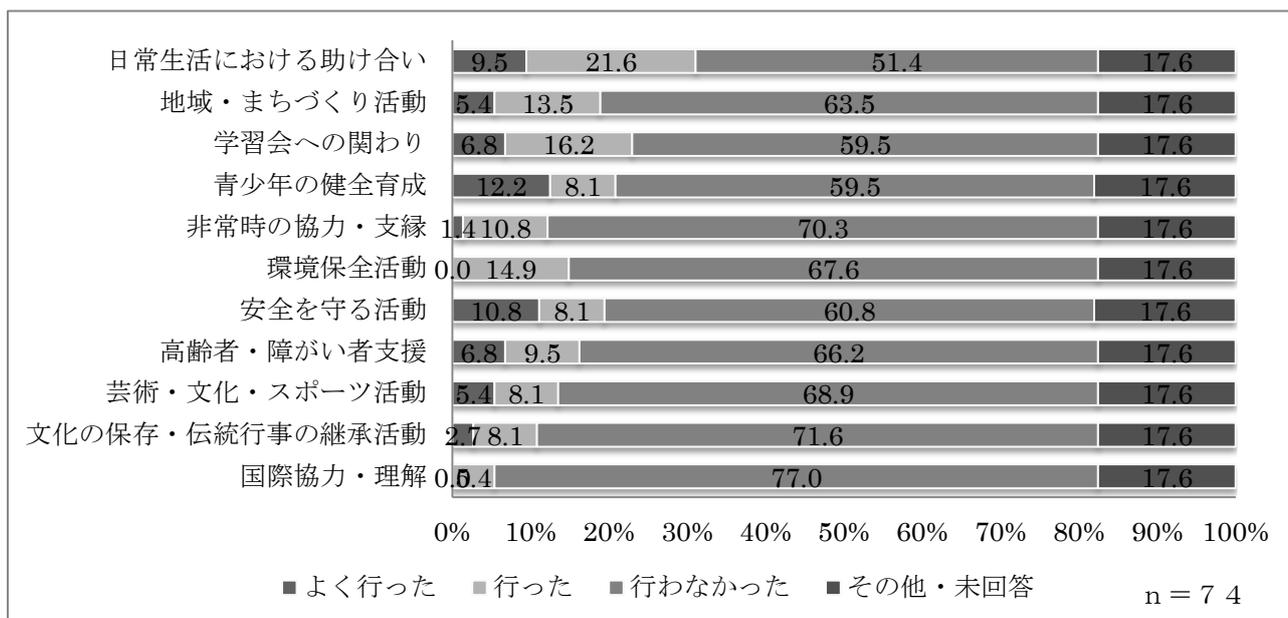
職場に関わることについては、最も高いのが「日常生活における助け合い」11.0%となっており、他の関わりに比べ、以下の内容はすべて同様に低い値となっている。県全体と比較してもすべての項目においても低い数値となっており、(図(1)-41)と併せてみると就業状況や回答者の年齢が影響していると考えられる。(図(4)-41)



図(4)-41

(ケ) 西社会貢献活動推進事業受講者

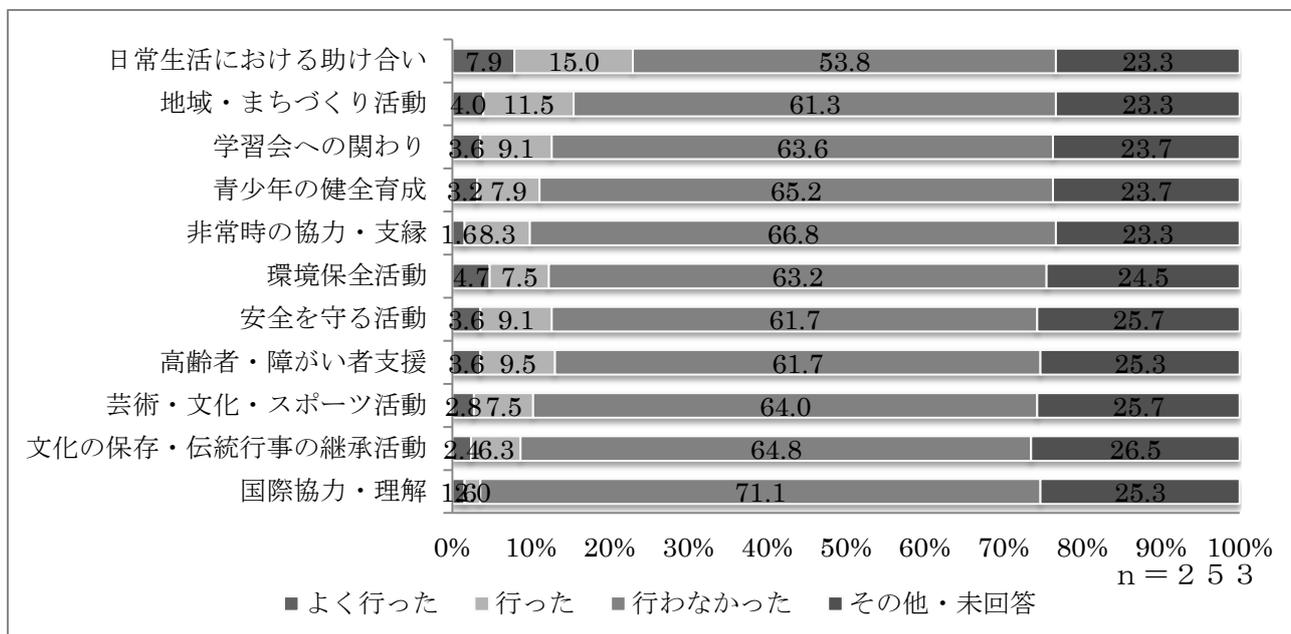
職場に関わることについては、最も高いのが「日常生活における助け合い」31.1%となっており、他の関わりに比べ、以下の内容はすべて同様に低い値となっている。県全体と比較すると、ほぼ同様の傾向であるが数値的にはすべての項目で若干上回っている。(図(1)-42)と併せてみると就業状況が影響していると考えられる。(図(4)-42)



図(4)-42

(コ) 水戸コミュニティ再生事業対象地域

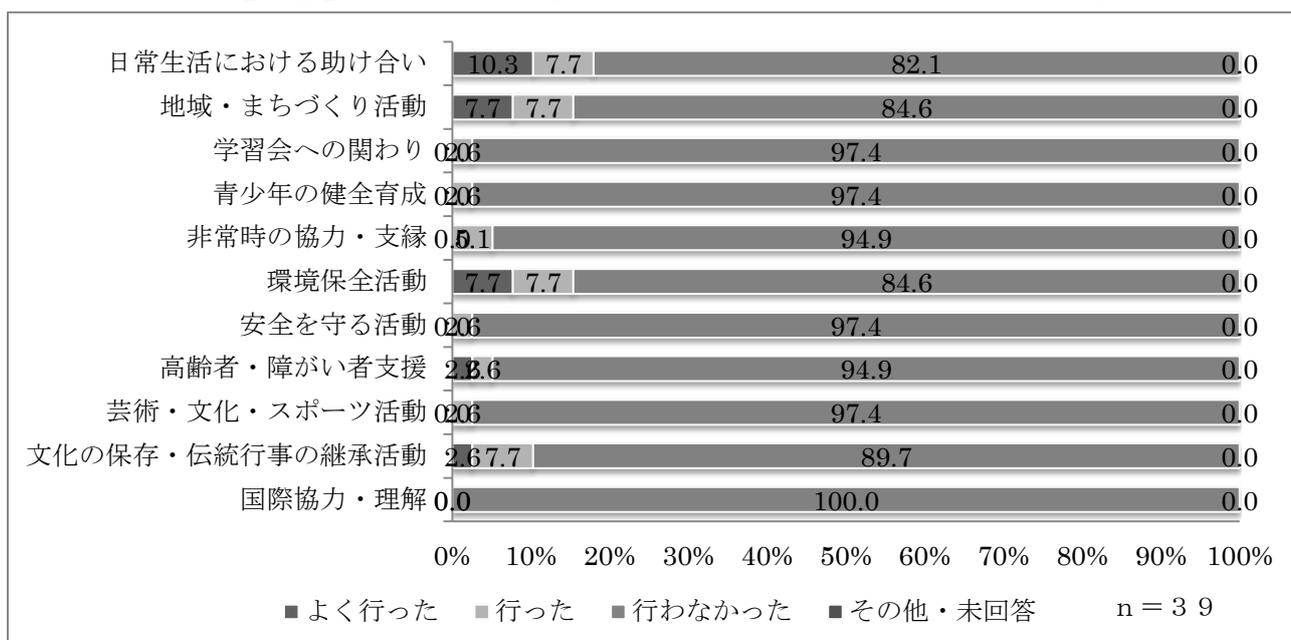
「日常生活における助け合い」22.9%が最も高く、次いで「地域・まちづくり活動」15.5%、「高齢者・障がい者支援」13.1%、「安全を守る活動」12.7%、「環境保全活動」12.2%となっている。【職縁】におけるつながり力は地域社会全般を対象としている活動に向く傾向にあると言える。(図(4)-43)



図(4)-43

(サ) 日光市土呂部地区

「日常生活における助け合い」18.0%、「地域・まちづくり活動」と「環境保全活動」がともに15.4%、「文化保存・伝統行事」10.3%と、他の項目と比較すると若干高くなっているが、全て低い割合である。【血縁】、【地縁】、【友縁】同様、【職縁】においても数値が低い項目は、ほぼ同じ傾向にある。(図(4)-44)



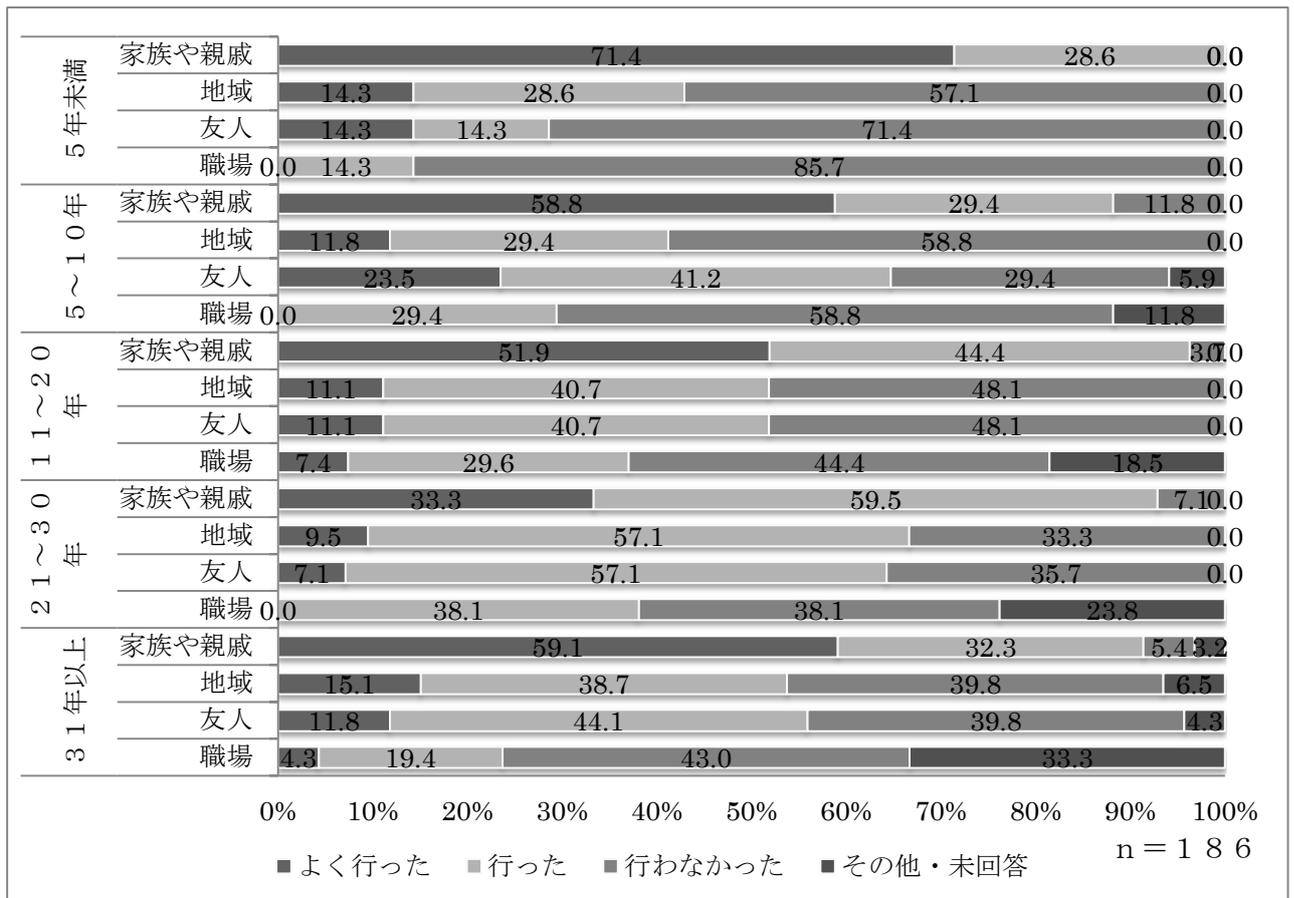
図(4)-44

2 「活動人口」調査に係る属性と「つながり力」の分析

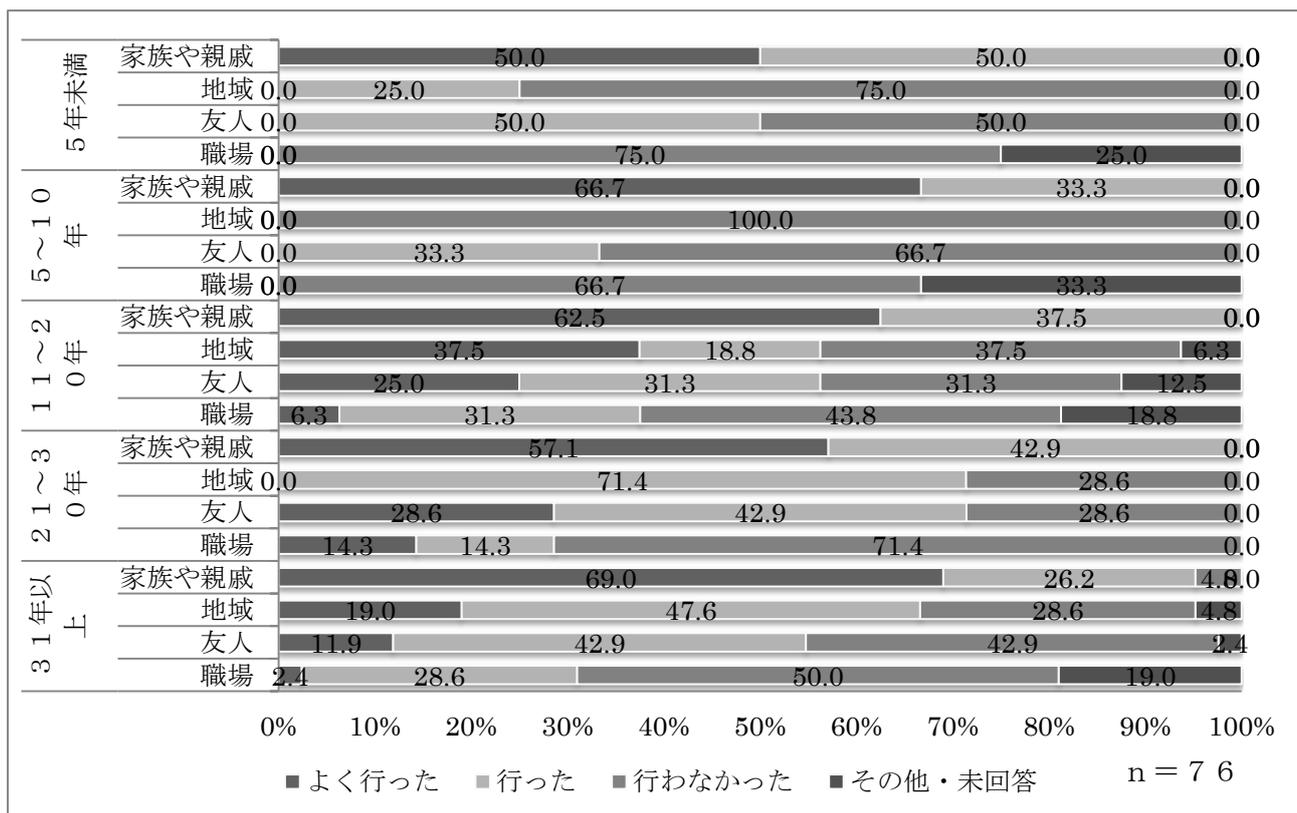
(1) 「調査対象地域」別の「活動人口」と「つながり力」の相関関係について

活動人口の多い、北コミュニティ再生事業対象地域（図(1)-1, 3）と南コミュニティ再生事業対象地域（図(1)-2, 4）について共通する調査結果と、活動人口の少ない、北調査研究対象地域（図(1)-5, 7）と南調査研究対象地域（図(1)-6, 8）について共通する調査結果を比較し分析を試みた。

ア 「活動人口」の多い地域の特徴としては、「日常生活における助け合い」において、「居住年数」の長短にかかわらず、各縁の中で「よく行った」活動の割合が非常に高いことが分かる。

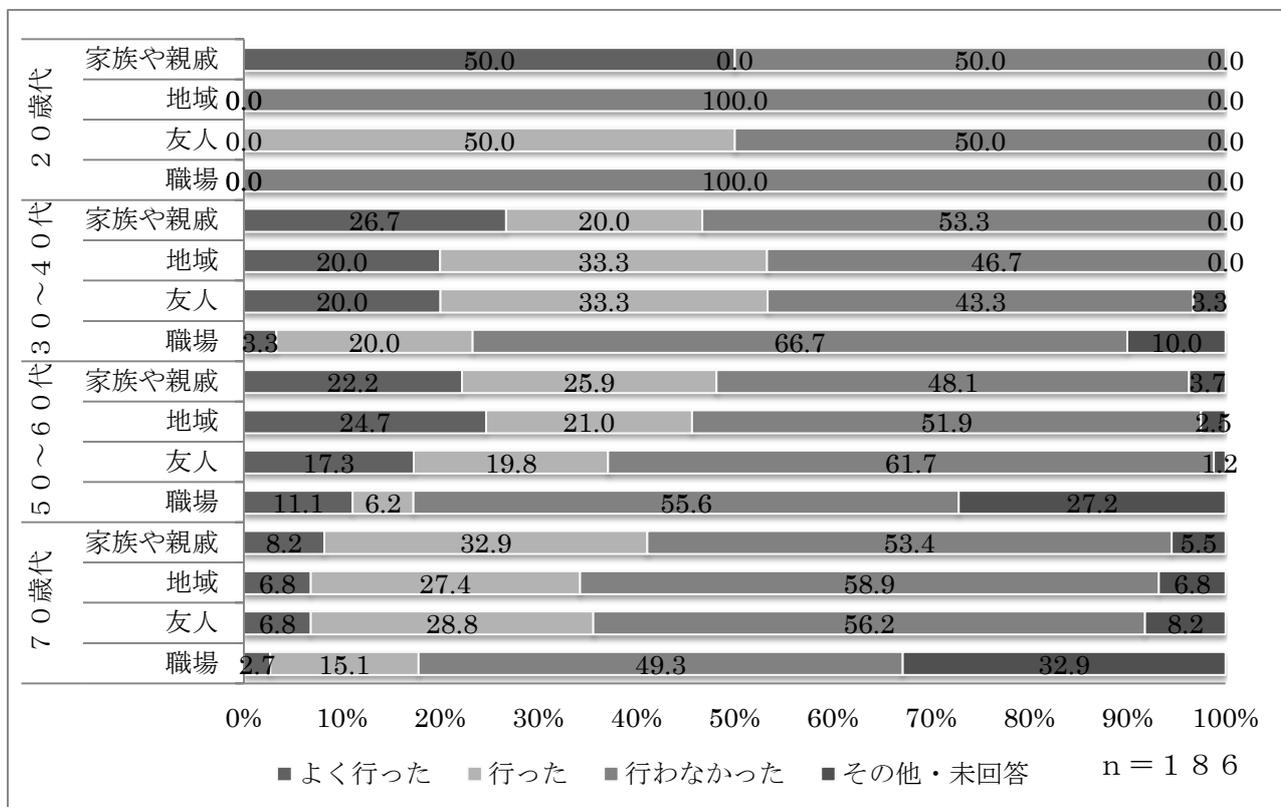


図(1)-1

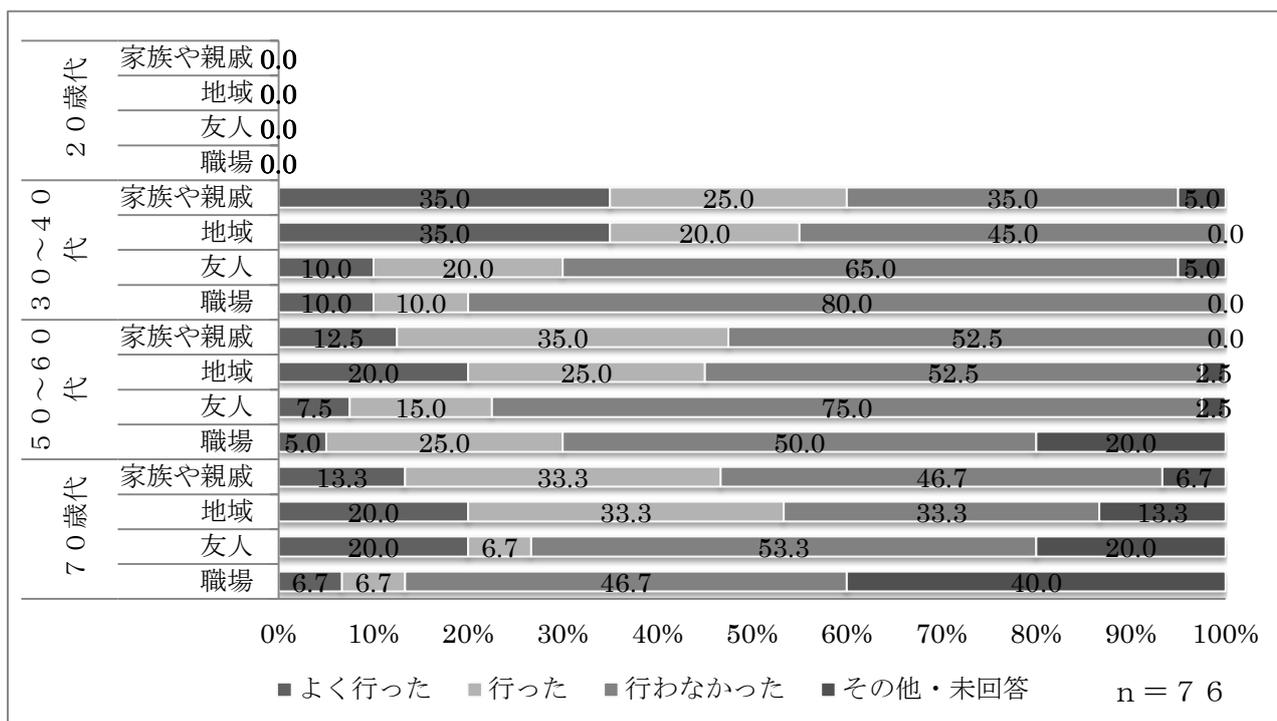


図(1)-2

次に、「青少年の健全育成」において、「30～40代」と「50～60代」の「よく行った」活動が非常に高いことが分かる。

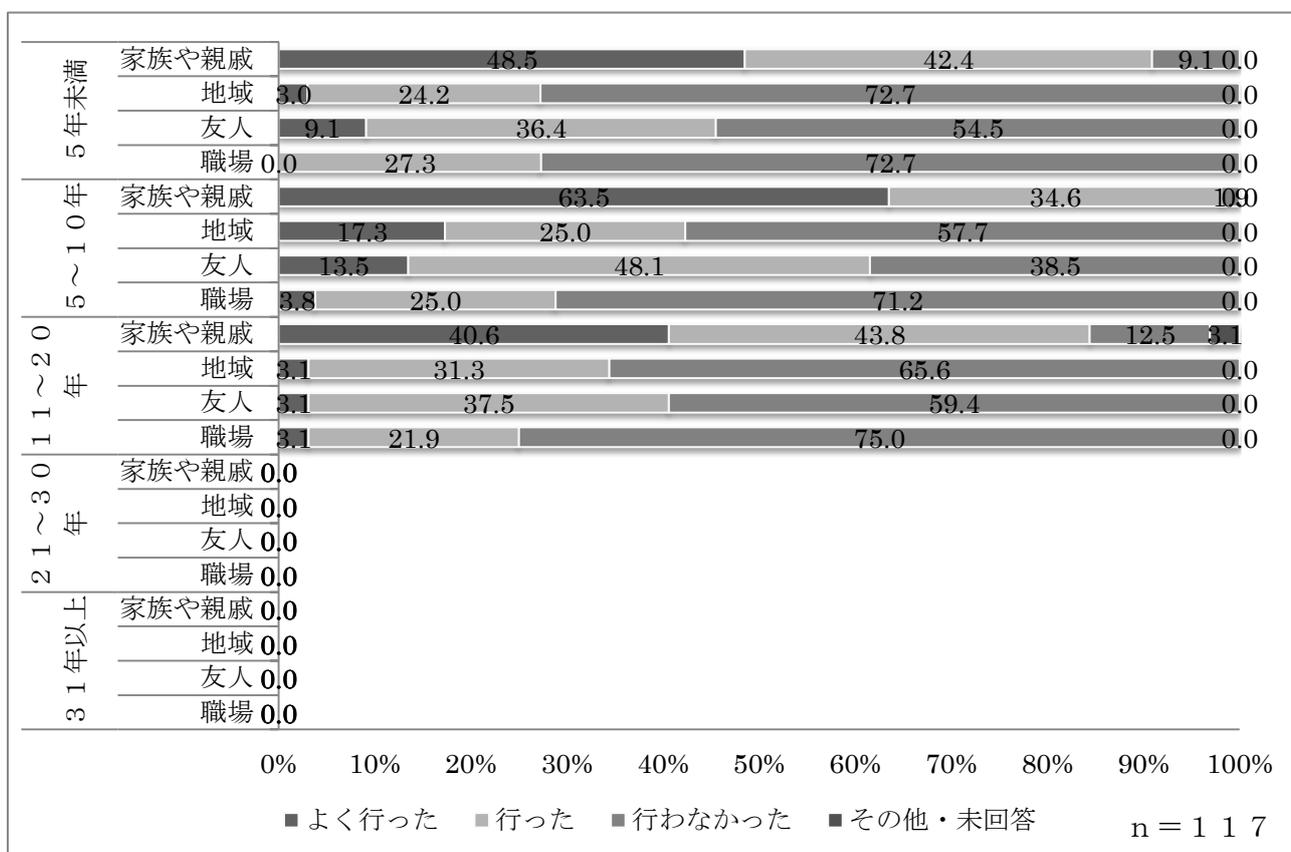


図(1)-3

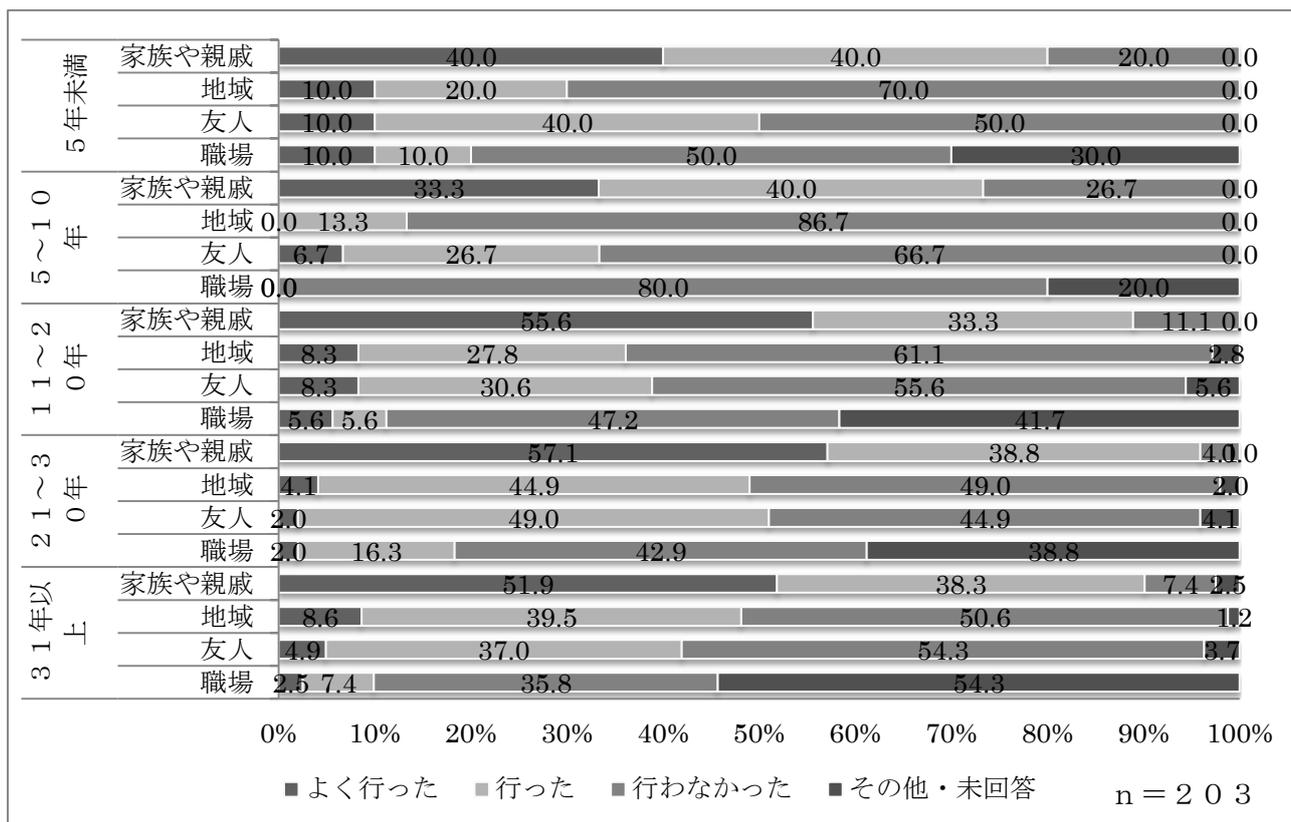


図(1)-4

イ 「活動人口」の少ない地域の特徴としては、「日常生活における助け合い」において、「居住年数」の長短にかかわらず、「家族や親戚」以外の縁の中で活動している割合が極端に低いことが分かる。

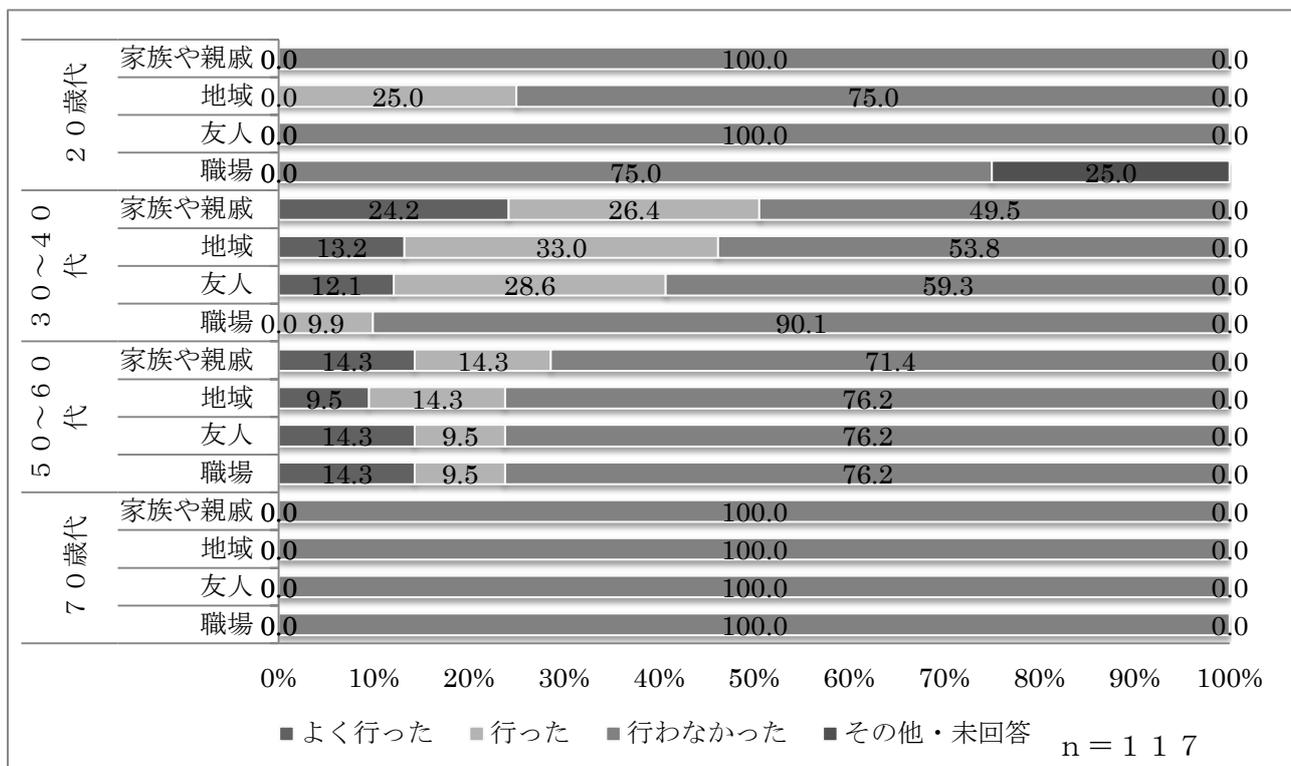


図(1)-5

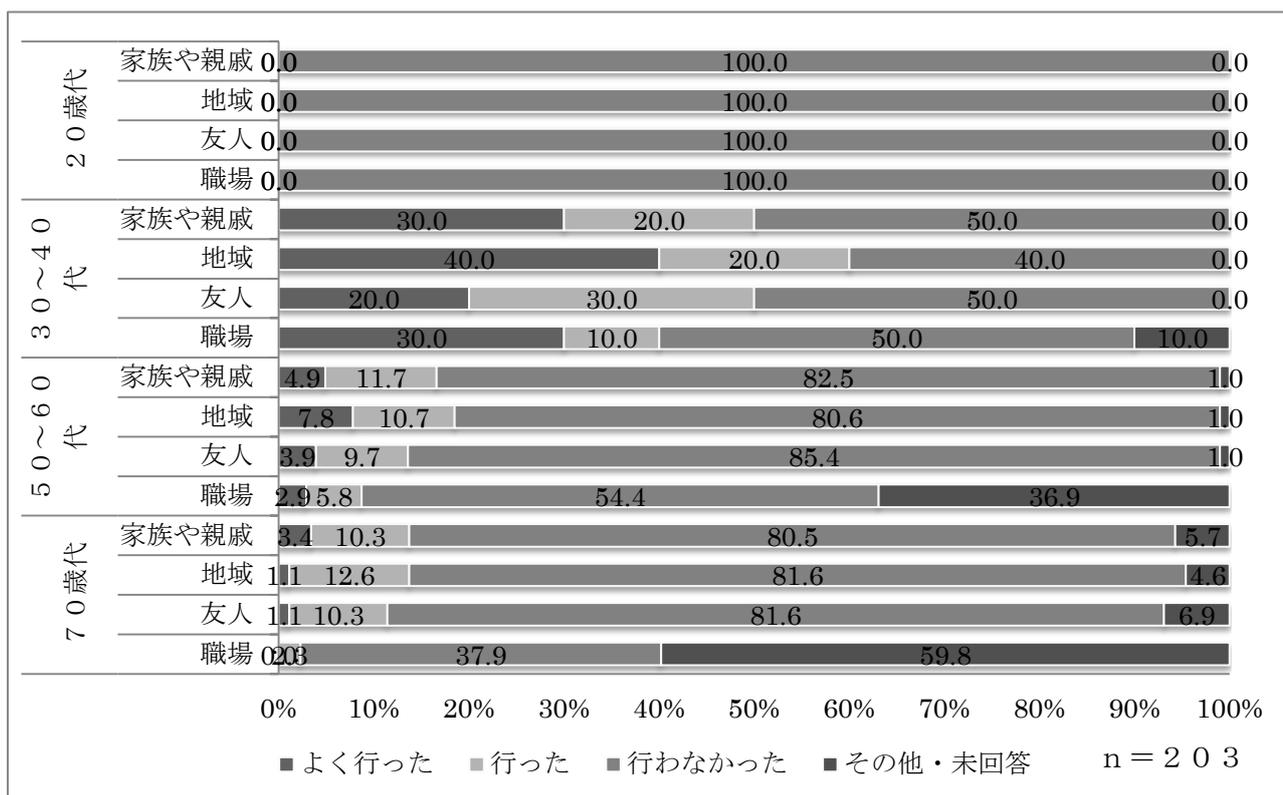


図(1)-6

次に、「青少年の健全育成」において、「30～40代」と「50～60代」の活動している割合が比較的低く、「20歳代」「70歳代」は活動している様子が見えない。



図(1)-7



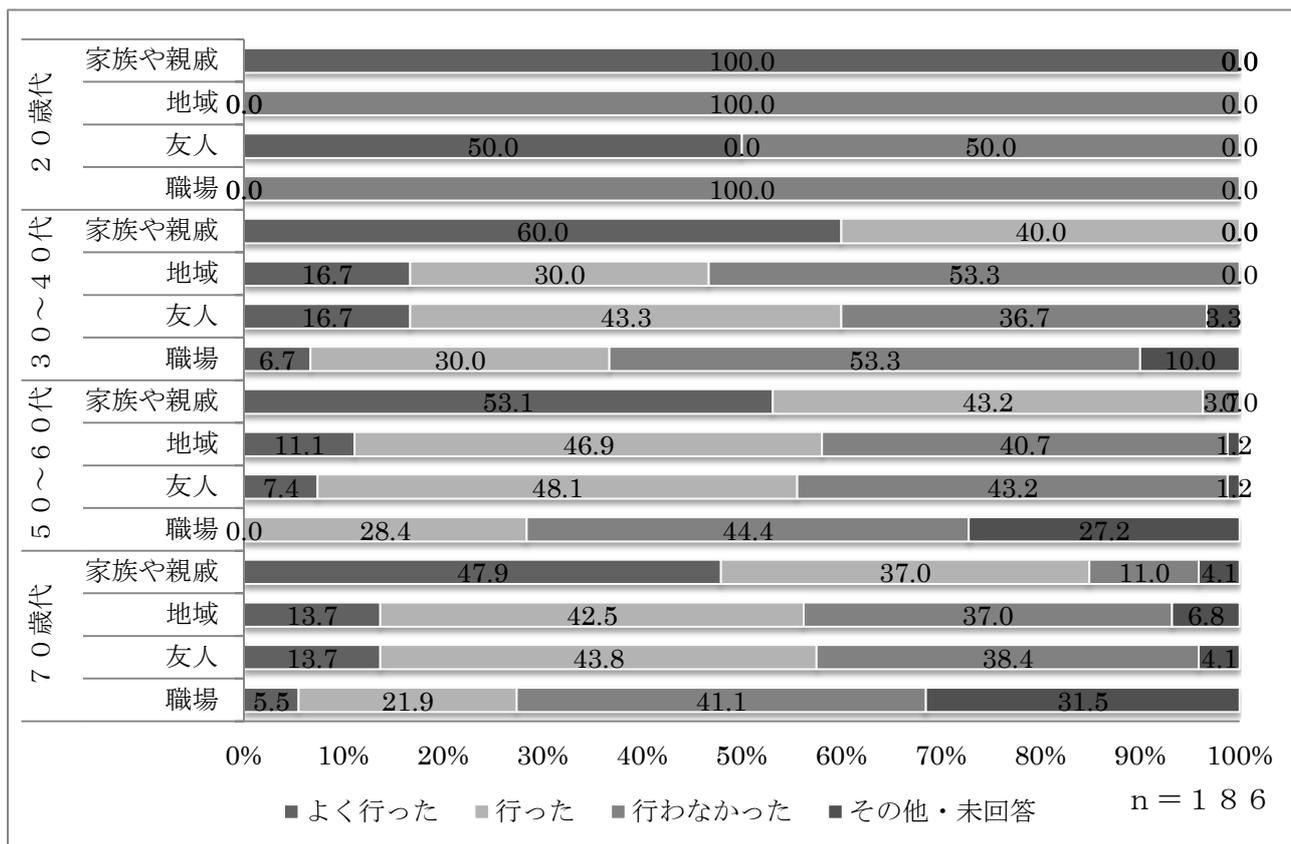
図(1)-8

これらのことから、縁を問わず日常的に助け合い活動などを通しコミュニケーションを図ろうとする意識のある人の多い地域及び、「青少年の健全育成」に代表されるような地域活動を、子育て世代からその親世代が中心となり活動している人の多い地域は、「つながり力」が強い傾向にあると考えられる。

(2) 「縁」と「つながり力」の相関関係について

ア 日常生活における、助け合い・支え合い活動

どの地域においても、「家族や親戚」の中での活動の割合が高く、日常の中の助け合い・支え合いの意識が高いことが再認識できる。「地域」の中でこの活動の割合が高い地域は北コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-1）、南コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-2）、水戸コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-3）である。これらの地域は下記のグラフのように、どの年代においても「よく行った」割合が非常に高いことが分かる。



図(2)-1

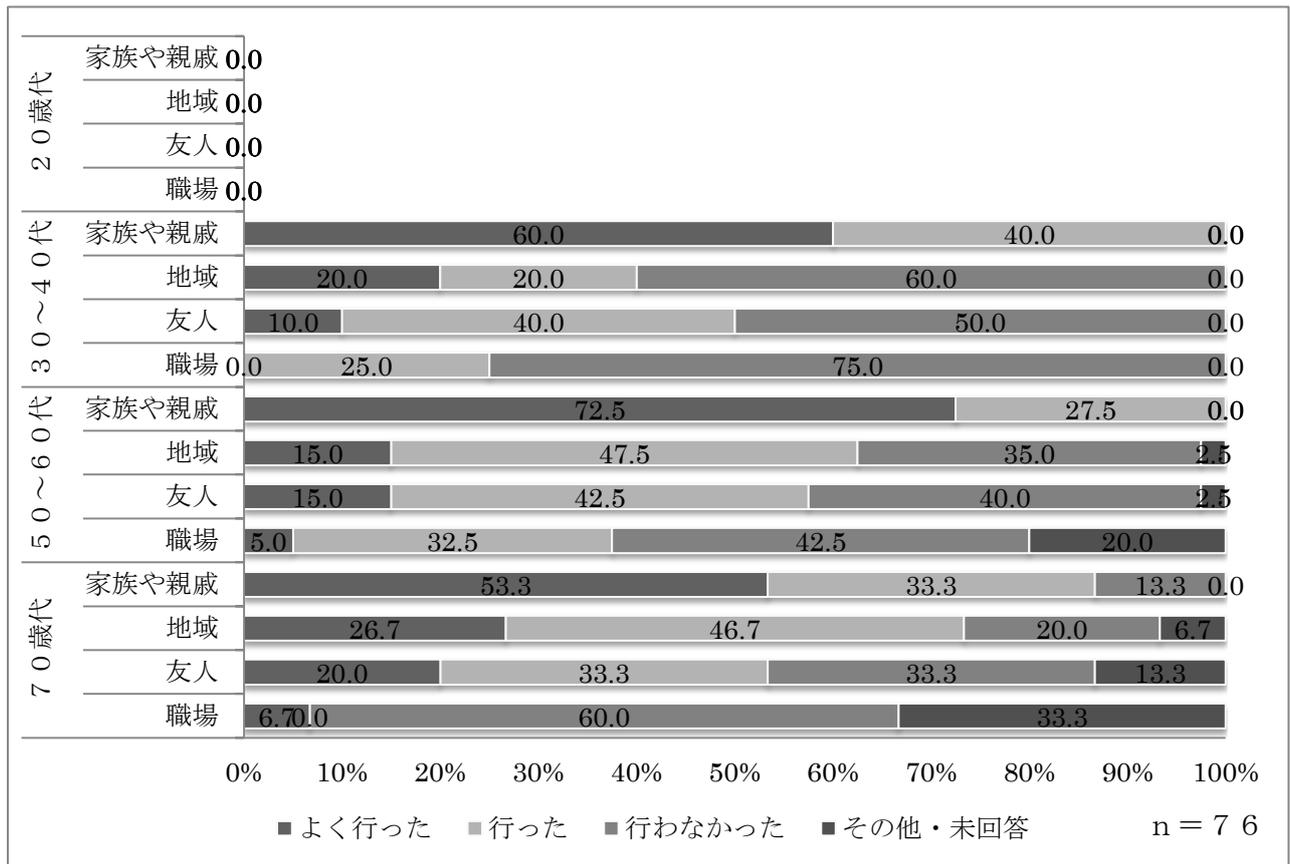


図 (2)-2

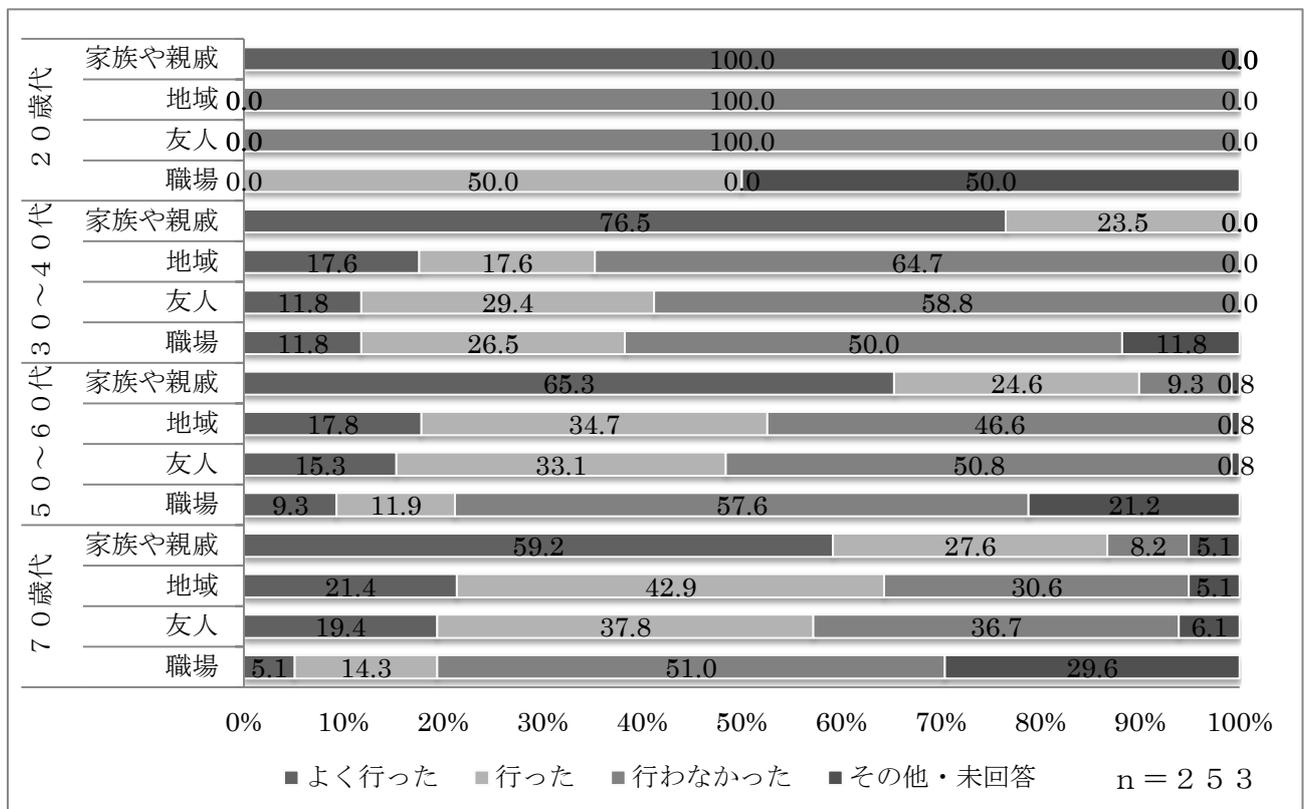
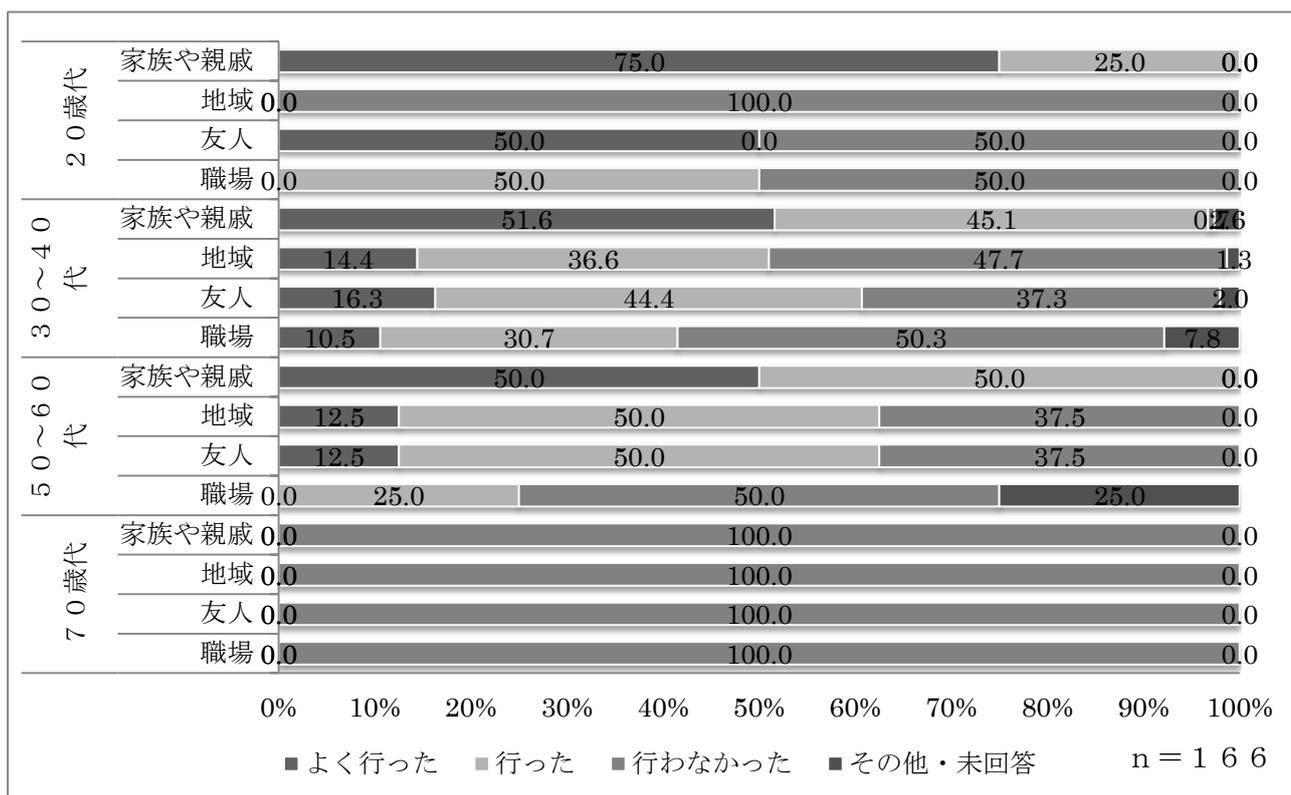


図 (2)-3

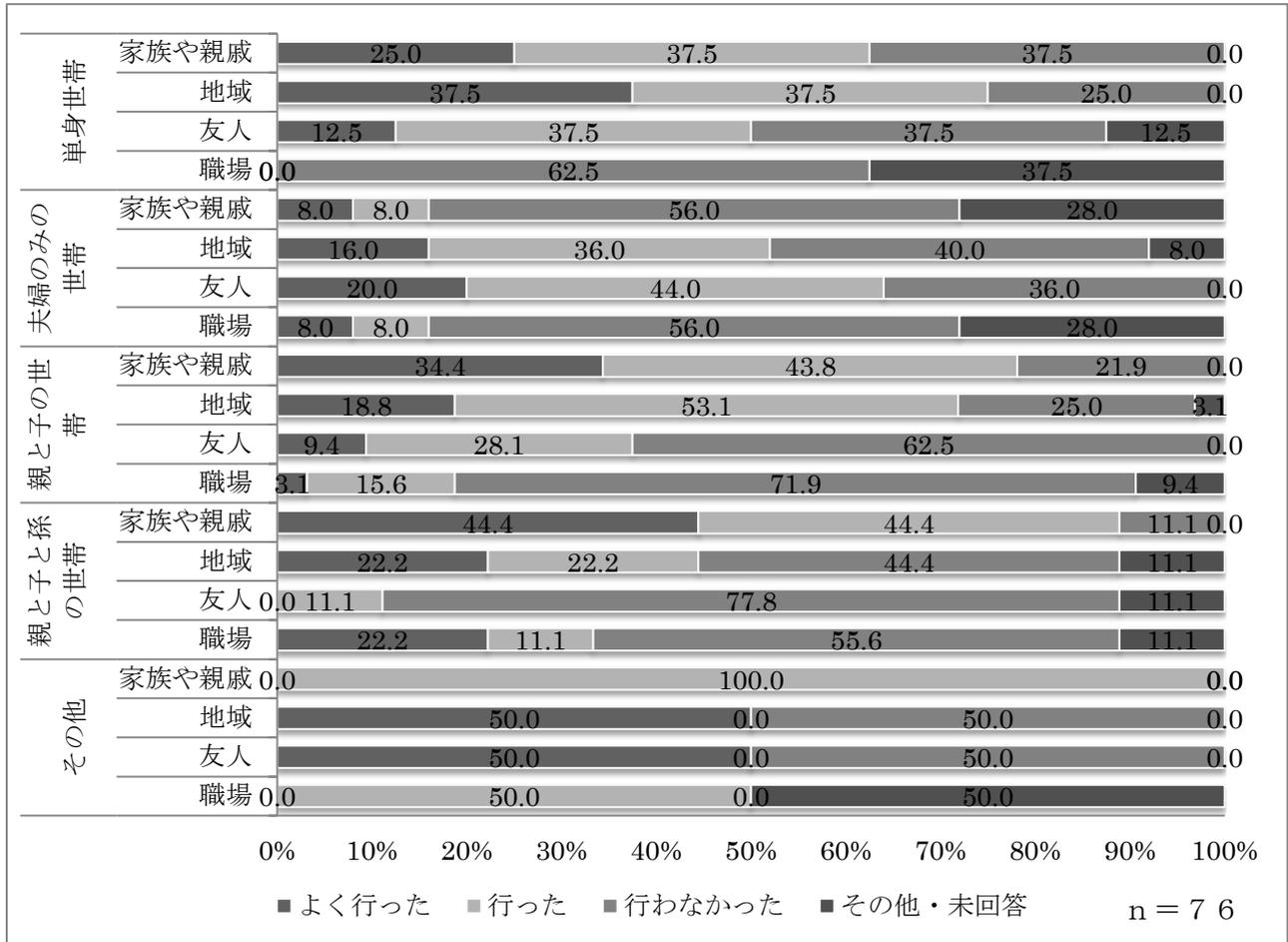


図(2)-4

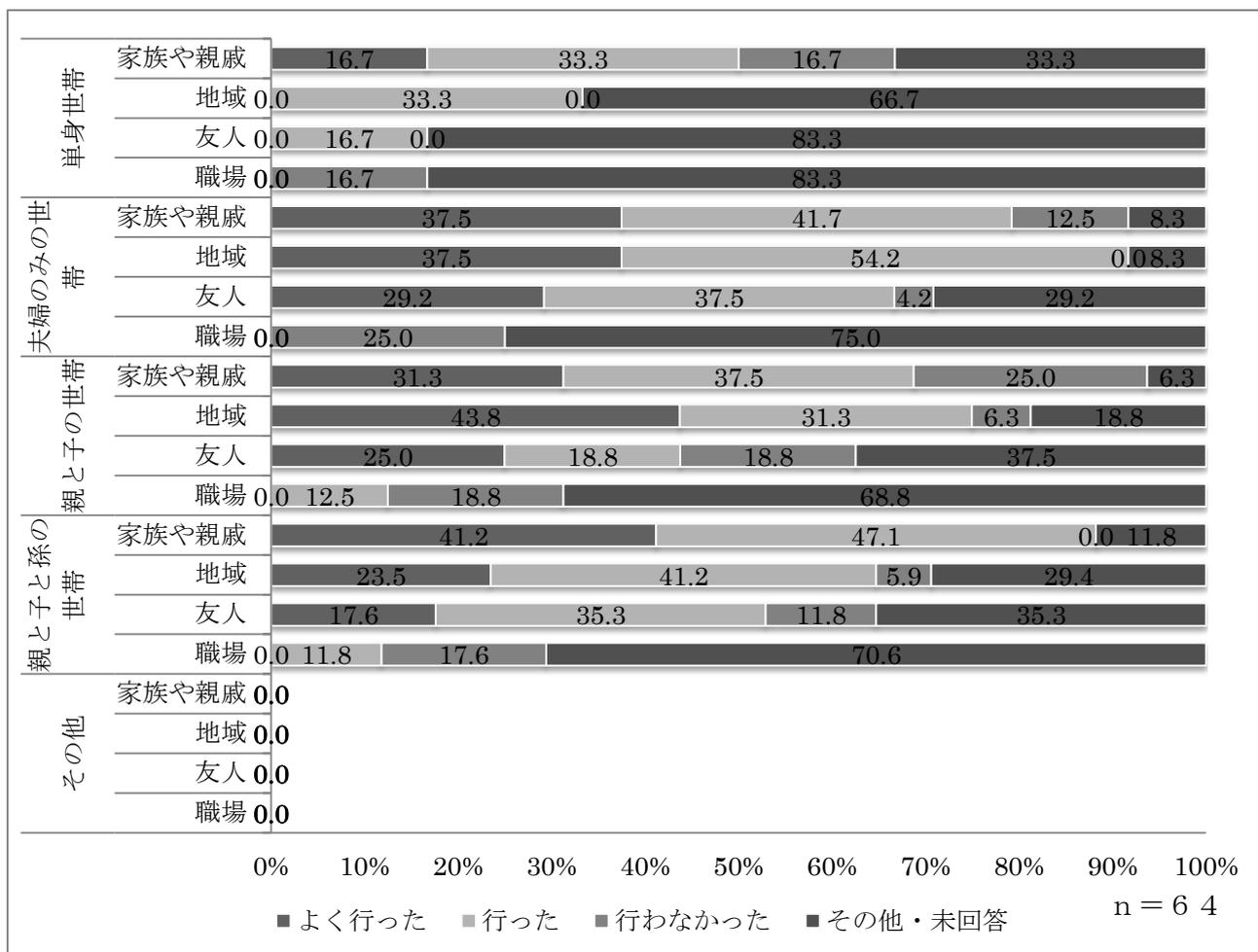
また、「友人」の中でこの活動の割合が高い地域は、鹿行調査研究対象地域(図(2)-4)である。20歳代の割合が高いことから、子育て世代のつながりが強いことが考えられる。

イ 地域・まちづくりの企画や運営に関する活動

「地域」の中でこの活動の割合が高い地域は南コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-5）と西調査研究対象地域（図(2)-6）である。「親と子の世帯」や「親と子と孫の世帯」の活動の割合が比較的高いことが分かる。

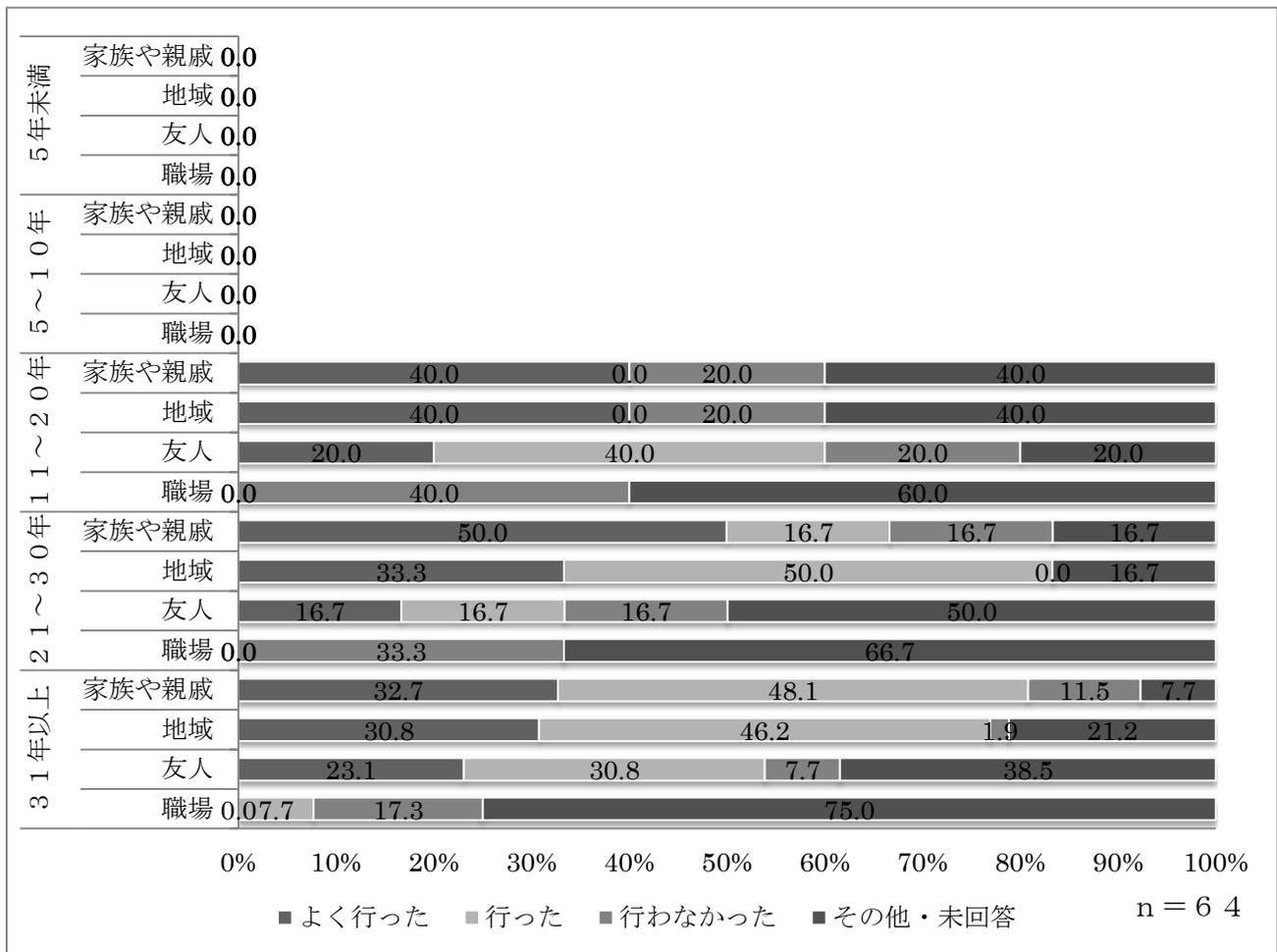


図(2)-5

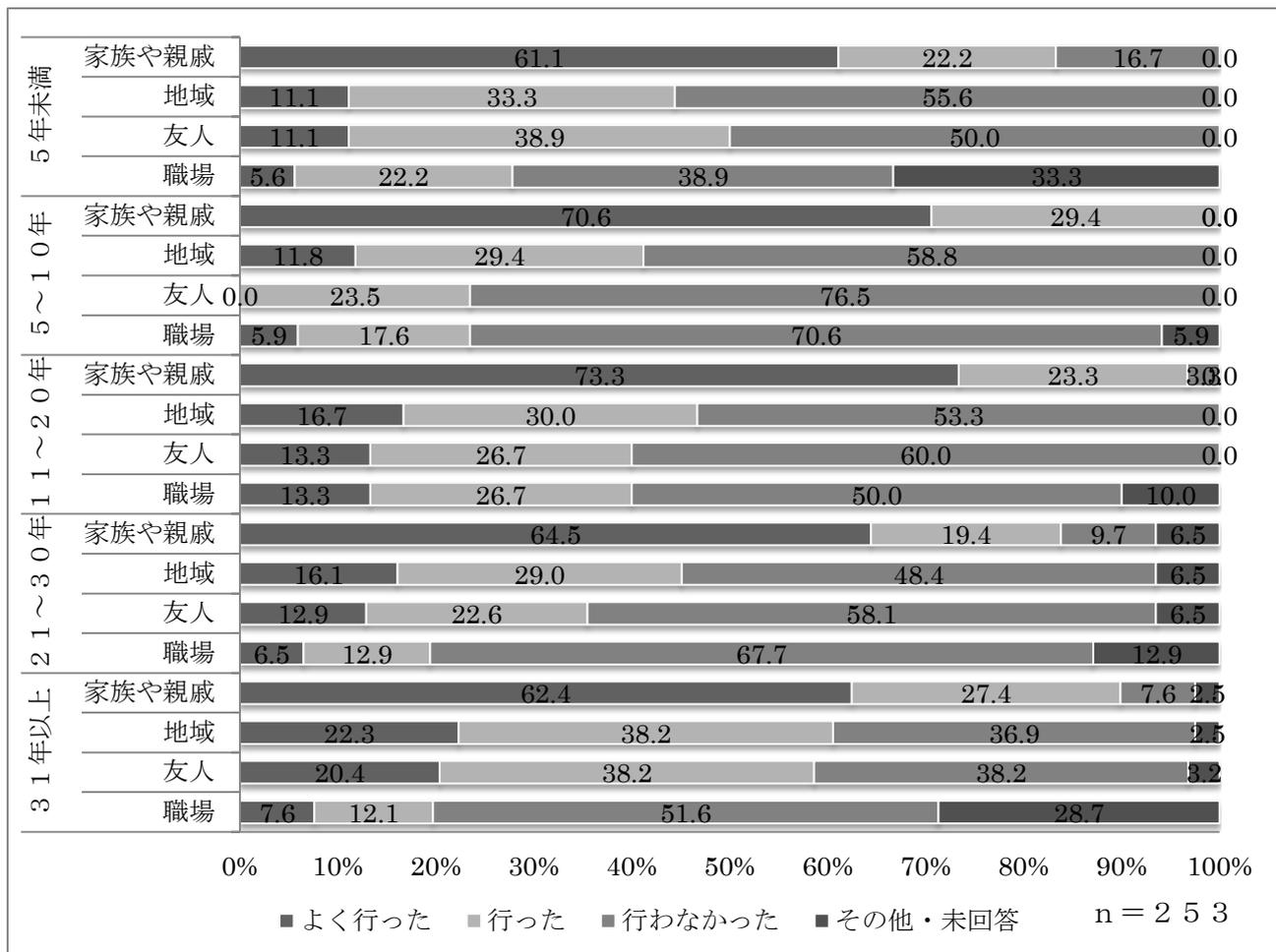


図(2)-6

また、「友人」の中でこの活動の割合が高い地域は西調査研究対象地域（図(2)-7）と水戸コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-8）で、その地域に長く居住し親しくしている人たちと継続した活動が行われていると考えられる。



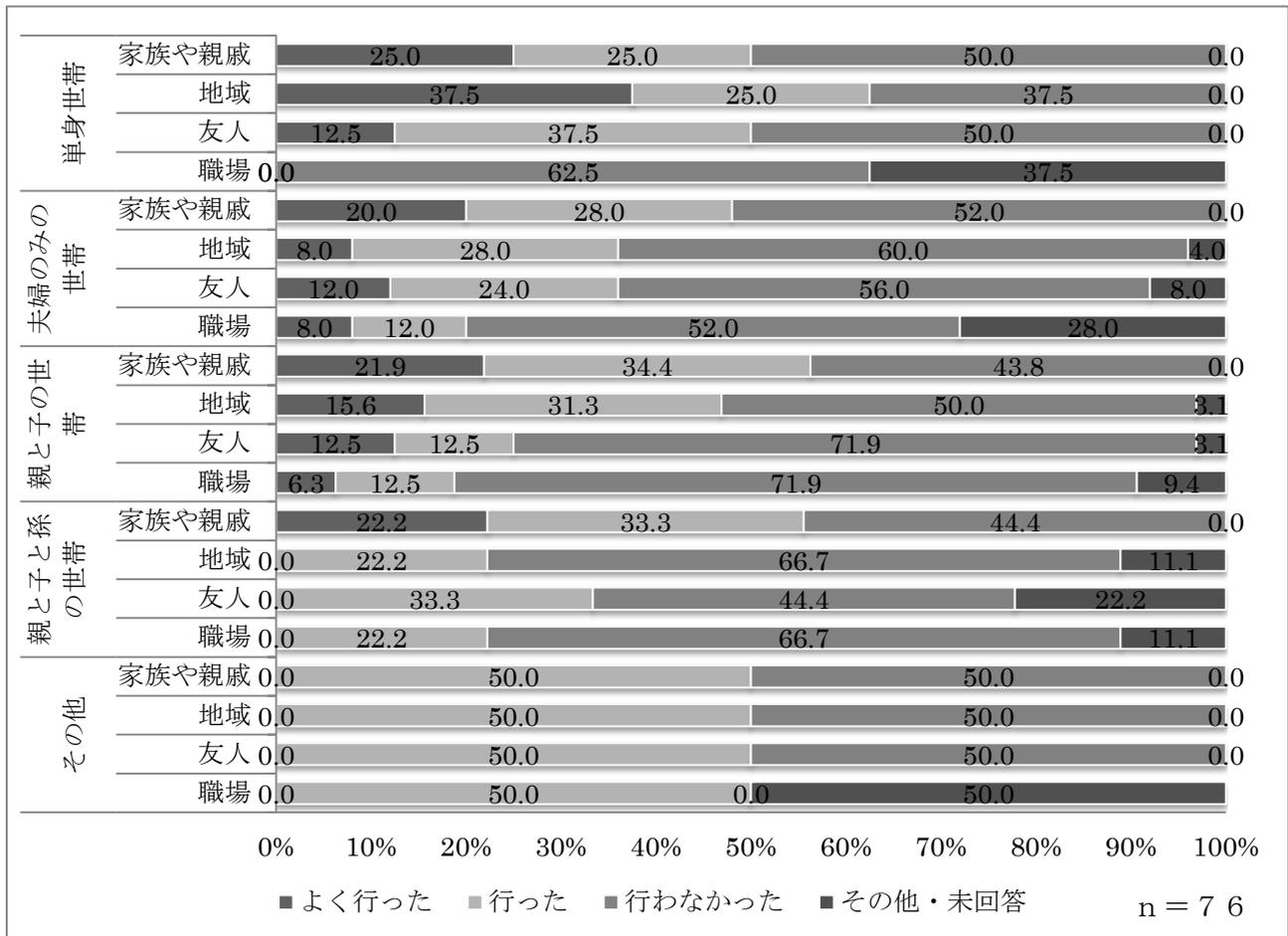
図(2)-7



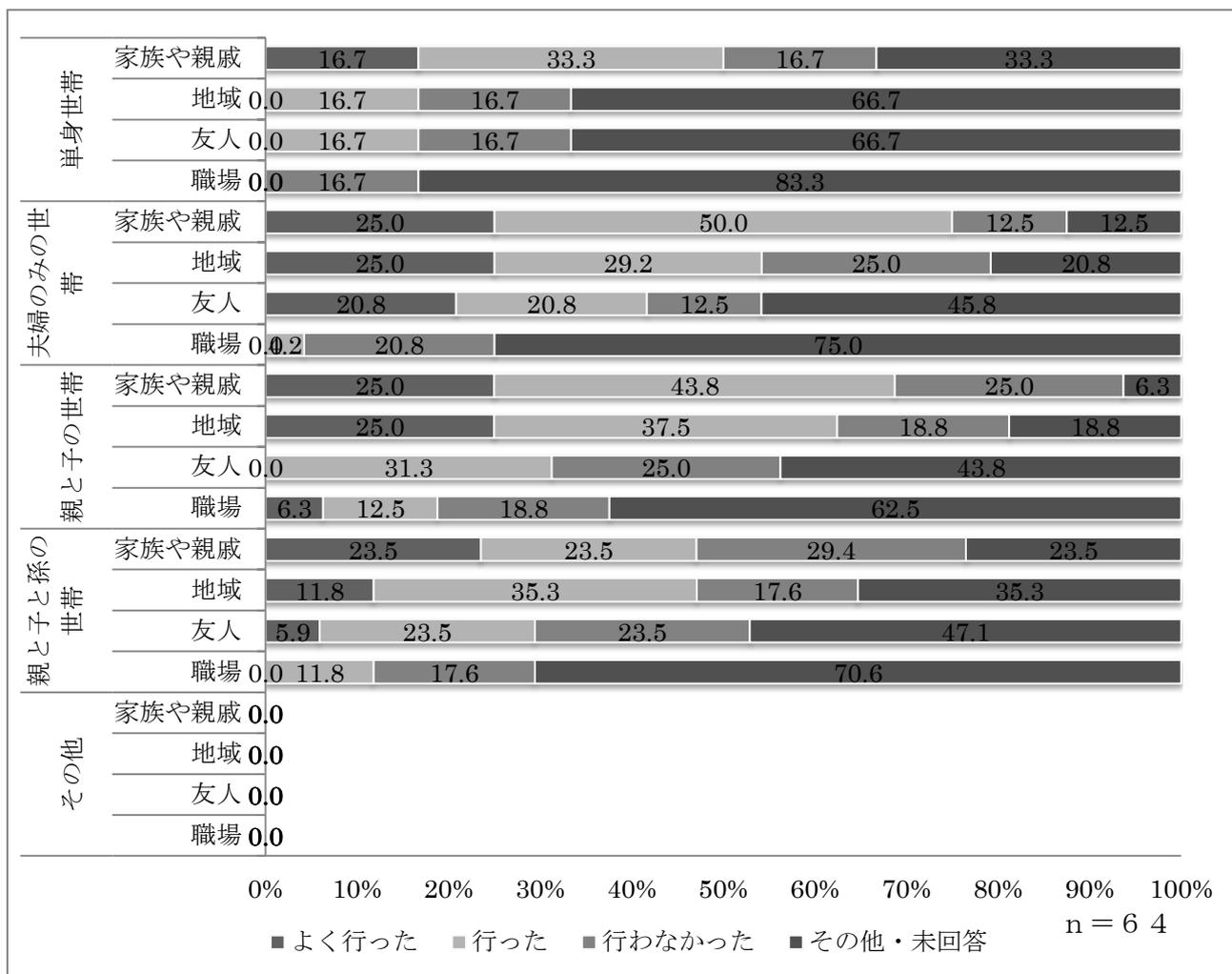
図(2)-8

ウ 学習会の企画や広報、ボランティア等に関する活動

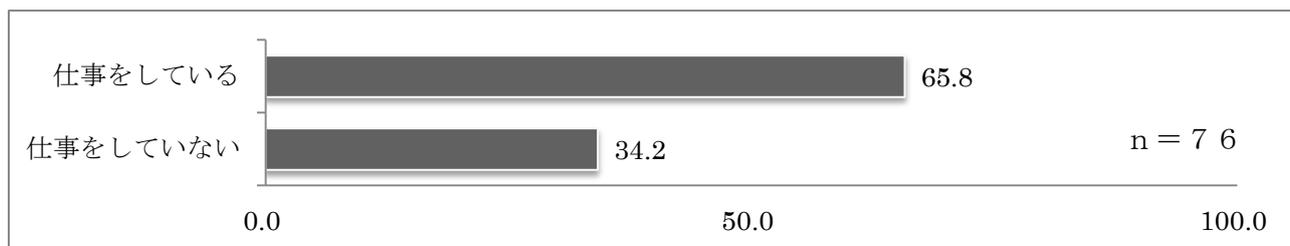
南コミュニティ再生事業対象地域(図(2)-9, 11)と西調査研究対象地域(図(2)-10, 12)がどの縁においても比較的高い割合を示しているのは、下記に示すとおり「単身」或いは「夫婦のみでの生活」している人が多い。また、「仕事」をしていない(定年退職者)が多く、これらの人は時間に余裕があり、且つ地域社会に視点がむけられている人が多いからと推測できる。



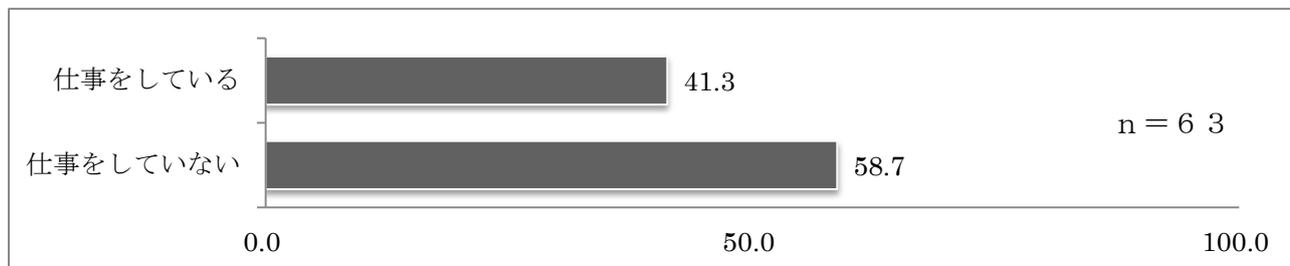
図(2)-9



図(2)-10



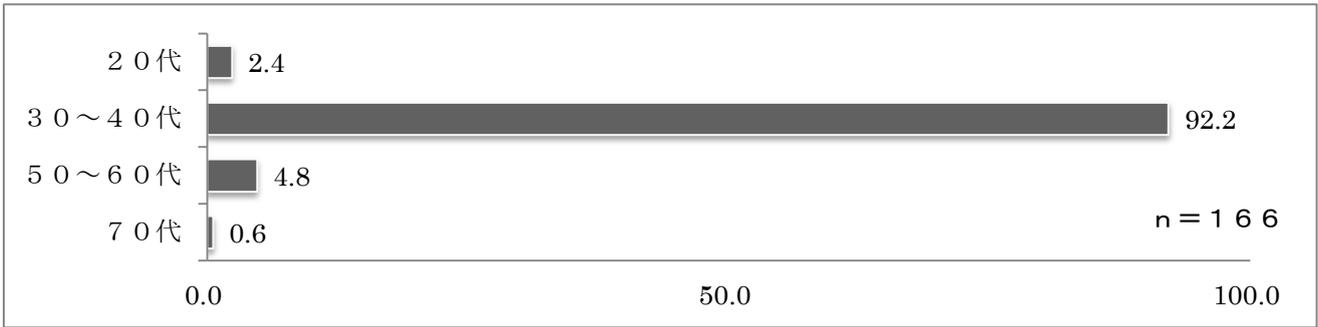
図(2)-11



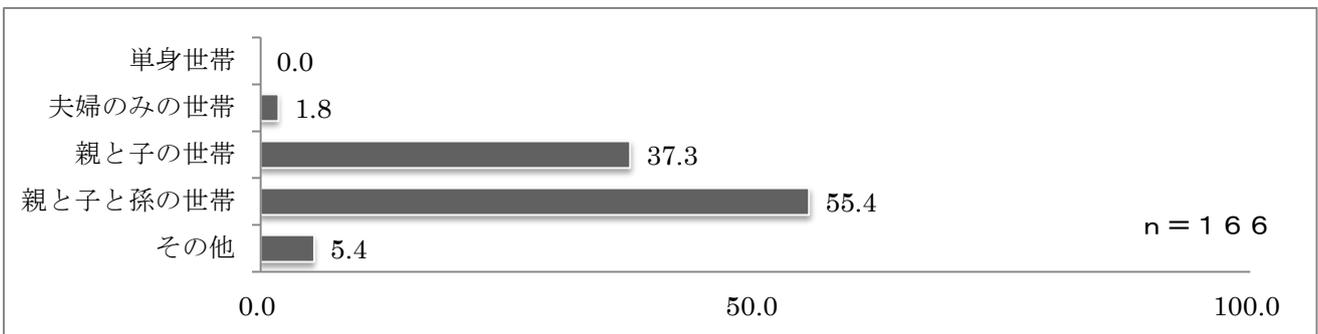
図(2)-12

エ 青少年の健全育成に関する活動

鹿行調査研究対象地域（図(2)-13, 14）で各縁とも活動の割合が高いのは、下記グラフのように、子がいる世帯で子育て世代が多いためと考えられる。

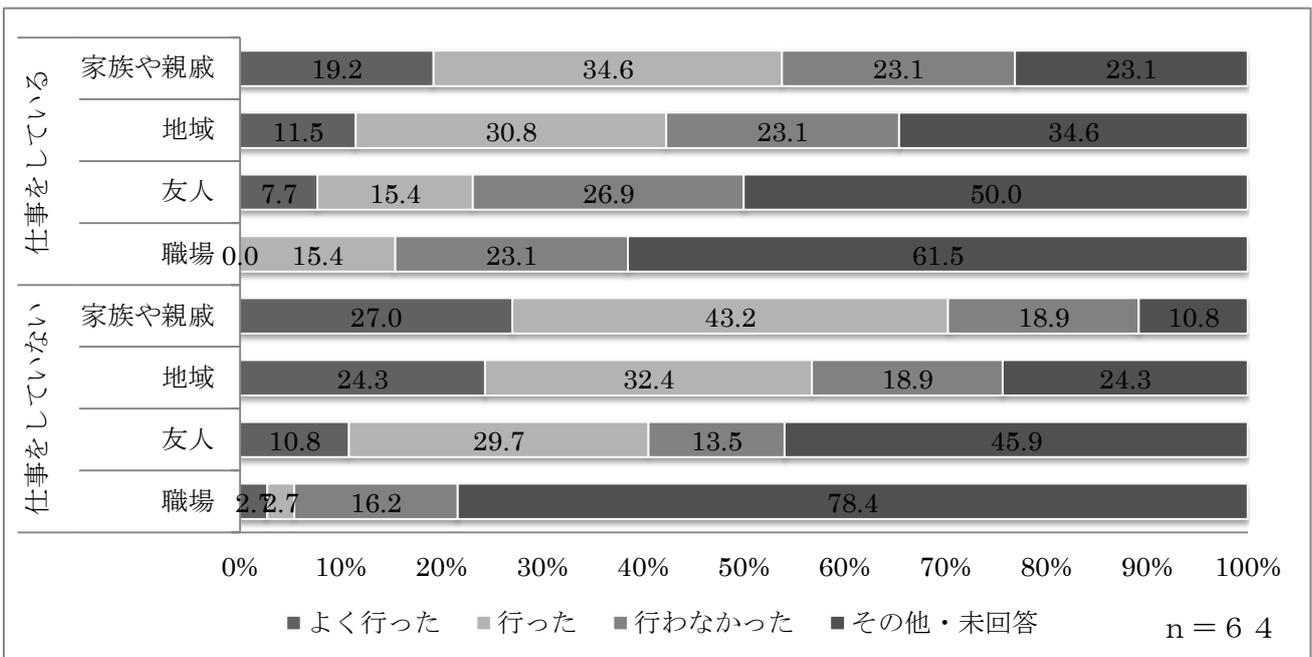


図(2)-13

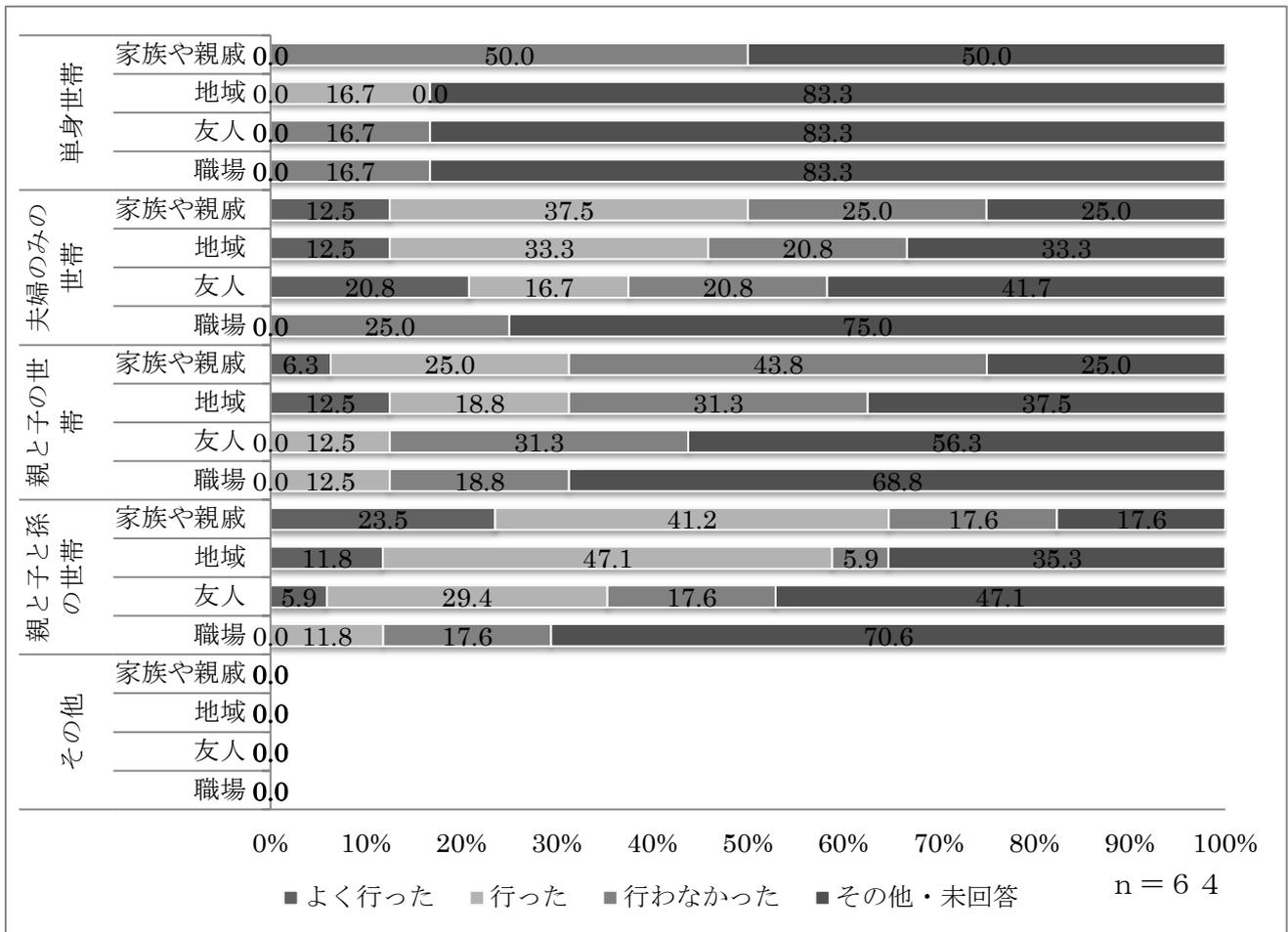


図(2)-14

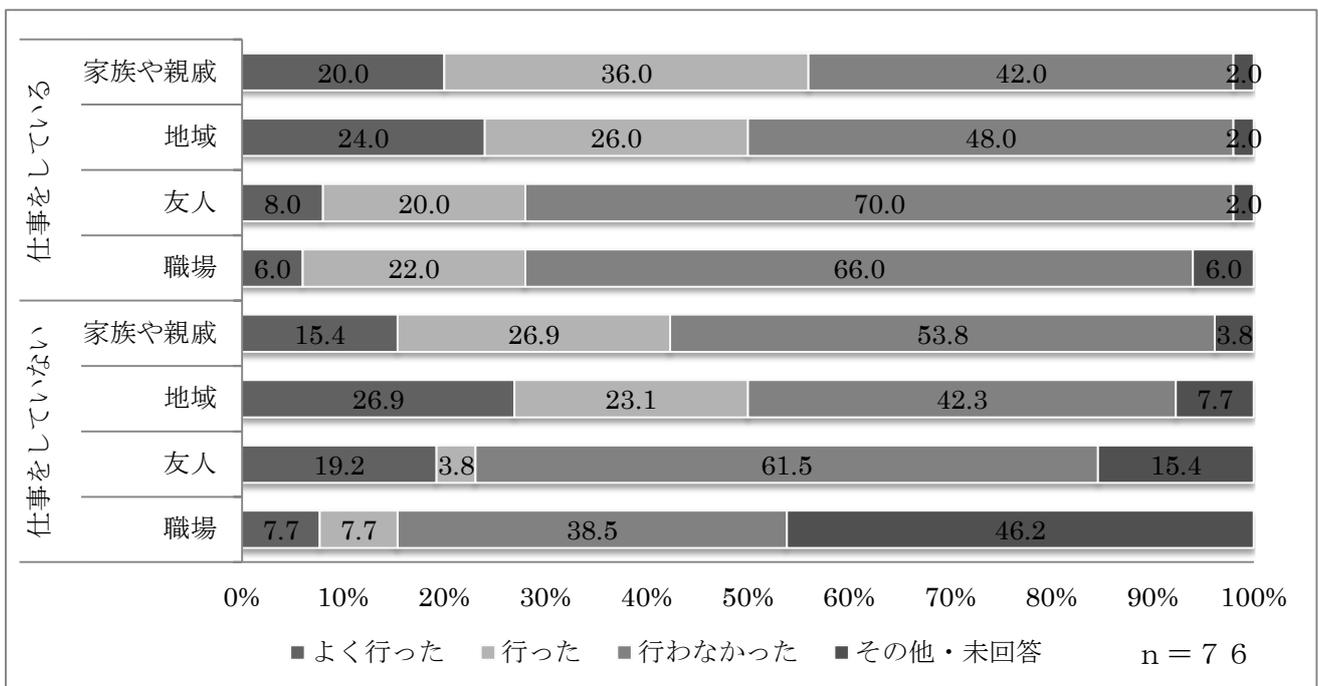
また、西調査研究対象地域（図(2)-15, 16）南コミュニティ再生事業対象（図(2)-17, 18）北コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-19, 20）が高い割合を示しているのは、比較的時間に余裕があり且つ、孫世代との同居家庭が比較的多いため、関心及び意識も高いためと考えられる。



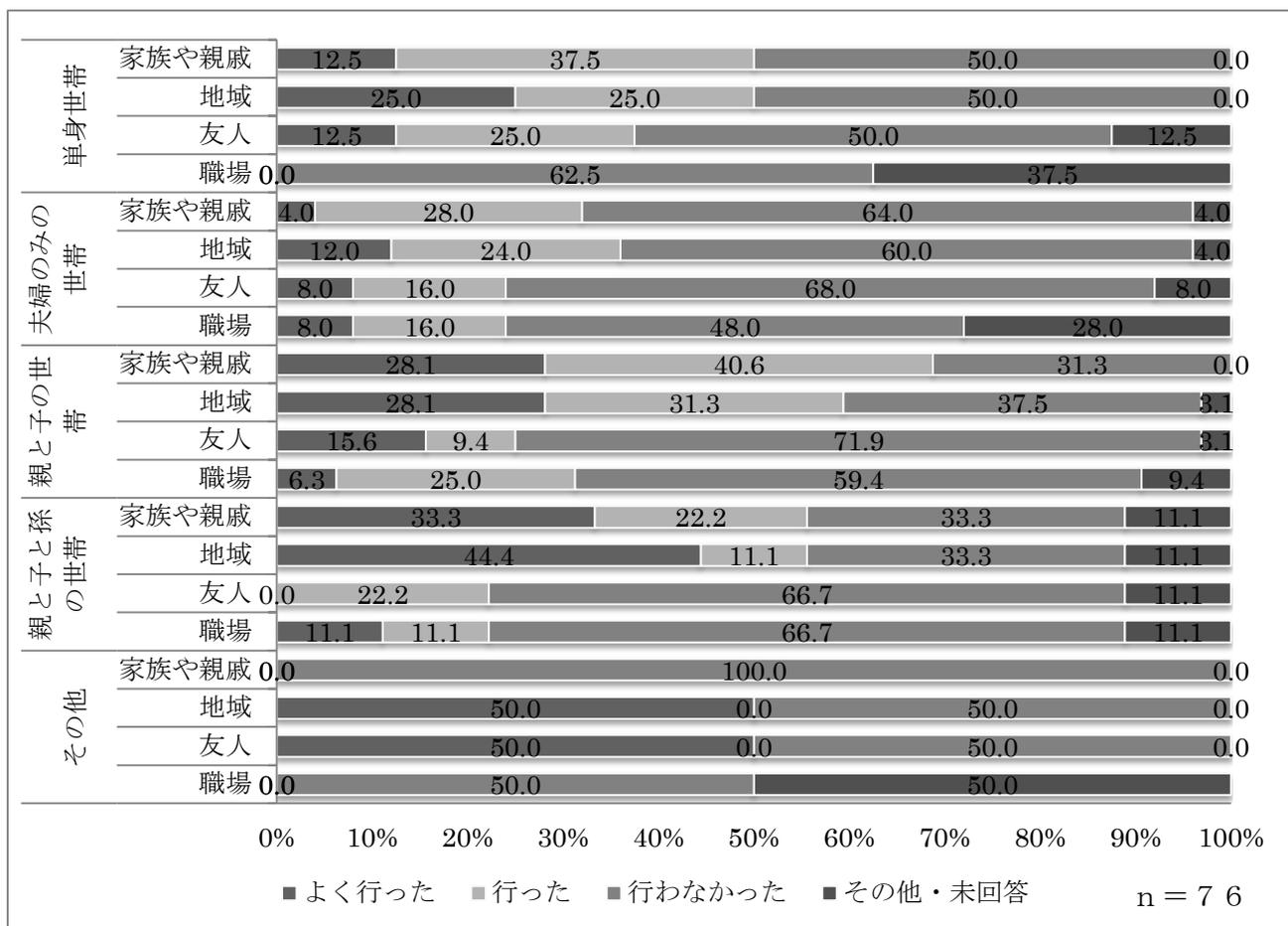
図(2)-15



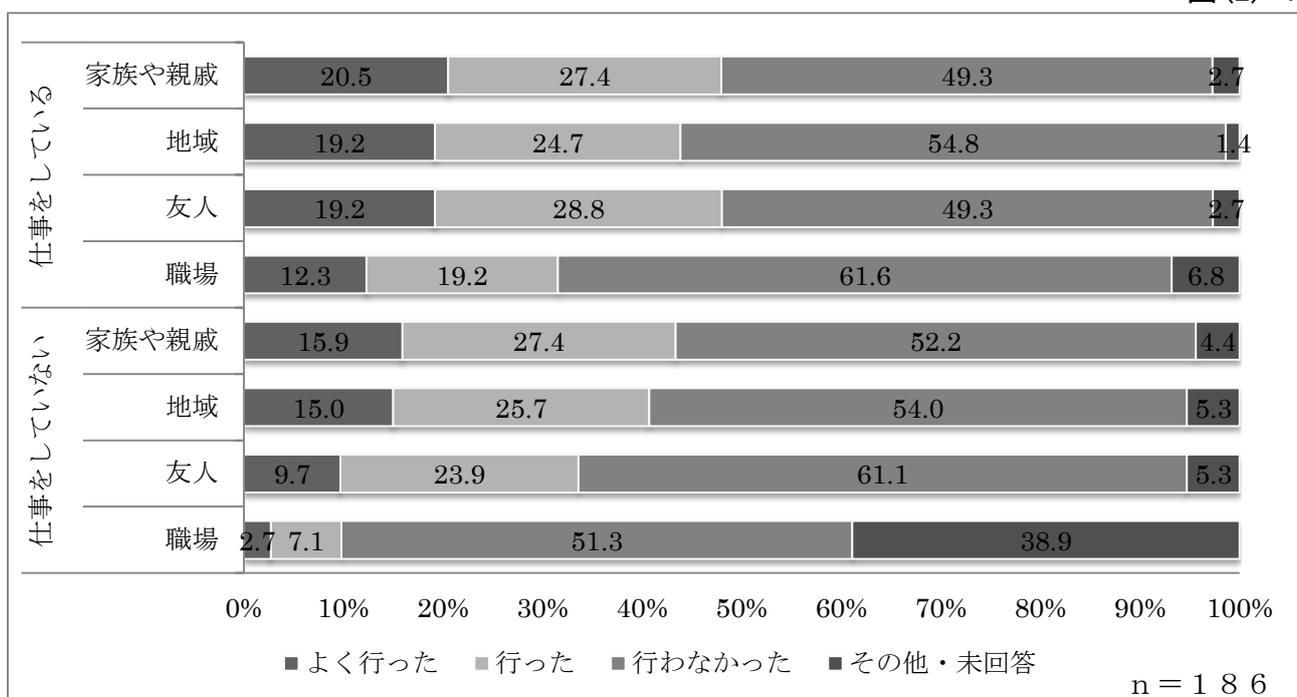
図(2)-16



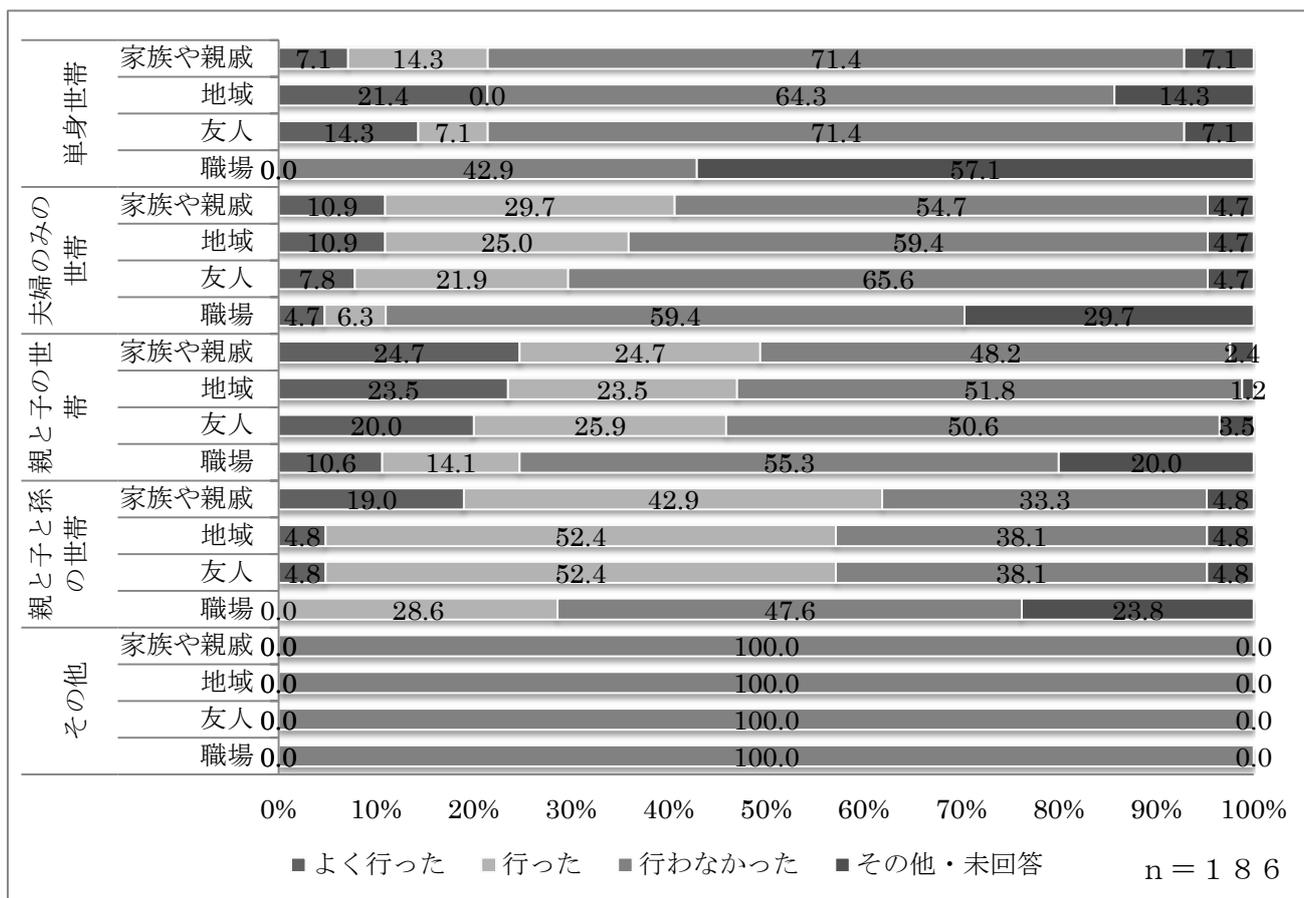
図(2)-17



図(2)-18



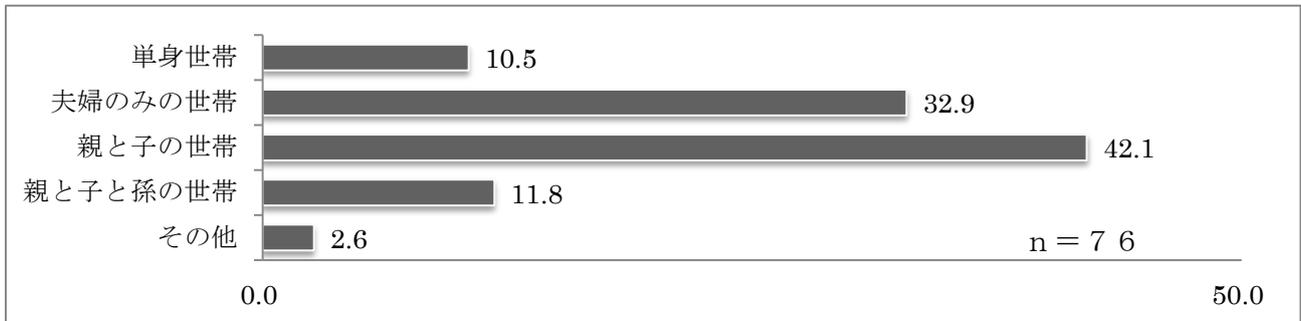
図(2)-19



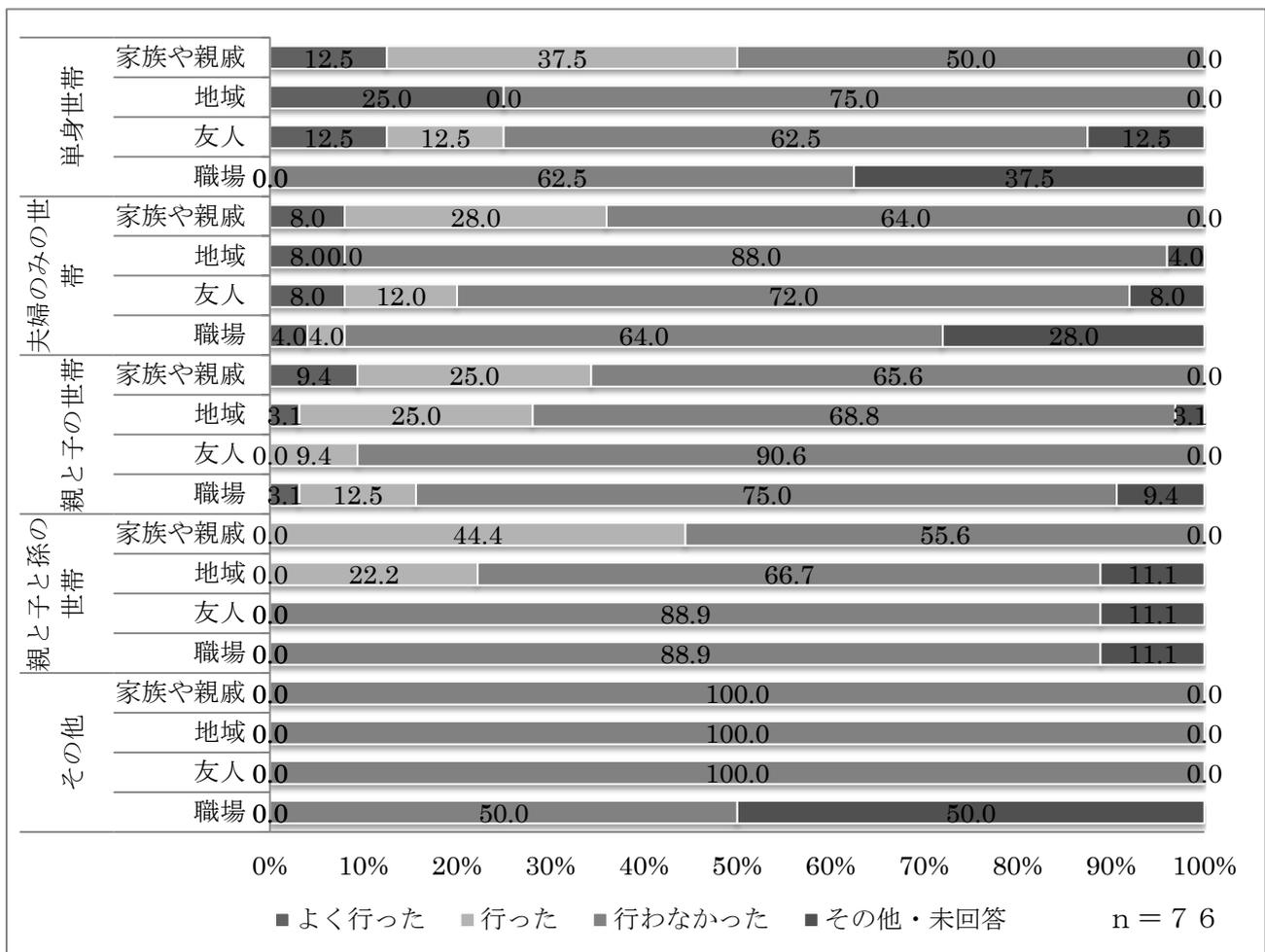
図(2)-20

オ 非常災害時に協力や支援をする活動

南コミュニティ再生事業対象地域が、「家族や親戚」の中で比較的高い割合が示されているのは、下記のグラフから「核家族」(図(2)-21)が多く、「地域」や「友人」(図(2)-22)との関わりを強めようとする傾向があるため、非常時にそれぞれの家庭が協力し合うことが考えられる。

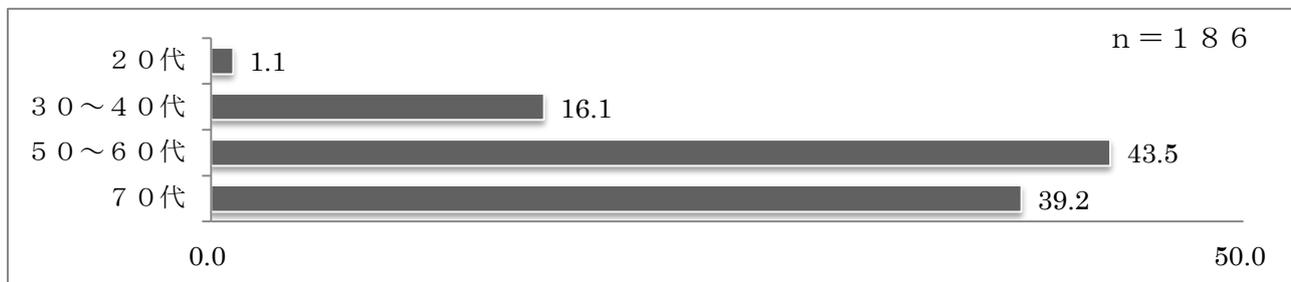


図(2)-21

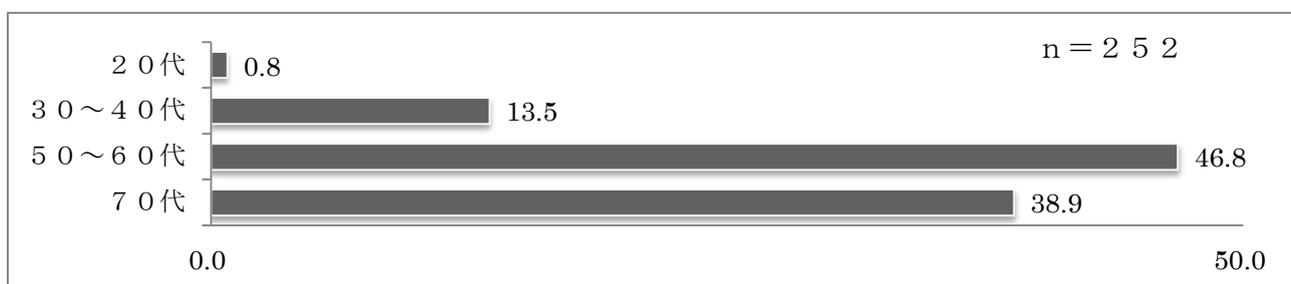


図(2)-22

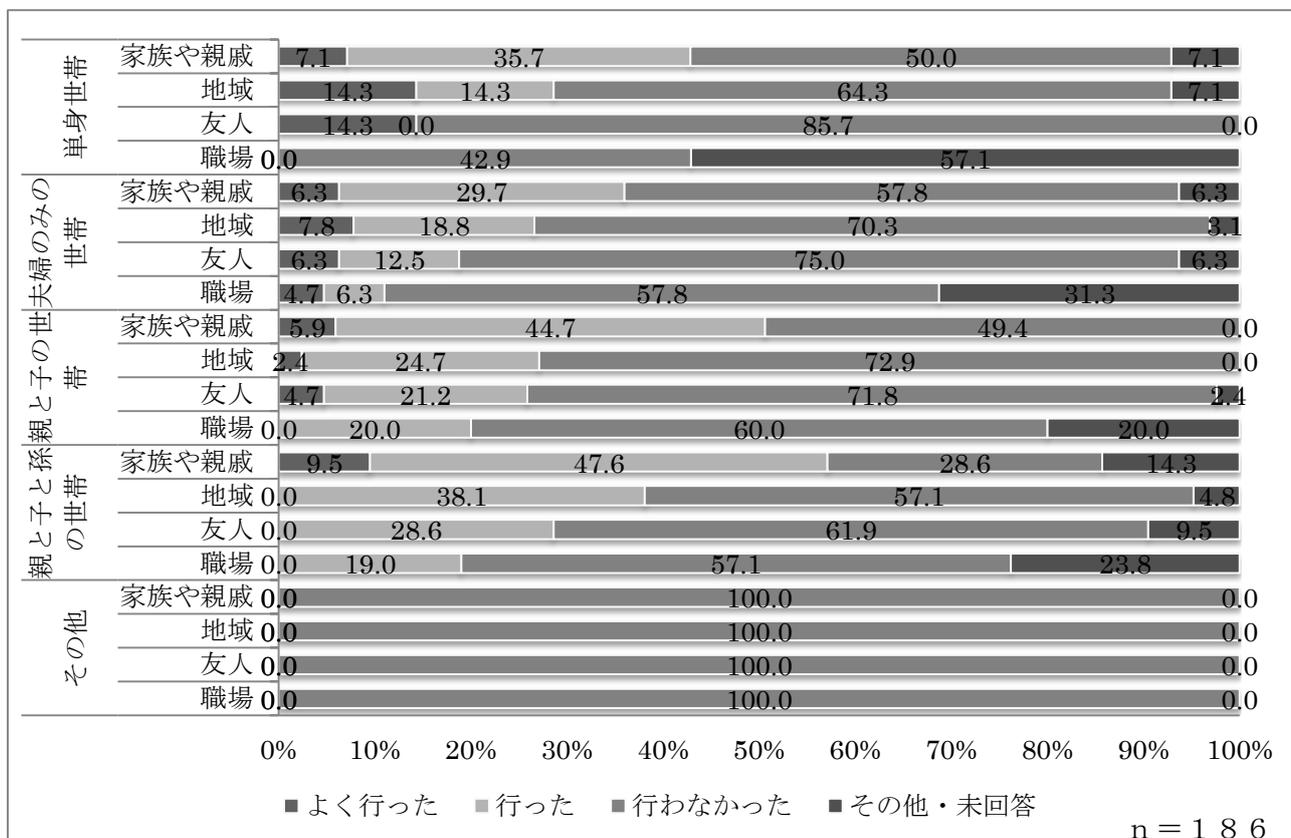
また、北コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-23, 25）や水戸コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-24, 26）で「家族や親戚」「地域」での活動の割合が高いのは、下記のように、高齢者が多いこと、「単身」或いは「夫婦のみで生活」している人の割合が高い。また、「地域」との活動も比較的活発に行っているため、両地区は災害時や緊急時の助け合いの割合が高いと考えられる。



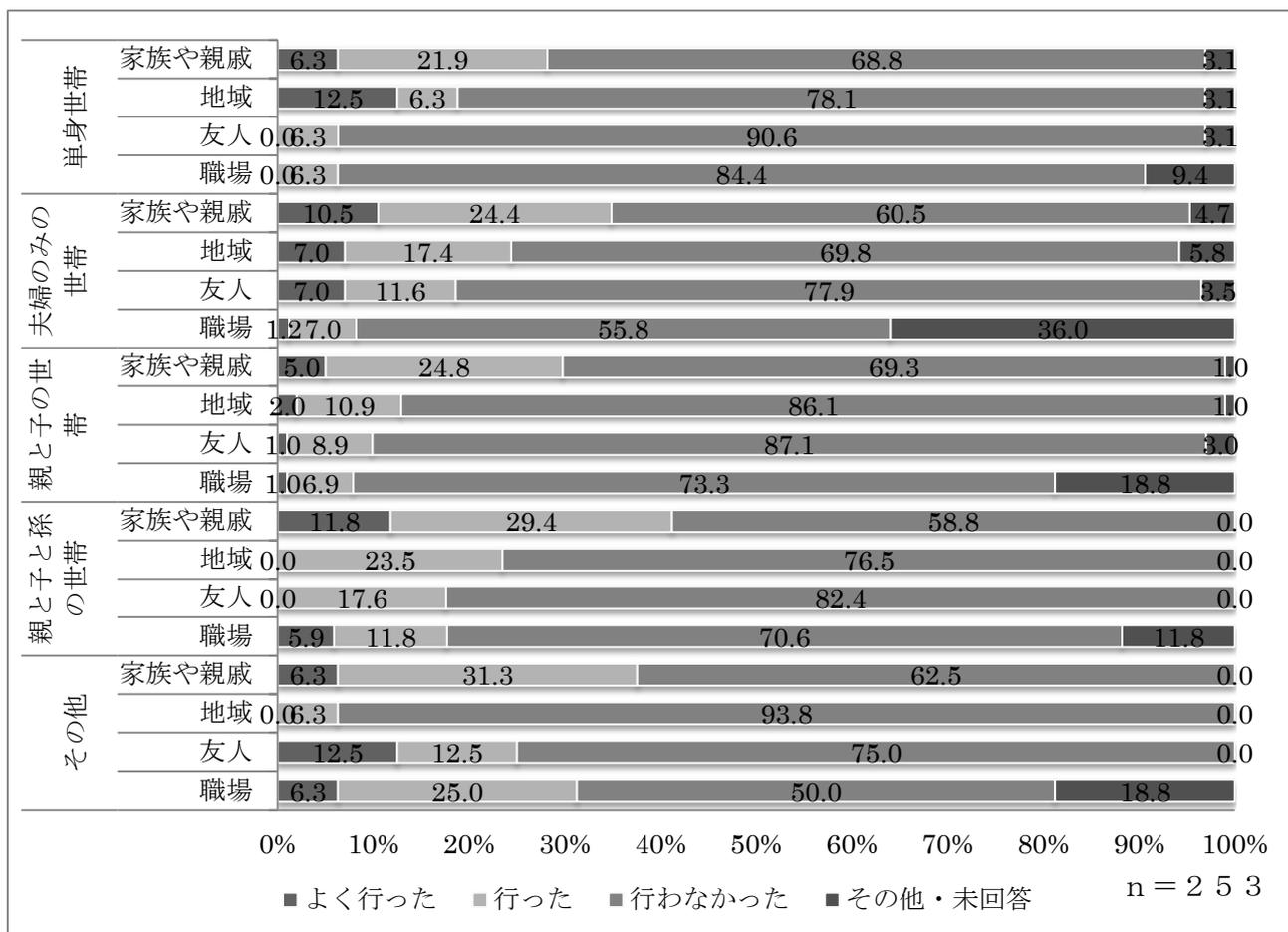
図(2)-23



図(2)-24



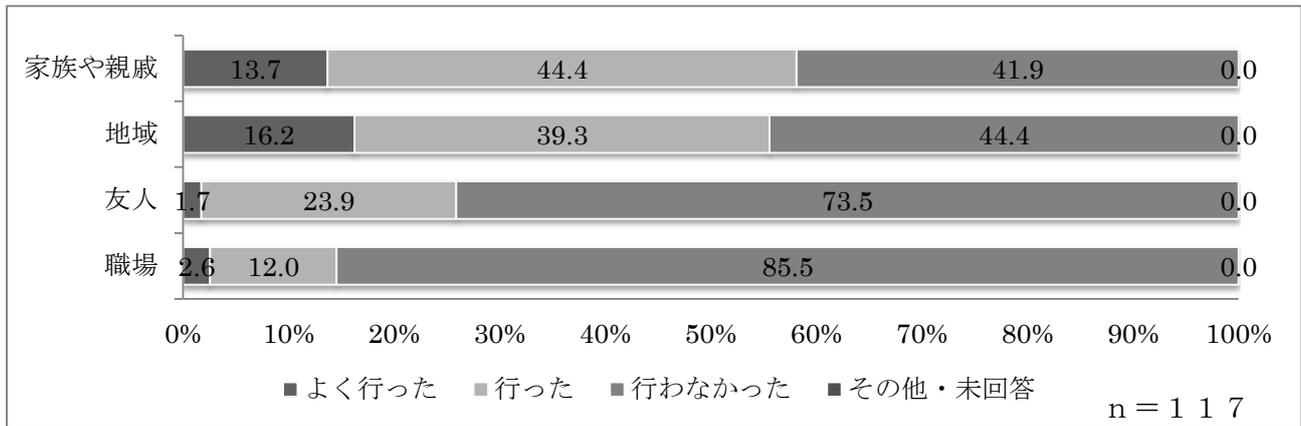
図(2)-25



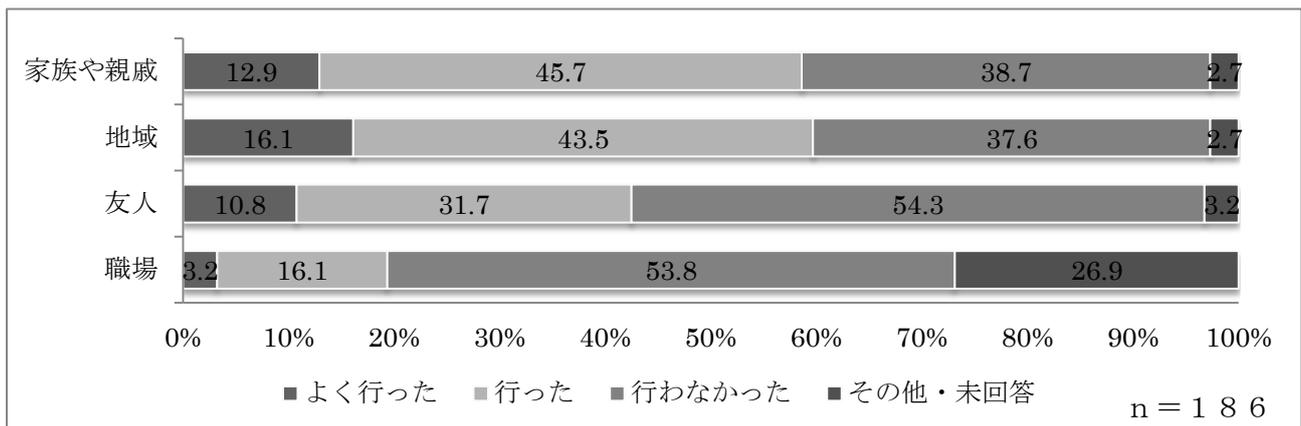
図(2)-26

カ 環境保全を図る企画や運営に関する活動

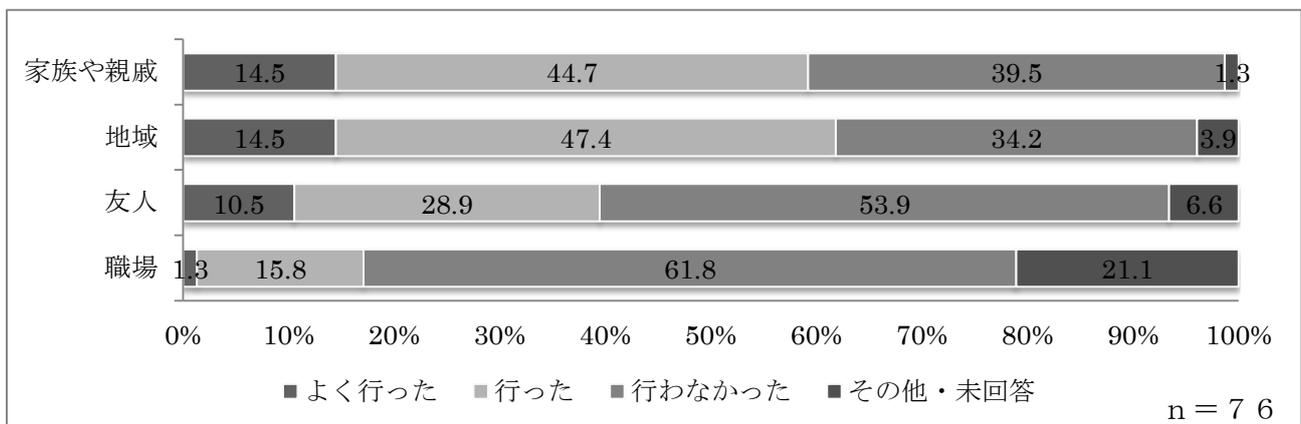
地域の環境美化活動（清掃作業や除草作業）が中心の取り組みで、地域の中で「家族や親戚」の縁の中で活動（敷地周辺）する割合と、自治会や小学校区の「地域」の縁の中での活動が考えられる。北調査研究対象地域（図(2)-27）北コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-28）南コミュニティ再生事業対象（図(2)-29）の「家族や親戚」「地域」「友人」の縁の中での活動は際だって高いことが分かる。



図(2)-27



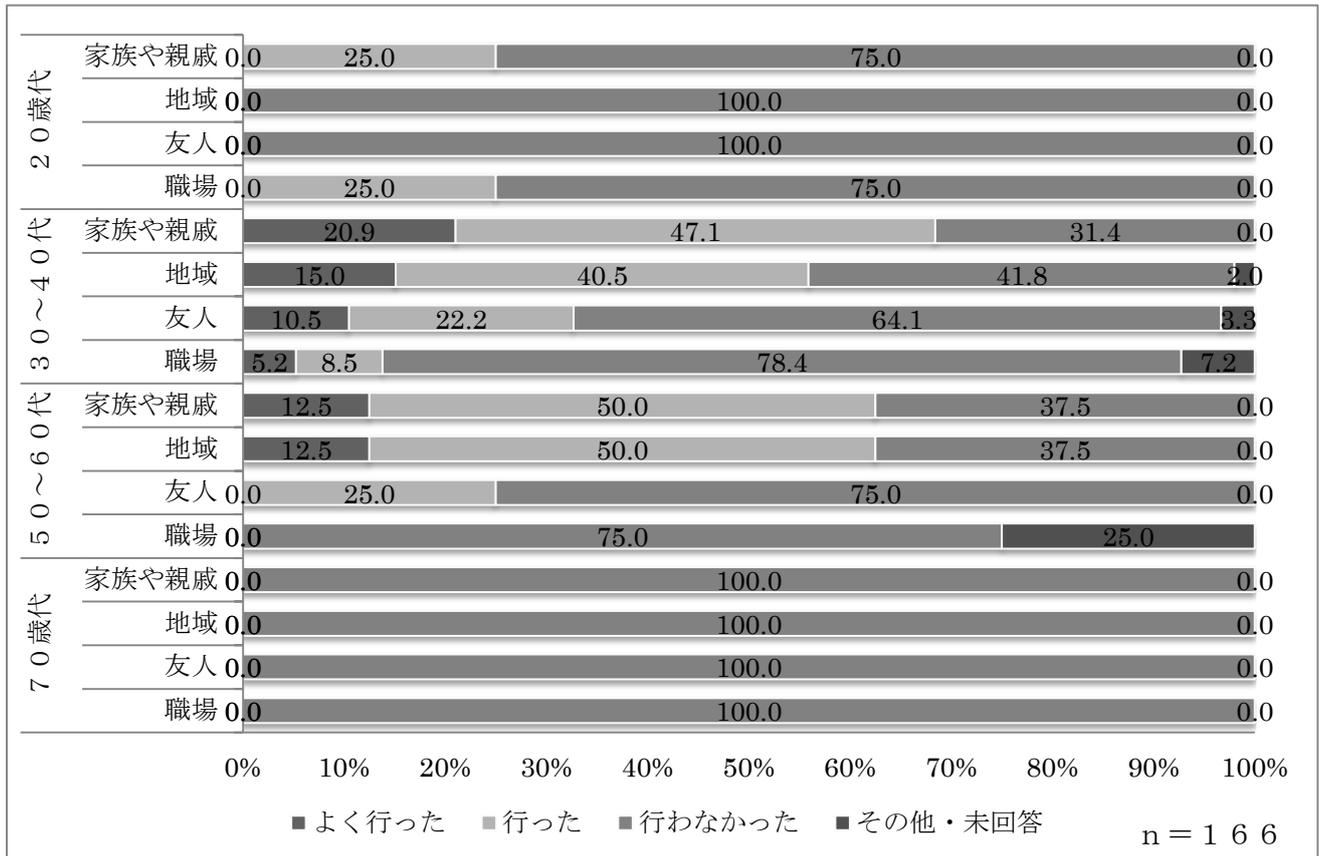
図(2)-28



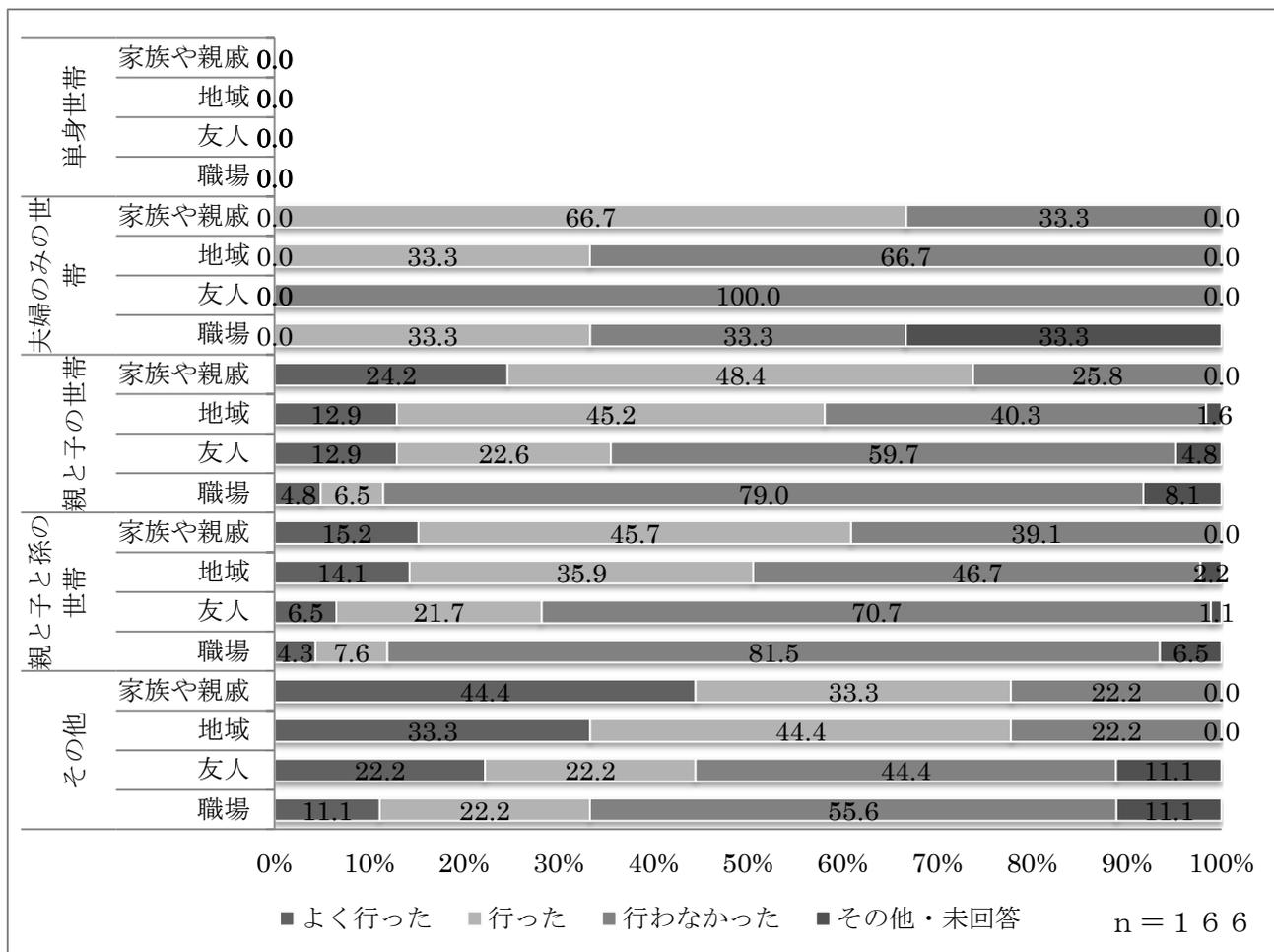
図(2)-29

キ 安全を守る活動

安全を守る活動は「家族や親戚」「地域」の縁を中心に行われていると言える。特に鹿行調査研究対象地域の「家族や親戚」「地域」の縁では、下記のグラフからも分かるように、「30～40代」「50～60代」が「地域」の縁の中で活発に活動している（図(2)-30）。また、「子や孫」がいる世帯ばかりでなく「夫婦のみの世帯」でも「家族や親戚」「地域」で活動していることが分かる（図(2)-31）。地域の安全に対する意識の高さが感じられる。



図(2)-30



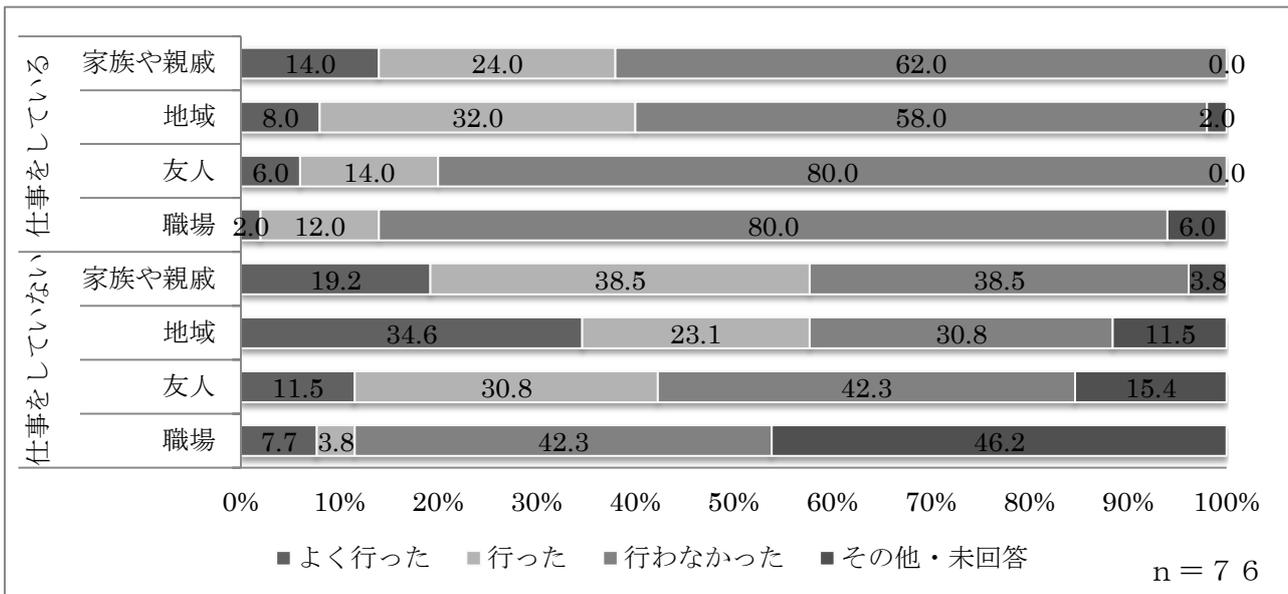
図(2)-31

ク 高齢者や障がい者支援活動

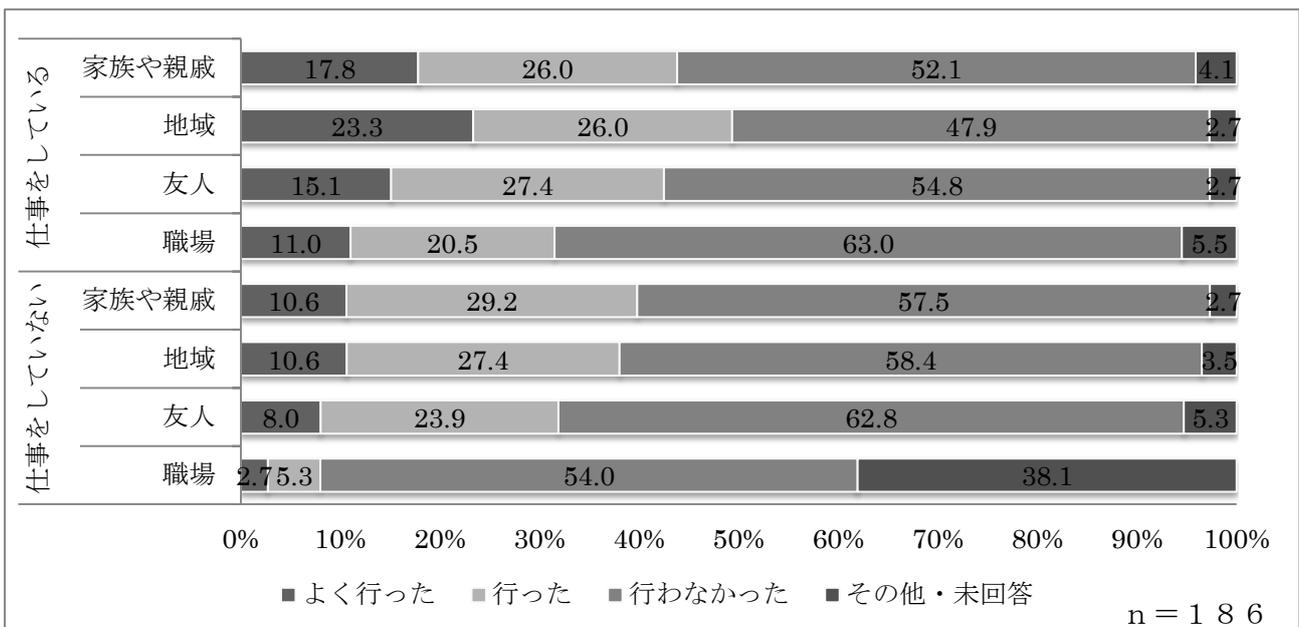
「家族や親戚」の縁の中では活動が行われているが、「血縁」以外での活動は消極的と言える。しかし、北コミュニティ再生事業対象地域・南コミュニティ再生事業対象地域・西調査研究対象地域の活動人口の多い地域は、比較的高い割合で活動している。

ケ 芸術・文化・スポーツ分野の企画や運営に関する活動

南コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-32）と北コミュニティ再生事業対象地域（図(2)-33）については、「仕事をしている人」「仕事をしていない人」どちらについても、「地域」での活動の割合が高い。そのため地域での活動が活発であると考えられる。



図(2)-32



図(2)-33

コ 文化の保存や伝統行事の継承活動の企画や運営に関する活動

地域に根ざした活動が中心であるため「地域」の縁の中での活動の割合が高い。また、「家族や親戚」の縁の割合が高いのは、「血縁」の中で伝統を守っていく意識が受け継がれていると考えられる。

サ 国際協力・在日外国人支援に関する活動

どの地域、どの縁においても活動の様子が見られない。若干、北コミュニティ再生事業対象地域に「地域」の中での活動が見られる。取り組まなければならない課題だと考える。

モデルプログラム（県域版）の展開を補う研修資料（OJTシート）

平成23年度 調査研究事業

5/19 第1回生涯学習調査研究委員会 各センターのOJTによる成果

1 センターにおける地域課題の明確化

(1) センターにおける地域課題の整理

思考の目安→人に関わる, 物に関わる, 自然環境に関わる, ライフラインに関わる etc.

地域課題・・・① 地域の人々の生活にとってのマイナス要因

② 地域の置かれている状況で, 身近に感じている問題

③ 改善の余地のあることで, 行政や団体に関わることで見直せる問題

④ 「支え合いと活気のある社会(※1)」の構築をすすめるために解決しなければならない問題

※1 地域で生活するすべての人に居場所があり, 人の役に立つ喜びが味わえる社会がつけられる。このことによりサービス市場が興り, 経済活動が活発になる。この成果が地域社会に還元されるシステムが構築された社会。

<p>・</p>

(2) 地域課題を緊急性のあるものと今後計画的に進めるものにと内容別に分ける

<p>緊急課題：地域のために最優先で考えなければならない課題</p> <p>・</p>	<p>計画課題：解決しなければならないが, 緊急課題の解決の後に考えていく課題</p> <p>・</p>
---	--

(3) センター区における地域課題の優先順位

緊急課題：地域のために最優先で考えなければならない課題	計画課題：解決しなければならないが、緊急課題の解決の後に考えていく課題
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

2 「新しい公共」について、センターの役割について考察する。

- ・地域課題の解決のために、自助・互助・公助の視点からどのように関わるか。
- ・茨城教育プラン「第3章豊かさを広げる生涯学習の推進」の実現にどのように関わるか。

平成23年度 生涯学習調査研究事業

～「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくり～

1 (1) 「無縁社会に立ち向かう」ことをどう捉えるか。

「思考の目安」

5/19の調査研究委員会での成果をもとに無縁社会の問題を考える。

(2) 無縁社会の問題を項目別に分ける。

<家庭教育問題>

<青少年教育問題>

無縁社会

<高齢者育問題>

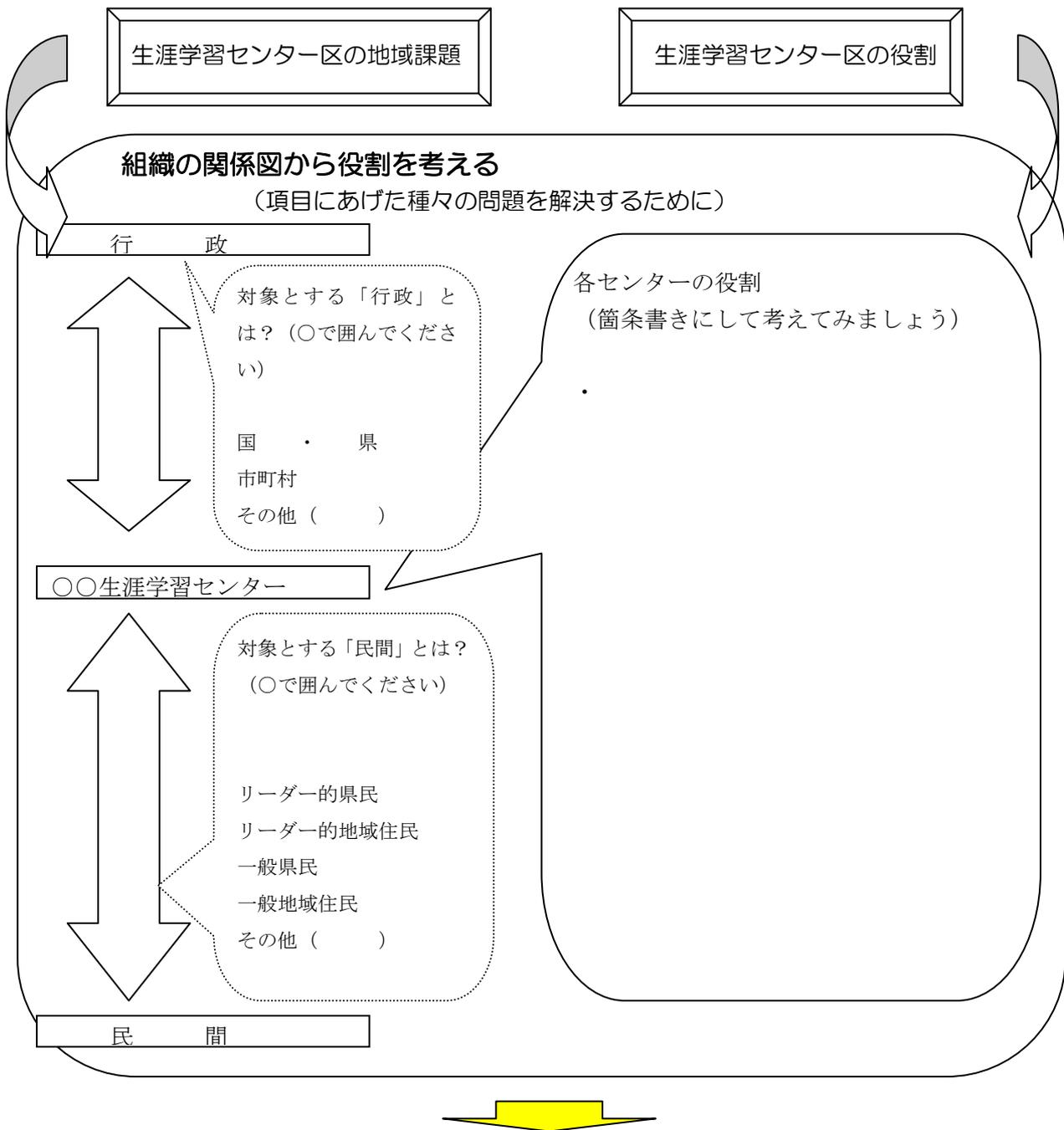
<地域社会問題>

<その他>

2 「新しい公共」における組織の役割を考える

※ 「新しい公共」・・・行政だけでなく、市民、NPO、企業等が積極的に公共的な財・サービスの提供主体となり、教育や子育て、まちづくり等の身近な分野において共助の精神で行う仕組み、体制、活動など

5 / 26 茨城県社会教育主事等研究協議会資料より



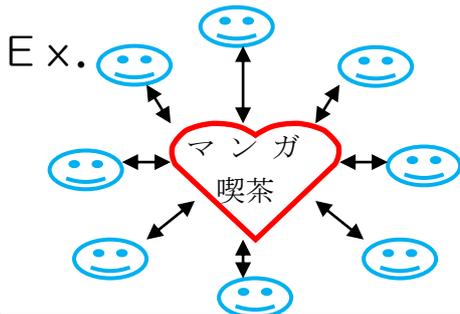
平成23年度 生涯学習調査研究事業

～「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくり～

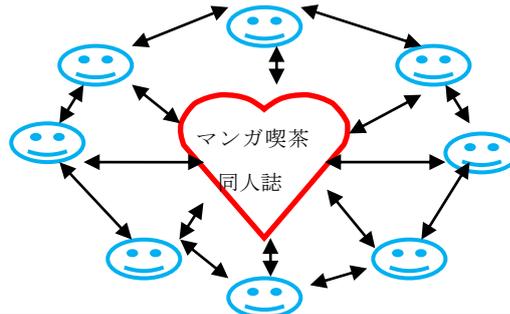
「人間的なつながりを深めるために必要なこと」6/23(木)OJTシート

1 キーワード

「人間的なつながり」



「深める」



マンガ喫茶に集う人は、一人でマンガを読むことを目的にしている人とする。そこで、マンガ喫茶の店長が、「同人誌をつくってみよう!」と呼びかけると、集う人々が、自分の好みやストーリーについて話し合いを始めた。
一人でマンガを読むことを目的にした人が、次第に集団化し人間関係が深まった。

コミュニティの場で考えると

「人間的なつながり」



「深める」



アソシエーションの場で考えると

「人間的なつながり」

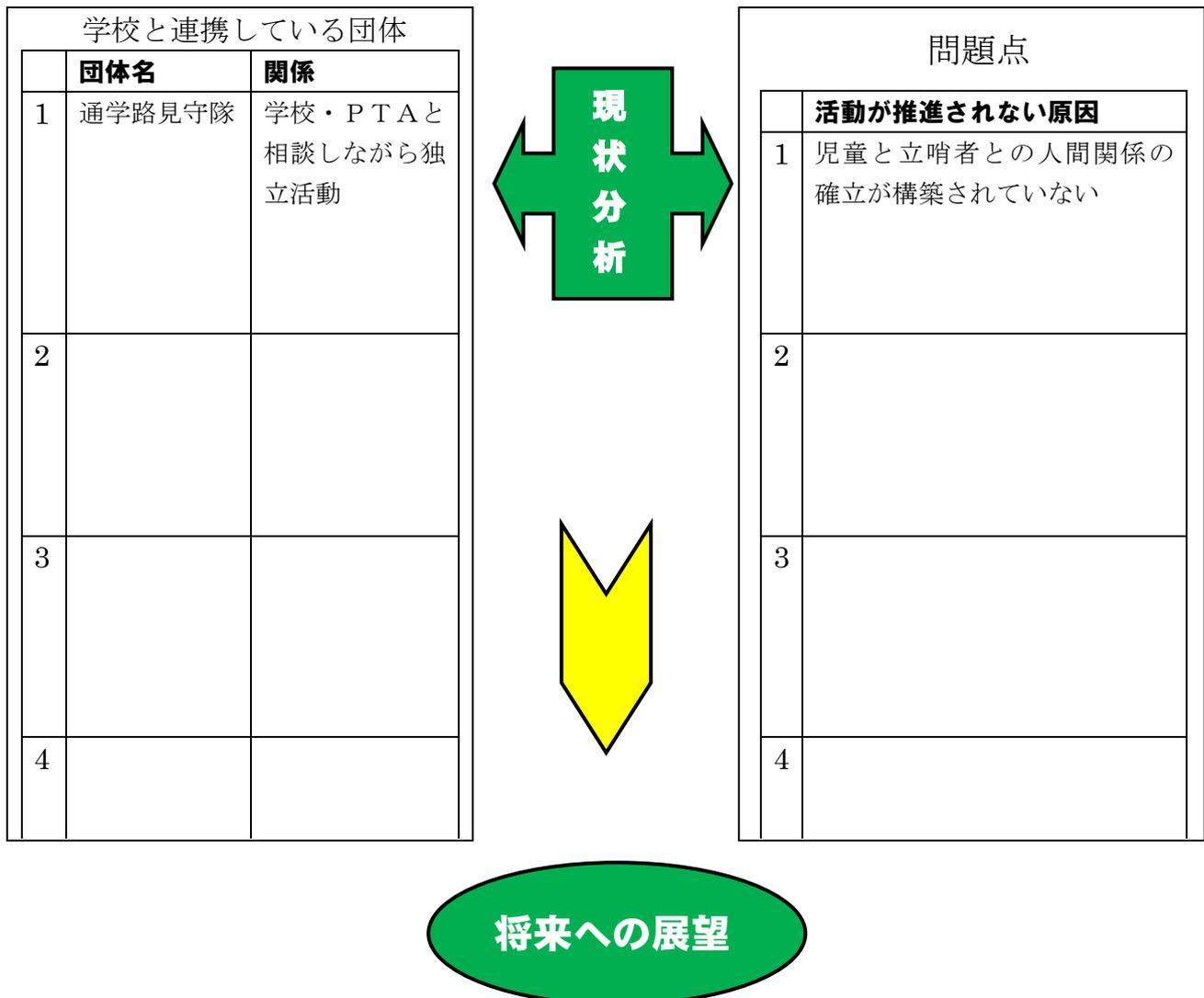


「深める」



2 キーワード

「学校を核とした人間的なつながりを深めるためには？」



誰がどの位置で、リーダーシップをとると解決していくか？

1 通学路見守隊の隊長が、学校長と相談の上、隊員が「児童集会に出席」「給食を一緒に食べる」などの取り組みを実施することにより、児童との人間関係が構築できた。

2

3

4

平成23年度 生涯学習調査研究事業

～「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくり～【コミュニティ分析】

1 各センターの地域課題から抽出しようとする地域の特徴を捉える。

(1) () 生涯学習センターの地域課題 (5/19持参OJTシート参照)

--

(2) () 生涯学習センターの無縁社会に立ち向かう問題点に優先順位つける。
(6/9持参OJTシート1の(2)無縁社会の問題を項目別に分ける参照)

1. 2. 3. 4. 5.

(3) () 生涯学習センターの抽出しようとする地域を考える。

- 抽出しようとする地域の住民構成と住民活動について下記の何れかタイプを選択する。
(○をつけて選択する) ※ 今回は感覚的に選択してください。
- ア 旧住民型 イ 旧住民主導型 ウ 新・旧混在型 エ 新住民主導型
オ 新住民型 カ その他
- 抽出しようとする地域の範囲を選択する。(○をつけて選択する)
- ア センター全域 イ 市町村 ウ 中学校区 エ 小学校区 オ その他
- 抽出しようとする地域に優先順位をつける。

1. 2. 3. 4. 5.

(4) 生涯学習センターの抽出地域と抽出理由を考える。

<抽出地域>	<抽出理由>
--------	--------

2 各生涯学習センター抽出地域のコミュニティ分析の準備資料を作成する。

_____ 地域

(1) 人口資料（人口推移，年代別人口等）と略史

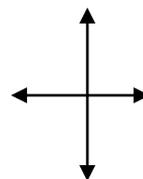
【人口資料】

【略史】

(2) 地域の特性

【自然環境】

【歴史環境】



【生活文化】

【産業環境】

(3) 地域の問題点（考えられるものを箇条書きにする）

<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・ ・
--

(4) 地域資源（考えられるものを箇条書きにする）

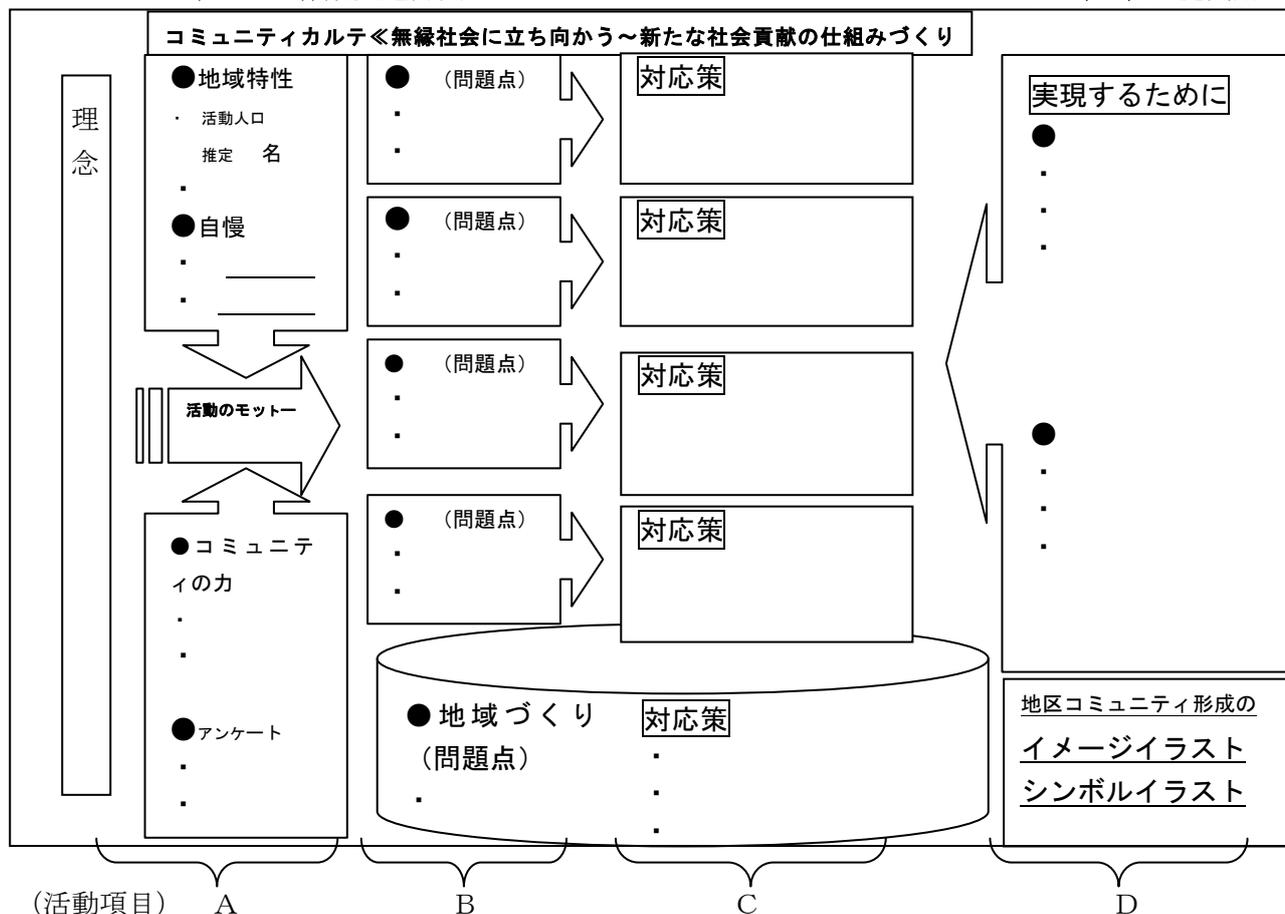
【ひと】
<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・

【もの】
<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・

【こと】
<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・

【かね】
<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・

平成23年度生涯学習調査研究事業～「無縁社会に立ち向かう」新たな社会貢献の仕組みづくり～ OJTシート
 コミュニティカルテ作成実施計画 2011/08/25 提出用



※ 10/13の提出に向け、A～Dの活動項目について、どの時期にどのような活動をしていくかの実践計画を、下記の表にまとめていく。

		活動項目	OJT活動内容
8月	8/16～		
	8/23～		
	8/30～		
9月	9/6～		
	9/8(木)	第7回調査研究委員会	
	9/13～		
	9/20～		
	9/27～		
10月	10/4～		
	10/11～		
	10/13	第8回調査研究委員会	コミュニティカルテ提出

平成25年度モデルプログラム（コミュニティ版）の事業評価について

～モデルプログラムで、地域や地域住民がもっと元気になるために～

1 事業分析シートの作成

<p>ア 事業概要について</p> <p>(ア) 事業名・・・A</p> <p>(イ) 事業目標・・・B</p> <p>イ 計画・予想している結果(アウトプット)について</p> <p>(ア) 事業の内容, 具体的な手段(人材育成のための具体策)・・・C</p> <p>(イ) 講座の開設実績(現実的な数値)・・・・・・・・・・・・・・・・・・D</p> <p>ウ 事業の成果(アウトカム)について</p> <p>(ア) 中間アウトカム 内容(いくつかのステップを経てめざす姿) ・・・E, F, G ※事業目標とのリンク</p> <p>(イ) 中間アウトカム 指数 (変容の様子を見極めるための評価の観点・キーワード)・・・・・・・・H, I, J</p> <p>(ウ) 最終アウトカム 内容(事業の目的とリンクした受講生の姿)・・・K</p> <p>(エ) 最終アウトカム 指数 (変容の結果を確認するための評価の観点・キーワード)・・・・・・・・L</p>

(2) 事業評価シートを使ったモデルプログラムの事業評価について

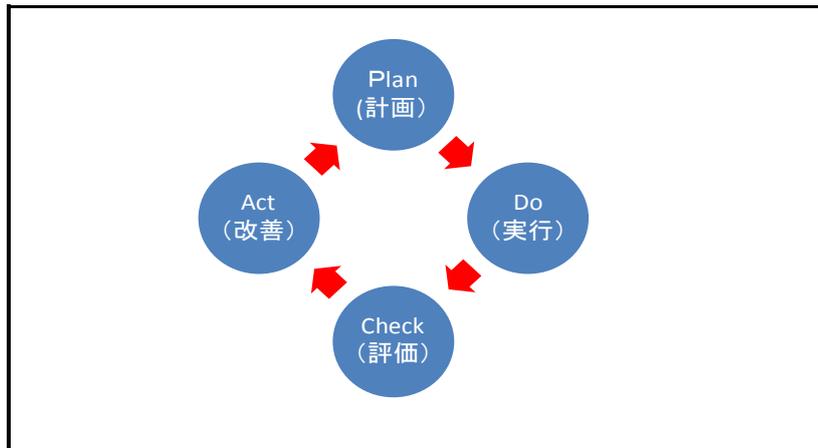
- ア 事業分析シートにある「中間・最終アウトカム」を意識した講座の実践(**Do ①**)
- イ 各講座等の終了ごとに、毎回OJTを実施し評価シートを使って事業評価を実施(**Check ①**)
- ウ 課題の発見と対応策の検討(**Act ①**)
- エ 課題と対応策の反映(**Plan ②**)

事業評価は事業分析シートを基に行います

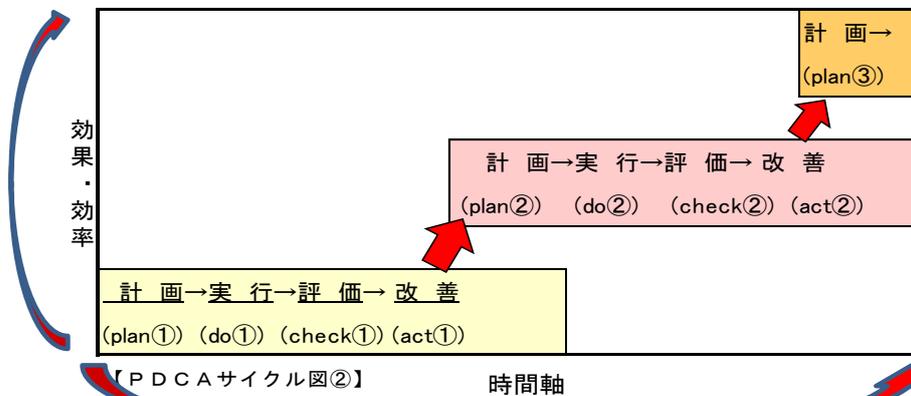
今年度は評価を数値化します

- a) 効率性・・・コスト改善の余地はあるか
- b) 妥当性・・・対象・手段等は妥当か
- c) 成果・・・意図とした成果が上がっているか
- d) 満足度・・・参加者の反応はどうか





【PDCAサイクル図①】



【PDCAサイクル図②】

【用語解説】

アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> • 事業の実施によって直接的に生じる結果のこと • 例: 講座の実施回数, 講座の参加者数, 利用者数, など
アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> • アウトプットによって直接的に生じる事業の成果のこと • 例: 家庭教育講座の実施後, 受講者が家庭で子どもと会話をする時間が増えた
中間アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> • 目標状態が得られるまでの途中の段階で予想される変化や影響
最終アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> • 最終的に到達する目標状態

事業分析シート

作成者

1 事業概要

事業名 A	
事業目標 B	
事業の内容 具体的な手だて C	

2 結果(アウトプット)

アウトプット D	例: 受講者数
-----------------	---------

3 成果(アウトカム)

	内容	指数
中間アウトカム	E 例: 意識の変容 学習内容の 理解度	H 例: 地域の問題を解決したいと思った人の数 学習内容を理解した人の数
	F 例: 行動の変容 仲間づくり	I 例: 地域の人たちとの交流が深まった人の数
	G 例: 自主グループ化	J 例: 結成された自主グループの数

	内容	指数
最終アウトカム	K 例: 自主的な活動の 展開	L 例: 活動を始めたグループの数, 人数

*事業目標と、中間アウトカム・最終アウトカムのリンク

事業評価シート **Plan①**

期日	講座名	講座内容 実行(Do)①

結果(アウトプット)	評価(Check)①	改善(Act)①
※本日講座について		
	効率性	妥当性
	4・3・2・1	4・3・2・1

OJT・・・結果について考察(高い値, 低い値それぞれについての背景等)

成果(アウトカム)	評価(Check)①	改善(Act)①
	成果	満足度
	4・3・2・1	4・3・2・1

総合評価 効率性・妥当性・成果・満足度の評価の数字を合計する	合計点数	S (15点～16点) A (11点～14点) B (8点～10点) C (4点～ 7点)	
-----------------------------------	------	--	--

計画 (Plan) ②	
-------------------	--

事業分析シートを基に, PDCAをOJTで行う

平成24年度生涯学習調査研究事業に係る 「活動人口」調査

資料7-1

--

平成24年〇月
〇〇地区の皆様へ

茨城県〇〇生涯学習センター所長（またはセンター長）

アンケート調査について

このアンケート調査は、茨城県内の5つの県生涯学習センターが茨城県教育委員会の委託を受けた生涯学習調査研究事業の一環として行うものです。

昨今、核家族化、一人世帯の増加、結婚に対する若者の意識の変化等、無縁社会が世代を超えて広がりを見せています。しかし、震災後、人と人との絆の大切さが叫ばれ、また、新しい公共を実現する上でも、地域などのコミュニティを通じたつながりはより大きな役割を担うものとなっています。

そこで、皆様方が家庭や地域、職場などで行っている様々な活動について調査をさせていただき、具体的な数値（1人あたりの活動数×定住人口＝活動人口）によって人と人とのつながりの強さを表すことを通して、今後のコミュニティの再生や地域のネットワーク形成などに役立てていきたいと考えております。

つきましては、お忙しいとは存じますが、趣旨をご理解の上、ご協力くださいますようお願いいたします。

なお、この調査結果は、統計的に処理しますので、この回答が外部に漏れたり、ご迷惑をおかけすることは決してありません。

【ご記入にあたってのお願い】

- このアンケートは、1軒のお宅に1部ずつ配布させていただいております。
ご家族の中で代表1名の方（20歳以上の方）がご記入ください。
ご協力よろしくお願いいたします。
- アンケートについてご不明な点などございましたら、担当までお問い合わせください。

平成24年度生涯学習調査研究事業に係る「活動人口」に関する調査

個人情報の取扱について

(目的) 平成24年度指定事業調査研究事業の資料

ご提供いただいた個人情報は、上記目的のみに使用し、他の目的に使用いたしません。

あてはまる選択肢の記号を○で囲んでください。該当する選択肢がない場合は、その他の()内に具体的にご記入ください。

1 あなたの性別をお答えください。

- ア 男性
- イ 女性

2 あなたの満年齢に合う年代をお答えください。

- ア 10代～20代
- イ 30代～40代
- ウ 50代～60代
- エ 70歳以上

3 あなたの家族構成(同居している家族)をお答えください。

- ア 単身世帯
- イ 夫婦だけ(一世代)
- ウ 親と子(二世代)
- エ 親と子と孫(三世代)
- オ その他()

4 あなたは仕事をしていますか。

- ア 仕事をしている
- イ 仕事をしていない

5 あなたの現在の地域(市町村)での居住年数をお答えください。

- ア 5年未満
- イ 5～10年
- ウ 11～20年
- エ 21～30年
- オ 30年以上

6 あなたは現在住んでいる地域(市町村)に住み続けたいとお考えですか。

- ア 住み続けたい
- イ どちらでもいい
- ウ 地域外に引っ越したい

7 あなたは過去 1 年間(平成23年4月から平成24年3月まで)に、日々の生活の中で、家族・地域・友人・職場等において 下記の活動をしましたか、あてはまるところに○印を付けてください。該当しないところは空欄で結構です。

※「よく活動した」・・・複数回または継続して活動した。「活動した」・・・1度でも活動している。また、「よく活動した」を2点、「活動した」を1点、「活動していない」を0点として合計の数を出してください。

活 動 内 容	ア 家族や親戚			イ 地域			ウ 友人			エ 職場		
	よく活動した	活動した	活動していない	よく活動した	活動した	活動していない	よく活動した	活動した	活動していない	よく活動した	活動した	活動していない
	2	1	0	2	1	0	2	1	0	2	1	0
日常生活における助け合い・支え合い活動(家事、育児、介護、慶弔事など)												
地域・まちづくりに関する活動(商店街の活性化、自治会、町内会の役員など)												
学習会や体験活動(講座や講演会の企画や広報、PRなど)												
青少年の健全育成に関する活動(子ども会活, PTA 活動, スポーツ少年団活動, 子育て支援活動など)												
非常災害時に協力や支援をする活動(災害救済, 被災地支援に関する活動など)												
環境の保全を図る活動(地域清掃, 花壇作り, 森林ボランティア, 動物保護など)												
安全を守る活動(消防団活動, 自警団活動, 地域パトロール, 子どもの見守りなど)												
高齢者や障がい者の支援活動(サロン活動の支援, 見												

守り・声かけなど												
芸術、文化、スポーツに関する活動（少年団やサークルの指導者、世話役、役員など）												
文化の保存、伝統行事の継承活動（地域のお祭りなどの実行委員など）												
国際協力・在日外国人支援に関する活動（日本語教室の指導者、ホームステイの受け入れなど）												

※ ア～サ以外にその他の活動などがあればお書きください。

・												
・												
・												
	アの合計			イの合計			ウの合計			エの合計		

↓
総数

8 この調査についてのご意見をご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。封筒に入れて切手を貼らずに投函していただきますようお願いいたします。

※ 調査結果につきましては、平成25年4月から

「茨城の生涯学習」(<http://www.gakusyu.pref.ibaraki.jp/houkoku/tyousa.htm>)よりご覧いただけます。(ダウンロード可)

平成 25 年度 生涯学習調査研究事業（茨城県教育委員会指定事業）

活動人口についての調査

調査実施施設：茨城県〇〇生涯学習センター

調査ご協力へのお願い

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、標記調査研究事業の一環として、（※）「活動人口」に関する調査を実施することとなりました。皆様には、一昨年、昨年に引き続き当調査にご協力いただきますことに対し厚く御礼申し上げます。

この調査は、その基礎資料を得るために実施するもので、対象とさせていただきました地域は、県生涯学習センター管内の 9 地区等となっております。

つきましては、趣旨をご理解のうえ、ご協力いただきますようお願い申し上げます。なお、ご回答いただきました内容は、統計的に処理いたしますので、内容が他に漏れたり、他の目的に使用したりすることはございません。

前年度までの調査結果及び成果につきましては「茨城県水戸生涯学習センターHP」に掲載しておりますのでご覧ください。（<http://www.mito.gakusyu.ibk.ed.jp/> ダウンロード可）

※「活動人口」とは、人と人とのつながりの様子を具体的に数値化したものです。

その人が、自ら進んで、家族や地域、友人関係、職場の中でどの程度活動を行っているか「つながり力」の強さを表したものと考えています。

ご記入に当たっての留意事項

- 1 このアンケート用紙は、1 世帯に 1 部ずつ配布させていただいております。世帯の中で、20 歳以上の方お一人が代表でお答えください。家族・親戚、地域、友人、職場の 4 種での活動を同類の質問で伺います。
- 2 当てはまる選択肢を一つ選び○印をつけてください。
- 3 すべてのご記入が終わりましたら、お手数ですが記入もれをお確かめの上、同封の返送用封筒にて〇月〇〇日（〇）までに〇〇〇してください。
- 4 この調査に関するお問い合わせは、担当者までお願いいたします。

茨城県〇〇生涯学習センター 担当〇〇、〇〇

Tel 〇〇〇-〇〇〇-〇〇〇〇

平成25年度生涯学習調査研究事業に係る(※)「活動人口」に関する調査票

個人情報の取扱について

ご提供いただきました個人情報は、上記目的のみに使用し、他の目的に使用いたしません。

あてはまる選択肢を一つ選んで○印をつけてください。該当する選択肢がない場合は、その他の()内に具体的にご記入ください。

1 あなたの性別をお答えください。

- ア 男性
- イ 女性

2 あなたの満年齢に合う年代をお答えください。

- ア 20歳代
- イ 30～40歳代
- ウ 50～60歳代
- エ 70歳以上

3 あなたの家族構成(同居している家族)をお答えください。

- ア 単身世帯
- イ 夫婦のみの世帯(一世代)
- ウ 親と子の世帯(二世代)
- エ 親と子と孫の世帯(三世代)
- オ その他()

4 あなたは仕事をしていますか。

- ア 仕事をしています
- イ 仕事をしていない

5 あなたが現在お住まいの場所での居住年数をお答えください。

- ア 5年未満
- イ 5～10年
- ウ 11～20年
- エ 21～30年
- オ 31年以上

6 あなたは現在お住まいの場所に住み続けたいとお考えですか。

- ア 住み続けたい
- イ 地域外に引っ越したい
- ウ どちらでもいい

- 7 あなたは過去 1 年間（平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月まで）に、日々の生活の中で、次の活動をしましたか、あてはまるところに○印をつけてください。該当しない場合は無解答で結構です。

[家族内や親戚関係内での活動についておたずねします。]

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (1-1) あなたは家族や親戚に対して、日常生活における、家事、育児、介護、慶弔事（時）、買い物、修繕などの助け合い・支え合い活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (1-2) あなたは家族や親戚とともに、商店街の活性化キャンペーン、自治会・町内会の集会やイベントなど地域・まちづくりの企画や運営に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (1-3) あなたは家族や親戚とともに、地域で実施される生涯学習に関する講座や講演会の企画や広報、PR などやボランティア等の活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (1-4) あなたは家族や親戚とともに、子ども会関係の活動，PTA 活動，スポーツ少年団活動，子育て支援活動などの青少年の健全育成に関する活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (1-5) あなたは家族や親戚に対し、或いは家族や親戚とともに、災害救済活動、被災地支援ボランティア活動など非常災害時に協力や支援をする活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (1-6) あなたは家族や親戚とともに、地域清掃、花壇作り、森林ボランティア、動物保護等の環境の保全を図る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

[家族内や親戚関係内での活動についておたずねします。]

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (1-7) あなたは家族や親戚とともに，消防(団)活動，自警団活動，地域パトロール，子どもの見守り，防災訓練などの安全を守る活動を行いましたか。

1 よく行った	2 行った	3 行わなかった
---------	-------	----------

- (1-8) あなたは家族や親戚とともに，地域敬老会，サロン活動の支援，見守り・声かけなどの高齢者や障がい者への支援活動を行いましたか。

1 よく行った	2 行った	3 行わなかった
---------	-------	----------

- (1-9) あなたは家族や親戚とともに，芸術，文化，スポーツに関する活動で，サークルの指導者，世話役，役員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った	2 行った	3 行わなかった
---------	-------	----------

- (1-10) あなたは家族や親戚とともに，文化の保存，伝統行事の継承活動である地域のお祭りなどで，実行委員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った	2 行った	3 行わなかった
---------	-------	----------

- (1-11) あなたは家族や親戚とともに，日本語教室の指導者，ホームステイの受け入れなど，国際協力・在日外国人支援に関する活動を行いましたか。

1 よく行った	2 行った	3 行わなかった
---------	-------	----------

- (1-12) 各設問の回答（1～3）に該当しない場合で特記するものがあればお書きください。

(-)	
-------	--

居住地や日常生活の中で」の人間関係に関わる活動についておたずねします。（地域での活動）

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (2-1) あなたは地域や地域の人に対して、日常生活における、家事、育児、介護、慶弔事（時）、買い物、修繕などの助け合い・支え合い活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-2) あなたは地域の人とともに、商店街の活性化キャンペーン、自治会・町内会の集会やイベントなどの地域・まちづくりの企画や運営に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-3) あなたは地域の人とともに、地域で実施される生涯学習に関する講座や講演会の企画や広報、PR などやボランティア等の活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-4) あなたは地域の人とともに、子ども会関係の活動，PTA 活動，スポーツ少年団活動，子育て支援活動などの青少年の健全育成に関する活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-5) あなたは地域の人とともに、災害救済活動，被災地支援ボランティア活動など非常災害時に協力や支援をする活動を被災地で行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-6) あなたは地域の人とともに、地域清掃，花壇作り，森林ボランティア，動物保護等の環境の保全を図る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

居住地や日常生活の中での人間関係に関わる活動についておたずねします。(地域での活動)

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (2-7) あなたは地域の人とともに、消防(団)活動、自警団活動、地域パトロール、子どもの見守り、防災訓練などの安全を守る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-8) あなたは地域の人とともに、地域敬老会、サロン活動の支援、見守り・声かけなど高齢者や障がい者への支援活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-9) あなたは地域の人とともに、芸術、文化、スポーツに関する活動で、サークルの指導者、世話役、役員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-10) あなたは地域の人とともに、文化の保存、伝統行事の継承活動である地域のお祭りなどで、実行委員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-11) あなたは地域の人とともに、日本語教室の指導者、ホームステイの受け入れなど、国際協力・在日外国人支援に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (2-12) 各設問の回答(1～3)に該当しない場合で特記するものがあればお書きください。

(-)	
-------	--

友人関係内で行われた活動についておたずねします。
 (友人関係：家族や親戚，居住地や地域，職場以外での人間関係)

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (3-1) あなたは友人に対して，日常生活における，家事，育児，介護，慶弔事（時），買い物，修繕などの助け合い・支え合い活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (3-2) あなたは友人とともに，商店街の活性化キャンペーン，自治会・町内会の集会やイベントなどの地域・まちづくりの企画や運営に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (3-3) あなたは友人とともに，地域で実施される生涯学習に関する講座や講演会の企画や広報，PR などやボランティア等の活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (3-4) あなたは友人とともに，子ども会関係の活動，PTA 活動，スポーツ少年団活動，子育て支援活動などの青少年の健全育成に関する活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (3-5) あなたは友人とともに，災害救済活動，被災地支援ボランティア活動など非常災害時に協力や支援をする活動を被災地で行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (3-6) あなたは友人とともに，地域清掃，花壇作り，森林ボランティア，動物保護等の環境の保全を図る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

友人関係内で行われた活動についておたずねします。
 (友人関係 : 家族や親戚, 居住地や地域, 職場以外での人間関係)

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

(3-7) あなたは友人とともに, 消防(団)活動, 自警団活動, 地域パトロール, 子どもの見守り, 防災訓練などの安全を守る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

(3-8) あなたは友人とともに, 地域敬老会, サロン活動の支援, 見守り・声かけなど高齢者や障がい者への支援活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

(3-9) あなたは友人とともに, 芸術, 文化, スポーツに関する活動で, サークルの指導者, 世話役, 役員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

(3-10) あなたは友人とともに, 文化の保存, 伝統行事の継承活動である地域のお祭りなどで, 実行委員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく参加した 2 参加した 3 参加していない

(3-11) あなたは友人とともに, 日本語教室の指導者, ホームステイの受け入れなど, 国際協力・在日外国人支援に関する活動を行いましたか。

1 よく参加した 2 参加した 3 参加していない

(3-12) 各設問の回答(1~3)に該当しない場合で特記するものがあればお書きください。

(-)	
-------	--

仕事、職場に関連した人間関係内での活動についておたずねします。
 (職場での活動)

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (4-1) あなたは職場の人に対して、日常生活における家事、育児、介護、慶弔事(時)、買い物、修繕などの助け合い・支え合い活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-2) あなたは職場の人とともに、商店街の活性化キャンペーン、自治会・町内会の集会やイベントなどの地域・まちづくりの企画や運営に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-3) あなたは職場の人とともに、地域で実施される生涯学習に関する講座や講演会の企画や広報、PR などやボランティア等の活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-4) あなたは職場の人とともに、子ども会関係の活動，PTA 活動，スポーツ少年団活動，子育て支援活動などの青少年の健全育成に関する活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-5) あなたは職場のなかで、或いは職場の人とともに、災害救済活動、被災地支援ボランティア活動など非常災害時に協力や支援をする活動を被災地で行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-6) あなたは職場の人とともに、地域清掃、花壇作り、森林ボランティア、動物保護等の環境の保全を図る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

仕事、職場に関連した人間関係内での活動についておたずねします。
(職場での活動)

「よく行った」・・・複数回または継続した活動 「行った」・・・一度でも活動したことがある

- (4-7) あなたは職場の人とともに、消防(団)活動、自警団活動、地域パトロール、子どもの見守り、防災訓練などの安全を守る活動の企画や運営を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-8) あなたは職場の人とともに、地域敬老会、サロン活動の支援、見守り・声かけなど高齢者や障がい者への支援活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-9) あなたは職場の人とともに、芸術、文化、スポーツに関する活動で、サークルの指導者、世話役、役員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-10) あなたは職場の人とともに、文化の保存、伝統行事の継承活動である地域のお祭りなどで、実行委員などの企画や運営に携わる活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-11) あなたは職場の人とともに、日本語教室の指導者、ホームステイの受け入れなど、国際協力・在日外国人支援に関する活動を行いましたか。

1 よく行った 2 行った 3 行わなかった

- (4-12) 各設問の回答(1～3)に該当しない場合で特記するものがあればお書きください。

(-)	
-------	--

8 最後にこの調査についてのご意見をご自由にお書きください。



ご協力ありがとうございました。

生涯学習調査研究委員会の委員構成

委員長	長谷川幸介	茨城大学准教授			
副委員長	小野瀬武康	NGO茨城の会事務局長	小林 長正	みと好文カレッジ所長	
	佐々木英治	茨城県日立市立久慈小学校教頭			
委員	永井 泰子	茨城県県北生涯学習センター 事業グループサブリーダー	佐藤 利枝	茨城県県北生涯学習センター ボランティアコーディネーター	
	川田 寛子	茨城県鹿行生涯学習センター 社会教育主事	風間奈保美	茨城県鹿行生涯学習センター 生涯学習ボランティアコーディネーター	
	松岡 祐美	茨城県県南生涯学習センター 社会教育推進員	法堂 泰明	茨城県県西生涯学習センター 次長	
	平塚 寿夫	茨城県水戸生涯学習センター 企画振興課長	佐藤 功夫	茨城県水戸生涯学習センター 主任社会教育主事	
	熊谷 智仁	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	田山 善堂	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	
	渡邊 和重	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	寺門 義典	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	
	伊藤まゆみ	茨城県水戸生涯学習センター 生涯学習推進員			

研究同人

松本 京子	茨城県県北生涯学習センター	安達 利明	荒井 恵子	稲葉かおり	船橋 侑太
大和田政博	行方市立玉造中学校				茨城県県西生涯学習センター
片山 妙子	茨城県県南生涯学習センター	小沼 公道	増田 雅一	篠崎 昌子	
赤津 剛義	澤田紀代子				茨城県教育庁生涯学習課
	茨城県水戸生涯学習センター施設ボランティア				

平成23～25年度 生涯学習調査研究事業

無縁社会に立ち向かう ～新たな社会貢献の仕組みづくり～

調査研究報告書

平成26年3月発行

編集・発行 茨城県水戸生涯学習センター

〒310-0011

茨城県水戸市三の丸1-5-38（茨城県三の丸庁舎3F）

TEL 029-228-1313

FAX 029-228-1633

URL <http://www.mito.gakusyu.ibk.ed.jp/>

E-mail lifelong@mito.gakusyu.ibk.ed.jp